女性改造

大正十一年九月十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十三年八月一日發行　大正十三年七月十三日印刷納本

八月號




純眞の美を增す
クラブ白粉
最新の科學が生んだ理想の白粉
外出散歩のお化粧直しに一番便利な美術容器入
鏡付コンパクト
クラブ白粉錠

レートメリー

懸賞當選發表

一等（二名）賞金各貳拾圓

レートメリーは一つけ卽座肌滑らかに白くする
東京市外下目黒六〇三　光江篤子殿

レートメリーは一つけで直ぐ肌滑かに白くする
長野縣松本市縣町二丁目　大和榮子殿

二等（五名）賞金各拾圓

一塗てのレートメリーは肌白く滑らかにすも一分の間に
岐阜縣高田町大字四町　秋野萩子殿

一つけて見る間に肌白く滑らかになるレートメリー
東京市本郷四曙町一〇　福井和子殿

一塗て一分！色白く肌滑らかにレートメリー！
鳥取市若櫻街道筋大工町　木下君子殿

つけたその場で肌滑らかに白くなるレートメリー
大分縣北海部郡田代村赤崎　松尾良子殿

つけて一分肌滑らかに色白くなるレートメリー
臺南市綠町貳拾番地　山崎瓊子殿

LAIT MARY whitens skin smoothly, in a miuute by a t,uch.

三等（貳拾名）賞金各貳圓

文案略▲香川縣末廣貞子▲東京市長尾イチ子司狩野ふみ江▲東京市外秋保ヒデ▲釜山茂村わき子▲名古屋淺野はな子▲栃木縣小太刀ハル▲大連市森靜子▲長崎市宮本しも子▲兵庫縣寄多ゑつ▲仁川稲田千代▲群馬縣田中美禰子▲福井縣中島ちかゑ▲金澤市大暢すみ▲天津梶田温子▲廣島市水野久子▲門司市野上百枝▲大阪市山中央子▲北海道遠藤たつ▲岐阜縣日比サダ子（組込都合により敬稱略乞御寛恕）

四等　同案多數に付規定以外百名を追加し百七十三名の諸姉にレートメリー一瓶宛進呈

本誌六月號で發表の英文和譯懸賞は非常な好成績を以て締切り前掲の如き好評を得ましたことを感謝致します同案多數の爲四等賞規定以外百名を追加し本品一瓶宛を進呈し謝意を表します（各等同案は先着順入選）





女性改造八月號目次

□表紙　なでしこ……木村莊八
□口繪　ナポリの朝……梅原龍三郎

戀愛と道德……石原純……一
マルクス・ラッサアルの私生活……小泉信三……一三
男女の心の問題……田山花袋……二一
現代文明批評
世界心……野口米次郎……三〇
近代生活……古屋芳雄……三八
文藝上の新傾向……千葉龜雄……四六

日本美の高調
藝術の神祕國……野口米次郎……五六
驚嘆すべき單純化……生田長江……六〇
大日本の有する藝術美……香取秀眞……六六
笑ひと日本文明……廣瀨哲士……六八



エクスプレッション其他……………柳田國男…


東洋キネマ
經營者 德川夢聲
氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ

ナポリの図



戀愛と道德

石原純

一

私は改造七月號に於ける戀愛價値論と題する一篇に於て、戀愛の本質を論じました。けれども私が戀愛なる言葉によつて云ひ表はさうとした私たちの行爲と、屢々同じ言葉によつて他の人たちの解さうとする處のものとが、若し相違してゐるならば、そこには無益な論爭がかさねられなければならないのを虞れます。それ故に私はふたゝびこの問題を取り扱はうとするに當つて、その言葉の意味に對する注意をしるしておきたいと思ふのです。

私は多くの論者が、戀愛を性慾の淨化行爲として解するに反し、之が性慾を機緣として起さるゝ特種の愛行爲であると主張しました　淨化と云ふ事が嚴格な意味でこの場合に不當であるのは、既に論じたとほりでありますが、私は性慾實感を伴はない戀愛の可能であることに關して、更に上の主張を妥當であるとしないわけにはゆきません。

私たちが性慾感なしに、少くとも之を自覺することなしに戀愛に入ることは、屢々經驗せられるところです。謂はゆるプラトニック・ラヴと稱せられるものは之であり、かのダテンがビアトリチエに對するところのものは、たとへ相愛的では

ないとしても、その心境に於てかやうなものとして擧げらるべきものでもありませう。若しかやうな戀愛が旣に私たちの人格內容によつて性慾の淨化としてそこにあらはれたものであるとするならば、私たちが一たびかやうなプラトニツク・ラヴの或る期間を經驗した後に、相互に性慾行爲によつて結びつけられる機會に到達した場合に、私たちは之を性慾淨化としての戀愛が再び性慾へ不淨化せるものとして見做さなければならなかつたでありませう。私は之を淨化なる言葉を用ひた故の一つの迷妄であると思ひます。最初に戀愛を生じて、而して後に性慾行爲にはひらうとも、それは、私が解する如くに、戀愛が性慾を機緣とするものである限り、寧ろ當然の歸趨であつて、決して不淨化でもなく不自然でもないのです。たゞプラトニツク・ラヴに於ては、たとへ性慾が機緣であるにしても、それが無意識的に隱れ潜んでゐて、自覺にあらはれずにゐるに過ぎないのであつて、しかもこの機緣としての性慾は戀愛行爲のあらゆる機會に於て衝動的に感ぜられるに至るでもありませう。從つて性慾機能に於て或る生理的缺陷を有するか、若くは強い道德的意識による性慾感の自然的抑壓によるか、更に或は純粹な童貞に於ける性慾感の未經驗的無知によるか、之等の何れかに依らない限り、純粹に性慾なしに戀愛を繼續することは不可能であるでせう。性慾が淨化せられて戀愛になるとは、いかにしても言ひ難いことです。

私は次に單なる戀、又は戀慕を、私の云ふところの戀愛と嚴に差別したいと思ふのです。實は甚だ異なつたものとしなければならないこの兩者を、通俗的には一概に混同して考へてゐる場合が頗る多いからです。固より戀といふ言葉のうちにも言語學的に考察したならば、私の論じたやうな戀愛を含まないとは限らないでせう。けれども戀愛の本質が常に相愛的行爲としてあらはれなくてはならないのに反して、戀は多くの場合に於て必ずしも然うでないのです。「人を戀ふる」とは或るひとりの異性を思慕することであります。その對者が同時に自分を思慕するかどうかには獨立な自分の心的感情に止まる點に於て片愛的であると共に、必ずしもそれが對者の人格にはたらきかけて、その向上を希鬪するものでない限り、それは亦私の解するところの愛ではありません。却つて只兩者の現在關係に於て彼等がより親しい接觸をなし得るやうに

希求する感情に外ならないのです。そしてこの親しい接觸が兩者の性的交渉によつて遂げられることを、意識的に若くは無意識的に含む限りに於て、それは等しく性慾を機緣として起るものであると云ふことが出來ます。

男女おのづからに戀すると云ふことこそ、寧ろ性慾と共に人間の本能的感情のあらはれでもありませう。それ故に單なる戀にはまだ人格價値の意識が十分に備はつてはゐません。私たちは併し異性との接觸に於て戀愛に到達する最初の階段として、先づ戀を意識するより外はないのです。戀は即ち戀愛への入口であると云はなくてはなりません。この事實が屢〻戀と戀愛とを混同して戀の將來する弊害をも戀愛に歸し、依つて人間の價値行爲たる戀愛そのものをも誤まつて貶黜しやうとするに到る所以であると私は思ひます。

上の意味に於ける戀は一つの本能的感情であるが故にそれ自身に行爲的價値をもつてゐません。私たちは戀を意識するに當つて、それが眞の戀愛に到達し得る可能性をもつかどうかを理性的に判斷しなければなりません。即ち私たちはこの際戀より發生する處の愛が相互に全人格を包容し、その人格向上を期し得るかどうかについて、十分の考慮を盡した後に戀愛生活に入るべきであります。戀は屢〻批難せられる如く盲目的でもあるでせうが、戀愛は決してさうでないと私は信じます。なぜなら戀愛に於て私たちは自らを人格的に行動しなければならないからです。私はそれ故にこゝで次の樣に言ふことが出來ると思ひます。

戀愛は即ち戀の進化であつて、性慾の進化若くは淨化ではない」と。

戀愛に到達せずして、單に戀によつて恣いまゝに性的交渉を行ふことは、之れまた人格を無視するものであります。戀は一つの素朴的感情としての强さと美くしさをもつでもありませう。そしてそこには單なる性慾と異つて人格の或る反映さへもあります。戀することは性慾遂行を欲するのではなくて、異性としての人格への思慕を感ずることです。けれどもそれが完全なる愛として發達しない限り、性的交渉に入ることは禁抑せられなければならないと思ひます。

二

戀愛と道德との關係は理論的にも亦實踐的にも極めて重要なものであることは誰しも認める處でありませう。私はこの點に私の考察を進めるに當つて、先づ道德なるものの意味を少しく明らかにしておく必要があると思ひます。

私が嘗て人間の生命の希求すべき理想價値をたづねて、聖と美と眞とを擧げたのに對し(「人間相愛」九八頁)、土田杏村氏はその戀愛論(婦人公論四月號)のなかに之に言ひ及ぼして、「反價値の特色を最も明らかに示す善價値は何故か數へられてない」として之を咎められました。併し私には道德的善價値なるものが、たゞ道德的當爲の存在を假定せる場合に於てのみ考へらるべきものであつて、かやうな當爲なるものが人間の絕對的究意理想のなかに抑も存在すべきであるかどうか頗る疑はしいのは、既に前論にも述べた通りなのです。

道德はもと二個以上の人格が對立せる場合に、その間に各が取るべき一つの相對的行爲として發生したものであることは確かです。なぜなら、若し地上に唯一人の人間のみが存在してゐたと假想したならば、彼がどんな行爲をしやうとも、恐らくそこに之を制止すべき理由を見出し得ないからであります。けれども若し彼が自分に對立する他の人格の存在を認める場合には、彼はもはや自分の好むが儘に行爲することはゆるされなかつたでありませう。こゝに自分の好むとはその本能的感情の趣く處に從ふのを云ふのです。彼はこの場合に恐らく先づ自分と對立者とが共存することの意味を考へなくてはなりません。人間が共存し且つその子孫を存續することによつて、積極的には自己の人格生命を永遠に向上發展せしめることの可能であり、消極的には孤獨の悲哀寂寞から免がれ得ることに氣づくとき、彼は即ち親しさの感情を湧き起し、愛の行爲を盡さうと努めるに至るでありませう。

人間相互の親愛感情は恐らく本能的に異性の間に血族の間に、また、知友や社會的集團や、更に一般人類の間に存在すべき筈のものでありますけれども、併しこの感情に從つて愛なる行

爲を果さうとするに當つては、いかなる事柄が之にかなふものであるかについて、或る理性的反省なしには、往々豫期に反する結果を苦驗しなければならないのです。私たちは異性愛又は親子愛の如き本能的に最も強く起り得る愛に於て、謂はゆる溺愛なるものの過誤を見出さずにはゐられないのです。他の幸福ならんことを希うて溺愛することが却つて之を不幸に導くことさへあります。私たちはかやうにして最も正當なる愛は自他の人格をして向上完成に到達せしめるそれであるとするより、より合理的な解釋を與へることは出來ますまい。けれども私たちは尙ほどんな具體的行爲が自他の人格向上に資し得るかについて悉くを明らかにすることは出來ないのです。若し私たちが、或る行爲をかやうなものの軌範として認めるならば、こゝに道德的當爲なるものが始めてつくられるのでなければなりません。

愛と道德とはかやうにしてその起原に於て等しく人間共存の事實的意味から發生せるものであると私は思ひます。そしてこの兩者共に畢竟人格の向上發展を目的としなければならない點に於て亦相一致すべきものでありますけれども、たゞ兩者のあらはれる形に於て或る程度の形に於て或る程度の相違が成り立ちます。卽ち感はどこまでも自然的な人間の本能的感情にその中核をおいて行爲するものであつて、從つて愛すると云ふことは自らよろこび好んでその感情の滿足を果すことに相應するのであります。けれども、之に反した道德に於ては自己の感情の赴くところの如何に拘らず、當爲として道德律に從はなければならない義務觀念を喚び起し、從つて道德的に行爲することは必ずしも感情の滿足に相應しないのであります。

愛と道德との兩者が恐らくはその發生の意味と目的とを等しうするに拘らず、何故にかやうな相違を行爲形態の上に持ち來すであらうかと問ふならば、それは明かに自律と他律との差別に歸せられなければなりません。當爲としての道德律は、私の既に述べた通りに、理性の充分に發達しない人間に對し、より高き理性が命令する軌範なのであつて、從つて若し私たちが或る道德律の存在を肯定するならば、私たちは寧ろ安んじて之に遵つて行動することが出來るのです。たとへ

自分の欲情が他に動いて之を守ることを欲せず若しくは之に苦痛を感ずるやうな場合があつても、私達は道德のためにこの欲情を抑壓することによつて自ら人格的に行動することの安心を感ずることが出來るでもありませう。之に反して愛の發動は徹頭徹尾自らの意志感情に依るものであつて、從つてそこには準據すべき若くは命令せらるべき何等の軌範も存在しませんから、自分で正しい愛のつもりで行爲しても、それが往々にして豫期に反する結果を醸し又は道德に違背するものとして激しい批難を受けることさへあります。道德背反に對する批難は、若し行爲者が十分の理性を以て判斷し、採擇したものであるとするならば、等しく人格向上への意見の相違として尚ほ忍ぶべきものであるでせう。併しながら、自ら正しい愛として盡したところのものが、後には必ずしも然うでないことを見出し悟つた場合には、自らに對する悔と共に、愛するものをさへ愛し得なかつた哀しみを感ずることに於て、人間として最も深刻なる苦惱を體驗せずにはゐられないのです。しかも私はこの苦惱の體驗が彼れ自らの内奥より發する自省的人格向上の道程として最も尊いものでなければならないと思ひます。他律的に強ひられることは既にそれ自身自由人格の毀傷であるからです。

私は道德も亦その最高の階段に於ては固定形式をもつた道德律を取り去つて、すべてを絶對自律的に任せなければならないものであると思ひます。人間相互の精神的交渉は極めて複雜であり、微妙なものであります。單なる原始的戒律は往往にしてその鑑明ひることの出來ないのを私たちはあまりに屢々經驗させられます。社會的思想の變化するに從つてそれは特に甚だしいもののあるのを見るでせう。それにも拘らず舊來の道德律を頑守することは、その不當なるを信ずる人たちに取つて徒らに之に反抗し、却つて倫理思想を破壞するの虞れを生じます。かやうな場合には寧ろ道德律のないのに如かないのであつて、すべての行爲が道德律に批護せられることなしに、又之への反抗をも感ぜられることなしに、自分一個の倫理的責任にゆだねられるのが正當であると私は思ひます。

實際に、道德的善はその反價値の特色を最も明らかに示すと云はれては居ますが、併しそれは一定の道德律を確立し、

善の概念を内容的に之によつて規律するからに過ぎないのであつて、若し道徳的善を、より根本的に人格向上への實踐行爲として解するならば、恐らくは容易に善と惡を斷ずることは出來ないであらうと思はれます。たとへば盜は戒律的に明に惡として責めらるべきものです。けれども或る一人の無力な人間が現時の財産私有制度の社會に於て貧困の極に陷り、止むを得ずして些細な盜行爲を犯したとするならば、それは寧ろ憐れむべきものであつて、その代りに彼が巧言令色によつて他人を魅惑して財産分與を得たとするに比べて、却つて憎惡するに足りないでもありませう。盜を絶對の惡として斷ずる前に、私たちは、抑も地上の一人の人間がその生存の權利を平等に主張することがゆるされるとするならば、どこにその保證を見出し得るであらうか、之がためにどんな社會制度が必要であるかと云ふやうな問題に對して十分の論議を盡さなければならなかつたのでせう。

要するに道徳については極めて愼重なる、そして永遠に發展して止まないところの考究を必要とするのであつて、それが人格の向上完成を目的とする限り、眞正の愛と一致すべき筈のものであり、また道徳的行爲が愛と等しく、何等の義務觀念なしによろこんで果されるに至つて、人間の行爲としての最高價値を有すべきであることも疑ひを容れないのです。さうでない限り、道徳的價値は暫定的であり又便宜的であつて、理想的なるものに屬しないでありませう。

三

以上愛と道徳との關係について論ぜるところのものは、愛の特殊の形に於ける戀愛に對しても當然適用せられると私は考へます。即ち本質的に見て、抑も道徳律なるものは愛又は戀愛の眞正なるあらはれに合致すべきやうに定めれならくてはならないものであつて、從つて戀愛が道徳に矛盾すると云ふやうなことはあり得べからざる事柄なのです。たゞ實際に於て之があらはれるやうに見えるのは、道徳律が正當に擇ばれてゐないためであるか、若くは戀愛が眞正の形に於て行は

れてゐないためであるかに歸せられなければなりません。戀愛することを道德上罪であると解す如きは、その迷妄の最も甚だしいものであると私は思ひます。

たゞ茲に考へなければならない極めて大切な事情が殘されてゐます。それは道德が主として一般者に適する律則を與へるに對して、戀愛は常に對立せる二人の異性の間の行爲として限られる點であります。私はこゝに特に二人の異性と云ふことを挿入しました。戀愛が全人格的に異性を愛するものであるとする以上、より多くの異性に對して同時に戀愛することは不可能でなければなりません。なぜなら、その場合には愛は既に全人格を包容するものでなくて、その何れかに於て分岐せられなければならないからです。私がこの文の初節に述べた思慕的な戀にあつては同時に多くの異性を對象とすることが或は可能でもありませうけれども私の特定するところの眞の戀愛に於ては固よりそれは除外せられなければなりません。之れ戀愛が單なる異性愛又は特殊の友情愛と異なる所以でもあり、また一方に愛が單なる思慕とも區別せられる所以でもあります。

戀愛が二人の異性の間に行はれる場合に、若しそれが第三者の人格をそこなふやうな事情があつたとしたならば、之は道德的にいかに論ぜられなければならないであらうか。かやうな問題は不幸にして屢々私たちの間にあらはれ、そして私たちはそれに苦まなければならなかつたのです。私は固より道德を現に假定せられる或る固定型式に於てゞはなく、愛の理想と一致するところのそれの本質的な意味に於て解することが正當であると思ひます。たとへそれが具體的な內容を示すに足らないものではあつても、私は戀愛價値論に於て、それ以外の途をとるわけにゆかないのを感じます。

この種の問題は實は戀愛に限られたわけではなく、たとへば親子間の愛に於ても同樣な事情が起り得るのであつて、その愛を行ふに當り、他の血族愛若くは友情愛を或る程度まで犧牲に共しなければならない關係も屢々あらはれます。この後者の場合の如きは多くは或る意見の相違によつてあらはれるのですが、私たちが眞の正しさの何れにあるかを容易に判

斷することが出來ない限り、また止むを得ないことであつて、私たちは自己の信ずるところに從ひ、そのより重き愛を全たうするやうに努めなければならないのです。しかも之がために愛をつくすことの出來なかつた第三者に對しては、出來るだけその心もちを相互に諒解すべく讓り合ふと共に、それでもなほ一致を缺くやうな場合に於ては、まさにお互に完全であり得ない人間のかなしみを體感して、更にその愛を將來に期するより仕方がないのでありませう。

戀愛の場合に於てもほゞ同樣です。戀愛せる二人の異性の何れかに對して第三者が親子の關係を有するやうな際には、恐らく私たちは人間としての最も深いかなしみを體驗せずにはゐられないかも知れません。私たちが戀愛と親子愛との何れをより重しとして判斷しなければならないかについては、固よりその事情を異にするに從つて適宜に之を處置するの必要を感じますけれども、若しより一般的に論ずることがゆるされるならば、年代的に或る間隔を保つてゐる、從つてその點で既に全人格的融合であり得ない親子關係よりも、まさに全人格的に融合すべき戀愛者間の關係を、愛として重しとしなければならないと私は思ひます。たゞ併しかやうな戀愛はその最も理想的なものであつて、あらゆる實際の場合には之に甚だ遠いことをも考慮しなければなりませんし、また之に關して意見の阻格する際にも尙ほ子の親に對する尊敬を缺いてはならないことも勿論でありませう。

一切の考慮を徵した上で、畢竟戀愛が道德に背反すると云ふ何等の要素をもたないことは、その兩者の本質上明らかであり、また當然であると私は思ひます。

四

戀愛の對象が特定の一人格でなければならないと云ふことは、戀愛が全人格的な愛であるといふ性質からの當然の歸結です。世に言ふところの戀愛の多角關係なるものは、實に戀愛以外の過程に於てあらはれるか、若くは戀愛當事者以外の

ものは本質的に第三者として見なくてはならない筈のものです。

戀愛の對象は卽ち事實的に特定の一人格でありますけれども、しかし之は必ずしも永續的であり得ない場合があらはれます。私たち人間は誰しもその人格に於て缺陷をもたないものはありません。さうなればこそ、私たちは常に自ら、そして又相互に絕えざる向上完成を希はなくてはならないのであつて、この希ひなしには人格的に生きると云ふことは無意味に終るでもありませう。人格の向上完成を希ふことに於て人格的生命の樂しい仕事が存在するのであり、そして私たちは戀愛生活に於てこの仕事に最も多くたづさはることが出來るのです。けれども私たちは不幸にして一たび戀愛生活にはひつた後に、相互の人格的缺陷が之を續けることに甚だしい障礙をもち來すことを見出す場合がないとは限りません。否、私たちは屢々かやうな苦い經驗をさへ味ふのです。その樣な不幸に出遇うて私たちが戀愛生活の存續を斷つことは果して正當でありませうか。

この問題は戀愛と道德とに關聯する最も困難な、しかも重大な問題であると思ひます。最高道德の見地から云へば、私たちが理想的に希求するところのものを、私たち自身の人格的缺陷の故に、追隨し得ないとすれば、それは悲しくも道德上罪せらるべき行爲であるに相違ありません。私たちが人間一般を愛することを希求して、しかも自らの欲情のために、その愛を心のなかに廢めたとするならば、それはこの意味で責められなければならないのです。たとへ自分の力が及ばないまでも私たちはどこまでも愛の理想を守らなければならない筈です。戀愛の場合に於てもこの最高道德の立場は勿論適用せられなければならなかつたのであります。

私たちは卽ちその人格的缺陷のために戀愛者の完全な融合をつくることが出來ず、戀愛を永續することの出來ないのは、ともかくもいかなる場合にも道德上責めらるべきものとしなければなりません。戀愛は人生に於ける最も重大な行爲の一つです。私たちは最も眞摯に之が生活に對して努力すべきであるのは謂ふまでもありません。そして戀愛の任意的終結

に對して十分の道德的罪過を感ずべき筈です。

併しながら、上に例示した一般的人類愛のやうなものと戀愛との間には、尚ほ或る間隔をもつてゐます。愛が等しく人間の本能的感情を中核とするとは云へ、その感情の强さの程度に於て戀愛は恐らく最も强く、人類愛は之に比べて甚だ弱いのです。そればかりではなく、後者の對象が最も廣く且つ漠然とした輪廓を有するに過ぎないのに反し、前者の對象は特定の一人格に限られてゐます。この特定者は固より自由に選ばれた（且つ選ばるべき）ものではありますけれども、實際の社會的並び個人的事情はその範圍を存外に狹く制限します。それ故に選擇の自由があるとは云へ、尚ほ多くの偶然さを含んでもゐます。從つて若し私たちがそこに戀愛生活の不可能さを發見した場合には、私たちは强ひて之を續けることに對するあらゆる努力に堪へ切れない事情をもたないとは限りません。之が戀愛の、他と異なる所以をなす所です。

若し私たちが戀愛の到底存續成立し得ないことを十分に自覺して、しかもなほ戀愛生活の形骸をその儘に殘すことは戀愛の任意的終結が罪せられるよりも、より大きな罪惡を犯すことに陷るでもありませう。なぜならそこには當然對象的人格の或る程度の無視若くは憎惡をさへも生じ來るからであります。それにも拘らず、彼等が若し依然として性的交涉を續けるが如きことがあつたとしたなら、それは人間として何といふ羞づべきことではないでせうか。かやうな罪惡に陷ることを避けるために、死に對する如き、或る深いかなしみをもつてする戀愛生活の合愛的終結は寧ろ望ましいことでなければなりません。たゞそこにはこの終結に伴ふ種々の處置が必要であります。そして之等の實際的處置は單なる倫理的理想の問題ではなくて、現實の個々的事情や社會的制度、從つてまた私の前に述べた暫定的道德律などにも關聯するために、極めて複雜な具體的考察をも必要とするでありませう。戀愛は本質論を主とするこの文に於て私は今は之等の具體的問題を殘しておきます。

マルクス、ラツサアル等の私生活

小泉信三

ベルンシユタインが校訂編纂して出したマルクス－エンゲルスの往復書簡集四卷(Der Briefwchsel zwischen F Engels und K. Marx 1844 bis 1883)は、マルクスを知らうと思ふ者の是非讀まなければならぬものであらう。彼の學說の中にも、「資本論」を讀むよりも、此を見た方が容易明瞭に其要點を掴むことが出來るものがある。價格論地代論などはそれであるが、それと同時に、彼れの私生活に於ける面目が此等の書簡に最もよく現れて居る。いつか小山內薫氏が雜誌「女性」に出された飜譯短篇の中に「レンヒエン・デムウト」といふ、マルクスの家の忠婢の名を題にして、マルクスの家庭生活の一側面を描いたものがあつた。原作者はリイプネヒトの「追憶」などに據つて書いてゐたやうに記憶するが(此記憶は確かでない。)まだあゝいふ風にしてマルクスを描かうとする者は、此の書簡集の中に極めて豐富な材料を見出すであらう。マルクスは誰も知つてる通り、傲岸不屈で、容易に人に許さぬ人物だつたが、エンゲルス丈けには何でも打ち明けて談り、訴へ、又泣言といふべきものをも聽かせてゐる。左に揭げる其愛兒を哭する手紙なども、著書丈けによつて彼を想像してゐたものには意外の感があるかも知れない。

マルクスが一八四八年－九年の革命運動の失敗後、大陸には身の置所がなくなつて、一八四九年の八月倫敦に亡命した

のは、誰れも知つてゐる通りである。エンゲルスはマンチエスタアに去つて、父が其社主の一人となつてゐた紡績工場に傭はれて、其收入の一部をマルクスの家計を助ける爲めに割いた。マルクスの手紙には、「三磅有り難う」「五磅正に受取つた」といふ言葉が頻りに繰返される。時にはそれが一磅の事もある。其間に共産黨の舊同志は分裂する。クリミヤ戰爭が起る。恐慌が襲來する。マルクス、エンゲルスは倶に幾度も革命の再來を豫想して、幾度も失望した。而して獨逸の勞働者との接觸は失はれ、英吉利の勞働者からは殆ど顧みられず、其學問上の著作はといへば、「資本論」は勿論「經濟學批評」も未だ世に現れてゐない。マルクスは僅に少數亡命客を友として、紐育トリビユウンに對する寄稿の報酬と、右のエンゲルスの仕送りとに依つて、此の大都の一隅に辛うじて生活を續けてゐた。此時代に（一八五五年）ムツシユ大佐といふ綽名をつけてゐた愛兒エドガアルが病死したのである。此子供が病氣のことは既に三月始めの手紙に見えてゐる。病勢は一進一退し、マルクス夫人はその爲めに自分も床に就いた。三月三十日の手紙は小兒の容體が絕望に陷つたことを報じてゐる。

「……到頭病氣は僕の家に遺傳の腹部疾病（Unterleibsauszehrung）の容體を現して來た。醫者の側から見ても望みは最早ないらしい。妻は精神激動の爲めに、一週間以來病氣で、今迄にない弱り方をしてゐる。僕は勿論確りしてなければならぬのだが、其の僕も胸がさけ、頭が燃える思がしてゐる。子供は病中にも一刻も其の機嫌善良で、同時にしつかりした性格を失つて居らぬ。僕の代りに仕事をしてくれる（寄稿代作）君の親切と、子供に對して感じてくれる君の同情とに對しては、實に感謝の辭がない。」

エドガアは終に死んだ。四月六日の手紙は報じて曰く、「親愛なるエンゲルスよ。哀れなるムツシユは最早ゐない。彼れは今日五時と六時との間に僕の腕に抱かれたまゝ（文字通り）眠つてしまつた。僕は君の友情が如何に吾々の苦痛を和らげたかを決して忘れない。僕の子供に死する哀傷を君は解して與れるだらう。妻もどうか君に宜しくといふ事だ。若し僕がマンチエスタアに行けば、一週間の豫定で、妻も連れて行くかも知れない。其場合は、無論宿屋に泊るか、貸間を借り

るかすることになるだらう。兎に角妻に最初の數日を過ごさせる方法を講じなければならぬ。」

六日後の手紙は愛兒亡き跡の寂寥を訴へてゐる。「……事毎に如何に子供が思ひ出されるかは、筆には書けない。僕は既に有ゆる災厄に遭つて來て居るが、併し今にして始めて、眞の不幸の何たるかを知つた。幸にして埋葬の日から酷い頭痛がして、考へることも、聽くことも、視ることも出來なくなつてゐる。最近の幾日かに悶みした恐るべき心痛の下に、僕は君と君の友情とを思ひ、又世界に猶ほ吾々が倶に爲すべき有意義の或事があるといふ希望に依つて纔に支へられて來た。」

マルクスの倫敦に於ける生活が安樂だつた時は、先づなかつたといつて好いが、窮乏の最も甚しくて、慘憺たる狀態を呈したのは、一八六二年前後の事である。第一に、マルクスが執拗な瘍腫の爲めに惱まされる。亞米利加南北戰爭の爲めに、紐育トリビユウン社から入るべき收入が影響を蒙る。其處へ持つて來て、此夏(一八六二年)ラッサアルが伯林から尋ねて來る。マルクスは此前年伯林のラッサアルの家に泊つて、非常に歡待されて來たのだから、構はずに置くといふ譯には行かないのである。七月三十日の手紙には「ラッサアルは今週の末に立つ……彼れに對して多少の體裁を保つ爲めに、妻は、釘付け鎹止めになつてないものは、悉く質屋に持ち込まなければならなかつた。」と書いてある。

マルクスが債鬼に惱まされた有樣は、次の一二の例に由つて充分想像することが出來る。

「倫敦へ歸つて見ると、家主から手紙が來てゐて、二十磅の殘りを受取る爲め、今日(四月廿八日)尋ねて來ると書いてある。ところが拂ふ金は一サンチイムもないのだ。僕が四週間留守にした間に、日常の必要の爲めの借金は無論嵩んだ。其上に、家主よりも猶ほ至急支拂を要する番外費目が二つある。第一がピヤノの敎師に對する七磅で、これは目下の境遇上稽古を已めなければならないので、支拂を要するのである。第二に質屋に十磅納めて、出して來なければならぬ。其處には單に子供の物許りでなく、女中の物も、穿き物まで這入つて居るのだ。家主が厄介だから、僕はまだゐないことにしてゐる。

家主が來たら妻が僕はまだ歸らないと云つて、切拔けることになつて居る。」

又別の日（六月十八日）には曰く「また君に僕の窮乏の話をきかせるのは、實に嫌なのだ。併し何うすれば好いのだらう。妻は毎日僕に子供達と一緒に墓の中へ入り度いと云ふ。僕は小言を云ふ譯には行かない。斯う云ふ狀態にゐて甞めなければならぬ屈辱、苦痛、恐慌は、實に言葉には盡せないのだ。君も知つてる通り、五十磅は借金の爲めに拂つてしまつた。さうして之れで半分も埋まつてはゐないのだ。二磅は瓦斯に拂つた。維那からの哀れな金は、七月末になつて始めて入るが、忌々しく僅かなものだらう。奴等は此頃毎週一篇しか論說を載せないのだ。其處へ持つて來て、五月始めからの新しい支出がある。僕は倫敦で七週間一サンチイムなしで暮すといふ危險な狀態に就いては、何も云はうとは思はない。それは吾々が慢性的に繰返してゐることだ。併し絶えず現金で拂はなければならぬ經常費があること丈けは、君も自分の經驗で知つてゐるだらう。これは四月の末に出して來たものを又質屋に入れて拂つてゐる。ところが先日來其財源も盡きたので、妻は先週僕の本を賣らうと試みたが「駄目」だつた。それが博覽會季節中の事で、子供等の友達は皆な樂しんでゐるのに、自分達丈けが、誰れか尋ねて來て、此窮狀を見られなければいゝといふ心配許りしてゐるのだから愈々可哀さうだ。」

マルクスも愈々窮して、事務員に傭はれて、生計を立てようかと思ふに至つた。八月廿日の書簡には斯う書いてある。「エンゲルス君、君は何といふか知らないが、僕の困窮の爲め君にこんなに厄介を掛けるのは實に苦しい。嗚呼僕が何かの實務を始めることが出來さへしたら！一切の理論は灰色で、たゞ實務のみが綠りだよ。如何せん悟ることが餘りに晩かつた。」さうして九月十日の手紙には「僕は來年の始め、英吉利の鐵道會社に傭はれるかも知れない」と云つて居る。（幸か不幸かマルクスは、惡筆の爲め採用されなかつた）。

マルクスが窮迫に惱まされることが餘りに甚しかつた爲め、さしものエンゲルスとの交情も一時傷けられやうとした

ことがある。マルクスとエンゲルスとの前後四十年に亘る交際に於て、此外にも二人が相爭つたことはあるのかも知れないが、兎に角書簡集に現れてゐるところでは、エンゲルスは一度マルクスの無情を憤つたことがある。それは斯ういふ事件である。エンゲルスは正式の結婚はしなかつたが、愛蘭土生れのメリイ・バアンスといふ婦人と同棲してゐたが、そのメリイが急に病死した。一月七日（一八六三年）の手紙でエンゲルスは此訃を傳へてゐる。然るにマルクスの是に對する答は、冷淡極まるものであつた。「メリイの訃は僕を驚かせ、且つ呆然たらしめた。彼女は非常に親切な、キツトのある人で、深く君を愛してゐた。」弔辭はこれで終つてゐる。それ丈けならば好い。マルクスは直ぐ其後に續けて、又もや長々と其生活難を訴へて、金策を相談してゐるのである。親友の妻を悼む言葉が僅に二行で終つてゐるのに對して、無心の文句が二十數行に上つてゐるのを見ては、エンゲルスでなくても感情を害せざるを得まい。マルクスは弔辭に續いて直ぐ斯う書いたのである。「我々の仲間には、何だといつて災厄許りが起るのだらう。僕は最早自分の頭が何うなつてゐるか、全く分らない。僕の佛蘭西及び獨逸で金を調達しようといふ試みは、失敗した。而して十五磅では雪崩を僅に二三週間しか支へられないといふことは、當然豫期すべきことだつたのである。肉屋と麵麭屋とからの外は（それも今週限りだが）最早掛けでは何も買へないといふこと以外に、僕を學校の爲め、家賃の爲め、及び掛取り共の徒黨の爲めに苦しめられてゐる。二三人の者に二三磅の内金を入れてやつたら、其奴等が今度は外の者に、二倍の威力を以て僕に迫らせるのだ。其上に子供等は外出する爲めの着物も靴もない。要するに、僕がマンチエスタアに行き、又最後の手段として妻を巴里に遣つた時に明かに豫見したやうに、萬事滅茶々々になつたのである。若し貸附組合(loan society)か生命保險かの方法で、稍纏まつた金額を算段することが甘く行かなければ(而してそれの見込がない。前者に就いては、一切の事を試みたが無効であつた。彼等は保證人を要求し、又家賃と租税との領收證を提示しろといふのだが、それが僕には出來ない)僕の經濟は最早二週間は支へることが出來ない。」其後に、こんな時に、君にこんな嫌な話を聽かせるのは、實に利己的な仕業だが、倫敦には

一人も自由に話しの出來る人がない。其上に「自分の家では他の方面からの破裂を抑へる爲め僕は寡默なるストア哲學者の役を演じてゐるのだ。」と言譯して居る。

マルクスの爲めには如何なる犧牲にも甘んじたエンゲルスも、今度許りは流石に好い顔をしない。一月八日附の手紙に對して一月十三日になつて始めて返事を書いてゐる。「今度は僕自身の不幸と、君のそれを見ることの冷かさとが、此より早く返事を書くことを積極的に不可能ならしめたことを君は當然と思ふだらう」といふのが冒頭で、それからマルクス以外の知友からは豫期以上の同情と友誼とを示されたのに「君は此瞬間を、君の冷かな思考法の優越を主張する適當の機會と認めたのか、それも好からう。」と云つて居る。金策に就ても、今度許りは其答は甚だ冷かである。

マルクスは是に何う答へるかと思ふと、暫らく日を措いて後に書いた手紙で、下手な辯解らしいことを言はないで、綺麗にあやまつてゐる。「君にあの手紙を書いたのは、僕が非常に間違つてゐた。實は發送して直ぐ後悔したのだ。然しそれは、決しての僕の無情から起つたことではない。君の手紙（早朝配達された）を見て、僕が近親の死に逢つたやうに悲しんだことは、妻も子供も證人になるだらう。然るに晩に手紙を書いた時には、それを絶望状態の印象の下に於てしたのである。家主からの差押人が家に來てゐる。肉屋からの手形抗議が來てゐる。家に食料と石炭とがない。而してジエニイヘンは床に就いてゐる。僕は通常こんな場合にシニシズムを以て之に處するのだが、特に僕の頭を狂はせたのは、妻が僕が君に實狀を充分正確に知らせてないと思つたからだ。下略。」

此手紙はエンゲルスを釋然たらしめた。此時のエンゲルスの手紙は、我々が讀んでも愉快である。「僕は君の卒直を感謝する。君の此前の前の手紙が僕に如何なる印象を與へたかは、君自身にも分るだらう。あれ程久しく一人の女と同棲して、さうして其死の爲めに傷心せずにゐるといふ譯には行かない。僕は僕の青春の最後の一片が葬られたやうに感じたのだ。君の手紙を受取つた時には、メリイはまだ埋葬してなかつた。君に云ふが、あの手紙は全一週間僕の頭に殘つてゐて、忘れることが出來なかつたのだよ。併し心配し給ふな。君の後の手紙が形を付けた。僕はメリイと共に、同時に、僕の最も古い最

も良い友達を喪はなかつたことを喜ぶ。」同時にエンゲルスは無理な工面をして、百磅を此手紙に同封して居るのである。

マルクスが其次の手紙で、妻の爲めに辯じた中に「女といふものは——多量の悟性を具へたものも——奇妙な動物だ。僕の妻は朝メリイと君の不幸の爲めに泣いて、丁度其日に絶頂に達すべき自分の厄難を全然忘れてゐた。かと思ふと、晩には、差押人に押かけられて、子供を有つて、苦しんでるものは、自分達の外には世界中に一人もないと思ふのである。」といふ一節がある。何でも此時妻はエンゲルスに急を告げて、救を求めて呉れといひ、マルクスは此際そんな事は出來ぬといつて、爭つたものらしい。「家庭の平和は大に害された」と書いてある。

併し此邊を讀んでゐて、最も愉快なのは、此の窮迫の最中に於て、マルクスの研究が毫も挫折してゐないことである。「斯う云ふ狀態の下では、仕事は到底出來ない」と嘆じながら、資本論の脫稿は大に捗取つてゐる。マルクス自身も或手紙には「……不思議にも此窮迫の下に於て、僕の頭は今、何年來になく、よく運轉する」と云つて居る。窮狀を報ずる手紙の間々に彼れは難解なる經濟理論の問題を論じて居る。其中の最も重要なのは、始めにも言つた價格と地代とに關するもので、地代論では絶體地代說を立てゝ、殆ど學界の定說となつてゐたリカルドの地代說を覆へさうとしてゐるのである。エンゲルスにも此の新說は始め理解し得なかつたのである。又ケネエの「タブロオ・エコノミク」(經濟表)に傚つて描いた、自家獨得の表をエンゲルスに示して、其批評を求めてもゐる。

前に引いた、エンゲルスに已れの「無情」を謝した手紙にも、直ぐ別の一節で、紡績機械の事を質問してゐる。軍事的觀察に捉へられたエンゲルスが、南北戰爭で南方の勝を豫想したのに對して、マルクスが其の誤れる所以を說いてゐるのも此前後の事である。生計難を訴へてゐるマルクスは、一向常人と變らないが、其間々に彼れの常人と異なる別の面目が現れてゐる。非凡人の凡人的一面を見ることも興味はあるが、非凡人の非凡人たる一面を見ることは、更に遙かに心氣を爽快ならしめる。

此書簡集を見ると、隨分多くの人物が散々酷評されてゐるが、最も酷くやられてゐる一人は、ラツサアルだらう。ラツサアルの著作は、殆ど價値を認められてゐない。其上に其人物に對して二人が罵評冷評を加へることは甚しい。元來マルクスは狹隘な俗人の道德標準に照らしても、非難の餘地の少ない嚴格な行狀の人であつたらしいが、ラツサアルは其正反對であつた。或機會に彼れは「吾々をして二者の中の一を擇ばしめよ。チプリの葡萄酒を飮んで、美人に接吻することか、……或は……人類最大多數者の暗黑なる運命の改善の爲めに、吾々の全力を捧げることか……。」と云つた事があるが、或人は之に批評を加へて、彼れは二者の一つを取らないで、兩方を攫んだのだと云つた。此一面もマルクス等の彼れに對する信用を大に傷けたものだらう。兎に角マルクスは、ラツサアルを用ふべき材幹とは認めながら、最後まで信賴すべからざる人物として遇してゐた。マルクス、エンゲルス間の交通ではひどい酷評を受けてゐるのに、ラツサアルがマルクスには始終敬意を表してゐるのを見ると、些か同情を禁じ得ないが、これはラツサアルの方にも非がないのではない。彼れが目的の爲めに手段を擇ばぬ人であつたことゝ、言行に表裏があり過ぎたことゝは、如何に彼れに同情ある人も回護の辭に窮する所だらう。例へば一八五九年に奈翁三世が伊太利を扶けて墺太利と戰つた時、マルクス等は反佛論者であつたが、ラツサアルは反墺主義を唱へ、「伊太利戰爭と普魯西の任務」と題する小冊子を著して、佛蘭西が南方で地圖の改正を企てるならば、普魯西はそれに關はらずに、シユレスキク・ホルシユタインを取つて獨逸の地圖の改正を行へと說いた。さうして置いて、マルクスへの私信では、あゝ云ふ事を說いても、普魯西政府が佛蘭西と開戰することは明である。自分の著述の目的は對佛戰爭を不人望ならしめて、革命の破裂を促さんと欲するにあつて、書中に說いた事が行はれることを欲してゐるのではないといふ意味の事を謂つてゐる。斯う云ふ政策も一の有効な政策かも知れないが、吾々を以て見れば、權謀に過ぎる。若し之れが爲め民衆が、ラツサアルの言說に耳を傾けなくなつたとしても、人を怨む譯には行かぬのである。

斯ういふ例は外にもある。これより愛嬌がある（と云つて好からうと思ふ）のは、女性に對して自分の價値を誇張して吹聽して居ることである。ラツサアルは度々情事に關する風說を立てられた人だが、一八六〇年の夏アアヘンに轉地して、

其處で相識になつた露西亞の一少女と結婚しようとしたことがある。其時此少女の心を動かす爲めに、長文の半ば自敍傳のやうな手紙を書いたのが殘つてゐるが、此中で彼れは、貴族とブルジョワジイとの畏怖と憎惡の的なる一黨の首領として自分を說いて居る。併し實際彼れが一黨を率ゐたのは、一八六三年以後の事なのである。又一八四八年に自分が法廷で試みた演說に就いて斯う書いてゐる。「如何なる物も貴女に私の喚起した電氣の如き印象を想像させることは出來ぬ。全市全州の人民は、謂はゞ熱情の波に漂はされ、……有ゆる階級、全ブルジョワ階級は、熱情に醉つた。此日が私に、萊因州に於て、無比の演說家たり、無限の氣力ある人物たるの名聲を齎し、新聞紙は此名聲を全王國に傳へた 。」又デュッセルドルフで官吏抗拒煽動の廉で起訴せられた時の裁判でも、彼れは前に劣らぬ名聲を博したといひ、「此裁判に於ける私の演說は、之も同じく印刷に附せられてゐるから御目にかける」と云つて居る。處が實はラッサアルは此時、準備はしたが法廷で演說はしなかつた。其事は言つてないのである。

又ラッサアルが其の爲めに決鬪して死んだヘレエネ・フオン・ドエンニゲスに向つて、自分が民選大統領として、六頭立の馬車で、彼女と共に伯林に乘込む光景を想像して話して聽かせたといふ話は、眞僞稍々疑しいが、上記の「告白」などに徵すれば、ラッサアルが決してさういふ事を言ふ人物でないとは、決して斷言出來ない。

さう云ふ譯で、ラッサアル對マルクスの關係は、少くもラッサアルに取つては、不幸な交際であつた。ラッサアルの方ではマルクスに好意を持つて、マルクスを新聞社に推薦したり、其著述の爲めに出版者を周旋したり、其の獨逸歸國(歸化)の爲めに盡力したり、或は金を融通したりしたけれども、マルクスの方では、始終警戒を要する、好ましからざる人物として之と交はつてゐたやうである。併し其のラッサアルが不慮の死を遂げたのを聞いては、マルクスも感慨なきを得なかつた。彼れがラッサアルの親近者に「彼れは若く、アヒルレスの如く、勝利に於て死んだ」と云つたのには、會釋も交ぢつてゐたらうが、「此の數日ラッサアルの不幸が頭に浮んで來て仕方がない。彼れは兎に角舊戰友の一人で、吾々の敵の敵たることを失はなかつた。」とエンゲルスに書いてゐるのは、僞らざる眞情の聲だつたらう、

男女の心の問題

田山花袋

一

中條百合子が『心の河』に書いたやうな女性の苦しみを、ある人はそれは女が我儘だからと言ひ、ある人は艱難がその周圍にないのでそれであゝいふ太平樂が言つてゐられるのだと言ひ、またある人はあゝいふ妻を持つたら堪らないだらうと言つてゐる。しかし、私はさうは思はない。

私はさう言ふ見方はあまりに世間並であると思つてゐる。また、さう言つた人達も表面ではさう言つてはゐるけれども、一歩深く入つて見れば、矢張り女性に對していろいろな注文乃至苦悶を眞面目に感じてゐることを私は知つてゐる。それはそんな風に簡單にすまして置ける問題ではない。何故といふのに、それは場合に由つては、生或ひは死の問題であると同時に、魂の問題であるからである。お互に一生を棒に振るか否かの問題であるからである。

私は到るところにさうした兩性の衝突と苦悶とを見て來た。さうした悲劇はあり餘るほどある。しかも、大抵の場合は、對立でなければ妥協に、爭鬪でなければあきらめに終つてゐる。『何うも爲方がない。何うしやうにも何うにもならな

いから』かう言つて一生を過して來てゐる。そして世間では、さういふ風にあきらめて行くことを、またさういふ風に妥協して行くことを一進歩一段階と思つてゐる。この頃はあの人もわかつて來たとか、出來て來たとか言つてゐる。その實それは世間並といふ深い陷穽に次第に落ちて行つてゐるのであるといふことは誰も知らない。

『心の河』の中に書いてあるやうな純な苦悶は、若い時は誰でも感じて來るものに相違ないものである、それは女性ばかりではなく男性でもさうである。私などもそのひとりであつたと言ひ得る。女性が男性に對して不滿に感ずると同じ程度のものを、(勿論質は違つてゐても)男性も女性に對して感じて來るのである。ある時には私はかう自分で自分に言つた。『何うもさういふ風に出來てゐるのだ。男と女とは、いくら心を合はせやうとしても、感じを一緒にしやうにしても、それはとても不可能であるやうに最初から出來てゐるのだ……。さう出來てゐるのだ……。しかしそれで好いのだ。男といひ女といへば、その呼び方からして違つてゐると共に、體からして違つてゐる。それを同じにしやうたつて、とても出來ない。同じにしやうと思ふのが間違つてゐる』かう思つて半ばあきらめたものである。しかしこれは理窟で且つ氣やすめである。さうした抽象的な言葉ではとてもそれを說明することは出來ない。それほど兩性の實際が細かく雜り合つてゐる。心と心とが觸れ合つてゐる。魂と魂とが結びつき過ぎてゐるのである。

二

少し溯つて私の通つて來た時代のことを此處に言つて見やう。私は日本の女性が深窓から浮び上つて來た時代を見て來た。初めて家庭から街頭へと出て行つた時代を見て來た。それにしても明治三十五六年から七八年の女學生の快活さは何んなであつたらう。何んなに新しい芽がそこに萠え出して來てゐたであらう。また何んなに生々とした色彩がその周圍に塗られてあつたらう。私達は日本の女性が女性としての覺醒に初めて十分に展開して來ることを豫想せずには居られな

かつた。またその持つた本當のものを自由にそこにひろげて來ることを豫想せずにゐられなかつた。それは私達の妻などの經て來た時代は、教育が教育であつたから、多くを望むのは望む力が間違つてゐたかも知れなかつたけれども、解放された新らしい女性には、何んなことでも望むことが出來ると私は期待してゐたのであつた。本能との戰ひも十分に戰へるだらう。自己の意志に對しても飽まで忠實であり得るだらう。戀したものは飽くまで戀ひするといふやうな根強さも持つて來るだらう。今までの造り花ではなくなるだらう。親の手からすぐ夫の手に移されて行くやうな單純なものではなくなつて行くだらう。男性をもつと本當に理解するだらう。ノラやマグダのやうな女も出て來るだらう。アンナ・マアルのやうな女も澤山に出て來るだらう。かう思つて私は尠なからぬ期待をかれ等に持つたのであつた。

何故といふのに、男はそれほど本當の心を女に求めてゐたから。女が本當の心を開いて來ることをそれほど熱心に期待してゐたから。しかし私も『心の河』の作者と同じやうに、矢張異性に對して次第に深い失望を感じ出して來たひとりである。矢張女は本能だ！といふ氣が次第に強くし出して來た。意志だとか、覺醒だとか言ふことは、表面は立派に見えても、いざとなつては、いざ本能に對したとなつては、何の戰鬪力をも持つてゐないものであるといふことを意識し出した。私も前に言つた人達と同じやうに、『そんなことを言つたつて駄目だよ。ちき平らにさせられて了ふよ。幻滅がすぐやつて來るよ。一體、さういふ風に考へのるがまだセンチメンタルなんだ。もう少し經つとわかるよ』かう言ふやうになつて行つたのである。そしてその時分には、私も『そんな天國なんかあるものか』などと言ふやうになつたのである。しかもそれは世間並と言ふ深い恐ろしい陷穽に落ちかゝつて行つてゐたのであるなどといふことを少しも私は意識してゐなかつたのである。

實際本能はあらゆるものを平らにした。何んな苦悶をも本能が救つた。本能があるがために人間は死にもするが、また本能があるがために人間は死から救はれもした。人間は本能に從つた時が一番無事でそしてまた一番平和であるといふこ

とを私は考へる。そしてまたその時が一番平凡で一番低級であるといふことをも私は考へる。否、一時は本能のために平にされるのもわるくはないが、それが長くつゞくと、人間の心は得て退屈するものである。そしてその退屈が沈滞をも腐敗をも醸して來るのである。さういふ意味から言つて、本能を肯定し更に進んで本能を崇拝するものは、概して世間並に通俗に墮して了ふものであることを私達は忘れてはならない。

三

私のこれまで見た來たところでは、女性は何うしても世間並になり易い。通俗になり易い。つまり感化され易く、平らにされ易いのである。さうでなくつて、何うしてあの三十七八年代の覺醒があゝいふ風に煙も揚げずに徒に灰燼になつて了ふことが出來やう？ またあの新しい女の運動が何うしてあゝいふ風に影も形もなくなつて了ふことが出來やう？ それは女性が男性に比して一層さうした感染性に富んでゐるがために、そのために、すぐさういふ風に平らにさせられて了つたのではあるまいか。

それに、家庭といふことと育兒といふことが、一層さうした本能との同化を女性に促して行つてゐる形がある。男性に取つては家庭はそのすべてゞはないが、女性に取つては兎に角すべてになり勝な傾向を持つてゐると言へる。そして三十七八年代の覺醒した女の中にすつかり家庭に埋却されて了つたやうな人達が澤山にあるのも半ばそのためであると言へる。そこに女がある。女の天分がある。どうも止むを得ないことである。しかし私は家庭破壞論者ではない。私はむしろ家庭を重じてゐる。家庭の中に入つてゐても、その心の持方如何によつて、いかやうにもその意志を、本能に平らにされて了はない意志を續けて行くことが出來ると思つてゐるひとりである。唯、家庭のために——家庭の持つた本能のためにいつとなしに全く平らにされて了ふことを恐れるのである。もつと詳しく言つて見れば、つまり『心の河』を書いたやう

な作者の若い心の芽が、いつか家庭のために、子供のために、またその相手たる夫のために、世間並に平らにさせられて了ふことを私は恐れるのである。何うかしてもつといつまでもいつまでもその意志を持續して進んで行つて貰ひたいのである。家庭の空氣にも育兒の困難にも支配されずに、いつまでもその若々しい心持を持續して行つて貰ひたいのである。國木田の詩集の中にも、曾つてさうしたことが歌つてあつたのを私は想ひ起す。自分等の戀はあまりに世間的であつた。あまりに世間に對照を置き過ぎた。淺はかだつた。だから自分等の戀は壞れた――。何故もつとその心をしつかりとつかんでゐなかつたか。世間がいくら壞さうとしても壞すことの出來ないくらゐに、また本能がいくら平らにしやうとしても平らにすることが出來ないやうにしつかりとその戀をつかんでゐなかつたか。何故もつと本當に眞劍に戀してゐなかつたか。そのために私達の戀は壞れた。かうかれはそれを深く悲しんでゐる。

世間――本能――その上にある意志ではないか。そしてその意志はこの宇宙の廻轉軸とその活動を同じうしてゐるものではないか。本能も世間もその意志に由つて存在乃至流動をつゞけて行つてゐるのではないか。それを失へばその本能もひとり手に停滯し腐敗するのも止むを得ないことではないか。また世間にしても、その意志をその背景に持つてゐなければ、好加減な妥協に落ちて行つて了ふのも止むを得ないことではないか。

四

三宅やす子は『心の河』を評して、『男性の作家にはこれは書けないものである。正宗白鳥氏はこの作者は女性の天國を夢みてゐると評されたが、さうした評の起るといふことは社會の現狀に對しても、この一編は手强い釋明を與へてゐるではないか』と言つてゐる。そこにも男性と女性とのつひに一致することの出來ない氣分の漲つてゐるのを濃厚に私は感じた。つまり正宗君は男性なるが故に世間並なるが故にさういふ風に見、やす子さんは女性なるが故に若い心の持主である

が故にさういふ風に感じたのではないか。そこにも男女兩性の爭鬪が露骨にあらはれてはゐはしないか。

否、それぱかりではない、やす子さんの論文には、男性に對してわるく反抗してゐるやうなところがあつた。『男子の專斷はすべてからである』とも言つてゐれば、『同情される口惜しさ』などといふことも言つてゐられた。『心の河』の作者よりもずつと強く反抗の氣分を見せてゐる。强い對立の氣分を見せてゐる。つまり一方から言へばそれだけ燃えてゐるのであるから、決してわるいとは私は思つてゐないが、しかしこの男性への反抗は、世間乃至世間並への反抗であつて、根本的に男性に喰つてかゝつてゐるのではあるまいと私には思はれる。つまり今の社會がいけない。今の世間がいけない。今の世間の男の女に對する態度がいけないと言つてゐるのである。つまり男性の中にある世間がいけないと言ふのである。そしてその世間を何うかしなければいけないと言ふのである。それは私も前に言つてゐるが、それを救ふためには世間並の心をかき捨てゝ、もつと本當の心を振ひ起さなければならない。ひとり烈しく泣いただけではいけない。また、それを安價にあきらめてはいけない。一難が加はるごとに、益々雄々しくなつて行かなければいけない。怜悧であつてはいけない。またわるく物がわかつてはいけない。わかるといふことは淺いことである。互ひに理解し合ふといふ言葉があるが、理解し合ふなどといふ生温るい心の境地ではいけない。ひとつになることを欲する意志——それは本能ではない——が盛んに絶えず燃えてゐなければいけない。一時、愛といふことが盛に口にも筆にも上せられたことがあるが、それは愛ではない。互ひに愛するなどといふ言葉すら入つて行けないやうな單一な純なひとつになることを欲する意志——。

それには報酬的な意味があつてはいけない。互ひに絶對的であれ！そこにあらゆるものが解決されるのである。つまりお互ひに燃えてゐることが肝心であるといふことになるのである。

絶對的といふことは、大きな犧牲的といふことにもなるので、そこに私はいろいろなものを容れて餘りある大きな沸えたぎつた坩堝を發見することが出來るのである。そしてそれを持つてさへゐれば、何のやうな困難が起つて來ても、何の

やうな心理的苦悶が起つて來ても、直ちにそれを解決して了ふことが出來るのである。そしてそれは決して安價な妥協ではない。

從つて消極的であるといふことはすべて私は取らない。かうしたいからするのであつて、かうしなければならないからするのではない。何でも自分から動いて働きかけて行くことが肝心である。自分で動いて行くことには、何んなことでも恥しいといふことはない。たとへ恥しいことであつても、動かされて止むを得ずにやるよりは恥かしくない。泥棒でさへも意識して男らしくやる方にゴルキイは心を寄せてゐる。本當に泣くことも必要ではあるが、私達はそれを一里塚として前に前に進んで行かなければならない。涙を呑んで進んで行かなければならない。これが即ち人生である。

しかし男に言はせると、前にも言つたやうに、『さうした細君はとてもたまらない！』といふだらう。又『さういふ積極的の女を持つたら、それこそ家に落附いてもゐられない！』と言ふだらう。しかしそれは遊戯本能や玩弄本能が人間にあるからで、それは第一義的でないから、大したことではあるまい。否、むしろそんなことは念頭に置く必要がないと言つても差支ないかも知れない。さうしたものは、相手の眞面目な心持に由つて次第に感化されて行くに相違ない。

感化作用といふことも、兩性の間に於ては非常に必要なことである。一方が感化しなければ一方が感化する。かと思ふと感化されるのを厭つてわるく互ひに固くなつてゐるやうな夫妻もある。兩方から好い鹽梅に感化し合つてゐる男女もある。『戀愛も互に深い感化を與へるやうにならなければ本當とは言へないね。それも意識してやるのではなくて、自然にさうなつて行くやうでなくては——。それは夫婦といふものも辛いものさ。私などでも何遍家庭を打壞して了はうかと思つたか知れないからね。夫婦で顔を見合せて、お互ひにかうしてゐても辛いし、さうかといつて離れて別れてゐても辛いんですからねと言つたことなどもあるからね。それは決して樂ではないよ。よくかうして無事にやつて來たもんだと思ふね』こんなことを話し合ふのも、決して私達夫婦だけではないに相違なかつた。

五

しかし或る人に謂はせると、次のやうに言ふかも知れない。『それはそれにきまつてゐる。それが好いにきまつてゐる。しかし、そんなにいつでも燃えてゐるといふことは、人間には不可能である。時には遊戲本能になることもある。ぐたりとあぐらをかくやうな氣持になることもある。だから、さう張詰めてばかりもゐられないよ』それは道理である。決してさうでないとは思はない。現に私もさう言ひたいひとりである。しかし、その燃えるといふことは、さういふ風に絶えず張り詰めてゐる形を言つてゐるのではない。

それは要するに、決定といふことである。燃えるに決定した。積極的に此方から働きかけて行くことに決定した。さういふ心持である。さうすれば、じつとしてゐても、その積極的に燃える意志、ひとつになることを欲する意志が、常に宇宙の廻轉軸と同時に片時もやむことなく活動して行つてゐるのである。たとへ靜かに落附いてゐても、じつと心をすましてゐても、また家庭や育兒のことに忙しく暮してゐても、さう決定したゞけで、それで立派にその心持を保持して行くことが出來るのである。

この心持に達する心の階段は何のくらゐあるか私にはわからない。また人の質に由つて違ふといふ形もある。つまり早くそこへ行き得るものもある。と同時に、一生かゝつて躊躇低徊してその門戸にすら入つて來ることの出來ないものもある。非常にむづかしい境であると共に非常に簡單に入つて行ける境でもある。

私は『心の河』を讀んだ時に、（かういふことでさへこれほど涙をこぼしてゐる。もしこれが三角戀愛にでもなつた場合には何うなるだらう？）などゝ思つて、須磨子のことだの、有島氏のことだの、またそこらに澤山ある人達のことを考へた。須磨子の場合などでも、島村氏の夫人にもう少し夫を思ふ心持があれば、あゝいふ風にならなかつたであらうし、

有島氏の場合にしても、もつとこの決定がはつきりしてゐたならば、あゝした結果を見なくてもよかつたであらう。お互に思ふ心が絶對であれば、その間には何んな惡魔も入つて來る餘地がないであらう。さうした形から言つても、『心の河』にあらはれた事は、大切な事であると言つて差支へなかつた。

それは敢て男女のことばかりではなく、何でもさうであらうと思ふが、面白半分といふことはよくないと私は思つてゐる。また皮肉に人を見るといふことも好くないと思つてゐる。聰明な人はよく他の弱點などが見えて困るさうであるけれど、さういふ人達はその聰明に捉えられずに成るたけ素直にそれに接する工夫をすることが肝心である。何んな境に臨んでも純な心を失はないといふことが一番大切である。

六

しかし、男女の關係といふことは、容易に言つて了ふことの出來るものではない。皆なが各自に自分で味つて見て、それで始めてわかるといふやうなものである。何うすることも出來ないものである。二つの心のことは唯二人が知つてゐるだけで、第三者にはその輪廓すらもはつきりとは飲み込めないやうなものである。深く知らうと思へば思ふほど、日常生活からお互ひの體のことまで入つて行かなければならないやうなものである。唯、眞面目であるといふことと世間といふものに征服されずにいつまでも始めの心持を保持してゐるといふことが、その關係をいつまでもいつまでも新たらしくして行くものである。

『それはさうだけれども、僕等の時代とは丸で違つて來てゐるよ。それはあの三十七八年代の色彩と活氣とは求めることは出來ないにしても、非常によくなつて來てゐるからね。知識だけでもいろいろなことがわかつて來てゐるからね……。それは同じことは同じだ。矢張同じことをして女は子供を育てたり家庭をやつたりして行くのだけれど――』こんなことを私は妻に言つた。私達はさつき孫を抱いてやつて來た長女の話などをして猶ほ深く考へ込んだ。



現代文明批評

野口米次郎

(一)世界心

米國に於ける排日案の決定とロダンの彫刻で燃えあがつた裸體美術禁止は、東西に於ける俗論の勝利である。地方的感情の野卑な跋扈である、狹量で無作法な風俗主義の跳梁である。前者は西洋と東洋とを反目させて所謂人種問題に油を注ぐ結果となる點からいふと、人道上の犯罪である。又政治を凹然的に取扱つて理想を全然實際から離して仕舞つた點からいふと、世界心に對する冒瀆である、闇打を食はせたものである。後者は古い乾枯びた風俗習慣を固守して保守主義の弱點を暴露した點からいふと進歩の否定である、又西洋で普通のことさへそのまゝ日本は受入れることが出來ず、美術を結果だけ見る物質主義で批判しようとする點から見ると、これも排日案と同樣に世界意識の盲者である、濟度すべからざる美術的不具者である。

世界意識が無いと國の文明は到底進むもので無い。實際に於て俗論を背景とする常識は國の文明を阻害する場合が多い。私共は世界心を生長させねばならない。私共は世界意識を涵養せねばならない。私は、常識で問題を理解しそれを決する時は已に過ぎさつて居ると斷言せねばならない。世界心とは何であるかといふに、時と空間を超越する永遠的生命を摑んで居る人間の心である。世界意識とは何であるかといふに、世界共通の新しい感性に生きようとする意識で、理想と事實を區別し乍らしかもその融和を計らうとする、申譯的な

アクチユアリチーを現實と混同させない意識である。それに反して常識は丁度停滯した湖水の水のやうなもので、流動的生氣を持たない。風俗主義の反作作用であり又風俗主義の流出であるから地方的感情に止まる。言葉の起元から見ても又生存の上から見ても、常識は澱んで沈滯した人間思想と感情の心理狀態である。私は諸君に問ひたい……何處の歷史でも重大な變化が常識の力でなされたことがあるかと。

私共は常識を捨てゝ世界意識に目覺めねばならない、云ひ替へると保守主義から離れて進歩主義に合せねばならない。私共は一地方的感情から世界的感情へ移つて、大きな人生といふ溪谷を流れて大海へと注がねばならない。過去の人生や文學は能役者が冠ぶるやうな英雄的な假面を着て居つた。如何にも劇的に感ぜられ又修辭的表現に富んで居つた、それ等の背後には傳統の後光が輝いても居つた、然し今日私共の信ずる世界意識から見ると、一種の骨董品たるに過ぎない生氣の無い床の間の置物たるに過ぎない。私共今日信ずる人生や文學は現實の上に立て居る。過去を追憶するものでなく、現實の姿に自分を發見して個性を解放しようとするものである。私共は過去を忘れねばならない。私共の表現は傳統を知るものでない。新い現實に生きるといふ事は個性を生長させるといふ事である。個性の無い所に、どうして眞實の修養がある理由は無い。眞實の修養は肉となり血となつて私共の人生を生長せしめる。然し修養も流動的生氣を失つた時は、いつもそれが常識に墮落した時である。私共は想像の力で私共の修養を日々自由なものにせねばならない、日々解放して行かねばならない。所で、この想像力も世界意識の中から產れたものでないと、遂には一地方的譬喩となつて仕舞ふであらう。

然らばこの世界心、この世界意識はどうして養ふことが出來るかといふに、それは學校教育や研究的團體の力で得られるもので無い。學校教育や研究的團體は外面的方則を教へるかも知れない、人に定まつた目錄を提供するかも知れない。然し生きた心理狀態は內面的考索を感激の血で洗つて始めて得られるものである。眞實な感激が無いと眞實な人間性を把持することが出來ない。例を擧げると、前記の排日案も裸體美術禁止も同樣に感激性に乏い非人間の行動であるといふことが出來る。實際感激性の無い所に世界意識が動く理由が無い。感激が神秘であるやうに世界意識も神秘であるといふことも出來る。私は世界心を得ねばならないと信じて居る。さうして私自身は神秘論者であると思つて居る。

さうだ私は神秘論者であるが、他の神秘論者と異つて居

る。他の神秘論者は抽象的な麗はしい幻想の爲めに現實の愛を忘却して居るであらうけれども、私は宇宙の神秘を世界共通の現實の中に發見しようと努力して居る、即ち精神的光榮を物質的存在の中に發見しようとするものである。私の世界心は五官の世界から產れて、靈界と現實との兩者に住んで居る魂であるといふことが出來る。私は物質を信ずると同程度に精神を信ずる、云ひ替へると精神的と物質的との間に何の相違を認めない。故に私の世界意識は眞實な意味に於て虛無思想であるといつても差支ない。私がこの世界意識で地方的感情の日本を救ひたいと思ふ理由は、日本をして世界共通の文明を得せしめたいといふ希望に外ならない。

　一地方的な文明でなく、世界のいづこにも價値ある眞實の文明を創造するには現實の上に立つて始めて出來ることである。單に現實が表現する結果のみを尊重するのでなく、どうしてこの結果を產むに至つたかといふプロセスに對する意識があつて始めて文明そのものも流動的生氣を放散して來る。私共はこの世界心を根柢の深い所に置かねばならない。さうしてその根柢は有らゆる人間界の現象のやうに、ヒユマニチーの中に据えなくてはならない。ヒユマニチーの裏書しないものに、この世界現象何一つでも尊重すべきものは發達しない。さうしてヒユマニチーも抽象的の力を認めるので永遠性を持つことから來る譯なのである。

　最初にいつたやうに米國の排日案なるものは世界の文明に對する横車である、ヒユマニチーに對する犯罪である、世界意識に對する侮辱である、哲學的にいふと偶然の力で必然を傷付けた暴行である。かゝる亂暴を働いてしかも自分は文明國であると名乘つて居るに至つては、米國の政治道も墮落を極めて居ると云はねばならない。なにも米國の獨立宣言や大統領リンカーンや詩人ホヰトマンを引用して論ずるにも及ばない。若し米國人に全世界の進歩に對する責任を感ずる世界意識があつて、ヒユマニチーを米國の現實から離れ〴〵に見ない世界心があつたならば、私共日本人に向つてかゝる政治的犯罪を實行することが出來なかつたであらう。それを忿怒するにしても日本人は世界意識の是認する範圍でせなければならない、世界心の裏書する限りに於て米人の暴行に答へなければならない。私思ふのに近頃新聞紙上で傳へられて居る米國の活動寫眞排斥とか『七三耳隱し』の排斥の如きは、一體全體何の價値があるであらうか。暴に對する暴としてもてんで問題にならないちやないか。他人から頭を毆打されて仕返しが出來ず戸棚の隅で不平をいつてゐる程度のものだ。

この位置な行爲はない。私は日本人にいふ……すべての問題を世界意識から眺めねばならない、諸君は世界心の發育を計らねば駄目だ。米國から來る活動寫眞とか蠻語を排斥するの行動に對して、私共の世界心は果して何といふであらうか。世界心はいふであらう。『反對するなら效果のある反對をせなければならない。如何となれば世界の文明は贊成より反對の力で進歩するからだ。然し屁にも價しない俗論に捕へられてはいけない。俗論位國の文化の上に於ける危險はない。米國に對する降らない反對運動は日本人が神經衰弱に懸つて居る證據だ。強壯者であつて世界心を握ることが出來る……

……諸君は自重せねばならない。』

眞實な世界心に對しては人間の階級も人種の色も無い。彼に對しては如何なるものでも又凡てのものが、平等であり自由である。彼はこの信條を人生の部分的にも又宇宙の全體の上にも適用するであらう。近代社會の精神的根底は眞實なデモクラシーの空想に置かれねばならない。私は民衆主義を認めると同時に個人主義を唱へる、さうして其間に何の矛盾が存在すると思はない。私共個人は個々別々のヲルガニズムで獨立してはゐるが、集つて合一せなければならない。又人間に何等階級的上下高低がある筈がない、私共は普通一班の思想と感情を尊重するといふ點に人間生活が是認せられる。私共の生活を充實させよといふ叫は、地上に於ける現實を確立させよといふ意味である。ホヰトマンは所謂普通一班の人間英語でいふデバイン・アバレージを信じたが、特殊な個人格を否定しなかつた、言ひ替へると普通一班の人間性を供へた人間で始めて特殊の人物となることが出來ると信じた。所で、彼は一方では普遍性の代辯者であり乍ら他の方面で個人性の防護者であつたのである。ホヰトマンの如きは私共が信ずる世界心の把持者であつた、世界意識の最も明瞭であつた人物であつたといふことが出來る。若し彼が今日存在してゐたならば、米國の排日運動を見て何を批判したであらう。

ホヰトマンはデモクラシーを説くと共に人間愛を高唱して居る。人間界最後の問題は愛の一字で決せられるともいふことが出來る。『失望してはいけない、愛は尚ほ自由の問題を解決するであらう、私共は打ち勝たれざるものとなる事が出來る』と彼は書いてる。愛の宣傳者といふ事は決して平和の前に降服する人といふ意味でない。彼は奮鬪を是認して何處までも努力で目的を達せなければならないと信じた。愛や平等や自由を彼は單に靜的に眺めた男でなかつた、彼は『自分の叫びは戰爭の叫びである、自分は活動的反逆を養育する、自分

と共に行く所のものはよく武裝せねばならない』とも書いて居る。卽ち世界心の所有者は愛の人であると共に、戰爭を辭しない努力の人間で無ければならない。屈辱的平和を希望するより戰爭で男子らしく失敗した方が世界の文化を進める。

英國で文學的に世界意識を敎へた文學者はマシユウ・アーノルドであつた。彼は俗論に反抗して文明批評を確立した。彼は偉い文學者であつたが、彼は單に人生のコンフオミチー（適合の意味）を說いた點に於て私は何となく食ひたらない。實際世界の文化を進めるものは適合の心理狀態からでなく、如何に反對の抗議に堪えるかに懸つて居る。實に文明批判の無い文壇位憐れな文壇は無い。それに依つてもその國の文化程度が容易に想像せられる。

今日の日本は俗論橫行の日本である。私共は常識論に厭いた。常識論は人間の生命を涸渇せしめる。少くも停滯せしめる。私共は世界心を養つてすべての問題に接觸せなければならない。世界意識を常識に替へて、國は文化の方へ一步近づくのである。

（二）近代生活

近代生活は敏感を基調とせねばならない。なぜならば、敏感性が音律的に動いて始めて恍惚の境地を創造することが出來る。過去の時代では恍惚の境地は單に想像力で精神を雜變的に飛躍させることで得られると信じられたものだが、これ位間違つたことはない。近代生活が目的とする恍惚境はかゝる不健全なものでない。眞實な恍惚境は僧院生活の孤獨からも又敎會主義の信仰からも得られるものでない。健全な肉體で健全な精神を支配して、否な肉體と精神とが各特殊の力を合一して現實に觸れその赤裸なアスペクトを知つて人が眞實の自覺に開眼する時、始めて恍惚の境地が廣い明瞭な風景のやうに面前に開けるのを見るであらう。現實は敏感性の所有者のみに對して赤裸な姿を示すので、眞實な敏感性は健康者だけが摑むことが出來る。一言でいふと近代生活は肉體に於ても又精神に於ても健全な人間が築くことが出來る生活であると云はねばならない。

健全な心理狀態位誇りに滿ちたものは無い。自覺的生活が卽ち『誇りに滿ちた生活』であるといつてもよい。實際自覺的生活位人間の生命が權威を示す場合は無いと信ずる。私はいふ……健全な肉體を養へ、健全な肉體で健全な精神を完全ならしめよ、さうして自覺的生活に入れと。私共の近代生活は必ずしも目的や方則に束縛せられるものでない、又古い

格言や智識に數へられるものでない。過去の生活は一定の目標を眼前に眺めてロングフエロウの詩エキセルシヲを歌つて、更に高く更に前へと進んだものであるが、近代生活は目的へ達するだけを理想とするもので無く、如何に目的地へ到達するかといふ道程を樂む生活を意味するのである。若し近代生活に目的があるとすると、それは卽ち人生の恍惚を得ることに外ならないのである。

現實の眞相に觸れるには、世間でいふやうな向上的生活から得られるものでなく、寧ろ英語でいふデッセントで降下的生活から得られる、云ひ替へると眞實の現實は所謂貴族的生活の床の間で發見せられるものでなく、下等社會の下水と芥溜との間に見出される。現實の眞相に生きる近代生活は過去の生活に於けるやうに物質的壯大を目的として、其誘惑に捕へられるもので無く、下へ〳〵と人生を掘りさげて其處から湧き出る正直な水を飮んで隣人的親交生活をするといふ意義に外ならないのである。然らば近代生活は無理想の生活であるかといふに決してさうでない。私共の信ずる理想は過去の理想でないのみである。過去の理想は物質的卽ち外面的に追求する所があつたが、私共はたゞ理想を心理狀態の中に發見するのである。故に理想を目的として闇雲その面前に降服するものでなく、若し私共が理想を追求するとすると、それは偶然の出來事であるに過ぎない場合が多いのである。偶然の出來事として出現する理想であるから、過去の理想のやうに禮服を着て扇子を持つては居らないが、實際赤裸のまゝ飛出しては居るけれども感激的に生氣に滿ちたものである。私共が歡迎する理想は將來に對する暗示を持つもので無ければならない。過去の理想のやうに特種の境地に立つ畸形兒でない私共の理想は普通の生活に入つてその生活を脫する時偶然に摑むことが出來るルネサンスの心理狀態そのものである。將來を暗示するもの位尊いものは無い。こゝに花が咲いてゐるとする。何故に花が尊いかといふに、花が咲けば果實が實るであらうといふ暗示があるからである。近代生活の理想に如何なる暗示があるかといふに、それは眞實な人生は生產的なもので、私共の人生は日々に增加し生長して一層眞實な生活狀態に入るであらうといふ希望を與へるからである。私は近代生活は樂天的態度の上に立つて居ると信ずる。

私は私共の信ずる理想は感激的生活に滿ちて居るといつた。ものが暗示的であればあるほど生氣に滿ちて居るものである。そこで近代生活は感激的生活であるともいふことが出來る。完全な健全な感激は決して理智の判斷を避けるもので

ないが、善良に平均が取れて居る人間性が最高潮に達した場合に眞實な感激を得ることが出來るのであるから、理智的境地を遙に超越して居る。感激は理智以上に尊いものである。感激性の祝福が無いと、完全に人生を價値付けることが出來ない。感激性があつて始めて詩を理解することが出來る。近代生活はまた詩的生活ともいつて差支がない。詩は神秘であるといふ定義を是認すると、近代生活は神秘生活であるといふことも出來る。神秘の信者であつて、近代生活が創造する恍惚の境地に踏入ることが出來るのであるといふことも出來る。

私の信ずる近代人は宇宙觀の上に明瞭な幻想を持つた人で無ければならない。私共は自分を宇宙心に結付けなくてはならない、又個人格を世界を動かして居る精神そのものと融合せしめなければならない。私共は近代生活は個人格の充實で始まり又それで終るべきものだと信ずる。個人格のうちに一班的人類の靈性が潛んで居る、故に自分一人の解決は軈ては全人類の解決であると見ることが出來る。この點はエマソンも主張し詩人ホヰトマンも力說して居る。卽ち彼等は近代生活の理解者であつた。エマソンは個人格の完全は孤獨境地にあつて始めて得られると信じたけれども、ホヰトマンは他の人間と共同生活を營んで、個人格が益々完全に發育するものと主張した。彼等二人は出發點では相違する所があつたが、到着點へ來て共に握手して居る。私はホヰトマンに贊成するものであつて、今日私共の生活は相互に分離したものであつてはならない、相互に特權の場所を選ぶものであつてはならないと信ずる。新しい詩が音樂で動くやうに、私共は想像の力で現實に觸れ相互に自由な交通を計らねばならないと信ずる。正直な實切な親交で近代生活を創造せなければならないと信ずる。

民衆とか平等とかいふ言葉が單に外面的現象であるに止るとしたならば、何の意味もそれにあるものでない。又人間社會で實際に民衆的であり平等であるならば、最早や云ふを口に語る用は全然無いのである。假想的人情を背景とする虚僞の世界では、民衆論や平等說を主張せねばならないが、過去永い間に起つた澤山のルネサンスを經驗した結果として傳統を捨て自分を解放することが出來たといふ近代生活者に對して、それを議論する時代は已に過ぎたものと見ねばならない。私共は眞實な生命を握つて、その力で人生を進歩させる改善させねばならない。卽ち敏感性の力で未だ發見されて居らない感情の世界を發見して、人生の恍惚裡に入ることを目

的とするものである。

教育といふことも一班的修養の上には必用であるが、眞實な敏感性を培養するもので無い。多くの場合では教育が邪魔をして敏感性を混亂ならしめる事がある。私共の近代生活は定まつた不動の形式を知らない。古い傳統は今日の人生を幸福ならしめるもので無い又今日の人生を生長せしめるものでも無い。もとより私は近代生活を壯嚴なものと思ふものでない。又決して外面的完全に對して無頓着であるから野卑な生命であると非難するものに向つても抗議するものでない。私は眞實な近代生活者は人間的誇りを持つた自信力の所有者であらねばならないと信ずるのみである。眞實な人生に接觸して得た所のものを內面的考索力で反省せねばならない、さうしてこの內面的考索力を得るには健全な肉體の力を持たねばならない。健全な肉體の力で健全な精神を培養せねばならない。最後に繰りかへしていふ……近代生活は樂天主義の上に立つて居る健全な人間の生活を意味する。



谿（隨筆）

古屋芳雄

此小さな谿とそれに添ふた丘陵とは、今また五月の惠みある太陽に訪れられて、宛ら魔の杖で觸れられたかのやうに、急に優しい綠とさま〳〵な色の草花を着けた見惚れるばかりの谷と變つてしまつた。思へば自分が茲に移り住んでからまる二年と半程になる。が、初めての夏——それはすなはち一昨年の夏の事であるが——茲で、此豐饒な穀物や、草花で掩はれた谷を發見した時には、自分は何んな歡びに驅られた事か！　茲にこそ自分の生命はあり、健康はあり、また自分が無限に欲して止まなかつた靜謐はあると思つた。即ちさうした野生的な自足と靜謐との中に生活の基調を置く事こそ、徒爾な神經の近代的、病的昂奮から逃れて、靜かに人生を觀照するために必要な事であると思はれたのである。

しかし茲にも人生の嵐と窮迫とを彼岸に眺めるやうな岸は無かつた。即ち此生々しい現實を煮詰めてそれからたゞ必要なものだけを抽出する「坩堝」——スピノザ的に考へて——の役目を成すべき生活の港が、却て多くの不幸や、痛ましい魂の經驗を持來す場所にならうと何うして考へる事が出來たらう！

その數多い出來事のうちで最自分を苦しめたのは教會と自分との間に起された信條上

の爭ひと、H氏夫妻の慘殺された事、及それに對する社會の輕微なる批判、また最近ではあの震災によつて惹起された諸諸の事件や不幸の悲しむべき印象と、數ケ月前自分自身の最愛してゐた弟を失つた事等である。

殊に最後のものは自分を深い哀傷の中に投げ込んだ。今自分は漸く此傷手から回復しやうとはしてゐるが、もう昔のやうな心からの快活さと、放縱とを以て、此再び還つて來た自然に對する事が出來なくなつたのを悲しむ。無論それは自分の修養の猶到らざるが故であらう。けれども此谷が、幾度か愛する弟と共に歩いた谷であるがために、茲を歩く時の自分は突如として襲つて來る悲しみに胸を貫かれたり、またそこに咲き出てゐる、名もしれぬ雜草の花に向つて涙をそゝいだりする事のあるのを何うする事も出來ないのである。

かくて自分が茲に引越して來た時に發見したあの野生的な快樂と、原始的な生命の谷は、再び、いつの間にか悲しみの谷、涙の谷に變つてしまつたのを知るのである。たゞ希はくば此谷が、その上流の方に於て想像せらるゝところの、一切の地上的な悲しみや歡びを超えた、靜かな花の香と天的な樂を以て滿された淨福の野につゞいてゐる事を禱り求むるのみである。

今日自分は亡き弟の百ケ日の喪に服して後三日目、朝から家にゐて妹への手紙を書いてゐたが、二三日前から降りつゞいてゐた雨は嵐に變つて、窓は瀧津瀬のやうに流れ落ちる水で掩はれた。庭に植ゑてある秋の若葉や藤の蔓がそれに洗はれて楚々と戰いてゐるのや、露草が其長い葉を雨に打たせて彈ねかへつてゐるのが、朦々と立ち籠めた飛沫の間から微かに見える。見る〱潦が庭一面に出來、それは集つて河になり、庭の一方の傾斜した方へ向つて土砂を運びながら奮激して流れてゐる。

自分は暫らく庭の面に見とれてゐたが、手元にあつた去年の今頃の日記を讀んで見る。と、偶然そこには次のやうな事が書いてあつた。

五月十五日——晴

例の通り仕事をやめて散步に出る。

此さゝやかな谿とそして一連の綠の丘、それだけが今自分の生活の大部分を滿す世界である。自分は此小天地で滿足する。それは五月の太陽と空氣との中で全く面目を新たにして自分をつゝむ。それは多くの思索や、觀察すべき材料を自分に提供する。

馬ごやしとかたばみ草とで掩はれた豐饒な畑にはもう穀物は無く、荒廢するに委せられ、所々に浸水して野芹の圓みある軟かい莖を密生して居る。また乾いた部分は大抵地しばり草とレンゲ草と、また時々ははこ草や、すぎなや、おほばこや、またさまざ〳〵の雜草で隙も無いまでに掩はれて居る。鬼野げしの尖つた葉を着けてゐる崖際や、またあの美しい蕺だみ草の、綠の葉の中に恰度飛白の絣目のやうな十字形の花びらを着けた目も醒むるやうな土堤がある。中にも地しばり草の黄い花やかたばみ草の三つのハート形の葉を眞尖端で結び合せた形の調和の美しさは何うだらう。其赤い關節をもつて成立した莖や、また同じく關節形に蕚を支ふる花柄等は、何故か深く自分の注意を惹き付ける。不思議なことに此草は花も、葉も、莖も、蔓も、全部が部分と部分との結合によつて成つて居る。然うだ。其根――それは百姓等が最も恐れるところのもの――も、また關節を以て連絡し、何處までも〳〵延びて行くのである。そしてそれが何處で中斷されても、そこから新しい根と新しい莖を發生する事が出來るやうになつて居る。

自分は此大地にしがみ付くところの、不思議な繁殖力を持つた雜草と、それを可能ならしめる形態とを見て、植物の個性の事にまで思ひ到らざるを得なかつた。そしてそれと同時に凡て雜草と呼ばるゝものゝ運命に注意を拂はざるを得なかつた。これらは其花があまりに小さいとか、眼に立つ程美麗でないとかまた甘く誘びるやうな香氣を持つてゐないとかいふ故を以て、今は雜草として、何等の注意をも拂はれてゐないばかりでなく、田を耕す者の眼からは一種の仇敵のやうに憎惡を持つてさへ見られて居る。それは穀物の種子や、艶麗な花を地上に送つたところの神とは全然違つた呪はるべき神（或は惡魔）によつて地上に送られたものゝやうに思はれて居る。少くともそれは當然路傍で滿足して居るべきに、不所存にも我々の肥料を盜まんがために外から侵入して來たものゝやうに思はれて居る。此悲しむべき運命が、此等の草にあの不

思議なねばり強い個性を與へたのではないかもしれない。だがしかし、然うであるかも知れない。少くとも然うであつていいと自分は或感動を持て思ふのである。

此谿が今や此種の雜草を以て掩はれた美觀は、自分に深い野生的な滿足と、心地良さとを與へる。こゝには自らなる調和があり、繕はれないもの〻美しさがある。自分が其中に坐る時、それはまた自分の中の最自然なる存在と調和するやうに覺える。それは自分を最深い無意識に誘ふ。自分は何の思ふ事もなく、降りそゝぐ五月の太陽の黄金の波の中に、幾分間も〱眼を細めながら動物のやうにうづくまる。人類の主觀的な多くの幸福を約束する幾世紀が自分の頭の上を掠め過ぎても、自分は惜しくはないと思ふ――

自分の健康は五月に入つてから急に甦つた。また仕事に對する抵抗も增して來た。自分が何よりも恐れたあの神經的な昂奮狀態の持續――それは二三年前まで自分を苦しめたところの――はこゝに來てからは全く跡を拂つた。

「オヽ還つて來い、五月の太陽、五月の花に、五月の土! おれはお前の中にもう一度おれの失はれた生命と、愛と、健康と、活力とを探し出さずには置かない――」

自分はあの優しい野薔薇の白い花の香が限りなく自分を惹付けるところの土堤に腰かけて、其花びらに鼻を押付ける事を忘れない。それはあの甘い歡樂を思はせるやうな西洋草花の多くに較べては、あまりにも氣高く、清雅である。自分はそれらをも愛するが、一層多く此清雅な野薔薇の香を愛する。しかしやがて自分はそこから立去つてあの優しい忍冬が眞白な鵞絨毛のやうな厚ぼつたい花びらを着けて谷陰の藪に下りる。そこにはまた莖の太い、黄色い花を着けた野生の菊やひめしをんが咲き出してゐる。そして自分はそれを小さな掌の中に入れて揉みつぶして嗅いだ小供の頃の想出に淚せずにはそれを摘み切る事が出來ない。

だが自分はそこを出て、活潑な足どりで、溫かい日映しの中に蒸れ立つてゐる松の矮林の中に歩み入る。それは歩み入るに從つて互ひに交錯する枝や、其下を塞ぐ藪によつて、不思議に孤獨境を自分のまわりに現出する。見よ、蠟燭をもつて飾られたクリスマス樹のやうに新芽を空に向けて一せいに伸上らせてゐる枝々が自分の訪問をよろこび迎へるもの〻や

うに見える。また其荒くれた健康な枝から滲み出すバルサムの香氣は自分の肺の中を隈々まで消毒する。

自分は此生命と本能とを以て滿たされた自然の中に、また一種の淨化の力のあるのを感得する。——自分はかうして此野生の森と、空氣と、日光と、そしてそれらが自分に齎らす思索によつて今限りなく富まされてゐるのを感ずる——

× × ×

自分は此日記を見て當時の自分の自然への陶醉がいかに深かつたかを思ひかへした。しかし今の自分は當時とは何といふ變り方であらう。自分はそれを悲しく思はずにはゐられない——。

夕方になつて嵐は止んだ。で、自分はもう一度——恰度その日記を書いた頃から約一年目に——其同じ谷を歩いて見やうといふ氣になつた。

自分はいつもの道を通つて谿に出た。そしてそこにはやはりあの丸い軟かい葉をした野芹を見た、まだまだ花の開いてゐない野薔薇の土堤や、忍冬の薮を！

けれども谷の外觀は今や全く其頃とは變つてしまつてゐた。震災後急に殖えたトタン屋根の工場や住宅が此優しい谷にまで浸蝕して來て、方々の畑は掘りかへされたり、赤い粘土や砂を以て盛られたりしてゐる。また野生のグミや、すいかづらで掩はれたピクチュアレスクな川の岸は幾何學的に修理され、思はぬところに廣々とした道が出來たり、また橋梁が懸けられたりしてゐる。で、もし自分たちが此有難い文明の恩澤といふやつを丁寧に謝絶してもう一度あのディオニソス的な、野生の森の快樂を求めやうとならば、何うしてももつと上流の方に溯つて行かなければならない。

自分は自分の此思出の谷が、いつの間にかかくも無殘に打破された事に對して淡い痛みを心に覺えながら、上へ上へと歩いて行つた。

しかしやがて自分が右側は武藏野特有の楢と櫟とで掩はれた丘になり、左は鬱蒼たる熊笹や、灌木で掩はれてゐる崖になつてゐる山の向ふの路に出た時に、自分はつい數ケ月前こゝを弟と散歩した事のあるのをふと思出した。思へばあれが

最後の散歩であつたのである。

自分は二つの相矛盾する感情のために再び胸の痛み始めるのを感じた。それは彼が、あの時と全く同じ姿をしてもう一度自分を訪れ、自分と共に此谿間の道を歩くといふ事が可能であるといふやうな感じと、否それがもう決して起らないであらうといふ感じとである。それは自分の胸の中で容易に調和する事が出來ずに、折につけ時に觸れて自分を苦しめる。

自分はいつの間にか西の方の側が濶然と開けてゐる、葦を以て掩はれた川邊へ來てゐた。そこでは水が堰かれてゐて瀧のやうな勢で崖の下に流れ落ちてゐる。自分は茲へも或暑い夏の夜弟と共に水の香を嗅ぎに來た事がある。その飛沫の極めて細い粉末が自分たちの鼻の中に飛込む時自分たちは水の臭ひ（久しく忘れてゐた！）を思出し、田舎で野生の動物のやうに育つて來た共通の思出に就て語り合ふ事が出來たのである。

しかし其時のおもかげはこゝにももう少しも無かつた。何故なら二三日來の大雨と嵐とが方々の崖を崩し、思はぬところに瀧を作り、また急激に増した水量は此河が全く見たことのない何處か他處の河でゝもあるかのやうな觀を與へたから。

自分は此過去つた嵐が跡づけて行つた——變化した河床や、奔騰する水を見つめながら、いつまでも〳〵立ちつくしてゐた。と、それは何故か自分自身の此頃の、多くの悲しみや感傷で荒らされた心の姿をそのまゝに展開して見てゐるやうな心持にさせられてしまつた。

けれどもやがて日は全く落ちて、あたりは夕方の靜かな微光に包まれ始めた。雨が引いて行つた後の空は驚くばかりの深い青と、打たば碎けさうな透明な空氣とで滿たされてゐた。そして地は、今その表面のあらゆる殘虐な、悲しむべき印象と共に、一様な濃い闇の中に沈んで行き、そこにはたゞ自分たちに一層靜かな思索と正しい價感とを命ずる嚴肅な星が、もう遠くの方から此地球を訪れて來てゐるのが見える——

自分は歸つて來て、其日の日記の上に次のやうな事を書き附けた。

× × ×

「死よ——。おれからおれの愛する者の一人を奪ひ去つた死よ、おれはしかしながらお前を今は最も親しい容のうちに加へやう。何故ならもし己たちがお前の見慣れぬ容貌におびえて、雨のやうな愚痴と嵐のやうな憎惡とを以てお前を拒絶しやうとするならば、お前はお前が手に一つぱいに持つてやつて來たその良い贈物をも己たちには殘さずに去つてしまふだらう。そうしてお前が來た事の慘虐な印象は永久に己たちの不幸な魂の中に殘るであらう。然うすれば愛する者の生命が失はれた事は文字通りに本當になるのみならず、己たち自身の生命もそこに浪費され、消失される事になるであらう。實際人は多くの場合然ういふ風にして生活を淋しくし、生命を削り取らせてゐるのである。そのためにいかに屢々最も恐しい呪ひがお前に對して擧げられる事であらう。然うして一人の愛する者が死ぬる時に、また有徳な人が死ぬる時に、それを此世の不可解の一つ、不調和の一つと考へるだらう。そこに神の不正義が唱へられ、世界の不完全があげつらはれる。しかしながら、己たちの知つて居る神や世界とはそも〳〵いかなるものであらう。己たちが今まで毎日見てゐたものをもう永久に見る事が出來なくなつたが故に此世は厭はしいものとなるといふのか。また或有徳な人がその徳の酬ゐられないうちに死んだが故に神は不正義なものと考へられるのであらうか。しかし己たちが此肉眼を以つ見る事の出來る世界のみが己たちの唯一の世界であるのか。それ程己たちの世界は狹く、幸福は制限せられてゐたのであらうか。一體己たちは氣が付かないのであらうか、すなはち死んで行つた者が猶此世に生存してゐた間には少しも感ずる事の出來なかつたものを、彼の死後始めて感ずるやうになつたといふ事を。また彼の生きてゐる間は彼を死せるが如く（全然存在せざるものの如く無關心に）取扱つてゐたものが、彼が死んだ後に却て彼を眞に生けるが如く考へ始める事のあるといふことを。殊

に死んで行つた者が全然地味な、目に立たぬ、しかしながら善良で、優しき人間である時に、己たちは彼の生きてゐる間は屢々彼を侮蔑し、その前に傲慢にさへ振舞ひがちである。しかしそれが我等の仲間を去つた時に、初めて彼の眞價を感じ、剩さへ彼が不知不識の間に己たちの上に刻み付けた善行と德操の涙ぐましい印象に氣が付く事がありはしないか。然うしてそれを感ずる事によつて一の全く新しい眞理――卽ち神は人間を、彼が爲した仕事の偉大さによつて擧げはしないが、善良さによつて擧げるといふ事の、眞の意味を體得しないであらうか。かゝる時、己たちは彼を肉の眼を以て見てゐる以上に實在的に見てゐるのだといふ事は確かな事である。然うして死が、己たちから何物をも奪ひ得なかつた、むしろ與へて行つたのであるといふ事を一層確實に知るやうになるであらう。しかもそれは己たちの現實の眼や、耳による感覺の世界以外の、もう一つの世界のあるといふ事を知るよすがになり、そこに住む事のみが幸福の源泉であり、また死や運命から何物をも奪はれずにすむ唯一の生き力である事を敎へられるであらう。かく考へる時に、己たちが現世に於て積む德は、偏へに此もう一つの世界に貢獻する事であり、死を眼の前に見る時でも今までつゞけて來た努力や精進の生活に悔恨の唇を觸れないのは、一には然うした靈的幸福が、自己にあつても他人にあつても不死である事を信じてゐるが故であると悟るであらう。己はこれらの事を神が祝福をもつて今後の生活の上に一層確めてくれる事を祈る云々」と。

文藝上の新傾向

千葉龜雄

(一) 沒イズムの時代

「世界文學」を最近に共著したウィリアム・リチャアドソンと、ゼッセエ・オオウェンが、現代世界文學の大勢を眺めて來て、大體こんな風に結論して居る、現代にありては、數かぎりの無い著述が、果てしの無い行列をつくつて、われ等の前を通つて行く、けれども「時」が決して、少しでもその隊列を游めることが出來ないのであつた。そしてわれ等は、勝手に、われ等自身の趣味によつて讀み、自分の讀みたいものだけを、その中から勝手にえらぶ。つまり現代でのわれ等は、一切の判斷を箇人の批評からのみきめるやうになつたので、決して他に先在する、何ものからの干渉をもうけ入れる必要がないのだつた。かくしてわれ等の批評は、絶えず變り行く世界の對象に反應して、絶えず流轉して居る。流轉するやうに用意されて居る。ところで、その對象を文學に置くとする。ところが恐らく現代の文學ほど、一つの尺度で測りきることの六づかしいものがない、なぜなら、二十世紀の文學の最も決定的な特徴が、それの種類と傾向が千差萬別で、あらゆる複雜をきわめて居るといふことだからである。云々。

が、これは何も「世界文學」の著者が感ずるだけの絶望ではない、單にユウヨロオプ一國一國の最近藝術を批判する多くの評者の場合にも、また、言ひ合ふ傾向が現代になぜ起つたかとなれば、それは世界が廿世紀に入つてこの方、始めて人類が持ち望んだところの、箇人解放時代の曙にどうにか辿りついたからである。なるほど「西洋精神の形成」を最近書いたスタエルとマルギンは、グリイスから現代にいれる歐

洲心理の基調を求めて、所謂二つの原因にそれをもとづけた。第一が、自由の愛であり、第二が統一への探求であり、この二つのものが、思想の上に、實行の上に、歐米の歷史を通じて潜行して來たものだと彼は語るのである。そして、そこに世界人としての、人類結合の理想が求められるのだと語るのである。が、こゝで誤解されてならぬことは、その統一への要求といふことの内容である。すなはち、こゝにいわゆる全人類の統一とは、お互ひの箇人の自由を同じ窮屈なものに切りつめて、そこから統一を求めやうとするものでは決してない。かへつて箇人性の自由をお互に最大限に求めしめ、認めしめた自由人の統一を求めやうとする意味である。で、なければ、その第一條件たるところの「自由の愛」といふものが少しも意味をなさないからだ。それを藝術の場合にあてはめて、將來の文學の位置を、恐らくもつとも正しく、もつとも聰明に說明したものが、ラシアのトロツキイの「無産文學論」であらう(數月前の「改造」參照)

自由人心靈の解放は、藝術の場合において、殊に最もその効用が進展される筈のものである。藝術家箇々が、凡てのイズムに囚へられず、あらゆる傳統や規範に縛られず、唯一、自己の箇性格を指標として創作する曉に、はじめて藝術創造の黄金時代が來る沒イズムの時代である。創造とは、AがBに異なるが故に創造がある。Fが、Gが、爭そつてAの足跡をのみ踏むところに、死滅の外に、何の創造があらうぞ。少なくとも現代世界藝術の現狀は、個性的藝術創造の新世紀をもつて、過去のどの時代にも誇り得る時代でなければならぬ。それを容易に系統づけ、流派づけるやうとすることの絕望がそこから生れる。

(二)　即箇性の藝術

たとへば、一九一四年に死んだスウェエデンの作家で戯曲家たる、ヒヤルマル・ベルグストロエムがかう言つて居る「私は、初めから、何等かの標準に從つて創作するものでなかつたから、從つて詩がどんなものであるとか、あらねばならぬとかいふやうな、何等の様式を用意するやうな必要をも少しも感じなかつた。で、この質問に關して私のいはうとするのは、たゞ體驗が、自分に敎へたものを書いたといふ事だけである。どこにでも人が生れる。その人が、外界から受け入れる印象に、或ひは樂しいとか、不愉快だとか反應する。それをそれぞれの態容に從つて表現する。それだけの働らきは誰にも許されてゐる筈だ。またその人は、そうした自分の表現

を、外の人類の世界へ自由に發表する。それ位ゐの自由も許されてある筈だ。――それが彼等のまことの報酬なのである。で、私だけはかう考へる。すべての、すぐれた藝術の主要な本質は、その眞理であるものを、出來るだけ在り得るやうに見せるべく努力することである、また、それに成功したことにおいて始めてその美が創設さるべきものである」と。

　おそらく、現代にすぐれた一家として認められるそれぞれの近代作家は、大ていベルグストロエムのこの意見に同意するのであらう。一たび十九世紀の寫實主義と自然主義の束縛から解放されたフランスが、現代において、もつとも主潮といふものの無い藝術國だと見られるにかゝわらず、百花らんまんと、無數のそれぞれの創造性の營なみをもつて、藝術の盛春をほこりつゝある理由が、こゝにおいてか始めて明かになるであらう。

　ことにこのことは、脚色の上の技巧、手法上の技巧について著るしく感ぜられる。　假へば、ロマンチシズムとか、ナチユラリズムとかいふ大きな旗の影に、列國の藝術が臣從して居る時代であつてさへも、なほ、一々作家を價値づけるところのものは、やはりこの二つの方面の技巧そのものであらねばならなかつた。たゞし、こゝで云ふ技巧とは、表現の上の効果を指して居るのではない。その表現を技巧にあらわすところの、作家個々のもつ、雰圍氣、情調、構圖、着想、省察、取扱ひ等の一切をひつくるめたものである。

（三）　現實主義の大勢

　けれども、しゐて各國の藝術を、たとへ大ざつぱであつても何等かの傾向にわけやうといふのならば、それは無理にでも出來ないわけではなからう。そしてその大部分は、まづ現實主義であることがうなづかれる。現實、未來主義や、表現主義といつても、まづ現實までに一切を還元して來て、その現實の奥にひそむ心象を、それぞれの形で、もつと主觀的に、或ひは情熱的に掴み出さうとする努力である、その視角においては、現實とどうしても分離し得ない。

　もし現實主義の行きわたりを、國々にわけて討檢して見やうならば、まづラシアの藝術は、その原始から、どこの國のそれよりも、最も多分に現實主義をふくんで居た。しかもその現實が、いつも苦惱の現實であり、どうかして、その現實から、かうした人類の苦惱を除き去らうとする希求がいつもそこに潜む。これがラシアの藝術をして、現實主義即人道主義であらしめた由來であるが、現代のラシアの無產派藝術

も、また最も生き生きした現實主義から孕まれ、同時に人道の誇りである點には少しも變りがない。たゞ、勞農政府前記の人道主義は、苦惱からの解脫を大宗としたところの、反抗と忍辱の祈りであり、今日のそれは、救ひと建設に集中する信念の人道主義であり、あるひは理想主義の一片をも含んで居るといはれやう。

ラシアについで、フランスもまた、大體において現實主義が廣い分野をいたして居ることは、そこが自然主義の發源地であつたことからも大體察し得られるであらう。われ等の淺い知識をもつてすらも、フランスの新らしい作家が、後から、後からと出て來て、現實を取扱ふ上に示す創造力のすばらしさと、着想の途方もなく深刻な機才には、全く敬服せざるを得ない。フランスでは懷疑でさへも明るい。快樂派の哲學は、たゞ輝やいたテンペラメントで、一刹那の現實を享樂することにする。たゞ現實の底にひそむ生命を、いろいろな方角から眺めて、その享樂の滓までをも浚ひとらねばあきたらぬところの、フランス現實主義の必然性がそこにかある。

ドイツは永い間、ロマンチシズムの感化を、最も深く享け入れて居た。たとへ近代において、現實主義の洗禮を多少なりとも享け入れたにしても、なほ理想主義や、ロマンチシズムの殘照から、まだ全たく拔けきれなかつたのはどうともし得ないわけであつたらう。それが大戰の試煉を經て、最も主觀的な表現主義を生んだ事は怪しむに足りない。新時代の最前線といはれるエルンスト・トラアの戲曲にさへも、そのどん底に潜めば、うづくやうな人道主義の呻きがある。そうした一種の精神主義ともいふべき傾向について、「ドイツの心」を書いたファンニイ・ジョンソンがこんな風に說いて居る。表現主義が現時ドイツの一象徵たるわけは、それが教化から來た熱烈な自己表現と、スツルム・ウンド・ドラングとの結合を意義するところにある。散々な不評判の末に、ドイツの審美派だけを統治して居たところの「藝術の爲の藝術」は、もうすつかり時代から捨てられた。然しそれに反對して、いや、それに側生して、ダダの運動が起つた。これはメフィストフェリイズ以後、多數のドイツ文學を潛流したところの、皮肉な愚弄の一形式である。恐らく現在の姿から見ると、それはニイチエとウエデキンドから、深い直接の暗示を受けたものらしい。

（四）　いはゆる精神主義

一方に注意すべきは、一九一四年までドイツに存在した意

志主義が、一九一八年の絶望思想に王座を讓つたことである。もとよりこれを掘り下げれば、ニイチエの教義を、悉く取り拂ふほどには行かぬが、しかし一方にタゴオルがインドからこの國を音なうた以來、彼の思想と哲學が、物靜かにドイツ國民の思想を侵潤しつゝある事實を見落すわけには往かない。今や疲れ切つて皮肉になつた西歐は、東方を眺めて、そこから宇宙の謎と紛糾の解説をしきりに求めやうとしつゝある。すると他方にはシュペングラアの文明沒落の聲が響きわたる。彼は唱へる、そこに何一つの現實といふものがない。懷疑或は無信仰こそは、われ等の最後の形相における歷史的必要であると悲觀する。シュペングラアは、靜寂に樂觀するタゴオルと思想的に結び付く、或ひはその思想がお互ひを補塡する。

ジョンソンは、更にドイツの哲學的もしくは文學的方面に起つた一つの傾向として、あらゆるヒユウマニッチイを基調として含むところの、自然崇拜のそれを舉げて居る。恐らくそれは、東方思想の敎義をとりいれたものらしく、涅槃の意義に近い情調を根柢に帶び乍らに、これにドイツらしい、精確な智識と觀察の熱愛を加味して居る。それの最も人をひきつける作物との種類としては、それが人類生活に働らきかけるものとして、もしくは獨立したものとしての何れにあれ、とにかく、動植物の生活を描いたものである。そこでは、人生それ自身の神秘が、一つの宇宙として意識されつゝ、深い敬虔をもつて學ばれつゝある。云々、

ジョンソンのこの辯論について、ことに印象深く思はれるのは私が最近に讀んだトマス・マンの「バッシャンと私」である。トマス・バッシャンもまた表現主義の主將の一人であるが「バッシャンと私」は、そうして傾向とはまつたく逆ふ。それは彼が世界大戰から逃れる、血なまぐさい人間殺戮の現實から逃れて、一頭の飼犬に、限りのない人道的愛情をそゝいだ心理描寫と自然愛の樂しいシンホニイである。犬のすぐれた文學には、かつてイタリイのアミンイの犬、ツルゲ・ニエフの犬、メエテルリンクの書いた犬、がそれぞれにある。けれどもこのアミイチスのフランシスの純情をもつて描かれたマンの犬こそは、恐らく前のどれにもすぐれた動物愛の表現らうといはれる。

その外、カイゼリングの「旅日記」に現はれた人道主義から見ても、現代のドイツの幾部を掩ふところからした精神主義の氣分の發生は現下のドイツといふ特殊の國情に即して、そこに必然的な意義があるものだといふことがわかる。

(五) 北歐と南歐と

更に北歐へ行つて、ノオルウエイがより多く現實主義であるのに比べて、同じスカンヂネエギヤでも、スウエイデンが、大體により多くロマンチックであるのは奇妙な對照がある。セルマ・ラゲツセルレエフ孃の作物が、「ボルチガリヤの皇帝」もしくは「棄てられし人」のやうな現實派のものですらも、多分にアイデヤリズムの思想を含んで居るのもさうだし、殊に一九一六年に、ノベル賞を獲たヴエルネル・フオン・ハイデンスタムの傑作「チヤアレスキ」が傳說的牧歌的な傳奇小說であるのも注意される。尤もそれも、スエデンボルグの神秘思想を孕んだこの國柄のためでもあらう。が、またそのスエデンボルクを研究した作品に、ストリンドベルグのやうな現實主義の鬪將をもこの國から出して居るから、一概には言へないが、とにかくヨハン・ボオエルや、一寸古くはイブセンやヨナス・リヤや、ビヨルンソンを出して居るノオルウエイは夥しく違ふ。彼等はみな、押しも押されもしない現實主義である。クヌウト・ハムズンすらも、「土地の生長」や、「飢」や「淺い土」では、貫ぬくやうな現實主義の把握を見せて居る。オランダや、デンマルクや、ベルヂウム、アイスランドやに來ると、メエテルリンクなどを外にしても、世界的に名を知られて居る諸作家は、まづより多く現實主義に屬して居るといつても誇大ではなからう。尤もこゝにも傳說的な、素朴で重苦しいロマンチックの氣分がどことなく搖曳してゐるけれども。

ところで、南歐へ來ると、イタリヤアとスペインには、アア遊つた程度のロマンチジズムを持ちつゞけて居る。可なり明確に、現實主義で表現して居ると思はれるガブリエル・ダンヌンチオでさへも、今は亡い同國の劇作家、ジユゼツペ・ジヤコオサから云はせると、「ダヌンチオを有名ならしめたロマンチツクな特性に反抗させられて自分が起つた」と言はれ、また「イタリイ現代劇」を著はしたランダア・マツクリントツクに評させると、現代イタリイの缺點を持ち來したものは、ダンヌンチオ、パスコリ、フソガザロ、その他彼等從屬者の審美主義、政治における超人の教義を導びく自己主義、智識を犧牲にして、純粹の情緒主義だけに偏する技巧、受動、無活動、審美主義の特質をのみ力調を置くこと等にあると批難し、また哲人クロオチエはイタリイ現代文學の虛無をかう彈劾する。現代イタリイ文學の無價値の第一は、虛無を僞造しやうとすることから起る。何にも無い虛無を、さも意味有り

氣にかむり立てやうと試みる。その存在性が始めから無いものを、在る現實の上へ表現し、それをもつて眞の現在と置きかへ、或はその現實を支配しやうとする。それは無誠實といふものであると云ふ、とにかく、ルイジイ・ピランデルロやジオヴンニ・パピニイや、みなイタリイ人のイタリイ藝術を主張して起つた。そしてダンヌンチオによつて代表されたフランス文學の感化を小説や劇から追ひのけやうとする革清運動が、今や文壇のいたるところに醸されつゝあるやうに見える。そしてヴエルガ、モルセルリ、ロペソツ・パンツニ其他自分の讀んだ藝術を頭の中で並べて見ても、やはり統一した主義はそこに求められぬが、その湧き立つ渾沌の中に、やはりまぢりの無い個性がみなはつらつと輝いて居る。

スペインでは、少くとも私の讀んだ現代作家の作物では、現實主義といふには、まだあまりにどこか垢の拔けない、浪蔓主義と自然主義の殘影が停滯して居るやうに見える。イタリイほどに思ひ切つて審美主義にも行けず、されぱとてフランスほどに、目ざめるやうな明るい現實主義にはまだまだ間がある。ベアレツト・クラアレイは、近代スペインの大劇作家たるエチガレイと、ガルドスと、キエウメラの三家を評して、三者が・藝術相がお互に逢ふにかゝわらず、三者ともに、どこまでもスペイン的である情調から離れぬ事を指摘し、ニチガレイは、題材においてスペイン的で、表現が世界的、ガルドスは、現代スペインの生活のみを眞面目に、上手に、深刻に描寫する傾向を持ち、ギユウメラは、特殊な部面でスペイン的だと斷言した。要するに、スペインの文學が、あまりにスペイン的であり、融通の利かない田舍もの的な、氣重に印象を起させるのは欺むかれない。次にイギリスとアメリカでは、イギリスの方がより多く現實主義であり、アメリカには、まだ自然主義の臭味が大分のこつて居る。と、云つても、やはり、兩國ともに、個性々々が充分に發揮されて居るので、細かく概括することは六づかしいが、しかし兩國とも、藝術としての純眞味と崇高さにおいて、まだまだ大陸に追ひつきさうも無いといつても、それだけは誇張であるまい。どちらも、常識國であることが恐らくその主因をなすものであらう。

（六）社會文學の新傾向

たゞ、世界の文學を鳥瞰視して、一班に共通した傾向として、何よりも氣がつく一つの思想がある。それは、多くのどの作家もが、そしてそれが新らしい作家であればあるほど、

社會問題になほ熱烈な注意を向けつゝある一線でなければならぬ。かの、自分は何ものにも囚へられずに、自分の生命で藝術すると主張したところのベルグストロエムすらも、やはりイプセンのやうに、階級と性格との闘爭には興味を潜めて制作した。クロオチエによつて、あまり審美的だと罵られたイタリイですらも、藝術に於ける社會意識が今では批評家の問題を喚び起して居る。しかして、イタリイの藝術に、社會意識がかくも世界より遲く巡つて來たのは一つはカソリツク敎の傳統が、新社會意識に適した温床でなかつた爲である。またリウィングストンは、それをイタリイの藝術家が、凡てあまりに審美的に片付ける爲である事に歸した。要するに彼等は、どんな社會上の苦惱や闘爭をも、たゞ純粹な「あわれみ」の感情から取扱つた。あわれみの感情が、人間情緒の、一番やさしい、美しい表現だとたゞ考へた。また人生に與へられた不正義を、神への償ひであり、來世の悅びだとも考へてゐたといふのである。またアンリ・ボルドオの說によれば、たとへばベルンスタインとブリュウのそれ、つまりイタリイの劇作家と、新フランスのそれとを差別する重な傾向は、イタリイ側が、決して社會組織の根柢につき進んで行く情熱を描かうとしない事だとあり、イタリイ近代の劇曲は、十が九までは結婚の失敗を主題にしたが、それは結婚を永久不變の屈從であるとしてきめてかゝつたものであつた。といふ。

この點では、スペインにおいては、ブラスコ・イバァニエスでも、ピオ・バロオハでも、ザマソアでも、みな社會組織や、階級闘爭を主題にした澤山の著作を出して居る。劇作家ジャツキン・キンテロなどは、「大衆に向つての藝術、少なくとも、凡ての手の屆くところに持ち來された藝術」を産出した一人だと批評家が語る。しかしひとりスペインだけとは云はぬ。現代世界のどの國をふり向いても、その藝術家が、民衆に呼びかける藝術を生產することを、一つの本能として努力してゐない國は一つもない。

(七) 二つの差別

もとよりそこには二つの差別がある。一つは强烈な人道精神の希求から、國境を超越し、人種を超越して、全人類の平和で自由な握手と抱擁を求めやうとする種類である。フランスのロマン・ロオランや、ノオルウエイのヨハン・ボオエルや、ブラジルのグラサ・アランハや、同じく「ナチヤ・レグレス」の作家で、アルゼンチンの作家マヌエル・ガルヴエツや、スペインのブラスコ・イバニエスやがその中に數へられるで

あらう。

も一つは、社會意識の上から、產業制度の上から、現代人間生活の苦惱と不合理を根本的に彈劾しやうとするものである。イギリスのバアナアド・ショオや、ジョン・ガルスウオジや、アメリカのアプトン・シンクレエヤや、フランスのアンリ・バルビスや、ピエル・ハンプや、今は故人となつたシャルル・ルイ・ヒリツプや、ジュウル・ロオマンや、ジョルジュ・ジユアメルや、ボオル・アダムや、ベルジュウムのジョルジ・エリウや、オランダのアレキサンダア・ヌクゼや、死んだルイ・クウペラスや、スペインのビオ・バロオハや、ドイツのエルンスト・トルラアや、ゲオルグ・カイゼルや、ハインリヒ・マンや、ボオランド、もしくはジュデア文學の諸作家など、わづかに私が讀んだ範圍においても、ほとんど數へ切れぬほどの作物が私の記憶に上る。まして改めてラシラを數へるに及ばぬと云ふまでも無からう。そしてそれ等が現はす樣式、視度、技巧、思想、情熱については、もとより個々に即して多種多樣を極めて居る、今までそれを細かく分類する頁を持たぬのであるが、要するに「何等の作物に現はれる人物を、單なる個人と考へずに、みな集團的意識に交渉をもつものだとするか、もしくはもつと狹く見て、或るきまつた社會的、もしは政治的經濟の一つの主義を持つものとして見るか」どちらにしても、自分と時代をめぐる社會環境の意識なしには、現代世界藝術家の息づくことが苦しくなつた。かの運命と叡智と神秘から生れて來た、モリス・メエテルリンクが、再び神靈交感のやうな神秘境に逃げ込まうとするところにも時代の象徵があらう。そこでエルンスト・トルラアの一劇曲の主人公は呼ぶ「われ等の子供等よ、地の上のすべては傷つき、そして破壞された、われ等は彼をどこへ埋めるであらうか」と、が、現代の社會作家達は、決して彼等の葬式準備に奔走する葬儀委員ではない。すべてがみな、新たに生れて來る新時代の產衣を用意するに忙がしいものだ。

懸賞短篇小說募集

本誌は現文壇の重鎭島崎藤村氏に選評をお願ひして、毎號左の規定に依り短篇小説を募集してゐますから、皆樣は奮つて自由な眞劍な作品を御投稿下さい。

規定

一、一篇の長さは四百字詰用紙三十枚以内に限ります。

一、毎月晦日を以てメ切日と定めます。（今回のメ切は八月一日で第一回（七月一日）應募作は九月號の本誌に發表いたします。）

一、當選作に對しては參拾圓以上百圓迄の稿料をお送りします。

一、住所姓名を明記して下さい。（但し應募者は婦人に限ります。）

宛名は　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社

女性改造編輯部

日本美の高調

藝術の神秘國

野口米次郎

外人が私の所へ來て何か日本獨特のものが見たいといふ時、私はいつも茶席へ案内する。私は彼を飛び石で路が付いて居る所謂露路に立たせる。さうして『こゝは外面的世界を捨てゝ自己遍照に入る通路だ』と說明する。私は彼に茶席を取卷く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を經て灰色になつて居る老樹を指さし、さうしていふ『君はこゝに沈默の祝福があることを感ぜねばならない。私共東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに發見するのだ。寂寞の幽な光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつてもいゝ。又唯美の悅樂境といつてもいゝ。その名前はどうでいい……………こゝは孤獨に生きる無遍の住む所だ、眞實の個人主義を發見してさうして宇宙の靈に合する所だ』私は私が伴つて來た外人に古びた花崗石の燈籠が聖人か哲學者か詩人ででもあるやうに蹲つてゐる姿に注意させていふ『この燈籠の心の中には眞理を照らす所謂燈臺の灯がある。この光はどうして人が社會の狂瀾怒濤を忘れるかを敎へるであらう、どうして人が人生の廢墟と塵埃から脫するかを敎へるであらう。どうして人が清澄な默禱の雰圍氣を作るかを敎へるであ

らう、どうして人が茶道に入るかを教へるであらう。』私は彼に茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、我々が自然を足元から眺めて敬禮することが出來るやうになつて居ると語り、茶席の庇が低く作られてゐて『この小暗い空氣は思想や想像を一點に集注させるに便ならしめる』といふであらう。

それから私は彼を茶席内に入らさせ、氣味の惡い位つめたい疊の上に座らせ、さうして眼を閉ぢて默想せよと彼に強ゐる。彼は私のいふがまゝにする。私は彼に『どうだね、默想の神秘は君に淨滌界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。私共がこゝで創造しようとする甘やかな靜かな恍惚境に對して君は何と思ふか』といつてみると、彼は漠然な微笑を洩すのみで一言も發することが出來ないであらう。餘程東洋否な日本の審美觀を理解することが出來る感情の所有者でない限りは、大概の外國人は私の言葉を了解することが出來まい。了解することが出來ないのも無理は無いと私は思ふ。なぜならば、この茶席卽ち茶道で暗示される日本の審美主義は日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生を融和させてそれを單純化させた日本人の態度は彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所のものであらう。然し私に人が日本で一番特色あるものは何であるかと尋ねたならば、私は直に茶席を上げる、否な茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを上げるであらうと信ずる。

私はこゝで私が嘗て書物で讀んだことがある一つの物語を話したい。將軍秀次公が朝の茶に三四人の茶人を招いたことがあつた。招かれた茶人は當代の名家共であつたことはいふまでも無い。期節は四月、日は二十日で櫻もまだ散るか散らないといふ頃で春陽氣分も段々老いて來る時分であつた。朝の催であつたから、薄暗い東風は茶席の軒端の露を拂つて庭の樹木には朝の光を恐れて夜の靈が蹲つて居るといふことが出來た。茶席の中には燈火が照らされず靜寂が茶席の全所を占領して居つた。耳をそばだてると茶釜から銀鈴のやうな響が來る、それは湯のたぎる音で、この物古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權を持つて居ると思はれた。招かれた客人はだれも無言で主人役の關白秀次公のお出ましを今や遲しと待つてゐた。所で主人公はなか〱出て來られず、客人共は欠伸をかみしめて頭をあげると、何の豫告も無く突如として有明の月がすつと忍び込んで來て、その微かに冴えた曙近き月の影が落ちて行く所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてばつたり留つた。その色紙には定家

の能筆で、『ほとゝぎす啼きつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ殘れる』の歌が書いてあつた。招かれた茶人共はハタと膝を打つて、『はゝあ、この茶莚はこの色紙を見せるためだな！有明をあてこんで「たゞ有明の月ぞ殘れる」の歌の色紙とは、將軍の御趣味のほど感歎の至りである』と心の中で叫んだ。話はこれだけで、其後主人役の將軍はどう御出席になつたか、又どうこの茶會が終つたかは分らないが、そんなことはどうでもいゝ。話の要點は關白秀次唯美的な態度に懸つて居る。實に彼の態度は精細な詩の秘術に觸れたものである。この特種な審美的雰圍氣を誘致し得た藝術的態度は驚歎に價する。洗錬し盡された文化の酵母から產れた詩的行爲とはこのことであらう。私は他の何處に詩歌繪畫の藝術品を紹介する方法としてこれ以上に優美なものがあらうとは思はない。又繪畫や詩歌を鑑賞する方法として、偶然にこの招かれた茶人共が發見したこと以上に幽雅なものがあらうとは思はない。私はこの態度こそ諸外國に誇ることが出來ると信ずる。西洋は質より量に走る、又複雜の果は混亂に落ちる國である。西洋は如何に自然を調節配列するかを知らない國である。西洋は如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は西洋に如何に自然と人生を選擇し單純化するかを敎へねばならない。茶席生活を尊要視した昔の文化は沈默と孤獨の德を敎へた。量より質を重大視して小の中に大を發見する方法を敎へた。有らゆる人生の完成は自個整理から始らねばならないと敎へた。さうして茶席こそ之れが具體化したものに外ならない。故に私は外人を茶席に案内して日本が創造した文化の一大アスペクトであると說くのである。

私は茶席の作法をついぞ學んだことが無いものである。私が外人を其處へ案内するとしても、私は決して細かい作法を說く資格を持つもので無い。然し私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて、人生を外面的世界から解脫して無礙自在な永劫を摑むことが出來るやうな氣がする。云ひ替へると私も生死一如の境地が茶席で發見せられるやうな氣がする。この境地は西洋人でも進んだ詩の理解がある人でするならば入ることが出來る境地であると思ふ。茶席は日本特種の創造であるけれども確に世界的價値がある理由もそこにある。よしんば今日の西洋人が日本の茶席藝術を理解しないとしても、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないとは限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を說くものである。

さうして私は更にもう一つの插話を語る光榮を持ちたい。話は宗匠利休と大閤秀吉に關して、前者が後者を『朝顏の

茶』に招待した話である。利休時代には朝顔は至つて珍らしいものであつたことはいふまでも無い。話に依つて見ると利休の庭には朝顔の花が澤山植ゑてあつたやうに思はねばならないが、大閤が來ると定まつた當日になつて、茶の宗匠利休は朝顔全部を前庭から切つて捨てさせて仕舞つた。秀吉はお茶より朝顔の花が見たいので利休の招待を受けたのであつた。然るに利休の家へ來て見ると朝顔一つも彼の眼に觸れ無かつた。で頗る不興の體で彼は茶席の方へ歩みを進めた。大閤は利休にお前の自慢の朝顔は何處に植ゑてあるかと詰問を掛けた。利休は無言であつた。大閤は更に一層不興の顔を顰め乍ら茶席へ入つた。茶席へ入つて坐に付いて顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が妖嬌たる姿をそこから顯はして居つた、宛も忘れられた日光の一片が床の間で輝いて居つたといふような工合に見えた。大閤の喜びは非常であつたに相違ないが、話はさう詳細に渉る必要が無い。要は利休が花の全部を庭から捨てさせて、たつた一つの朝顔に一大名譽を輝かさせた點にある。

　この利休の所置は前に語つた將軍秀次の所置と同程度に價値付けねばならない。實に香ばしい藝術的對度であると云はねばならない。私は利休を茶人としてよりは寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふものである。この態度は九十九枚の繪を燒いて一枚だけを取つて置く美術家の態度である。私は光悦や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨てゝ仕舞つた利休の態度は九十九の作を切捨て一つだけの發句を殘さうとする俳人の態度である。私は芭蕉は確にこの態度こそは日本の永い文化が産んだ最も偉大なもので、優に世界に誇ることが出來るものといふことが出來る。

　床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱に何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理狀態で、その歌ふラプソデーには麗はしい抽象的な神秘がある暗示がある。その中から精神的雰圍氣が夢のやうに幻のやうに放散せられることを感ぜる。獨唱の生活には自個の保全がある、個人格の充實がある。我々日本人の古い文化が産んだ藝術家は、畫家でも歌人でも俳人でも、悉く獨唱的生活の信者であつた歎美家であつた。その生活の中から永遠無終の藝術が産れたのである。私は獨唱家として の山上の一本松を歌つて、かういふ言葉を書いてゐる、

『お前の 獨唱家としての 態度には獨立 の大きな 威嚴があ

る、

そしてその獨立は沈默と孤獨の聖なる空氣のなかで育つたものだ。

お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、ああ、お前の銀のやうな獨唱に、

なんたる壯麗な神嚴を私は感ずるであらうか！

私は泣かないばかりの感激をお前の獨唱に感じた。

多少たりとも個性は合唱の場合に破れる、だが、獨唱は自己表現の完全なものである。』

獨唱家なればこそ利休は偉人であつた光悅は偉人であつた芭蕉は偉人であつた。獨唱的態度から日本の茶席は產れた繪畫は產れた俳句は產れた。若し今日の日本にこの態度が無く又この態度の藝術家が無いとすると、日本が藝術國としての特調は已に亡びたものである。新古今にある定家の歌に、『見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ』とあるが、孤獨に生きる眞遍的寂寥味は日本藝術が最高潮に達した場合である。寂寞のうちに靈の無礙自在を發見して人生の洸惚に入るといふことが日本人が見出した詩の神秘で無くて何であらう。今日の日本人はこの神秘を失ひつゝあることを私は遺憾と思ふ。一度この神秘を失つたが最後二度とそれを取りかへることは出來ない。日本人が變つた神秘を發見するかも知れないが、その時が來るまで詩の上での亡國と云はねばならない。私は亡國民となりたくなり、私はどこまでも我々祖先が創造した詩の神秘を握つて居たい。

驚嘆すべき單純化

生田長江

今から十五六年も昔、今ほど西洋嫌ひになつて居らず、他からは折々西洋崇拜者とさへ早合點されてゐた時分のこと、

私ははじめて伊勢の大神宮に參詣した。そして今以て忘れられないやうな大きな感動を經驗した。

　あの白木造りの建造物と云ひ、それを取り圍んでゐる幽邃なる樹立、あれでも矢張り水かしらと疑はれるほどの清澄な流れと云ひ、又それらのものを引つくるめた全幅の結構と云ひ、そもそも何と云ふ成功した單純化であらうぞ。何と云ふ調和の調和であらうぞ。

　かしこには『かんながらのみち』が完全に具體化されて、そして立派に保存されてゐる。

『なにごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼるる』――これは其儘其時私の經驗したところのものであつた。

　日本人位單純化をよろこび、從つて單純化に長じてゐる民族は多くあるまい。

　日本人は手奇麗に單純化しきれないほど、種々雜多な材料を貪り集めることをしない。偶ま彼等にして材料の多彩と豐富とを第一に誇るといふやうな惡趣味に惰してゐるならば、それは彼等が一時外來の惡影響に毒されてゐるのである。そして、そんな間違つた過渡期にあまり久しくゐないといふことも、日本人の過去の歴史が立派に證人となつてくれてゐる。

　單に單純化に重きを置くのみならず、敏感なる日本人は、その材料に珍奇なる物、高價なる物が採用されてゐる場合など、さうした材料が材料のまま露出することのないやうにと警戒する。そして斯樣なる敏感にもとづいた心掛けを『奧床しい』ものとして、どんなに尊重して來たことか。

『日本人の住宅、衣服、食物等、すべてが餘りに單純すぎる』と、愚かなる西洋人と、西洋人かぶれのしてゐる日本人とが非難らしく言ふ。

　彼等には、それらの極度に單純化された物が、それにもかかはらず、驚くべき多趣多樣な、複雜した内容から出來てゐることが、理解されないのである。否感知されないのである。

　彼等の目には、例へば日本の家屋が悉く皆一樣に、灰色、もしくは褐色がかつた灰色とのみ見えるであらう――丁度、あの愛すべき田舍の人達が、桃色をも、石竹色をも、褪紅色をも、緋色をも、甚だしきに至つては牡丹色をも、悉く皆一色に見て、たゞ『赤』『赤』とのみ云つてゐるのと同樣に。

古代希臘人の着物は、大きな布呂敷の眞中に穴をあけ、そこから頭を出したやうな物であつたさうだが、日本人の着物も大體に於て希臘式から出發した物である、それが非常に發達進歩を遂げた物であるかも知れない。兎に角、日本人の着物は、その心持の如く、ゆるやかで、爽かで、さつぱりしてゐる。

日本服を着てゐて『現代的』生活を營むのに不便なのは、餘りに明白すぎた話である。

しかし乍ら、袂のある日本服を着てゐて、時にはたすきをかけたり、だんじらをからげたり、野良着にも差換えたりする位の心掛でゐて、それで暮らして行けないほど『暮らし』に骨の折れる、それほど『多忙な』現代的生活が、正しい生活であるか、それとも間違つた生活であるか。

『現代的』生活その物が今、根柢から否定され、革命されようとしてゐるのに、『現代的』生活を營むべく不便だからといふのでは、何物を斥けることの理由にもならない。

私はあれほど『多忙らしい』西洋服によつて代表される一切の文化を憎惡し、日本服の如き寛濶な、ゆつたりした物が、再び不便でなくなる日の、一日も早く來るべきことを、殆んど狂熱的に待ちのぞんでゐる。

神代この方、『拂ひたまへ、清めたまへ』と清潔法を重んじて來た日本人にとつては、とにかく不潔である限り、それは美でも善でもあり得ないのである。

日本人の潔癖は、金錢に附着してゐる種々なる汚穢をも、拂ひ清めようと欲する。そして汚穢がつひに拂ひ清めがたきものであると知つた時、金錢その物を汚穢物として棄て去らうとする。

實際、農本主義の社會だけが本當に人間らしい、健全な社會であると考へる時、商業は詐欺取財に近い醜業であり、その商業の爲めに重寳なる貨幣は、手を觸れるだもけがらはしいほど不潔な物であらねばならぬ。

貨幣を、金錢を賤んではならぬといふ不可思議な教訓がこの半世紀に近い間日本の社會に强調力說されたるは、日本が西洋化し、商業主義化し、資本主義化する方へ、急轉直下してゐたからである。

しかし、本來の日本人は金錢を賤んだ。少くとも金錢に對して淡白であつた。それが所謂『現代的』生活といかがはし

い物にとつて、如何に不適當な性癖であるにもせよ、兎に角日本人の斷行の美しさの一であることを、私はかたく信じて疑はない。

西洋人に惡くかぶれて、拜金主義者となりきつてしまつたらしい現在の日本人の間に於ても、どんな醜惡陋劣な金の儲け方をしようと問題にしない彼等の社會に於ても、今尚ほ金の使ひ方について、あいつはどうも『きたなくて』困るとか、兎に角金ばなれがいゝとか言ひ合つてゐるのは何を語るか。

つまり、日本人は如何に拜金主義者になりきつたやうに見える場合にすらも、尚ほ且つ二分の一だけしか拜金主義者になり得てゐないのである——溜めると云ふ點に於てもでなく、單に儲けるといふ點に於てのみ。

かくの如く最近の日本人が、拜金主義化しながら、徹底して拜金主義者になり切れないところに、つまり我利我利亡者的であると共に、浪費者的であるところに、最近日本產業界特有の病的發展がある。

資本主義の肯定者でなく、日本人の此上の資本主義的成長を希望する者でない私は、斯うした日本最近の實業界の惡傾向をそれほど慨歎すべき事に見てゐない。のみならず、結局どうしても日本人が西洋人同樣の拜金主義者になり切れないといふことを、非常に心強く嬉しく思はざるを得ないのである。

一口に云へば、日本人に拜金主義は適當しないのだ。否、詐欺取財にまぎらはしい商業といふ奴も適當しないのだ。そしてそれは日本人にとつて聊かの不名譽な事でもない。

商業に不向きな、それだけうそ嫌ひな日本人は、本來僞善者嫌ひである。

日本にだつて昔から僞善者がゐなかつたわけでは勿論ない。ただ、西洋では、單に僞善者であるといふことが暴露されただけでは、致命的な事件でもあり得ないのに、日本では『あいつ飛んだ喰はせ者だつた』は、一切萬事のお仕舞ひを意味してゐるのだ。

例へば一人の男が、平生聖人君子のやうな風を裝ひながら、ひそかに不正の金錢を貪り、不義の快樂に耽つてゐたとする。そして其事がばれてしまつたとする。西洋邊りでならば、恐らく彼は、平生僞善であつたことを卑まれるより先きに、そんな不正不義をやつてゐたことの方を咎められるであ

らう。しかし日本の從來の社會ならば、彼のさうした人並らしい行爲を問題にするより以上に、その聖人君子面をして、口のはたを拭つてゐたことの圖々しさの方を、一層問題にするであらう。

幾分逆說的に云ふを許されるならば、西洋では何等の善行をなさずとも、相當善人らしく裝ふてゐることは、『紳士』たることの大切な資格の一である。日本では、多少の惡い事はしてゐながらも、ちつとも善人面をしないといふだけで、兎に角我慢の出來る『男』になるのである。

本當に日本人らしい日本人が、執念深くなく、復讐好きでないといふことも、どんなにか日本人を美しい物にしてゐる。

日本人の所謂仇打などは、傷けられたる名譽の回復であり、雪辱であつて、腹癒せではない。

だからあれほど苦心慘憺してやつて成しとげられた四十七士の仇打に於ても、當の敵吉良上野は、なぶり殺しにもなにも會つてゐない。四十七士が若しもリンチングをやる亞米利加人でもあつたなら、どれ位異つたものであつたらうかを一寸想像して見るがよい。

日本人にとつては、敵そのものが憎いのではない。むしろ敵の爲めに傷けられたる名譽を、回復し得ないでゐることが腹立たしいのである。だから、その名譽にして回復され得たならば、敵には苦痛を與へると與へないとは問題でない。むしろ無用の殘酷さを發揮して、再び別の名譽毀損に陷らないやうにと心掛ける位である。

日清戰爭の前と後とに於ける日本人の對支那人態度、日露戰爭の前と後とに於ける日本人の對露西亞人態度等を見るがよい。そして何ならば、獨逸人に對する殆んど不可解なほど執念深い、復讐好きな佛蘭西人と比較して見るもよい。

本來の日本人は、弱い者いぢめをやらない。そしてどんな強敵をも恐れないのを嘆賞する。

日本人は戰爭と取引とを一にしてはゐない。從つて、どんなに損の行く戰ひをも辭しないと共に、どんなに得の行く戰ひをも肯じない場合がある。

この勇ましさが、ホオマア的意義に於ける勇ましさが、如何に本來の日本人を美しいものにしてゐたことか。

西洋語に、『恩にきせる』といふ言葉があるかどうかを知らない。

兎もあれ、恩にきせるといふことを、非常に下賤劣惡なものとして斥けること、日本人の如きは恐らくあるまい。『他人の世話になつてゐるのを心苦しく思ふのは常人の事であり、自ら他人の世話をしてやつてゐるのを心苦しく感ずるのは高貴な感情を有つた人間の事である』—斯うニイチエは言つてゐるが、その所謂高貴な感情の持主が如何に西洋に—紳士社會にすらも——まれであつて、如何に昔の——今ではない——日本にまれでなかつたことぞ。

日本人のたしなみ善き社會に於て、喜怒色に現はさないことを尚ぶのは、日本人に著しき貴族的品位を與へてゐるところのものである。

理屈はぬきにして、希臘羅馬の古典民族が如何に日本人の如く、喜怒色に現はさないことを心掛けてゐたかを想ひ見よ。又、現代の歐米人にしても、教養なき階級より、だんだんと教養ある階級へ上りゆくにつれ、幾分日本人的に彼等の『表情』を節約するやうになつてゐることの事實をも考へ合はせて見よ。

私達のいくら尊敬しても足らないと思ふ、フォン・ケエベル博士も曾つて指摘された如く、日本の舊式な婦人が、西洋婦人の如く、たやすく『叫び立て』ないといふことは、どれほど日本の婦人を奥床しく、氣高く、美しいものにしてゐるか分らないのである。

斯うして『日本固有の美』を擧げて行けば所謂有形的な物の方面にも、無形的な方面にも限りを知らない。

しかしながらさうして限りなく擧げ得られる美の殆んど總てが、過去の日本人の物であつて、現在の日本人の物でないことを思ふとき、私達の胸はどんなに憂鬱な氣持で以て一杯にされることか。

げに、西洋かぶれのした、西洋崇拜になりきつてゐる現在の日本人が、如何に日本人としての誇るべき本來の美しさを、古履をでもぬぎすてる如く未練なく、彼等の所謂『進化』の路傍にぬぎすてゝしまつたことぞ。

私は今、殖民地にゐる者の郷愁のごとき心を以て、半世紀前までの日本固有の美にあこがれてゐる。

大日本の有する藝術美

香取秀眞

赤珠は緒さへ光れどしらたまの君がよそほひし尊くありけり

この歌は海神の宮より、遙に彥火々出見尊をしのび奉りて、豐玉姫が尊に獻じた歌であると、古事記にしるされてある。

赤珠の赤く美しいよりも、白珠の裝ひをされたまう尊の、いかにも尊く美しいことをたゝへた歌である。

當時の高貴の方々の裝ひの一斑が推し量らるゝこの簡素な白珠のよそほひは、彥火々出見尊のみに限られたのでない事は、他にも想像し得らるゝ資料が多い。

高貴の人に捧ぐるものとして、最も尊嚴を極めたものは、常綠の眞榊を根こじにしたるほづ枝しづ枝には、眞澄の鏡と、みすまるの珠と、劍とを結びつけて、白にぎて青にぎてを、し垂らしたもので有つた。それが我國の上古に於ける、我等の先祖が、やんごとなき人に奉るみてぐらで有る。如何にも清淨で、如何にも簡潔を極めたものである。

この好尚と趣味とは、皇統の連綿として萬世一系たるがごとく吾等も亦數千年以前の祖先の好みの遺風が心の奥深く傳へられて居る。

純白は洗煉され淨化された終極の最も高尙な趣味である。伊勢の皇大神宮は二十年毎に新規に建て直されて居ることは、白珠のよそほひと同一趣味の淸淨潔白な表現である。復雜を單純化することの趣味は、建國以來の國民性である。萬葉集の歌はこの點に於て復雜の思想を單純したる最もよき標本である、從つて洗煉された美しき思想感情を知るべきは、萬葉集を措いて他にはない。

大和民族は佛教渡來以後、あらゆる美術品を見もし作りもした、殊に奈良朝時代には、その當時の世界の總ての文化を蒐集し盡した感がある。時代の轉換する每に支那を手本にし

て趣味好尚の變遷が行はれて居るものゝ、何時の間にか日本風に淨化されて仕舞つて居る。中には舶來のまゝ藏されて他に亡びた文藝美術をも仕舞ひこんであるものもある。

白たへ、あらたへは我太古の布織物で、あかるたへ、照たへは絹織物である、横じまの倭文布、暈繝錦に似たる綺などは何れも本邦固有の織物である、然るに雄略天皇の朝に韓國から錦を織ることを傳へて後、孝德天皇頃には頗る精巧を極めて、華文の精密な車形錦、菱形錦、麒麟錦と云ふ樣なものを作り出して支那人をして紺錦と賞贊せしめた事がある。出蹤の[illegible]は器用な日本人の特意な所である。所謂淨化である。

蒔畫は本邦獨得の技術である事は、早く室町時代に於て、支那人をして泥金畫漆之法と稱して工人を來さして學ばせた事がある、磨き出し蒔畫の如きは洒霞といふ名で彼國人に賞玩せられたのも其頃の事である。他國の有せざるものを獨り持つものは外にもある。

茶道の式を大成した千利休の好みは、上代から總ての審美的要素を含蓄せしめながら最も單純化して居る、而して卓絕した審美眼を持つて居た事は近代に於ての第一人者で有つて、彼あるが爲に審美的日本趣味を明白に吾等に敎へ與れた人である。工藝美術の趣味も彼あるが爲にいよ〳〵微細に敎へられて居るのである。たとへば支那人も西洋人も知らない鐵釜の肌の趣味、銅器の光澤の内にひそむ地あれの趣味、陶磁器の釉藥の面白味。織物の糸の不揃な面白さなど數へたてれば限りなく、微細な處にも一小乾坤あることを味ふ事の出來るのが我日本工藝の特色である、更に亦その極致は、唐銅の細口花瓶の、しかも文樣のない無地のものが、日本室内、ことに茶室の床の唯一の裝飾である事である。

無地文の花瓶そのものは、神代に於ける内珠のよそほひと共通なものである。挿花の具としての法則としても――。

現代は西洋舶載のものといへば、草花に至るまでも珍らしいものが賞美されて居るが、コスモスの花の日本的になつた如くに西洋ものが洗煉されることは近き將來にあることゝ想ふ。全世界の行きづまりの結果は、わが大和民族のもつ總てを以て、彼等に臨まねばなるまい。

ガラスや七寶は再度我國に來たが、我古代人の趣味性には適合しなかつたものらしい。周漢時代のあの精緻の文樣を施した古銅器も亦、我趣味には合はなかつたものが、今世間の人々から賞玩される事は、實は他の毒々しい油ぎつた西洋ものなどゝ共に一時的眩惑であつて、日本人自らの趣味性に自覺する時代が來れば、當然影をひそめて仕舞ふか、或は日本

趣味的に浄化されるものであらねばならない。

油繪を修行した繪家が、墨繪風の毛筆繪をかく人の多いことは、日本趣味に自覺しかけたのではあるまいか。それは年齢や、境遇とのみは云へない。

西洋料理や支那料理をたべても見るが、香の物に茶漬飯は終生廢するわけにはゆくまい。――それが日本人で有る限りは――。

氣候の温和な、山水の明媚な吾等が日本は、人物や動物を繪畫に扱ふことよりも、山水花鳥を繪畫にすることの方が多い事も又考慮の中に入れて置くべきである。――人事よりも天然。

三十一言の歌、十七言の俳句、島國的とのみけ落すことは出來ない長篇を誇る國があるならば、吾國は短篇で誇つてもよいではないか。――東方君子國が持つ寡言。

複雜な社會生活の疲れをいやす唯一の清涼劑は、單純化された日本趣味の藝術にある。

笑と日本文明

廣瀬哲士

私は近頃「笑」に關する事柄について少し心掛けてゐることがありますので、その方から日本の文明の性質について少し話して見たいとおもひます。

私は、最初、わが日本は笑を閑却してゐる國であり、笑の趣味を解しない國であるのでは無いかと想ひました。さうして、まづ日本文學の中から笑の文學を探して見ました。西洋には實に夥しく喜劇があるにも拘らず、日本には殆どそれらしいものが現時のわが文壇に見出されないので、われらは笑を解する能力が無いのでは無いかとさへ私は思つたのです。

ところが、靜かに歴史的に考へて見ますと、下品な豪傑笑ひの趣味で無く、上品な笑の趣味が、極めて古いわが文學の古事記萬葉集の中にさへ既に豐かに載せられてゐるのに氣が

つきました。私は一々その作例を指摘する煩を避けます。若し近く古事記萬葉集に目を通される機會がおありでしたら、何うか笑ひの立場から注意して讀んで見てください。いかにユウモラスな味ひの豐かなかにお驚きになるでせう、下つて平安朝時代にも澤山ユウモラスな味ひを湛へた文學があります。今昔物語だの竹取物語だの、枕の草紙、取りかへばや物語、一々算へたてられません。鎌倉時代から南北朝時代の作品にはさほどぞつとしたものはありませんが、古今著聞集だの、徒然草、實語教などに可笑味が澤山盛られてゐます。室町時代には世界的文學の一つとして誇り得られる狂言が現れました。江戸時代になれば最も名高い一九の膝栗毛、三馬の浮世風呂、平賀源内の作品などを始めとして、京傳、馬琴、蜀山人、其他の作があり、狂歌、狂文、俳諧、川柳の短きものまでを一々指摘したら無盡藏といつていい位です。

次に繪畫彫刻の方は何うかと考へて見ますと、飛鳥、白鳳、天平あたりの古いところは畫の方の資料は乏しくて解りませんが、彫刻の方で法隆寺の乾漆の塑像などに、最早何ともいはれないユウモラスな上品な作品があります。それが平安朝の末期の定朝の作品などを平等院あたりに行つて御覧なさい。何といふユウモラスな、しかし決してグロテスクなもので無い床しい作品でせう。

平安朝まで下つて來ますと、繪畫の資料も豐富になつて來ます。さうして、何よりも第一に擧げなければならぬのは鳥羽僧正の作品です。鳥羽僧正の繪は繪卷物ですが、決して此人のものばかりで無く繪卷物には笑ひの趣味の盛られてゐるものが尠くありません。鳥羽僧正に續いて土佐光長だの、藤原信實などといふ人々、餓鬼草紙、小野道風畫像のやうな作品、かやうにいへば平安朝と鎌倉朝とをごつちやにして擧げるやうですが、時代を混じた序に、この兩朝の間に現はれた彫刻の作品で想ひ浮かぶものから例を求めると、奈良興福寺所藏の藥師十二神將や、龍燈鬼像のやうなものもあります。

南北朝から室町時代以降になると、今日殘つてゐる作品が多く、私のやうな資料を漁るに無精な者には迚も一々擧げ切れないくらゐです。またそれを今一々述べてゐる餘裕も與へられてゐませんから略しますが、最も支那の傳統を受け繼いだ人と見られる雪舟のやうな大家にも、兎を畫いたり、馬を畫いたものにユウモラスな味が認められますし、狩野家の人達のやうな支那畫風のものを專門のやうにしてゐる家柄の中からも可笑味の溢れてゐる作品を遺してゐる人々があり、海北友松のやうな同家の門人にもさういふのがあります。

江戸時代になつてからは可笑味を盛つてゐる繪畫は實に夥しいものです。宗達の風神雷神の鬪のやうな傑作を始めとして、所謂浮世繪の畫家で多少なりともかやうな味ひのある作品を物してゐない人はありますまい。啻に浮世繪の畫家ばかりで無く、嚴肅な畫のみを畫いてゐたと想はれるやうな人々の中にも、幾度と無く筆のすさびとしてか、輕妙な笑を催さす作品が私どもの目にも觸れます。私は英一蝶のエピソオドや、華山の繪、シヤラクの錦繪のことなどについて詳しく話す暇がありません。

以上の私の例證は、あまりにプロボオシヨンを考へない想ひ出した儘の雜然たるものでありますが、しかし、これだけ擧げただけでも、いかに日本の文學や藝術の方面に笑の趣味の豐富であるかといふことの證據に十分だとおもひます。實證的に考へ直した後に意外にも私は最初とは全く異つた考を有たねばならなくなりました。

しかしながら、それならば、これが日本の文學及び藝術を通じて現はれてゐる特質であり、日本の文明の特色をつかむ上の關鍵となるか否かを決定するまでには、更にかやうな特色が、過去の日本の文化的本源地であると考へられてゐる支那から來たものであるか否かを檢し、若し支那にかういふ特色が全く見出されないか、若しくは殆んど見出されないといつて差支無い程度であることが確かめられた上で無ければ、決してさうと斷言することができないのであります。

ところで、私は支那のことを今日までさう深く研究してゐません。しかしながら、乏しい智識と薄弱な鑑賞力とによつて考へて見ますと、右に擧げたやうな、日本の文學藝術に賑かな笑の趣味は支那に於ては殆ど見出されないのであります。私は支那の古典文學の中から可笑味を私の力にできるだけ漁つて見ましたが徒勞でした。唐宋時代迄の文學は比較的日本によく紹介されてます。しかし、その中から果して可笑味の名に値する洒節なり作品がありますか。元以後の近代になると流石に滑稽味を取り入れた作品があります。私どもには直接鑑賞することは困難ですが、關漢卿の元曲の中に多少指摘するものがあり、更に下つて明末清初の李笠翁の作品にはたしかに滑稽の要素が盛つてあります。けれども、權威ある人の説を訊して見ても、その味ひが決して上品なもので無く、極めて野卑なものだといふことであり、また書物にもさう記してあります。また現代劇中の代表作三篇を井上紅梅氏の譯で讀んで見ましたが、成程多少ユウモラスな味ひが作中に盛つてありました。しかしながら、三篇とも露骨な猥褻に

まで堕して、さうして笑を咬つてゐるのを見ますと、日本の笑と支那の笑とは文字こそ同一であつても内容實質はよほど異つてゐるのでは無いかとさへ想はれるくらゐであります。

要するに、支那の文學は決してさう明るいものではありません。極端にいへば涙の文學といひ得られるくらゐであり、浪漫主義に一貫してゐる文學であるといへるでせう。序ですから言ひますが支那の思想は常に理智主義のものであり、一方に於ては極端な物質主義であります。それは常に形式、利害、對照を高調するものであります。

それでは藝術の方は何うかといひますに、文學や思想に現れてゐる支那の特色が、同じやうに此處にも現れてゐるやうに見られるのであります。支那の畫に、若し日本の畫の豐かな可笑味を求めるとしましたら、成程それが全く無いことはありません。殊に佛教の影響が熾烈であつた唐宋、殊に宋時代の作品に多く見出されるやうであります。けれども、此處で注意しなければならぬことがあるやうです。それは成程可笑味に相違は無いのでありますが、支那畫中に見出される可笑味は可笑味中の一種類一形式に過ぎないことであります。それは所謂洒脱味であり、奇警に隣してゐる味ひのものばかりであつて、寫實を輕妙な筆で行つたといふやうなのは殆ど無いのであります。それは主として作家の頭腦で笑化され、ユウモラスにされたものであつて、私の言葉をもつていふならば主觀的滑稽味であつて、客觀的滑稽味では無いのであります。御覽なさい。日本の繪畫の可笑味は、風俗畫の隆盛に殆ど正比例をして居り、主觀的思想感情から解脱して客觀的の世界を虛心坦懐に觀照し、個我を忘れて社會生活に融和した時に花を開いてゐるのであります。啻にそればかりで無く、時には諷刺的のものもあり、洒脱味のものもあれば、主觀的思想感情から發露したものもあります。ですから日本の可笑味は非常に變化に富んでゐますが、支那に於てはさうではありません。客觀的の可笑味、委しく曰へば主觀的の感想や思想を殺した時に、卽ち主觀的の價値批判をやめた時にあらはれる可笑味は支那には無いのであります。私も費丹旭や改七香の風俗畫には感服いたします。殊に女性的の柔い味を描き出してゐる妙手として珍重したいとおもひます。けれども、費丹旭にも改七香にもわが風俗畫家の妙手に見る可笑味、ユウモラスな味ひはありません。

甚だ常識的の羅列ではございましたが、此處までいひますと、さうして私の引證が正しいものであつたら、日本の笑の趣味は決して支那から教へられ、與へられたものでは無いと

言ひ得られるのでせう。實際私は日本民族が先天的に笑に惠まれてゐる民族だとおもひます。笑の能力と笑の趣味とはわが民族、從つてまたわが文化を特色づける重要な要素の一つであるとおもひます。しかしながら、明治時代に至るまで支那が文化的に日本を壓へた力は實に重いものでありました。ところがその重い壓力を加へた支那民族は、私の見たところでは、右のやうに笑を殆ど解しない民族でありました。支那風の教育は君子は笑ふべからざるものであるかの如く教へて來ました。それにも拘らず、その重い壓力に抵抗して常に日本の文學藝術が自己の特色を發揮する努力を繼續して來てゐるのであります。それ位でありますから、今後われらがこの民族的本性に自覺して不自然な壓迫を排して、しかも攝取すべきものは攝取して進んで行つたら、今後三十年五十年後のわれらはずつと新しい生活に入り、ずつと新しい、東洋的ではありながら、極めて色彩の強い日本的文化を成就することができるかも知れません。否それに相違ありません。私は過去の日本文化を眺める時、また將來の文化を期待する時、必ず笑を眼中に置き、將來は是非ともこの笑に隨順しなければならぬものだと信じます。苦節二千五百年よく生命を續けて來たわれらの笑に對して、將來正當の地位を文化の世界に於て與へてやらなければなりません。

エクスプレッシヨン其他

柳田國男

古來の日本人が持つてゐる精神美を科學的に分析して話を徹底させることは、慌しい短い時間ではとても覺束ない。それで私はこゝで一人の旅行好きな男が、旅をしながら折にふれて感じたことを、漫然と頭に浮べて見る。

×

私が先年大隅の佐多岬を歩いてゐたときのことである。恰度一月二日の早朝で、私は曉の光を拜むつもりで、海岸から次第に山の中へ入り込んでゆくうちに、まるで人氣のない崖の上に來かかつた。その時ふと何處からともなく澄んだ美しい唄の聲が聞えてくるのである。しかもそれは女の聲である。驚いて崖の淵から谷底を覗いてみると、その谷底に僅か一枚か二枚の畠があつて、その中に白手拭を被つた二十七八の女が、しきりに畑を耕しながら夢中になつて俗謠を歌つてゐるのである。これなどは一つの例であるが、さういふ鬱然とした明方の谷の底にゐて、唯一人で鍬をとりながらも自然の中に自分を沒却して唄を歌へる平和な心は日本人――殊に原始的な日本人――の特有な氣持である。私は世界の何處の田舍を歩いた時にもこの光景には出遇はなかつた。

又二三年前の冬、私が宮古島へ遊びに行つた時のことである。川滿の里と云つて僅か三四軒の農家が散在してゐる瓦礫の多い道を馬で通つた時、やはり思ひがけない歌聲に驚かされて垣根に近づいてみた。すると中には四十四五になる盲目の男が一人ゐて兩手でしきりに碾臼を廻しながら籾摺をしてゐたが、朗かな歌はその男の口から出てゐるのである。更によく見るとその男の顏は微笑を含んでゐるのである。私はさういふ盲目の四十四五にもなる男が、どうして笑つて歌ふ氣になるのかと、其時も心を動かされたのであるが、それは要するに他と比較する心や爭ふ氣持を持たないからである。これも日本人が持つてゐる美しいエクスプレッションの一つである。

×

それからもう一つ日本人特有の美しい心持を感じた例をあげると、それは駿河の島田町で見た光景である。島田町では四年に一度づゝ帶祭といふのがある。その帶祭の催物として町では、男連中だけが集つて、白粉に紅友禪などを着けて踊りをすることになつてゐる。ある年の帶祭に、私が一人で町を歩いてゐると、ふと向ふの電信柱の下に一人の女が立つて何かしきりにブツ〱言つてゐるのが見える。木綿縞の半纏を着た三十ばかりの女であつたが、祭をじいつと見ながら、しきりに唇を動かしてゐる。近づいてみると女は遠くから祭の囃子を一緒に囃してゐたのであるが、かういふ氣持は、社會心理から云へば、一種のちがつた心理で、例へば祭のやうなものであるが、その女はたしかに土地の女ではなかつた。それが音樂もあり、足調子もある囃子を遠くから一人で

合せてゐる姿はたしかに面白い。かういふ女の氣持は諦めとは違ふ、諦めも何も知らずに、物事に屈託しない暢かな氣持の現れで、西洋の男にも女にもみられない表現である。

×

日本の田舎では今でも例のあることだが、一昔前までは村の祭事には必ず一人か二人の、祭文讀みの青年を、その村中の若者の中から、選擧することになつてゐた。さういふ場合には村人の中の誰か一人が、「今年の祭文讀にはあの若者を選ばふ」と言ひだすと、期せずして村人の考へがその青年の上に一致してゐたものである。一番心持の正直さうな、從つて容貌も端正で、神靈に捧げる祭文を讀むにふさはしい青年が、澤山の村人の中から、一つの爭議もなしに自らたゞ一人選び出されるといふのはたしかに美しい事實である。從つてその頃村の若者達は努めて邪心を拂つて、心を正しく保つことを心掛けてゐたので、背中を撫でてやりたいやうなエクスプレツション（顏立ばかりではなく全體の容子である）を持つた青年が、女よりも男に一層多かつたが、此頃はめつたにさういふ青年を見なくなつた。世界中でたゞ端西の南方の田舎を歩いた時、自分はよく、さういふエクスプレツションを持つた青年や尼さん達を見たが、今の日本の京都あたりにみかける尼さんは、爭はない者の氣高い美しさを持つてゐない。

×

著者は忘れたが、書物の名は「北東サイベリア」である。これは日本美の話を少し離れるが、自分は嘗てこの本を讀みながら、ひどく感動したものである。

北東サイベリアといふのは北緯七十度より北で、チユクチ人種などの住んでゐるところであるが、凡て動植物の盛りといふものは北極に近づく程非常に短いものである。日本の海岸に咲く濱茄の花などは、あの香氣の高い紅い花を十分觀賞することが出來るが、オホーツク海の沿岸などでは夢のやうに咲いたと思ふと幻のやうに散つてゆくのである。北東サイベリアなどでは、一株の植物の上の方には今、花が蕾んで、蝶が飛んでゐるかと思ふと、中程には早、紅い花が滿開の香氣を放つてゐる。かと思ふと下にはもう實が生つて獸がそれを喰つてゐるといふ程に、慌しく植物の一生が過ぎ去るものである。それと同樣に、人間の盛りも非常に短くて、女が十七八になると急に花が開いたやうに艶かに美しくなつて、

又急に衰へてゆくのである。それでかういふ國にふさはしい年中の催しとして、春五六月、野が青くなつて、月がほのぼのと照る晩には歌垣をやるのである。若い男女が相集つて春の月影の中で歌をうたひかはし、舞踏をするのであるが、その晩には、北東サイベリアの老婆達は亦、若い者と一緒になつて野に出かけるのである。そして若い男女の心を汲むやうに「どうせ人生は短いものだ。自分達も一度はお前達のやうな時があつたのだが、もうこんなになつてしまつた。どうせ人生は夢のやうに短いものだ、踊るのも歌ふのも今のうちだから、若い者よ、踊れ、踊れ。」といふ意味の歌をうたふのださうであるが、私はこのサイベリアの老婆の氣持が、日本人にもあると思ふ。殊に田舍の老人に著しい。

　風儀上の問題はともかくとして、若い者の遊ぶのを見て靜かに樂しむ氣持は、日本の老人のかくすことの出來ない氣持である。

×

　日本の國民性とか、固有美が、單に數卷の書物や、僅かばかりの政治家や、軍人の傳記によつてつくられてきたやうに論ずる人があつたら、自分はこれに反對する。河竹の寄りの話のやうに、又古來の名人がその末期に誰かに秘術を傳へて死んでゆく話のやうに、人間は年をとると一體に話ずきになるものである。年寄がよく若い者を相手に話をしたがるのを見て、「又自慢話が始つた」と一概に云ふやうだが、私は年寄りの話好きは自慢よりは今少し團體的なものだと思つてゐる。年寄は隣の息子を相手にでも自分の考へを傳へずには氣がすまないのである。それは或意味で若い日本人が眞先に戰ひに死んでゆかうとした品性と同じ品性の現れだと思ふ。例へば山の中の藥用植物が、今日まで役だつて來たのも年寄の教へたがる氣持の遺産であるやうに、日本の國民性は決して、數卷の書物や、數人の傳記で代表されるものではない。

　それは恰も沼澤に生ひしげつてゐる眞菰のやうなものである。眞菰の生ひしげつてゐる下を覗いてみると、眞菰の根や何かゞ朽ち果てゝ土となつたその上から〳〵と新らしい眞菰が繁殖してゐるやうに、植物が細胞の核子になるものと、肥料になるものとが相伴うて非常に複雜に發展するのと同じ理由である。

×

序に思ひ出したが、誰でも知つてゐるやうに、ハーンの書

いたものの中で、一番西洋人が不思議がつてゐるのは、ジャパニース、スマヰルスである。横濱の外人の家にゐたある女中が良人が亡くなつた報知を受けとつたのに、別に悲しさうな顏もせずに微笑んでゐたといふので、外人の奥さんから散々叱られて、追出されたといふあゝいふ性質の微笑は、今の日本の女の人からはだん／＼少くなつてゆくやうである。

江戸文明の一側面と浮世繪

田中喜作

江戸三百年の文化は其の不可思議なる爛熟によつて、あやしくも我々を悲しめ、また我々を喜ばしめる。其の政道の流轉が江戸の思想と、江戸の文化の上に如何ばかりの蕩搖を齎したとしても、今それ等を說くべき餘裕を有たない私はそれを一篇の政治史に讓るの外はないが、かのあやしき文化を考察する上に、どうしても度外視することの出來ない一つの事實、――而も多くの文明史家の間にも、ともすれば忘られ勝ちな一つの事實を前提として提供しておきたい。

それは上下三世紀に亘る悠久なる年月の間に一國國家經濟の基本であらねばならなかつた米價騰貴の狀態である。

由來江戸時代の米價は概念として一石銀六十目卽ち金一兩（銀六十目を金一兩に換算することは金銀價の高低によつて多少の變動はあるが盛期に於ける平價に近いものである）と見ることが至當であるが、然しこれは決して三百年間の平均價であるといふ理由からではなくして、江戸文化が咲き亂れた爛熟たる百五十年の時代の米價が常に一石凡六十目の平價を維持したといふ事實からである。今是を具體的に云ふと德川氏江戸開府の慶長時代の米價を諸書に散見するところによつて平價を求めると凡一石銀十六匁に當るのであるが、それが僅に二十年を經過したる寛永には一躍三十五匁に騰貴し、爾來明暦萬治寛文と四旬の歲月を經て延寶には已に凡六十目に及むでゐるのである。それが爾後一世紀半を經たる文

政時代に尙六十三匁に過ぎなかつた。無論この間には年の豐凶によつて文明期の如き百目に近い時代もあつたが、然しかく江戸文明の初期から六十年を經たる延寶に六十目に及むだ米價が化政時代即ちもう內憂外患が交々起つて德川氏の覇業が已に命旦夕にせまつた文政に至るまで米價の指數が延寶を一〇〇と假定して僅に一〇八にしか騰貴してゐないのである。まだそれのみではない。この六十目と稱する延寶期の銀貨幣の品位は純分二十を交へてゐたのに對して、文政期の通貨文字銀新文字銀は四十六乃至三十六に過ぎなかつたので即ち五十四乃至六十四の驚くべき雜分を混入してゐたのである。無論經濟狀態の低級なる江戸時代にあつては貨幣品位の等差が今日想像する程物價に短的に影響するものではなかつたらうと思はれるが、然しこの事實を考察すると米價は事實に於て少くとも三四十目に下落してゐたものと見るべきが至當である。かく百五十年の歲月を經て米價が半に近い下落をすると云ふ、こんな不可思議な一國經濟の狀態が果して古往今來何れの國に求めることが出來るか。

無論こゝにはかゝる不可思議なる狀態の由つて來るところをも考察する必要がある。然しそこには肯定と否定との多少の條件があつて互に複雜なる第二次的構成を形づくる上に、其の文獻にも乏しく、到底本誌上の問題とするべきものでないから、こゝには其の一つの主因が德川幕府の政策たりし極端なる農民壓迫によることを說くに止めて、事實を事實とすることを以て前提としておくの外はない。

實に元和偃武以來三百年の文化はかくの如き不可思議なる經濟狀態の上に立ち、是に應じて退化し是に應じて爛熟したのである。そしてこの農民壓迫の如きも其の影響がそれ自體に止まるものであつたとすれば、文化の上の重大なる問題とならなかつたかも知れなかつたが、それは當然の歸結として米價の低位は自繩自縛となつて幕府を始め各藩の財政を極度に疲弊せしめた。已に初世以來急激なる奢侈の增大と、諸種の社會的施設の勃興とまた各藩に對する政治的策謀とは、幕初に於ける金銀產出の激增すら僅に寬永の天下を賑はせたに過ぎずして、寬文以降にはもう幕府及各藩は何れも戰國以來蓄積したる資財を傾けて漸次其の窮迫を暴露し初め、元祿に於ける惡貨の鑄造によつて僅に是を彌縫せんと試みた。これより以後である。米價の低位が、益〻、統治者を脅威し彼等が國庫の窮乏を見たのは、彼等の莫大なる資財は爾來果して何人の手に歸したるか。

云ふまでもなくそれは町人階級特に商賈であつた。「商賈已

に素封の富を有すれば千里控制手の權半は已にその手に歸す』と云へる價川の著者の時代をまつまでもなく、彼等の富は異常なる壯大を成し遂げた。是に加ふるに彼等は安い生活費によつて其の利を二重にし、また大名貸しなる新たなる營業によつて其の利を三四重にした。而も他面には德川氏の文敎興隆も尙彼等下層階級に遍布するに至らなかつたことと、海外發展の禁令と、今一つ商賈等に對する有形無形の壓迫とは彼等をして富への沈湎以外に永劫に浮む瀨なき運命觀を把持せしめた。

こゝに至つて彼等無智なる富豪の行衞は推して知るべきである。寬文期に至るまで三都の遊廓の高級なる妓女は多く貴族を客としたが、爾來貴族に代るものは商賈となつた。彼等は富によつて遊蕩し、遊蕩のために富へ沈醉した。彼等の生き甲斐はたゞ遊蕩によつて滿足することとであつた。『人は十三までは辨へなくそれより二十四五までは親の指圖をうけ其の後は我と世にかせぎ四十五までに一生の家を固め遊樂することに極まれり』(永代藏)と彼等はきめてゐた。『うつゝか夢かまぼろしの身を持ちながら遊べや歌へ』(めりやす)と觀じて彼等が儚なき悅樂を趁ふ容は云ふまでもなく遊里惡所に外ならなかつたから、三ヶ津と云ひ五ケの津と云ふ當時の大都市は各、其の遊里の隆盛を誇負してゐた。文敎興隆もたゞ社會の一部に偏在して幕府の奢侈禁令の無數の發布も富の滔瀾を防ぐことは出來なかつた。梨園の繁昌も猥雜なる好色本の流布も音曲諸藝の興起も皆是れによつて培はれた。彼等はあるがまゝに蕩盡して、制禁の容す範圍に思ひのまゝに振舞ふた。而も尙彼等は素町人といやしめられ士農工商と四民の最下層に甘んじなければならなかつた。武家、新五左、淺黃裏と罵つても、彼等は一介の田舍武士の前にはお侍と崇め土下座するより外はなかつた。そして彼等の心の墮落は年と共に加重し子々孫々に傳へ彼等の肝に銘じ骨に鏤刻して、享保以降のせちがらき世の中にも彼等は『今時の此世界、夜ぬけと分散せぬものは男の內ぢやござりませぬ』(伊達娘戀緋鹿子)と放言しながら、尙遊樂の巷に彼等の歡樂を追ひ求めた。而も此の風潮は彼等の一階級に止まらずして江戶の後半に及むでは武士にも農民にも瀰漫したことは當然の結果で、『甚だしきは近來の饑饉に公命加はりて豪民施行せしに貧民其の施しの鳥目を受けて直に戲場に行き凶年に大に戲場の賑ひ』(草茅危言)ふが如き奇觀をすら呈し、世を舉げて逸樂と現世謳歌の氣風に浸染して、當時の戲作者にとつては、釋迦も孔子も、老子も子路も、蕩兒と共に一夜の歡樂を惡所にあさる嫖

であつた。彼等にはこの墮落以上にもう人生の光明も希望も何ものもなかつたのである。

此の悲しむべき人生、此の淺間しい現世謳歌主義、彼等はこの世相を果して何と觀じたか。無論彼等の衆多の間には少數の自覺者はあつたが、然し彼等の大多數は物質と肉慾との狂瀾の間に、『浮きに浮きてなぐさみ手まへすりきりも苦にならず』運命に悟入して安きを偸み『わけの聖』と呼ばれ『通りもの』『大通』と稱されることに王侯にも等しい誇を感じたのであるが、而も彼等の心の奥底の悲哀にはどうすることも出來なかつた。彼等の間に興隆した音曲が哀切の律を傳へて聽くものの心を搖し、彼等の文藝が逸樂の假面に憂愁と皮肉とを物語つて我等を悲しませるのは實に是の世態の半面でなくて何であらう。

以上は男性の場合であるが是が女性に至ると一層甚しい。彼等は時にも階級にも上下を通じて曲解せられたる儒教思想に壓せられて殆んど奴隷に等しい境遇にゐた。些かの事件にも『女童の知ること』でないと蔑まれてゐた。男性には尙且惡所があつた。然し女性にはもう七歲にして席を同うすることをすら禁ぜられたる男女間の墻壁があつた。彼等は知ること、見ることを禁ぜられ死の曉まで情緒の抑壓を强ひられて牛馬のやうに驅使されるより外はなかつた。かの佛蘭西十八世紀の淫靡はバリニイフオンテエヌ女史をして其の寢室の天井に〝Fais le bien〟の文字を止めしむる（マニユエール著巴里秘錄）奔放を敢てせしめたが、我等の祖母にとつては想像も出來ないことであつた。彼に於ける女子教育が、物心のつく頃になると直に尼院に送られて爾來世と隔離し婚期の來るまで淋しい生活を送らねばならなかつたとしても、彼等には尙『世間を見るために、踊やオペラを見るために、結婚しよう』（デイドロオ追想記）と考へるだけの自由はあつたが、若しこれが我々の祖母であつたら彼等は恐らく『世間を見るために身を賣らう』と云ふより外はなかつたであらう。

然しこの淺間しい世態にも尙藝術の花は燦として咲き亂れた。否『この淺間しい世態にも』ではなくて、この世態あるがために咲き亂れた。浮世繪は實にかくの如き世態を背景として、この淫蕩なる時代相に沈湎して進化し完成した。若しかくの如き時代相がなかつたら、恐らくかくの如き神秘なる藝術は存在しなかつたらう。

浮世繪とはそも〳〵何の謂ひか。今日に至るまですべての浮世繪研究者は『浮世』なる言葉を單に今樣の意と解し延い

て浮世繪を今樣風俗の寫實的表現とし、是れ以上一人として新なる解釋を下してゐないが、それは室町の末期以來、浮世繪派確立時代に至るまでの『浮世』なる言葉の内容の變遷史を不問に附したるより生ずる誤解にして、若しそれを仔細に研究すれば單に今樣風俗の寫實的表現ではなくして、寧ろ狹斜趣味の繪畫であることを悟るべき筈である。無論德川氏の初期浮世繪の創始者と目せられてゐる岩佐又兵衛の時代にあつては、まだこの言葉は明確なる意義をとらずして旨と今樣の意を示してゐるが、世は元祿以降に入り淫靡輕佻なる世態が一世を風靡し、一面に好色本の猥雜なる流布が益々時代思潮を如實に物語る頃になつては、もう明に狹斜趣味を意味してゐるのである。たゞこゝに狹斜趣味と云ふも必ずしも浮世繪の全部が材を狹斜の巷にとつてゐることを意味するものでないことは云ふまでもない。たゞ演劇の如き美女の如き當代のこの派の畫人によつて扱はれたる題材が何れも狹斜に密接なる關係をとつてゐるから、姑くこの言葉を借りるものであつて、若し此の言葉を不當なりとする人があれば、デカダン趣味とするもさまたげないのである。

そは兎まれ一たび今樣風俗の寫實的表現として發したる、この派の藝術が木版畫の發達にともなふて、其の鑑賞者を下層階級に移した時、尚其の寫實的表現の傳統を維持したとすれば、一代の世相と共に、漸く所謂狹斜趣味に近づいたことは當然の結果であらねばならぬ。

されば浮世繪を鑑賞せんには上述の如き、悲しむべき淫湎浮華なる世相を度外にしては決して其の正しき鑑賞を得ることは出來ないのであつて、かの豐信の如き春信の如きまた清長の如き歌麿、寫樂、長喜、榮之の如き此の派の巨匠は一人としてこの雰圍氣外には出てゐないのである。たゞ衆多なる彼等畫人の間には、年所の久しきに亘るに從つて、多少の傾向を異にしてゐるのも亦當然であつて、まだかくの如き世紀末の神經過敏を表現してゐない比較的初期の畫人師宣、清信等の一派もある。また或るものは生きながら心の奥底に植えつけられたこの生の哀愁を自ら覺らずして夢のやうに嘻戲してゐるものもある。讀者は恐らく昨年高島屋に展覽せられた松方氏藏品の一部を通覽せられたことと思ふから、其の二三の記憶だけでも辿つて見られるがいゝ。たとへば春信の『蓮池橋上の二美人』それは何といふ物憂いたよりない表現だらう。そこには一つとして烈日の下に輝いてゐる色彩を見ることは出來ない。色は皆繪の具の本體から遊離して香のやうに立ちのぼつてゐる。若し讀者にして、こんな作品を佛蘭西十

八世紀の華麗淫蕩なる作品に比較するとが出來たなら、恐らく私の云ふ哀切なる悲調を一瞥の下に心讀することが出來る筈である。またあるものは此のあやしき文化に蠱醉して其の神經を剃刀のやうに研ぎ澄ましてゐるのがある。たとへば同じ展覧に見ることを得た榮之の『藝者撰』の如きがそれである。（私はこれまで榮之の作品のうちに殆んど見るに足るべき作に接したことがなく、彼を群小畫家のうちに數へてゐるのだが、あの二枚を見て初めて彼の大才を知つたことを白狀する）。またあるものは此の儚なき環境裏に智惠の目を見開いて自分の境地に悟入してゐる『通りもの』がある。歌麿の如きは即ちそれである。若し夫れ寫樂に至つては已に春信の夢はあともなく消逸して悉く是れ沈思と悲痛との具現ではないか。そして彼を剛堅なる男性的顯現であるとすれば、長喜の多くのものには柔媚なる女性を見る。彼の憂鬱にして物思ふが如き顔、それに應はしい衣の褪せたやうな淸瀨ない色彩。是等何れも一つとして私の云ふ悲しき淫蕩の世界を物語つてゐないものはないのである。

私は已に浮世繪版畫を指して『神秘なる藝術』と云つた。私には事實まだ殘されたる問題も多いが――特に浮世繪師として上下三百年間殆ど一人として筆を染めてゐないものはなく、また想像も及ばない程無數の出版を見たる春宵秘戲の類册及び一枚摺のうちにあつて、明和安永頃に至るまでの作品の驚くべき價値を說きたいとは思ふが、餘りに敍述を復雜にすることは本誌の目的ではないと思ふから、こゝに所謂『神秘』を說いて、この一篇を終らう。

私はこの一篇のうちに漠然と浮世畫なる言葉を使つて而も主として浮世畫版畫を說いたが、嚴密に云へば初期以來寛文比に至るこの派の肉筆畫も說くべきであつて、そのうちには他派の藝術中には見ることの出來ない優秀なる作品も多いが、今是に及ばなかつたのは、一面に敍述の多岐に亘ることを避けたのと、今一つは浮世繪の肉筆と云ふものは元祿以降の作品に及ぶと、殆んど見るべきものなく僅に師宣、長春、一春章等の作品の間に十幀をすら數へることは困難であると云ふ事實に原因してゐるのである。この問題は今日までの浮世畫史家の間には實に曖昧に葬られてゐるので、殆んど一人として元祿以後に於ける浮世畫肉筆の無價値を說く大膽を敢てしたものはないが、自分を以て見れば春章の如き版畫の方面に特異なる色彩を有つことの少い畫人や、長春の如き殆んど肉筆專門と云ふべき畫家にこそ佳作もあるが、他には全然優秀なる作品を發見しないことを斷言せんとするものである。

師宣の如き比較的初期に近い作家にしても、其の作品は彼の二三の秘戯の畫册に比すれば遙に低劣なるものである。而も版畫なるものは云ふまでもなく、肉筆畫に比すれば遙に多量の工藝的要素を含んでゐるものであつて、嚴密に云へば純藝術を以て律することの出來ないものであるにも拘らず、かくの如き結果を見るのは果して何が故であらう。

これを說くには先づ版畫刻摺の手續をも說かねばならないが、今はもうそんな餘地もないから是を簡單に說明すれば、少くとも一つの理由は色彩の物質的素質が肉筆畫に比して版畫の方が遙に澄明の度を保有してゐること丶今一つは版畫の工藝的拘束が版下描き卽ち畫人をして自ら畫趣をして單純ならしめる點に存するので、是れに加ふるに柔軟なる筆端から生る丶線よりも、粗剛なる刀と木質とから生る丶描線の方が遙に力强いと云ふ理由からである。已に藝術として單純にして强堅な要素を保有してゐる以上、其の藝術の價値の優れてゐることは自明の理であらう。其上それ等の版下を仕上げる彫師摺師と呼ばれるものが、何れも現代に想像される如く工藝的なものでなくて、彼等も亦畫人と共にかの江戸の不可思儀なる背景のうちに生き、悲しき淫落の世界に沈溺して彼等の技藝を研き澄ましてゐたもので、實に畫人と彫師と摺師とが何れも遊樂と作畫との三昧に入つてゐたものに外ならないのである。

さればかなくの如き神秘る藝術作品は、江戸時代と云ふ不可思議なる時代を背景とし、かの不可思議なる空氣を呼吸してのみ產するものであつて、今後如何なる未來にも、如何なる境土にも再びかくの如き神秘なる藝術を產することは出來ないであらう。私はこの意味に於てかのあやしき江戸文明の一側面を悲しみまた尊ぶと丶もに、此の偉大なる浮世畫の藝術に讚嘆するものである。

私は最後に一言する。私はこの一篇擱筆後に改造七月號所載の黑田源次氏の版畫論を讀んだ。黑田氏は現時に於ける版畫研究の一權威であるが、その說くところ浮世繪風景畫を以て此の派の旁系であると斷じたところだけは私も曾て說いたことであるから我が意を得たものであるが、其他は悉く皮相の見解であることを悲しまざるを得なかつた。私は今多くを云ふことを欲しないが最後に同氏が現今流行する自畫自刻の版畫の蒙を嗤ふて我が國獨得の版畫藝術の未來を說かれたことについては、如上の見解より到底容することの出來ない點であると信ずるものである。

或る島の數日

若山牧水

伊豫の今治から尾の道がよひの小さな汽船に乘つて、一時間ほども來たかとおもふ頃、船は岩城島といふ小さな島に寄つた。港ともいふべき船着場も島相應の小さなものであつたが、それでも帆前船の三艘か五艘、その中に休んでゐた。そして艀から上つた石垣の上にも多少の人だかりがあつた。一寸重い柳行李を持てあましながら、近くの人に、

『M——といふ家はどちらでせう』

と訊くと、その人の答へないうちに、

『M——さんに行くのですか』

と他の一人が訊き返した。同じ船から上げられた郵便局行の行嚢を取りあげようとしてゐる配達夫らしい中年の男であつた。

『さうです』

と答へると、彼は默つて片手に行嚢を提げ、やがて片手に私の柳行李を持ちあげて先に立つた。慌てながら私はそのあとに從つた。

二三町も急ぎ足にその男について行くと彼は岩城島郵便局と看板のかゝつてゐるとある一軒の家に寄つて私を顧みながら、

『此處です』

と云つた。

此處のまだ年若い局長であるM——君は夙うから我等の結社に加入して歌を作つてゐた。その頃一年あまり私は父の病氣のために東京から郷里日向の方に歸つてゐた。そのうち父がなくなり、六月の末であつたか、私は何だか寂しい鬱陶しい氣持を抱きながら上京の途についたのであつた。そしてそ

の途中、兼ねてその樣に手紙など貰つてゐたので、九州から四國に渡り、其處からまた汽船に乘つてこのM――君の住む島に渡つて行つたのである。手紙の往復は重ねてゐたが、まだ逢つたこともなく、どんな職業の人であるかも知らなかつた。

M――君はたいへん喜んで、急がないならどうぞゆつくり遊んでゆく樣に、と勸めて呉れた。身體も氣持もひどく疲れてゐた時なので、言葉に甘えて私は暫く其處に滯在することにした。M――君はその本宅と道路を中にさし向つた別莊の雨戶をあけて、

『こちらが靜かですから……』

自由に起臥する樣にと深切に氣をつけて呉れた。

M――家は島での豪家らしく、別莊などなか／＼立派なものであつた。私の居間ときめられた離宅は海の中に突き出た樣な位置に建てられ、三方が海に面してゐた。腰掛窓に凭つて眺めると、ツイその正面に一つの島が見えた。その島はかなり嶮しい勾配を持つた一つの山から出來てゐて、海濱にも人家らしいものはなかつた。山には黑々と青葉が茂つてゐた。その島の陰から延いて更らに二つ三つと遠い島が眺められた。遠くなるだけ夏霞が濃くかゝつてゐた。手近の尖つた島と自分の島との間の瀨戶をば日に一度か二度、眼に立つ迅さで潮流が西に行きまた東に流れた。汐に乘る船、逆らふ船の姿など、私には珍らしかつた。

一方の緣側からは自分の島の岬になつた樣な一角が仰がれた。麓からかけて隨分の高みまで段々畑が作られて、どの畑にも麥が黃いろく熟れ、滯在してゐるうちにいつかあらはに刈られて行つた。

その頃私は或る私立大學を卒業して五六年もたつてゐるに係らず、まだ職業らしい職業を持つてゐなかつた。『金にもならぬ和歌などばかり作つてゐて一體お前はこの若山家をどうする氣か』と云つて、先頃まで歸つてゐた鄕里の家で、病父の枕許で、年とつた母や親戚たちから私は責められた。苦しい中から學資を貢がせられ、漸く卒業したと思ふに五年たつても六年たつても金の一圓送つて貰へない彼等の身になつて見るとその苦情も當然であつた。たゞ父だけはその性分からかさまでに氣にかけず『もう少し待つて見ろ、そのうちに何かするだらう』と寧ろ彼等を慰めてゐた。その父が死んで見るといよ／＼私の立場は苦しくなつた。是から東京に出て新聞社などに勤めたところで幾らの送金が出來るわけでもなし、いつそこのまゝ母の側にゐて小學校なり村役場なりに出

て暮らさうかとまで考へて、その口を探したがなまじに何々卒業の肩書のあるのが邪魔になつて都合よく行かなかつた。いよ〳〵弱つたはてにまた母や姉から若干の旅費を貰つて、ともかく東京へ出て見ようと、いふ途中に、この瀨戸內海の中の小さな島に立ち寄つたのであつた。

凭り馴れた肱掛窓に凭つてかけ出しの樣になつてゐる窓下を見るともなく見てゐると、丁度干潟になつた其處に何やら蠢くものがある。よく見ると、飯蛸だ。一つ、二つ、やがては五つも六つも眼に入つて來た。それを眺めながら、私は懶く或る事を考へてゐた。父危篤の電報に呼び返さるゝ數日前に私は結婚してゐた。一軒の家でなく、僅か一室の間借をして暮してゐたので、私の郷里滯在が長引くらしいのを見ると、妻も東京を引きあげて郷里の信州に歸つてゐた。そして其處で我等の長男を產んでゐた。私が今度東京に出るとなると、早速彼等を呼び寄せなくてはならぬ。入るものは金である。その金の事を考へてゐるうちに見つけたのが飯蛸であつた。そして可愛ゆげに彼等の遊び戲れてゐるのを見入りながら、不圖一つの方法を考へた。一年あまりの郷里滯在中は初めから終りまで私にとつては居づらい苦しい事ばかりであつた。どうかしてそれを紛らすために、いつか私は夢中になつて歌を作つてゐた。その歌の數が隨分になつてゐる筈だ。それを一つ取り纏めて一冊の本にして多少の金を作りませう、と。

括つたまゝ別莊の玄關にころがしてあつた柳行李を解いて、私はその底から二三冊のノートを取り出した。そしてM——君から原稿紙を貰つて、いそ〳〵と机に向つた。左の肱が直ぐ窓に掛けられる樣に、そして左からと正面からと光線の射し込む位置に重々しい唐木の机は置かれたのである。

が、豫想はみじめに裏切られた。それ以前『死か藝術か』といふ歌集に收められた頃から私の歌は一種の變移期に入りつゝあつたのであるが、一度國に歸つてさうした異常な四周の裡に置かるゝ樣になると、坂から落つる石の樣な加速度で新しい傾向に走つて行つた。中に詠み入れる內容も變つて來たが、第一自分自身の調子どころか二千年來歌の常道として通つて來た五七五七七の調子をも押破つて歌ひ出したのであつた。何の氣なしに、原稿紙を擴げて、順々にたゞ寫しとらうとすると、その異樣な歌がいつぱいノートに滿ちてゐたのである。實は、郷里を離れると同時に、時間こそは僅かであつたがやれ〳〵と云つた氣持ですつかり其處のこと歌のことを忘れてしまつてゐたのであつた。そしていま全く別な要求からノートを開いて見て、われながら其處に盛られた詩歌の

異樣な姿に肝をつぶしたのである。

其處には斯うした種類の歌が書きつらねてあつた。

納戸の隅に折から一挺の大鎌ありなんぢが意志をまぐる
なといふが如くに

新たにまた生るべしわれとわが身に斯くいふ時涙ながれ
き

あるがまゝを考へなほして見むとする心と絶對に新しく
せむとする心と

ともし斯くもするはみな同じやめよさらばわれの斯くし
て在るは

いづれ同じ事なり太陽の光線がさつさとわが眼孔を拔け
通れかし

感覺も思索も一度切れてはまたつなぐべからず繋ぐべく
もあらず

わが瞼は涙に濡れて眩き日に照らされし萬象はみな死に
て冷し

日を浴びつゝ夜をおもふは心痛し新しき不可思議に觸る
るごとくに

言葉に信實あれわがいのちの沈默よりしたゝり落つる言
葉に

さうだあんまり自分の事ばかり考へてゐたあたりは洞穴
の樣に暗い

自分の心をほんとうに自分のものにする爲にたび／＼來
て机に向ふけれど

自分をたづぬるために穴を掘り穴ばかりが若し殘つたら

何處より來れるやわがいのちを信ぜむと努むる心その心
さへ捉へ難し

眼をひらかむとしてまた思ふわが生の日光のさびしさよ

死人の指の動くごとくわが貧しきいのちを追求せむとす
る心よ

といふ樣なのがあるかと思へば、また、

ふと觸るればしとゞに搖れて影を作る紅の薔薇よ冬の夜
のばらよ

開かむとする薔薇散らむとするばら冬の夜の枝のなやま
しさよ

靜かにいま薔薇の花びらに來ていこへるうすきいのちに

夜の光れり
傲慢なる河瀨の音よ呼吸烈しき灯の前のわれよ血の如
き薔薇よ
悲しみと共に歩めかし薔薇悲しみの靴の音をみだすなか
ればらよ
吸ふ息の吐く息のわれの靜けさに薔薇の紅も病めるがご
とし
むなしきいのちに映りつゝ眞黑き珠の如く冬薔薇の花の
輝きてあり
われ素足に青き枝葉の薔薇を踏まむ悲しきものを滅ぼさ
むため
薔薇に見入る瞳いのちの痛きに觸るゝ瞳冬の日午後の憂
愁
古びし心臟を捨つるが如くひやゝかに冬ばら紅に瞳向
へり
愛する薔薇をむしばむ虫を眺めてあり貧しきわが感情を
刺さるゝ如くに
灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬ悲しき寢醒

の漸く眠りを思ふ時に
この冬の夜の愛すべきもの薔薇ありつめたき紅の郵便
切手あり
やゝ深き溜息をつけば机の上眞青のばらの葉が動く冬の
夜
ラムプを手に狹き入口を開けば先づ薔薇の見えぬ深き闇
の部屋に
餘り身近に薔薇のあるに竊きぬ机にしがみつきて讀書し
てゐしが
忘れものばかりしてゐる樣なおちつきのない男の机の冬
薔薇
晝は晝で夜は一層ばらが冷い樣だ何しろおちつかぬ自分
の心
と思ふまにばらがはら〳〵と散つた朝久しぶりに凭つた
暗い机に
じいつとばらに見入る心じいつと自分に親しまうとする
心
斯うしてじいつと夜のばらを見てゐる時も心はばらの樣

に靜かでない
ばらが水を吸ひやめたやうだガラスの小さな壜の冬の夜
のばらが
かと思ふと、或る海岸の荒磯に遊んでは、
あはれ悲しいで衣服をぬがばやと思ふ海は青き魚の如く
うねり光れり
とかくして登りつきたる山のごとき巨岩のうへのわれに
海青し
岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟人ちさき帆を
あぐ
嬉し嬉し海が曇るこれから漸くわたしのからだにもあぶ
らが出る
身體は一枚の眼となりぬ青くかゞやける海ひらたき太
陽
岩のあひだを這ひて歩くはだしで笑ひて浪とわれと
鵜が一羽不意にとびたちぬ岩かげの藍色の浪のふくらみ
より
下駄をぬいでおいたところへ來たこれからまた市街へ歸
るのだ
岬の森より歸らむとすれば港の市街に悲しき汽笛鳴る
この帆にも日光の明暗ありかなしやあをき海のうへに
水平線が鋸の齒のごとく見ゆ太陽のしたなる浪のいた
ましさよ
少女よその蜜柑を摘むことなかれかなしき葉のかげの
精力を浪費する勿れはぐゝめよと涙して思ふ夜の浪に濡
れし窓邊に
悲しき月出づるなりけり限りなく闇なれとねがふ海のう
への夜に

と云ふ風の歌を作つてゐるのであつた。

ツイ、僅かばかり前に一生懸命して自分で作つておきながら、いま改めて見直すとなつて殆んど正體なく驚いたのである。どうしてあんなに驚いたのか今考へればわれながら可笑しいが、とにかくに驚いたゝほんの數日ではあつたが、鄕里を離れてさうした島の特別にも靜かな場所に身を置いたゝめ、前と後とで急に深い距離が心の中に出來てゐたのかも知れぬ。

驚愕はいつか恐怖に變つた。何だか恐しくて、とても平氣でそんな歌を淸書してゆく勇氣がなくなつてしまつた。と云つて、心の底にはそうして作つてゐた當時の或る自信が矢張り何處にか根を張つて居た。そしてその自信は書かせようとする、故のない恐怖は書かせまいとする、その縺れが甚しく私の心を弱らせた。二日三日とノートと睨み合ひをしてゐるうちに終に私は食事の量が減り始めた。氣をまぎらすためにM――君から借りて讀んだ萬葉集の、讀み馴れた歌から歌を一首二首と音讀しようとしては聲が咽喉につかえて出ず、強ひて讀みあげようとするとそれは怪しい嗚咽の聲となつた。萬葉の歌を眞實形に出して手を合せて拜んだのはこの時だけであつた。

終に友人が心配しだした。そして、では私が代つて淸書してあげませうと云ひながら、次ぎから次ぎと書きとつて行つた。それをば唯だ茫然と私は見てゐた。さうなつてからは日ならずして二三冊のノートの歌が一綴の原稿紙の上にきれいに寫しとられてしまつた。

折角久し振におちついてゐた私の心はその淸書にかゝらうとした時から再びまた烈しい動搖焦燥の中にあつた。そして友人の手によつて淸書が出來上るや否や、それを行李に收め、あたふたと私はその靜かな島を辭した。

丁度十年ほど前になる。いまこの島の數日を考へてゐると、其處の友人の家の庭にあつた柏の木の若葉、窓の下の飯蛸、または島から島にかけて啼き渡つてゐた杜鵑の聲など、なほあり〳〵と心の中に思ひ出されて來る。(完)

歌集『緑の斜面』より

島崎藤村

『女性改造』の讀者のために、土岐哀果の歌集『緑の斜面』より數首の歌を抄錄する。

路ばたにもぐもぐと藁をかめる馬あせる心をなげかじわれは

これまでのわれを愛すこれよりのわれや更に愛せざるべからず

死ぬまでもまことのわれを言はさるかまことのわれを思ふひまなきか

かれは來てトルストイのことを語りて歸れりトルストイのことを思はずひさし

一きやくの椅子ありそのうへに永遠に腰おろす人なきごとく

失望するなかれわれらに前途ありふりさけ仰ぐことのよろしさ

馬鈴薯のひとつを父に似るとみればこれは母に似る長きとまろきと

庭掃くは子らのつとめと朝戸ひらきみなおり立つも百日紅のはなに

さくさくと大き利鎌の苅りすゝむ青道のおとに心はひそめ

朝露の青道しとゝ苅りつみてわだちさやりゆくおとのすがしさ

ゆふべのみどりいかにも靜けきひと時を家に歸りてもたむといそぐ

雜木わか葉こもれるなかにさびしかるいのちをもちてあり經むわれは

おり立ちておんみも心養ひねみどりかゞやくこの斜面なる

日本アルプスのテント生活

奥宮加壽子

この思ひ出の記の筆者奥宮氏は、東京雑司ケ谷にある日本少年寮の寮母である。今から二十餘年前僅か拾圓の資金で少年寮を計畫し、家庭を離れて修學の途にある少年のために家庭的な愛の搖籃をはじめて、中學校から高等學校へと成長してゆく少年の成長をひたすらに樂しみ眺めながら今日まで過してきた人である。氏は今年はもう五十を過ぎてゐるが、この一篇は一昨年の夏寮生達にすゝめられて日本アルプスに登られた思ひ出の記である。

準備

大正拾年七月二十三日から三十一日までの、夏の九日間、わたくしは十四人の寮生たちと共に、信州上高地で樂しいテント生活を送りました。この一篇は、當時の樂しかつた思ひ出を、私の貧しい記憶や、寮生たちのおぼつかない記錄に辿りながら書きつゞつたものであります。

七月二十日前後は恰度第一學期末の試驗で、寮生達は誰も彼も一心に勉強しなければなりませんでしたので、準備の大部分は、殆んど一人の寮生の手で整へられました。恰度その年大學へはいつたばかりでその寮生は比較的餘裕があつたのです。

テントは前から々寮生たちの間に、山岳旅行が試みられてゐりましたので、二つほど揃つて居りました、いづれも、携帶用の小さいもので、八人用、六人用など申しましても、木の根、岩角にどんなにしてゞも一夜の雨露を凌ぐためならいざしらず、尠くとも一週間も滯在して、そこに相當にゆとりのある、快適な生活を樂しみたいといふやうな目的には、もちろん適しませんでしたので新に、自己流の設計で、少し大きいのを註文致しました。

すべてどんな旅行にしましても、その準備は、ぜいたくにも質素にも際限ないでせうが、私どもは、もとより何のぜいたくもできずとも、始めから山岳の間にあつて困苦缺乏に堪へることを學びに行くといふやうな目的でもありませんでしたので、許されるだけは周到に、テント生活の眞味をそこなはない程度には、充分豐富に整へたいと存じました。大略住居と炊事器具と、食料と茶菓と、衛生と雜品に分類し、各々を更に團體携帶品と個人携帶品とに區分し、思ひつく度に書きつけ、機會ある毎に買ひ集めまして、愈々出發が近づいてまゐります頃には、約二貫目近い各人のリュックザックの他に、テント三張と、大きい行李四つ位の大變な荷物が出來上りました。四十名近い寮生の中から十數名の參加者を募るために、草されました左の一文はその折のきもちをすこしは傳へるかと存じます。

「信州松本の西五里の島々から更に島々谷に沿つて登り行くこと四里にして徳本峠の頂上に達する。最初の驚嘆の叫びが先づこゝに於て發せられる。白雲あざやかな穂高の秀麗！　常念の魁偉！更に眼下にひらけた上高地三里の森林とその間を白くうねつてゐる梓川の清流!!

徳本峠の頂から北日本アルプスへ注ぐ最初の一瞥によつて先づ歡呼の第一聲を發した人々は、更に下つて上高地の森林と梓川の清流とをまのあたりするに及んで、自らの抱ける想像のあまりにみすぼらしかつたのに驚くであらう。森林の、微塵も陰鬱な影を帶びないかくも明るく澄みきつた姿と、溪流のかくも美しいゆたかな流れとを誰が豫期しよう。この林の中、この流れのほとりに私たちの三つのテントが張られるのだ。心ゆく夏の數日がそこで送られるのだ。

槍、穂高、燒嶽の山々への足場としての上高地、乃至近くは國立公園の候補地としての上高地はすでにその名を稱へられすぎた。然し私たちは、今それを山への足場と考へやうとはしない。將來の公園とも見ない。私たちはそこへ好奇と冒險とを求めに行くのでもない。私たちの求めるものは、たのしい或はのびのびした或はほんとうの或はいのちにみたち生活であり、そこにとけあふ心である。

それだから上高地滯在の一週日に於いて私たちは一つの山へも登らないかもしれない。山を目的とする人はその點で失望しなければならない。又それだから私たちが生活の根をはるところは清水屋でもなければ五千尺旅館――この二軒の旅舍が上高地に於ける家の全部であると言つてさしつかへない――でもなく、直接大地の上であり、私たちの食ふものも私たち自身によつて炊かれる食物である。たゞこれらの旅舍は、私たちの食料の供給所、不測の場合の收容所特に、その快適な温泉の提供所であれば足りる。梓川の水は浴みするには、またあまりに冷たいのを恐れる。四里の上に於いてはそれらの水はまだ雪の姿で横たはつてゐるのだから。

私たちは行く前に先づ一度醫師の診察を受けよう。そして、寒さに對して充分な用意を怠るまい。更に萬一を慮つて完備した小藥局を携へて行く。そしたらあとは思ひきつてのびのびしてあすこの土地に落ちつくことだ。小さい、心配を消すための細かい用心だ。食物は、あの土地の誇らかさを冒瀆しない程度に於いて勿論山海の珍味をそろへて行かう。

はじめ、上高地が國有林であることについて或秒の危惧を抱いて居たが、五六日前松本小林區署から、返事の通告がきてその方も大丈夫だと言へることになつた。

あゝあと十日！　そして上高地へ!!　しかもこの十日には試驗が横たはつてゐる。試驗と上高地！　何といふ對稱だらう。然し私たちは、今こゝで徒らに試驗の無意味な愚痴を憤るのを止めよう、また、成績表の前にかくも無自覺に自個を殺しつゝある自分自らの卑屈を慨くことも止めよう。思へば、今にしては試驗も、私たちの緊張した心から湧く努力によつて立派にしとげるべき嬉しいつとめではないか。

あゝ、あと十日!!　そして上高地へ!!　盡きない欲求の世界がそこにひらけやうとしてゐる。

徳本峠

出發の一夜は信州松本驛前の飯田屋に泊りました。明の七月二十三日は愈々私共が徳本峠を越える日でした。登山の計畫が出來てから三月の間、折がある毎に目白坂や、むねつき坂を登つて鍛へあげた、おぼつかない私の脚力が、今日果して、日本アルプスの中樞へ入る第一の關門、徳本峠七千尺の試練に堪へるかどうか大きな疑問の日でした。それが人一倍重いからだを、數年來の不健康で人一倍弱い足に支へて上り四里、下り二里

を一寸きざみに、辿つて參りまして、とにもかくにも、夕方の六時半、約十時間半を費して上高地に着くことが出來ました。今寮生の○○○○○○○記錄の中から左の一節を借りてその折の私たちの登山ぶりを思ひかへしてみます。

◇

四時起床、心配して居た强力も都合よく揃つて、荷物も全部今日中に峠を越すことになつたので一同勇躍して出發の支度にとりかゝる。空は快晴ではないがところ〴〵青空も見える。

六時出發、すぐ島々の町をはづれて島々谷に沿ふトロッコみちにかゝると、十五人の一列が、一疋のむかでの樣にぞろぞろ匍ひ出した。中には、もう捕蟲網をひらめかして蝶々の影さへちらついたら、百足蟲の胴體からぬき出やうとしてゐる反逆者の關節もあれば、手あたり次第に海軍ナイフを揮つて道端の草を薙ぎ倒して行く亂暴な關節もある。或者は背負ひすぎた重荷をぢつと口唇に噛みこらへながら、最初から勞力の經濟をはかつて默々として歩を運んでゐるかと思へば、又或者はあと先きかまはずはじめから大はしやぎで、人より先に驅けだしては橋があつたと報告にもどり、わざと後れては、莓があつたと口をもぐつかせてゐる。十分とたゝないうちに、亂暴組の一人、秀衞さんは早速手を切つて衞生隊の御厄介になり、且ウイスキーで忽ち元氣を恢復する。

草木はまだ朝露にしつとりぬれてゐて、一足毎にこぼれ落ちる。土も程よくしめつてゐて素足でふむにも快ささうだ。なるほど時折叢影や道の傍を走る小川の淵に黄色く熟れたいちごの實を發見する。だまつて一つ口に投げ入れたのちに公表するとすぐさま三四人の活躍組がとびこんできて忽ち食べつくしてしまふ。島々谷は道の左に或は右に始終さうさうの響を立てゝゐて、山々の曉の夢を執拗にゆりさまさうとしてゐる。朝の雲が動いてゐるのであらう。すぐ川向ひの山の頂きが、又すぐに行く手の遠い山々の頂きが朝日に照り又かげりして美しい。時折一本二本照らし出される白樺の白い幹が清々しい。

程よい傾斜の道がいつ迄もつきない。百足蟲もいつのまにかしどろもどろで、三々五々に歩いてゐる。僕と一ちやんとが、母さん（少年寮では奥宮氏のことをお母さんと云つてゐる）を扶けながらゆつくり〳〵登つて行く。生れてはじめての草鞋脚絆に身をかためた母さんが、案外元氣に歩いて行かれる。ゆうべからまた少し痛むといふ膝のリウマチスも相變らず痛いとは言ひながらとにかく歩みをつゞける。なあに大丈夫だらうとは思ひながらも五十に間のない母さんのことである。果して大丈夫かしらとすぐ心配になる。はじめ戯談のやうに言ひ出した上高地行きのことが、だん〳〵本氣になり出して以來の心配だ。萬一を慮つて注射器も用意して來た。いざと言へば嶽のどこへでもテントを張らうとの決心もしてゐる。でもまさかそんなことにもならないで濟んでくれるだらう。山又山の行手を望むと何やら氣が急いで來る。そこで『母さんもつとゆつくり行きませう』とわざと歩をゆるめてみると、『なあに大丈夫』と母さんの聲は元氣だ。『大丈夫、大丈夫』と心に叫

びながら考へはまたも行く先のことに落ちる。製材所までだつてまだ容易でない。それから駐留へたどりついて、漸くほんとうの登りにかゝるのだ。すぐ再た心細くもなる。散々はしやぎちらしてゐる連中も時々心配になるとみえて、『母さん、こんなきれいな花』と慰めに來たり、『母さん、もうすぐ流れがありますから、あすこで休みませう』と勵ましに來たりしながらそつと母さんの顔色をのぞいて行く。かくてしどろもどろの百足蟲は伸びたり縮んだりしながら、全體としては母さんの歩みにつれて進行して行つた。

やがて小林區署の小屋のところで、路は、島々谷の南谷へ折れこむ。川は更に急に兩岸から迫つて來て、南谷は、だんだんと深い谷底におちこみ、時々生ひ繁る木々の間から白い泡をのぞかせるだけだ。或時はわづかに岩を噛む流れの音だけをひゞかしてゐる。道は始終その左岸に沿つて、相變らずゆるやかに上つてゆく。明け方のどつちつかずの天氣はいつのまにかすつかりつむじを曲げてしまつて、兩わきの山からせばめられた細長い空をのぞくと、一面の密雲がこめてゐる、白い霧が山肌に漂ふ。時折一脈の冷氣がさつと渡つて、皆の襟を冷す。

忽ちあたりがガラツとひらけて、くだけた河原の礫が展開する。ゴロゴロ石の間に所々柳の木立が立つてゐたりする。一同先づ一と休みと思ふ間もなくポツリポツリとやつて來た。それと、めいめいリユツクサツクのポケツトを探り合つて、茣蓙の上から更に油紙をかぶつた。

製材所はすぐだつた。河原に材木が山の様に積んである。トロツコはこゝに到つてつきる。樵夫の小屋が、雨にけぶる楓の影に、谷川に臨んで、實にもふさわしい。こゝで一大難關に突きあたつた。先着の報告によるといつもの道は山崩れとかで危いから、こゝですぐ谷川を渡つて右岸を暫く進むのだといふ。その橋が大問題である。島々谷の冷水量が河原の一部に幅三間たらずの間にせばめられて、そこを恐しい勢でたぎり立つてゐる。思ひきつて大い丸太が無雜作にその上に渡してある。小雨に白光る新しい木の肌が、いかにもすべり心地よささうに横臥してゐる。之には一同思はず片唾を飲んだ。先づ四五人の氣早者が、恐る〳〵渡り終つてから、大丈夫と叫んでゐる。氣の小さい連中は、どうにか母さんを渡してからと、その前には渡る氣もしないらしい。僕は忽ち快然として叫んだ。『僕が先に立つて手を引から。一ちやん君は後から扶けてくれ。母さんしつかり！なあに大丈夫です』そこで思ひも設けなかつたところで思ひも設けなかつた一大冒險がはじまつた。ふだん散歩の道に一尺の幅があれば一町でも二町でも遠まはりしてゐた母さんが、激流に架せられた丸木橋を渡るのである。之を前から手をひくものは、強力にも劣らない最高な荷物を背にした僕であり、後から支へるものは俊ちやんである。氣早の一組と氣弱の一組とが、兩岸から手に汗握る間にどこまでも茶目氣のぬけない二三人がカチリカチリとシヤツターを切つたか、寫し損ひがなかつたらさぞかし珍しい光景を現出してくれるだらう。萬歲！　萬歲!!　渡つて居た氣弱の連中もどやどや渡つて來て『母さ

んえらい、えらい』とほめそやす。ほめそやされながら母さんは、わずかに額を汗ばませながら、さすがに滿足さうにニコニコして居られる。

十一時半踏留澤。此の間、行程三里半。費した時間五時間半。途中六七回休んだが豫定より少し早い。出された澁茶にしみじみと温いものゝ有難さを冷い胃袋に感じた。先づゆつくり一休みといふので、一同肩の荷をおろし、草鞋をかへたり、脚絆をしめなほしたりする。

三十分の休憩に一同元氣を新たにして、最後の急峻を征めにかゝる。道は登つては折れ、登つては折れして、急な傾斜をゆるやかな登りで幾度にも切りくずして行かうといふ寸法である。それさへ一通りの生ぬるさではやりきれなくなつて、つま先きがぐんぐんもち上つてくる。雨もだんだんつのる。まだ十分とたゝないうちに、母さんは堪らなさうに立ちどまつて呼吸をつかれる。あかくほてる頰を快ささうに雨に打して居られる、一通りの心細さではない。登るに從つて、淡しく整つて來た林の相にも、漸く數を増してきた白樺のなめらかな肌にも、あちこちでしきりに鳴く鶯の聲にも、心をむけるだけの餘裕もないらしい。たゞ全身の力をぢつともちたへることに一生懸命らしい。歩かれるまゝに歩き留まるまゝに休み、辛うじて『これでもあと戻りしてるんではないぞ』と馬鹿なことを怒つてゐる。

『おーい、ゆつくり、ゆつくり』と、變な方角からどなるものがある。聲の方向を見ると木の枝に黑い人間が一人なつてゐる。『寫すんだからゆつくり來い』と叫んでゐる。『やあ、やあ』と皆あつけにとられて言はれるまゝにゆつくり歩いて行くと、どうして皆を一度に撮らうかと、雨の晴れまと、木の茂り工合とをねらつてなかなか苦心したのだと今の妙計をほこつてゐる。

或は、曲つた道の一段上のところから木の間をすかして、『母さん！ 母さん！』と呼びながらうまく母さんの顏に出合ふと、ニッコりしてまたかけ上つて行く者もある。かうしてはじめのうちは、賑やかだつたが、元氣に感じて、どんどん登つて行つてしまふので母さんの身邊はだんだん淋しくなる。今朝以來その激しい響で一同を元氣づけてくれた、島々谷はどこの岩かげに身をひそめたものか昨々水の音を傳へて來るだけだ。柄にない重荷がすこし身に應へ出して、すこし息のはづむ僕と、疲れぎみの一ちやんと、殊勝氣に藥品を抱へた俊ちやんとが、何や彼やと、なだめたり、勵ましたりしながら半町、四半町ときぎれに登つて行くおぼつかなさである。心配して待ち合してゐてくれる英坊も一寸と運ばない母さんの足まどろかしさに、堪へきれなくて『母さんチョコレートをあげませう』などゝごまかして栗鼠のやうに逃げて行く。

深い林は、人の精神を稀薄にする靈氣をもつてゐる。雨と冷氣とが加つて、一層人の魂を冷す。何かしらぼーつと遠くなる心の中をヒラリヒラリと不安な疑惑がかすめ去る。とりとめもなくオロオロする。歩いてゐても休んでゐても、はつきり意識しない。四人とも只一心に自分の心の一點をみつめながら、エーテルのやうにゆらぎ出さうとする自分の

魂を辛うじてひきとめながら、際限ないものに面しては破れ出さずにゐられない弱い人間の心を辛うじて守りながら、何かしら一心に念じてゐる。一片の微塵によつてグサツと全部固結して了ひさうな過飽和のやうな情態であつた。たとひ一里の路でも、それを一寸づゝに刻んで行くとしたら無限にも等しい

それからあとの半里は十里よりも長かつたことは書かない、いや書けない。とにかく無事に頂上に登りついたことを結論して、あつさりと窮迫しつゞけた心を絶大の歓喜へ開放しやう。

◇

私はこゝでこの記述者の書きおとしてゐる大切なことを追加さして頂きます。それは私がどうやら、かうやら徳本峠の頂へ辿りつくことができましたのは、療生堂の心をこめた應援によるのはもちろんですが、も一つは、私がふだんから用ゐつけてをります寶丹の力です。實際、私は麓から頂上までの一里餘りの間に、何十遍寶丹を口にしたか知れません。も一つはこゝで散々にみくびられて居ります私の弱い足が、更に弱い私の心臓をたすける安全辨になつてゐるといふ事實でございます。私の足の強さがもすこし普通でしたら私の心臓はその無理に堪えかねて或はカンフル注射の力をかりるやうなことになつて居たでせう。

上高地の生活

―一同の記録から―

■テント

九時過ぎ(二十四日)五千尺旅館の主人丸山氏の案内でテントを張る場所を探しにかゝる。すぐ河童橋の稍々上手、小梓林の奥に秘められた絶好な宿營地が見出された。あたりは一面美しい草原で、そこをほどよく木立が限つてゐる。一帶がすぐ前を流れてゐる梓川の水面から一間ほど崖をなして高められてゐて、對岸の白樺の林の上には言ふまでもなく穂高の諸峯が聳え立つてゐる。稍下手を望めばこれはまた崩落の山肌を露骨に露はした焼岳が二條三條ゆるやかに白い煙を噴いてゐるのが滋さんの望遠鏡をせがむまでもなく手にとるやうに見える。その先は、白骨温泉へ通ずる峠であらう。かすかにひらけてゐるかと思ふと忽ちそこに霞澤六百の山々が連つて、テントの後まで來てゐる。それが徳本峠に到り更に蝶岳から常念へまで走つてゐるだらうことは地圖で知られる。

晝食後早速テントを張りにかゝる。先づ片側に萌芽の印を縫ひつけた新調のテントが、ピッチリと快く張られた、それと入口を向ひあひに、八角テントも、平テントも、各々つゝましやかに張られた。一番心配してゐた床は五千尺旅館の好意で、角材と板とを充分に貸してもらつて、かなり衛生的にすることができたのは非常な幸福であつた。その上に莫蓙をしきつめ、更に、毛布をしいて、ほんたうにすみ心地よささうな三つの巣ができた。第一の巣には、母さん以下六人。第二の八角には俊ちやん以下三人、第三には、喜一さん以下三人ねることになる。それから河岸に流し場をつくつて、そこへ段々をつけたりかまどを三つつくつたり、河原で薪を集めたり、最後に最も奇抜なのは一叢の木立から鶯どもを追ひ拂つて、それはすてきな便所

をつくつたりして、みんな手分けしてかなり働いたがをそくなつて、八時頃漸く夕食にありついた。夜は點される蠟燭の光で、林の間に三つのテントが、ほの明くたゞよつて幻の國のやうだ。一としきり咲ひさゞめきの聲が洩れ、やがて、となり、となりの巣を訪れ合つてゐた小鳥たちは銘々のねぐらにかへると、三つの巣は一時に「おやすみ」「おやすみ」を叫び合つた。あたりには急に底知れぬ靜けさがこめる。その夜は時々雨がパラパラとテントに音して、トテツもない寒い晩であつた。

■炊事係

炊事の方は一人でもひきうけると言つてゐた英夫さんが、どうしたわけかやつて來なかつたので、大恐惶。しらずしらず僕が代りにひきうけた形になつた。

山では何にでも舌鼓が打てる。料理の腕と言つては、ライスカレーだけにしか自信がなかつた僕も、御馳走の點で皆を失望させることはないとはじめから多寡を括つた。先づ最初の晩餐に早速ライスカレーに腕を揮つて、忽ち非常な好評を博して以來、千變萬化の珍料理は凡そ今年の上高地での最高の贅を盡したものであつた。それほど、僕たちの食料は、品種に於いて、質量に於いて豐富に用意されてあつた。更に、茶菓係がコヽアやコーヒーに妙腕を揮つてその間を調和してくれる。アルミの釜二つのご飯とせとびきの大鍋にいつぱいのお汁はいつも、底までからになる。そのまゝ、ドブント流れにつけて、ゴシゴシ河の砂でこすればあとは次の食事まで世話はない。食器は勿論銘々思ひ思ひの場所へ下りて行つて思ひ思ひの手附で洗ふ。その洗ひ方のあやしさは言ふまでもないことながら、上と下とで何やらふざけ合つて洗つてるうちに、忽ち、茶碗やお皿を流れに攫はれて、きちきちにしかもつて來なかつた食器が一つ一つ減つて行くには狼狽した。とにかく炊事係は、成功した。但し忙しさにはつくづく閉口して、ふだん何の苦もなく裝つてもらつてゐる身をしみじみ嘆じた。殘念だつたのは、もつて來た大部分のがどうしたのかすつかり黴びてしまつて、いくら梓川の清流につけてみても遂に口にすることができなかつたことゝ、も一つは釣好連のはじめの傲語にも似ず、岩魚の漁業が振はないで、一日平均二匹半といふやうな成績で、一夜、五千尺からたくさんのフライを惠まれた他には、この愛すべき河魚に飽滿することができなかつたことである。

■海拔五千尺の寒さ

夜の寒さには皆泣いた。こんどの計畫で、あれほど顧慮しながらやつぱり一番ぬけてゐたのは防寒であつた。はじめの晩は、殊にひどかつた。何でもこの夏始めての寒さだつたさうだ。五千尺からふとんを借りて來なくちやとてもやりきれないなどゝ泣き言を言ふ者もある。併し次の晩からは少し凌ぎよくなつて、とうとうそのまゝ、風邪をひくものもなく一週間も夜を明した。たしかに四十度以下である。

■いちご

五千尺の前で河童橋を渡らずにその儘梓川に沿つて下つて行くと、清水屋の對岸霧澤の邊にひろがつてゐる、ひろびろとした原に出る。こつちへはめつたに人も來ないと見えて路らしい路もない、どういふわけか木らしい木もなく、所々やせた白樺がひよろ〱してゐるだけで、燒岳を眺めるには之ほど好いところは無ささうに思はれる。

燒岳の後に夕の雲が紅く〱映えて美しい夕方であつた。皆ではじめて、こつちへ散步に來た。そしてあたり一面野いちごで充ちてゐるのを發見した。それが繪本でむさぼり食べたやうないちでなくつて、粒の小さいあかい可愛らしい苺だ。みんなでよろこんで摘んでは口にした。

■採集

朝霧にけぶつてゐたのが急に晴れた。朝食後網をもつて三人で蝶々を追ひまはす。樹々の幹と葉と、草と花と、蝶々とはちと虻とが一度に輝き出し光り出しひらめき出し、ひるがへり出し、舞ひ出し、唸り出し、何だか億千の光の兒が、歡呼し、動搖し、舞踏しながら林をかけめぐり、かけめぐつてるやうだ。めまぐるしい。

探撿隊の氣になつてどこまでも林の奥へつきすゝんで行つたら思はず一條の細流に出合つた。ジャブ〱渡つて、なほもすゝんでそこが、梓川の中にある大きな洲であることを發見した。今日の大發見であるたくさんの獲物があつた。

■星

同じ星の世界が、下界での眺めとは何とちがつてるだらう。こゝと星の世界とをへだてゝゐるものはあれば眞空だけだ。何といふ光だらう。形容できない。

夜テントをぬけ出して眺めいつたあの星の光は忘れられない。

■ほとゝぎすと鶯

朝起きぬけに林の露をふむ。鶯の聲を聞く。

夕がた宵闇に浮ぶ草花をわけて散步する。あちこちでしきりにほとゝぎすの聲がひらめく。

ほとゝぎすと鶯の聲、これが上高地での鳥の聲の殆ど全部であるかもしれない。何と充分な全部であらう。

■大正池

朝遲かつたので晝飯のかはりに志ることをつくり、その時係を定める。一週間分の燒木を集める。

それから俊ちやんが大正池にプランクトンネットを張りに行くとのことで皆も行く。母さん一人留守。

此の池は大正五年燒岳噴火の際熔岩が流れて來て、梓川の流水を一時せき止めてできたものだとか、池の中に枯れた白樺や、落葉松が林立してゐて、その間から燒の噴煙がすぐそこにある。フイルムを一本半もつて行つたが、不足して、多くの絶景に恨を呑む。

一ちやんは、繪を描く。

舩を出して愉快に漕ぎまはる。少し奥へすすんで行くと梓川の瀬の音がゴーゴー聞え

て來て恐しい。この池は梓川と續いてゐるらしい。

■宮川池

九時頃から宮川池に行く。俊ちゃんはプランクトンネットを持つて、僕等は寫眞器と捕蟲網をもつて。牧場から左へ曲つて梓川のあやふい柴橋をゆらゆら渡つて、小森を越えて、割合に道が遠い。

池は豫想したほどもなく、御庭式で、水も少くみすぼらしい。人工的で此の地の景色には似つかない。寫眞撮組は悲嘆するに反して採集組は、大よろこびだ。大一文字！ 大一文字など〻追かけまはしてゐる。

午後、高山植物撮影、野苺食ひに行く。

■ハンモック

一つのハンモックはすぐ川のふちに吊つてあります。少し搖つてる時に糸が切れでもしたら、好い氣もちで乘つてゐる人はジャブンと川の中へ落つこちねばなりせん。然し丈夫な細引でしつかり結へてありますから切れるやうなことはありません。

お天氣の好い日にこのハンモックにころがつて、うつ〻りと青空を眺める快さは何とも言はれません。御空と言つても、きれいに茂つた白樺の葉のすきまからチラチラ見えてゐるのです。それですからもちろん、ねてゐる私の上にも、下の草原の上にも葉のすきまを洩れてくる太陽の光が快い風に木の葉が搖れる度にかあいらしい舞踏をしてゐるのです。殊にそれがすぐ傍のテントの白地の上では、いろいろの大きさの明るい玉になつて重なり合つたり離れ合つたりして、紫色の影の上をそれは樂しさうに跳ね廻つてゐるのです。

また頭を川上の方に置いて横になると、焼岳のゆるやかな煙の色が、ひとりでに見えて居ます。向ふ岸の白樺の林の眼もさめるやうな緑の上に、ゆつたり山肌をさらして白い煙を噴いてゐる焼岳の姿は、見るともなく見とれてゐる私をやがて快い夢の國へ誘つてくれます。

かうして夢ともなく、うつ〻ともつかないたゞ快い微笑の世界へさまよひ入ります。それはゆるやかな、さうかと云ふとめまぐるしいほど迅い一種の摑みやうのない迅さでめぐつてゐる渦の世界です。それにつれて、すべてのそこに芽ぐむ小さい生命たちが踏つてゐるのです。それらの〃命たちのよろこびのときめきは、一つのコーラスにかたまつて、渦の世界をまた音樂の世界にもしてゐるのです。その振動のないコーラスにつれてなつかしく匂つて來る堪らな 香しさは果してどこからたゞよつて來るのかそれは私には見當がつきません。

もう一つの吊床はすこし奧の小さい茂みのかげに吊られて居ります。こゝへはよく勉強ずきな誰彼が本を抱へてころがりに行きます。今日二三人でこの吊床へ母さんをのつけてあげやうと相談したのです。吊つてゐるどの糸もこんなにひつぱつても大丈夫切れないことをたしかめた後にかなり苦心して母さんを上にのつけてあげました。然し母さんはどこまでも不安さうで、どんなにしつかり吊してあつても下に支へのないもの〻上に安心して居

られる理窟があらうかとも思はれてるらしく、皆で吊床から手を離すとすぐ『こわい、こわい』と言はれるのです。かうして私たちのせつかく親切な企ても成功しませんでした。

■ある日

午前中は各自の趣味に應じて思ひ思ひの行動をとる。

晝食後お風呂に招ばれて皆で五千尺へ行く。かへりに羊羹を三十本買ふ。

夕食後、俊、三、隆、喜、國、一、立で穂高の登り口を探險に出かける。三、立は途中からぐれて釣をはじめ、一は寫生、喜は讀書、結局探險はお流れになつて意氣地なくも例の原へ苺をたべに行く。

かへりに清水屋に立ちよつて温泉につかり好い氣もちになる。

■鮇つり

今日もひるから一人で鮇つりに出かけた。激流に毛針を流す本職ぶつた釣り方はだめだとあきらめて、今日は少し上つて行つて岸の淀みでいつも鮇が群れてゐるところへ眞上から糸を垂した。大きいのがうよ〳〵してゐて胸がドキ〳〵する。然しなか〳〵ひつかゝらない。夕方までかゝつて五匹釣つた。テントの前の流れに、石でかこつたいけすをつくつておよがした。いつのまにか一匹逃げてしまつたからあとのも、いけすに口をあけて自由にしてやつた。

■花　火

いよいよ今晩きりだといふので夕方暗くなると皆で河原へ渡つてありつたけの花火をあげた。電氣花火を釣竿の糸に吊してふりまはした。眩ゆい白光が深山の暗にスーッと尾をひいてやがて消えて行く。その消えぎわが何となく淋しい。それでも皆で夢中で拍手してよろこんだ。明日テントをたゝむのだと思ふとさすがに殘り惜しいやうな氣がして、ひとりでに皆はしやぎたい氣分になつたのだ。それからテントにありたけの蠟燭を點けて唱歌を歌つたり、遊んだりして夜をふかした。

■かへり支度

午後から、テントをたゝむやら、下駄の材木をかへすやら、不要のものを燒くやら、各自の荷物を整頓するやら大騷ぎをした。四時頃五千尺の大廣間に落ち着く。五千尺で大歡迎された。夜寢る前に皆でまるくなつて所感を語り合つた。さすがに明日去るとなると名殘り惜しい感じがこみあげて來る。

………………

以上は記録係の記録、當時の日記や消息又は後で思ひ出して書きとめて置きましたものゝ中から斷片的に抽き出したものであります。もとより十日足らずの日數で、多くはその年始めて參りました者のみですからその間の印象も偏つて居りまして、あの盡きない趣のある高地の全い姿を遺憾なく髣髴せしめることはできませんでせうが、私共のテント生活がどんなに豐富な趣味と、清新な樂しみに充ちて居りましたかその一端は傳へて居るかと存じます。

始めの二三日はさすがに私も疲れまして動くさへ苦痛に感じられましたが、あの清らかな空氣と美しい眺めとはすぐにそれを癒してくれました。まことに自然は深く入りこめば入りこむだけ深甚な味を感じさせます。一むらの木立、一本の草すべて測り難い趣きを具へて居りました。雨にも、霧にも、青空にも、又、朝にも、夕にも、それぞれの變化に應じて、それぞれの變つた様を見せてくれました。それが何れも、何となつかしく　よろこばしく、しとやかな眺めでしたでせう。

ほんとうに、日本アルプスの諸峯にかこまれた海拔五千尺の高原にひらけた方三里の大森林、その間を貫く梓川の溪谷など〻聞かされましたら、蔓なほ闇い陰鬱な森林と見るからもの凄い激流とを想像しがちなのは、私ばかりではございませんでせう。それだのに何と明るく澄んだ林の相と何と清らかにそしておだやかな河の流れでしたでせう。まことに大洋の狂瀾、山岳の峻烈、如何なる偉容をも整へることのできる自然もこゝ一高地ではその尊い温容を示すのに苦心してるかと思はれました。

更に、春、雪どけについで樹々の芽の萌え初める頃の美しさは如何ばかりでせう。又、秋、白樺の黄色く紅葉する頃の麗しさは如何ばかりでせう。

たゞたゞ皆様にこの仙郷を訪れられんことをおすゝめするより他ありません。私の様な者でも參れましたなどと申しましてはをかしく聞えますが、現に私どもが滞在して居りました時にも何人も御婦人の方も見られましたし、幾組もの女學生の團體が或は徳本峠を或は焼岳峠を越えて來られたことを聞きました。

テントも私どもの他に幾つも見うけました。河童橋の傍に、神戸高商の方々とやら、まだ他の一二の團體が何れも二三日滞在せられた様に記憶致します。大正池のほとりには慶應の方々が露營せられた由も承りました。殊に私共のテントのすぐかたわらに、私共が參ります以前から、引きあげましたあとまでずつと村井誠一氏（村井弦齋氏息）がお一人でテントを張られて、其間は、五千尺に御滞在の姉君が炊事やその他をお手傳に來て居られましたのはたいへん床しく感ぜられました。（以上）

哲學講座（第2回）

紀平正

直毘神

總て神話は素朴的民族の宗教であり哲學であり、藝術であり乃至科學である、從て國民が如何なる神話を有せしかは、如何なる國民性を有つて居たかを知るに重要なる資料である。（其の何故に然るかはしばらく預つて置く）。さて此の眼で以て、我が古事記の神代記に顯はれた所のものを見るとき、我等は其の偉大なるものを我等の祖先が有つてゐたことに驚かされざるを得ない。然し今一々其事を玆に論じて居るわけには往かぬが、特に哲學的に考へるといふ事に關係して、見遁してならない、而て他の國民には類例のない一として、玆に直毘神の事を述べなくてはならぬ。即ち直毘神とは、思ひ直し見直すといふ、思惟の働きを神としたものであつて、此れが即ち哲學的に考へるといふ事に外ならない。而て又他の諸神は悉く自然的（無意識的）に生れられたのであるが、特に此の神のみは、伊邪那岐神が意識的に生ませられた、唯一の神であることに注意することが肝要である。

古事記によると、其の出生の順序はかうである。

初め伊邪那岐、伊邪那美の二神が天沼矛を以て修理固成し玉へるオノコロ島に天降りて、國土を生成玉ふ時に、最初には失敗せられた。其の失策の理由をトうて、女先づ唱へたるが故にとせられた、即ち此の場合、既に男唱婦順といふ大な

る道德的の觀念があつた樣にも思はれるが、これは今日云ふError and trial (幾度も失敗しては又やつて見ると云ふ方法)に外ならぬと解すべきものであつて、玆には未だ眞の反省的の働き、卽ち批判的の力があつたのではない。批判力、これ人間が人間としての思惟力で、これあるが爲に、人は人以下の禽獸との區別がつく。而て更に此の力は、之を別けて云へば、眞善美(或は聖をも加ふべきか)となるが、未部的に云へば、人の人たる所、人としての望ましき理想そのものである、而て此の理想に向つて働く所に、人の自由といふものが存在する。而て更に此の自由性の爲の故に、人は始めて與へられたる自然界より離れ得るのである。それで斯る批判力は、人にありては之を明德と呼ばれてる、希臘に於てはアポローン神、日本にありては天照大神がそれを表明した神樣であるが之を又物を以て象徵したのが火である、實に人間は火を用ゐることによつて、他の下等動物との區別もつくと云うてよろしい。それで希臘に於ては、チタン族のプロメテイウスが、天上の火を取り來つて人間に其を使用することを敎へた爲に、天神等の怒りを受け、コウカサスの山に永恒に鐵鎖で繫がれ、鷲が絕えず其の身體を苦しめると云ふ神話となつて居る。日本に於ては、伊邪那美の神が火の迦具土神を生まれ、陰部を燒き、其れが爲に病氣になられて、遂に死なれ、黃泉國に趣かる、卽ち玆に生と死とが別たれ、始めて美と醜とが別たれることになる。

そこで伊邪那岐神は女神を慕はれ、黃泉國に行かれて、我と汝とで作りし國未だ完成せざるが故に、再び歸り來りて其の仕事を完成し玉へと談判せられたのであるが、其の屍骸の醜惡なるを視て、大に閉口し、逃げて歸られ、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にて、其の穢を禊はれた、其の時に黃泉國の醜惡なるものより生れました神が八十禍津日神及び大禍津日津、卽ち災害の神である。そこで其の禍を直さんとして(意識的に)なりませる神が、今玆に云ふ所の禮直毘神と大直毘神とである。斯る災害の神が黃泉國の穢れより生れ出し、又それを水にて洗ふ事によりて淸めるといふ樣なこと、卽ち禊祓といふことが、果して日本國民性の何を示すか、又それが甚だ簡單に考へられて居る樣であること、卽ち此の場合直毘神の出生が、何を意味するかに就て、之を說明して居ることは、甚だ事を複雜にするが故に、玆には又之を省く。とにかく美醜といふ樣な對立が、明德(火神の出生)によつて批判せられることになつた。——勿論此の美醜の對立といふ內には、我等から云へば善惡、眞僞の對立をも包むで居る

と見なければならぬ。蓋し希臘人に於ても、美と善と眞とは長く混同せられて居た如くに、國語によしが美、吉、嘉、善、好、芳、可良、淑、佳等に通ずるを以ても之を知るべきである。――而も批判せられて、相互が對立に陷つただけでは、未だ眞の思惟の働きではない、一切の惡なるもの、醜なるもの、僞なるものを、善化し、美化し、眞化する所に、人の人たる大切な働きがある。そこで其の働きとして直毘神が生まれられた、卽ち此神の働きそのものを更に具體化したものが、天照大神である。それで古事記の物語は次の樣になる。

　伊邪那岐尊が禊祓せらるゝ時に、他にも多くの神樣が又生まれられたのであるが、最後に左の御目を洗ひ玉ふ時に日神天照大神、右の御眼を洗ひ玉ふ時に月神月讀命、御鼻を洗ひ玉ふ時に建速須佐之男命が生れられた。岐神は此三種の貴子を得られたで、大に滿足せられて、各統治國を定め、天照大神に高天原、月讀命に夜之食國、須佐之男命に海原を命令せられた。眼は知卽ち明德を表はす。故に其處より日月の兩神が生れ出でたが、鼻は正しく靈肉の中間に位する感覺器官である。從て其處より生れ出された神は、卽ち人間其のもの、否な日本人其のものを表明する、されば須神は勇猛心に滿ち、父神の云ふ事だとて、すなほには聽かぬといふ意地張の、いたづらである。泣く時には、青山をも枯し、河海をも泣き乾すといふ程に徹底的である。然し其の內に一種の晴明心の閃きがある。此の命の勇猛な點のみを取つて、西洋流にかぶれた或る學者が、此は暴風を神化したものであると說明した事があるが、無思考的と云はねばならぬ。須神の此の氣象は、出雲國讓の場合には建御名方神（諏訪明神）に現はれ、近く明治維新の際には、榎本子や、會津桑名の諸士の魂として表はれる所のものである。蓋し須神其れ自ら日本人の代表であると見なければならぬ。從て日本人の母性としては、小供のおいたも無思慮に叱つてはならぬ、直毘の力によりて、思ひ直し見直してやり、よくそれを指導せなくてはならぬ。而てそれは天照大神の御働きによつて表はされて居る。

　須佐之男命のおいたが餘り甚しいので、父神は遂に追放せられた。そこで姉君天照大神に暇を告げんとして、高天原に登らるるに、此の時も亦山川國土を震動せしめられた。そこで天照大神も驚き玉ひて、武裝して其れを迎へられたのであるが、須佐之男命は、我に邪心なし、其の證據として、各自が誓約して子を產んで見ようと云ふ事になつたのであ

る。そこで結局須神の晴明心の勝利を表明する爲にとて、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命が生れられた。而て此の御方が、我皇室の御祖先なのである。從て我が萬世一系の皇統は、卽ち晴明心の勝利其のもの丶表現となる。然るに須佐之男命は勝つた勢に乘じて、又荒びられる(此の氣分は日本人には今も猶ほ所謂御祭り氣分として殘つて居る)。此の場合にも亦無思考な人は、神須命の無道を御怒りになつて、天照大神は天の岩戸に隱れられたと云ふのであるが、神典には誠に正しい御怒りになつたとは決して書いてない。卽ち直ちに直毘靈を働かされて彼惡きにあらずとして自己へ反省せられたのである。此が卽ち岩戸隱れである。そこで神々が相談せられて、岩戸から大神を引き出すのであるが、此際大神として更にもう一層深く反省せしめたものは卽ち「思惟の思惟」かの榊の中央部へつけた御鏡である。而て此の御鏡が、伊勢の神宮に我等が天照大神として齋き祭る所のものである。斯くて天照大神は永恒に靈界の主神でまします、此神を主神とする我等日本人は、其故に反省其のものを以て思惟の生命とせなければならぬ。而て其の働きが直毘神である。而て他面には赫々たる日神は、一切の生靈を產出する原動力としての熱であり、然も其の生產は育成の力としては、溫和なる愛の力である。故に我等は女神として此を描く。卽ち此れが日本人の原動力である理想である。」

之れを西洋に於ける哲學其のもの、乃至哲學といふ語卽ちPhilosophy(正當に譯せば知愛である)の起源に就て考へて見る。古代の希臘がペルシヤの壓迫から逃れ得た時に、俄かに知識が發達し、又知識が要求せられた。其時に我は「知識の所有者」Sophistと名乘つて輩出した多くの學者があつた。而て此等の學者は「人は萬物の尺度なり」といふ大眞理を發見したのであるが、其の「人」を以て個人的我儘なものと取つた。世間に「理屈はどうでも云へる」といふ名言がある。如何にも或る種類の知識(此の知識の事は後に又說明する)は勝手なものとも云へる。勝手な知識を眞理らしく振り廻されては、實にたまつたものでない。世間にはこんな人が多いのであるがソフイストとは卽ち其種類の人々なのであつた。而て此のソフイストを後に詭辯論者と釋する樣になつたのは、我儘勝手な理屈をさも眞理らしく振り廻したからである。此等ソフイストに對抗して立つたのが、卽ち大聖ソークラテス其の人である。

希臘神話に於ける知識の神、卽ち明と速とを以て其の神德とし、豫言と狩獵との神は、アポローン神である。此の神殿

の前には、神徳に似合はしくも、七賢人の一人の格言として「汝自を知れ」の語が彫刻せられてあつたのである。――若し我國の天照大神を實在の人間とするならば、神意を人間に傳へる「かんこ」（神子、巫女）卽ち豫言を職とした人であつたであらうことは明かな證據がある。又我國は既に農業國であつた故に、大神は農業一般の神であるが、希臘では知の神アポローンは狩獵の神である。日本でも或る漁業地では、天照大神が漁業の神である場合がある。何れにしても、知識の神として、我に於ては鏡を御神體となし、希臘では「汝自を知れ」の語を以て御神體とする。――ソークラテースは國敎を信ぜずといふ事を其の罪の一として、死刑に處せられるのであるが、實は非常な敬神家である。只神樣に關して通俗な考へに止まつて居なかつた。それで常にアポローンの神に參謁するのであるが、「汝自を知れ」の神言の前には蕭然として襟を正さなければならぬ。而し自己の何ものたるかを知り居るかと自ら考へた時に、遂に無知なりと自白せざるを得なかつた。自己の何ものたるかを知る、之は一切の知識の極限であつて、何れの方面に於ても、此れを人が人としての大切なるものとせないものはない。禪では之を「見性」と云ふ。卽ち見性卽成佛と見る故に、此を以を公案（禪宗では終局的の問題を公案と云ふ）としたものが非常に多い。ソ氏はともかく自分を無知なりと知つた――我が親鸞は常に自分を一文不通の尼入道と呼び、又愚禿と稱した。――此の自覺からして、既に他の詭辯論者とは自ら相違して行動行爲が取られたので、親鸞にも同樣の場合があつたが、彼の友人の一人は、ソ氏の聖か凡かに就て疑うた。それで其の友人はアポローン神に其の疑問の解決を願ふと、巫女は、ソ氏は天下の大賢人であるとの神勅を下した。友人が此事をソ氏に語ると、ソ氏は始めは中々信じなかつたが、其の虛言でない事を告げられると、自ら大疑問の中に入つた。換言すれば、神に虛言なきが故に、自を無知なりと知れることが大知なる所以を悟らなくてはならなくなつたのである。それで彼はハークユレス的大國難（此は最後に說明する）を以て、此を解決し、人皆自分を知れりと思ひ居ることが間違である。如何にも余は無知なりと云ふ事を知れるだけそれだけ多く人より多くを知つて居る。卽ち大賢人であるわけであると考へた。されば大賢

人である以上は、人を敎化することが自己任務であると云ふので、爾來一切自己の私事を忘れて、特に靑年の敎化に力を盡した。――此の場合多くの逸話が傳へられて居る。内に何の餘財もなくて晏如たる夫の行爲に不滿を抱いて居る妻のクサンチッペは、或時非常にかんしやくを立て、何事にも答へずして思案に耽つて居るソ氏の頭から、桶一杯の水をかぶせた。するとソ氏は莞爾として笑つた、先刻來しきりに雷鳴して居たから、大方大雨が降るであらうと思うて居たが、果してずぶぬれに逢うたと。一事が萬事、ソ氏は卽ち直毘神の化身の樣なものであつたのがある。――而てソ氏の用ゐた方法は、かの有名なる「ソークラーテス的嘲弄」と「産婆術」とである。前者は、美なるもの卽ち善なりと考へて居た希臘人を驚かした程にぶし男であつた天賦を利用して、先づ最初は知らざる間似をなし、相手をして輕蔑心を起さしめて置いて、若干問答の後に、逆襲して相手を無知なりと自覺せしむる迄やつつける方法である。而て斯く相手を苦しめるのはソ氏自ら本當の産婆であつた母から學んだ産婆術であると名づけた。人は皆な眞理を以て居る。然も今や其の眞理を産み出さんとして居るのであるが、つまらない知識を有つて居て、それを本當の知識なりと誤り居るからして、産み出すことを得ないで、却て苦しんで居るのである。それで余は産婆の如く、先づ彼に陣痛を起さしめ、從前の惡知惡覺を蕩盡せしめなくてはならぬ。さうすると、玉の如き眞理といふ赤ん坊が自ら生れ出るといふのが産婆術である。卽ち斯くて生れ出されたものが、西洋に於ける哲學そのものである。玆にも哲學が女性の仕事に關係して居るのが面白い。

總ての點に於て當時の時風と相違して居たソ氏の言動は、衆人からは疑の眼を以て見られた。然も眞理の爲に屈せさる大丈夫心、(卽ち自由心)は衆人をしていまいましいやつと思はしめた。それが爲にソ氏は遂に死刑を宣告せられた。然も將に死せんとする時も、ソ氏の靜平なる態度は少しも平常と變らない。弟子共を集めて、徐に靈魂の不滅を說いて、實に大賢人たるの死を遂げたのである。實に此の死は、當時の人のみならず、やがて歷史のあらん限り、全人類を敎導する無限の力となつた。そこでソ氏の弟子であり友人であつたクセノホンは、斯る大賢人を殺してアゼンス人に寧ろ禍あ

れと迄に激昂して、ソ氏を神の如くに見て、其の一代記を書いた、それがかの有名なる『ソークラテース追憶記』である。而て又ソ氏の人物思考を中心として、それを哲學化したものは即ち其弟子であつたプラトーンである。實に彼の書いた多くの『對話篇』は、丁度佛教に於ける諸經典と同樣な赴を有つて居るもので、世界的思想及び文學の淵源となつて居る。プラトーンの哲學一般に就ては更に後に語る場合があらう。今其の終局的のものを言ふと、實在中の實在は「至善」である。これが宇宙を創造するものであるが、惡なるもの、醜なるものは、始めから非存在であるが、至善の創造の爲めの消極的條件として、至善から存在の力が與へられるによつて、始めて存在性を得るのである。然もそれは積極的存在でないからして、それを純化すること、即ち善化して進む所に、我等の思惟の本性即ち哲學が存立するとの考へである。即ち直毘神の働きそのものを以て、哲學としたのである。而て哲學(上記知を愛するといふ意義)と云ふ名を與へたのは、我等は所謂知識の所有者、即ちソフィヒストではない、彼等は知識を何ものか手段にせんが爲に、之を所有せんとする、然るに我等は眞理を眞理として、之を愛するものなりとしたのである。プラトーンの所謂「愛」の意義に就ては、更に後に「愛の哲學」を説く場合に詳論するであらう、ともかくかくの如くにして哲學とは、玆に知識の純粹化であると云ふ意義が定められた。從て知識を名聞其他何等かの目的の爲にするならば、最早それは哲學ではないと心得べきである。

最後に、斯る純化即ち哲學的に考へることは、努力なしに得られるものでない、それが即ち希臘に於ては、ハークュレスの神話となつて表はされて居るのである。七斗七星の劍頭、織女星とを結ぶ一直線を境として、丁度北極星に對立する場所に、六の星が光つて居る、それをハークュレス星座といふ。神話によると、ハークュレスが人生の行路に就て思索しつゝ步んで行くと、路の二つに分れて居る所へ來た。一方には窈窕たる佳人が盛裝して立つて居て、此の方を御進みなさい、人生の行路は春の如しと云ふた。他の一方には、老憊せる老人が立つて居て、此の路を取れば困難のみなりと云ふた。そこでハークュレスはしばらく考へた末に、我は斷然困難の路を取らんと決心した。此を「ハークュレスの選擇」と

云ふ。そこで運命の神は、「何にを生意氣な」と思ふて、十二の大困難に逢過することを命じたのであるが、ハークュレスは遂に其れを成し遂げた。故に彼は神にせられた、それがハークュレス星座である。卽ち前に云ふた「ハークュレス的困難」とは卽ち之れを云ふ。プラトーンの天才的の力は、よくソークラテースの直毘の力、卽ち反省の反省、思惟の思惟をば彼の對話篇の內にて只此の一句によつて躍如たらしめて居る。孔子は五十にして天命を知るといふて居るが、天命を知るとは、どうせ世の中は金力に限る、或は權力に限るなどと、世の多くの俗人が惡悟りに陷つた樣な、所謂あきらめ主義を云ふのではない。其處に自己の自己たる眞價を實現し、價値の創造をなし、眞の人格としての力を發揮することを意味する。從て直毘神による、思ひ直し、見直すといふ事も、單なるあきらめ主義と解してはならぬ。ハークュレス的困難を經ての價値の創造、人格者としての實現を意味する。哲學は其故に 外面からぼんやり眺めて居る。或は他人の模倣をするといふ樣な、呑氣な仕事ではない。從て讀書三昧ではない 生命を充足せしめんとする無限の努力そのものである。直毘神といふ樣な、哲學其れ自を神話として有する我等日本人に負はされたる仕事は、其故に永恆の努力そのものであると覺悟しなくてはならぬ。此覺悟こそは、日米問題位は何の苦もなく解決し得る所の唯一の力である 而てこれがぐづぐづした理窟を言はぬ、卽ちことあげせぬ國といふ意義であり 隨神業である。（地久節日）

山川菊榮論

女といふ割增を要せぬ評論家

堺利彦

私が今ごろ改めて菊榮氏の論評をするのは寧ろ間が抜けて極りがわるい。それも何か新らしい問題について、或は新らしい同氏の著作についての事ででもあるなら、相當の意味もあると云ふものだが、世間の定評、殊に我々仲間の定評を、幾度目かに繰返すのでは、書く者も讀む者も聊か馬鹿々々しいわけである。然し雜誌の讀者は川の水のようなもので、昨日の水と今日の水とは違つてゐる。同じ舟を同じ岸から同じ瀨に出した處で、其の舟べりの水はいつでも新らしい。私も其の積りで又同じ樣な菊榮評を書いて見る。

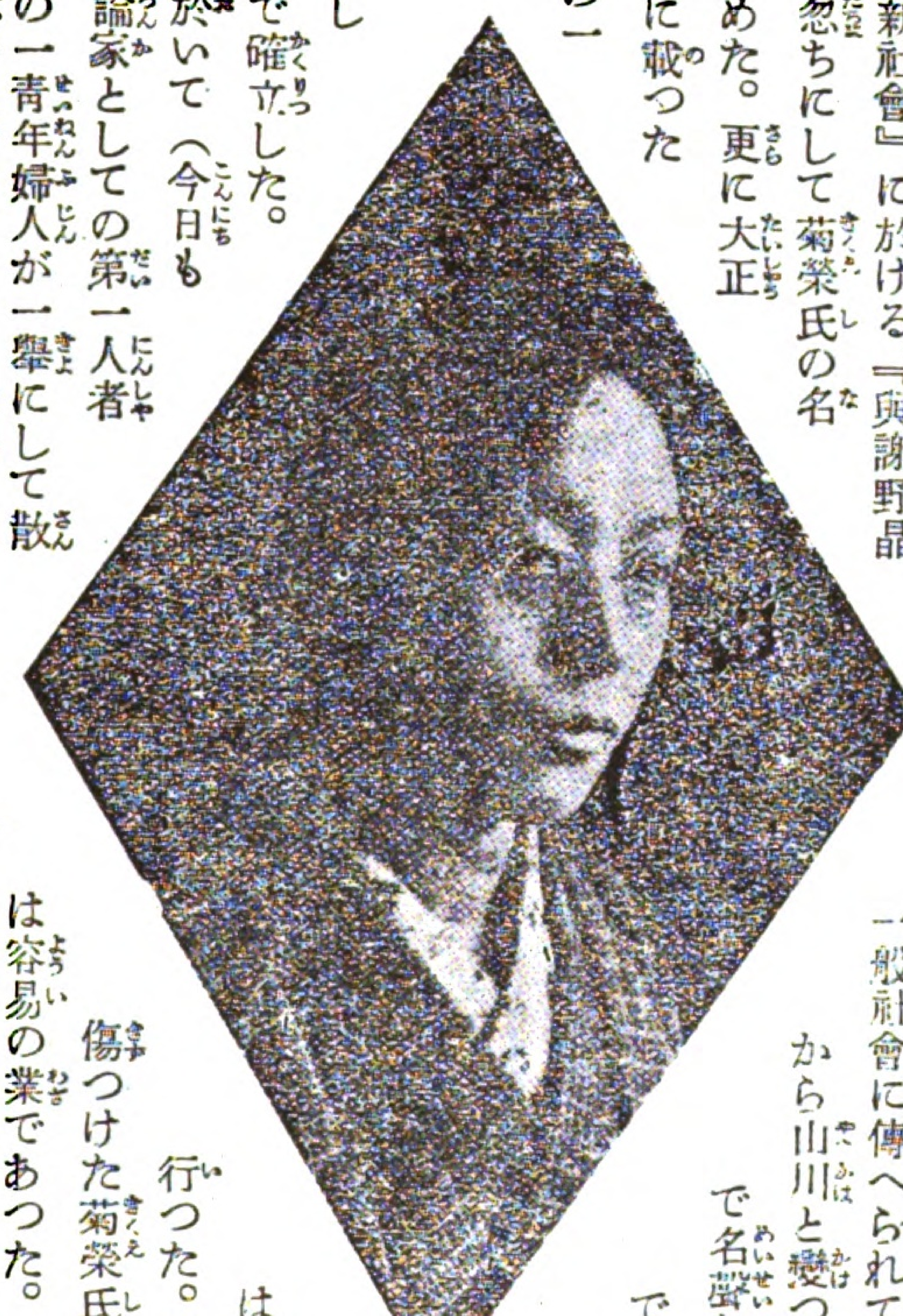
私が初めて菊榮氏の文章を見たのは大正四五年頃の事で、其頃やや賣出しかけてゐた伊藤野枝氏に對し、公娼か何かの問題について菊榮氏が批評を加へたものであつた。それより少し前から、青山菊榮といふ、中々エライ、學問の出來る、若い婦人がゐるといふ話は聞いてゐたが、右の文章で初めて少し其の正體を見屆けたのであつた。然し其の文章では、まだ特別にどうといふほどの才力も現はれて居らず、只だ野枝氏に比べて、社會主義的思想が頗る徹底してゐるのに感心したと云ふに過ぎなかつた。

所が大正五年七月の『新社會』(當時、私が出してゐた雜誌)に、『公私娼問題……青山菊榮』といふ、堂々とした長論

文が載つた。これは野枝氏との論爭を延長して、積極的に獨立の論文にしたと云ふやうなものであつたらうと思ふが、その時、私等は初めて菊榮氏の少なからぬ才力を認識した。然しそれだけではまだ大いに驚くといふ程ではなかつた。

然るに同年九月號の『新社會』に於ける、『與謝野晶子氏に與ふ』の一文は、忽ちにして菊榮氏の名に燦然たる光彩を添へしめた。更に大正六年一月號の『新社會』に載つた『再び與謝野晶子氏に』の一文は、菊榮氏の光彩を又一層燦然たるものにした。社會主義評論家としての菊榮氏の地位はそれで確立した。

與謝野晶子氏は當時に於いて（今日も猶そうであるが）婦人評論家としての第一人者であつた。然るに、無名の一青年婦人が一擧にして散々にそれを論破し、優に凱歌を揚げるだけの實力を示したのだから堪らない。我々はあの齒切れのいゝキビ〳〵した、強い、鋭い、女らしい弱々しさの少しもない、足の踏んばりの飽くまでシツカリした、あの華々しい文章に接した時、それこそ實に『驚異の眼を見張つた』のであつた。我々はその時初めて、女といふ割增なしに評價する事の出來る婦人評論家に出くわしたのであつた。



（菊　榮　女　史）

それから暫くすると、菊榮氏の名聲は早く既に嘖々として一般社會に傳へられてゐた。其の時、氏の苗字が青山から山川と變つて、夫君の均氏と共に、相並んで名聲を馳せたのは、洵に目ざましい事であつた。その前後、與謝野晶子氏以外、思想界に名聲を馳せた婦人は、平塚明子、山田わかの諸君であつたが、菊榮氏は順次にそれらの諸將を擊破して行つた。劈頭に於いて既に最大の名將を傷つけた菊榮氏が、第二流の諸將を征伏するのは容易の業であつた。

斯くて山川菊榮氏は、社會主義を立物とする評論家として、名流婦人間に全く無敵の地歩を占めた。然し菊榮氏は固より婦人ばかりを相手にする婦人評論家ではなかつた。名家大家を以て目せられる多數の紳士が、續々として彼女の槍玉に擧

げられた。私が明かに記憶してゐる一例を擧ぐれば、『象牙の塔』に立てこもつてゐた厨川博士などは、最も重大な負傷を蒙らせられた一人であつた。

『山川均、山川菊榮、主筆』と銘を打つた『社會主義研究』は、久しく我黨の中央本城であつた。彼女は、婦人社會主義者として、多く婦人の立場から社會を評論した。それは勞働者が勞働者の立場から論議するのと同じである。『婦人の立場』『婦人の勝利』『婦人の叛逆』など題する彼女の文集がある。又ベーベルの婦人論、『カーペンタアの戀愛論』などの反譯もある。けれども彼女は決して婦人問題ばかりに限界を限られるような、そんなケチくさい婦人社會主義者ではない。『勞農革命の建設、レーニン著、山川均、山川菊榮、共譯』『勞農露西亞の研究、山川均、山川菊榮、共著』などを見れば分る。最近二三年間、毎年のメーデー毎に、幾千幾萬の勞働者が爭つて讀んでゐるメーデーのパンフレットは、實に『山川菊榮著』である。

こんな事をいつまでも書き並べてゐる必要はない。私は只、これほど優秀な、これほど有力な、これほど光つてゐる婦人社會主義者が、只一人、日本の社會に出現した事に對し、無限の歡喜を感ずるのである。

最後に、菊榮氏に一つの注文を提出する。此の一二年來、或は二三年來、婦人問題（或は戀愛問題）に關する著書が多數に出た。それが殆んど一種の流行のように見えてゐる。私は、菊榮氏が、それらの數著述に對して、片つぱしから鋭利なメスを加へた、一つの新著述を出して貰ひたい。尤も此の流行の間に、菊榮氏のベーベルの婦人論、カアペンタアの戀愛論なども出てゐる。又、菊榮氏の數種の前著は、既に豫かじめ其後の類書を批判し盡してゐる。だから菊榮氏としては、此種の論戰は疾くに片づいてゐるものと考へて居られるだらう。私もその通りに考へてゐる。けれども、片づいた問題が幾度でも新らしそうな顔をして出て來る以上、あやつり人形の引つこぬかれた首が幾度でもスゲかへられて現はれて來る以上、こちらも今一度くらい面倒を見て、其の總ての首を一まとめにして引つこぬき、其の新らしそうな顔の悉く埃だらけ煤だらけである事を明かにしてやるのも、必要だらうかと考へる。だから若し菊榮氏の健康が許すならば、此の際、ぜひ一つ大急ぎでそれをやつて戴きたい。

今のこととその頃のこと

神近市子

震災前迄は一時一等國になつたとか何とか云つて有頂天になつてゐたものゝ、元來日本と云ふ國が地理的に東洋に偏してゐる關係上、先進文明國とは歷史、言語、風俗、習慣、一として共通のものを有してゐない。その爲めに、ともすればそれら先進國の言語に通ずるものが多くの方面で勢力となりがちである。馬鹿〳〵しいことではあるが、凡てが模倣によつて成立つ日本の國情では、これも又止むを得ないことである。

日本と外國語との關係はこの通りである。それでは日本では語學の研究が盛んで、大多數の人が（せめては智識階級だけでも）一箇國位はよく通達してゐるだらうなどと速斷するのは大間違ひである。東洋人中で日本人ほど語學の研究に不熱心な國民はないさうである。

特に婦人の間に語學が發達せぬのは又もどかしい位である。今日自覺したとか何とか云つてゐる婦人が洋服を着てへボ代議士達とホテルで會食する位の虛榮心と勇氣とは持ち合せてゐても、その活動を欲する情熱をチツと持ちこたへて、一二ケ國語を習得し自分の人生觀を確立し了せるほどの意志の力を養つてゐる人が何人あるのであらう。皆が妙に賣名的なことが好きで、演壇に立てば纏りのないことを饒舌つてやぢり倒される位が落である。

この種の婦人が多い現在の日本で、平塚雷鳥氏などは珍しく眞面目な氣持で動いてゐる人である。同じ時代に屬し同じ圈内に住む女性にとつて、平塚氏ほど逢つてゐて氣持のよい透明な感を與へる人は澤山はない。可なり正しい情熱の持主で、洞察力もあり勇氣もある人である。その平塚氏があの不充分な語學を補ふことにどうしても成功されないのである。

そこに行くと山川菊榮氏の勝れた英語力は、非常な強味で

ある。東京で活動してゐる若い婦人の大部分は女子英學塾出の人であるが、その英學塾出身でも讀書力の點では恐らく氏に越す人は多くあるまい。それほど學生時代から英語力では有名な人であつた。

○

山川均氏と結婚して社會的に活動を始めてからの菊榮氏の奮鬪振りは、何と云つても目醒しいものである。私は氏の論說の中に特に氏の發見にかゝる獨創的なものは發見しない。又社會主義者と云ふ見地から見て、菊榮氏の多岐にわたる論說の基本をなしてゐる智識は、決して社會主義的常識以上には出てゐないと信じてゐる。しかしその興味を感ずる範圍が廣く、いかなる種類の解放運動に對しても責任を感じて常に有形無形の援助を惜しまないその情熱、可なり多岐にわたる問題を扱つてそれを氏の一つの信念——廣い意味での社會主義的見解に追導くその明かにして鋭い論斷には敬服の外はない。實に菊榮氏はまだ光明を見ず蒙昧な狀態にある日本の婦人の上に、覺醒の福音を傳へた最初の有力な使徒である。

菊榮氏の論集は、最近五六年の勞作としては量に於いて決して少くはない。今その著書を一瞥して見ると、社會に出られた頃の論文を集めてある『現代生活と婦人』及び『婦人の勝利』等の中に、今日の氏の地位を確立した最も好い論文乃至は研究が幾篇か收められてある。社會に生れやうとする希望を抱いて、氏が眞面目に熱心に餘程緊張した氣持をもつてペンをとられたであらうと云ふことが、一讀して直ちに感じられる。それ以後のものによつても啓發されることは決して少くはないが、一時流行兒と云つた觀があつて盛んに各雜誌に書かれた關係からか、氏の持味である例の尖角がよほど鈍つて來て文章なども無雜な感を與へるものが多くなつて來てゐる。特に昨年あたり出版された『黎明期のロシア』は單なる譯述に止つて、生々とした著者の批判を缺くところに餘程讀者の熱心にハンデキヤツプがつけられてゐる上に、ロシアの共産黨と日本の社會主義者との間のとかく噂を常に耳にする者には、或る種の不安があつて、安心して著者の案内の下に革命ロシアを覗いて見やうと云ふ氣になり切れない。

しかし、從來ともすれば安價な自己告白の小說位に等しい文學的衝動を浪費し、理智的にも歷史的にも自分達の位置を覺つてはゐなかつた若い日本の婦人界に、菊榮氏の出現は一の偉觀である。加ふるに氏も亦可なりプロダリチープで求められゝばどんな群れの雜誌にもその所信を述べて少しも倦まな

いその態度は、これ又尊敬に値する。

○

日本にも近い將來には又必ず更に彈力に富み更に創造力を有する婦人が現はれて、現在の逸散してゐる婦人の精力を集め、その上に立つてこれを組織的に指導して行く明かな理智と、廣い抱擁力の交響樂を私共の爲めに奏してくれるであらうと云ふことは、私は信じて疑はない。しかし日本婦人の覺醒運動の黎明期の有力な先驅者の一人として菊榮氏は必ず數へらるべき人である。

人としての菊榮氏はいかにも嚴つい冷たい人であるやうに感じられてゐる。しかし私の知れる限りでは、氏は自分の味方または自分に親しむ範圍の者に對しては行き屆いた同情と温かい思ひやりとをもつた人である。

凡ての勝れた情熱家達と等しく、氏も極端から極端に走る人である。いつか女學校の憶ひ出話の時、故高木兼寛氏が菊榮氏の女學校に來て日本のキモノの缺點を數へ、『中にも帶は廣帶細帶ともによろしくない。須らく洋服のやうに凡てボタンを用ゐるやうに改良しなくてはいけない』と云つたのを聞くと、氏は學校から歸るや否や着物にも袴にもボタンをとりつけて得意であつたさうである。氏もこの頃は洋服黨の仲間に入つて居られるかどうか私は知らない。けれどづめ〳〵の行燈のやうな着物と袴とを着て濶歩した幼い菊榮氏を想像してゐると、自然に微笑が浮んで來る。直情徑行、信ずるところはこれを行はなくては居られない強い性格がその生活の基調となつてゐる。

たゞ氏には今まで父祖にうけた一種のアリスクトラスジムの遺産が大切にしまつてある。氏の母方の祖父は何とか云ふ幕末明治にかけての漢學の大家であつたと云ふことである。その父君に養はれて氏の母君も聰明な學識ある婦人であつた。地位による又は財産によるアリストクラシズムは氏には緣遠いものであつたかも知れない。しかしこの母君によつて營まれる家庭として（氏の父君はどんな事情からか壯年以後は朝鮮支那等に住んで東京には餘り居られなかつた）一體に氏の生家の空氣は、學問尊重、智識萬能の匂があり、兄弟姉妹日夕に机を並べて書籍に親しんで居られた。（君は江村とか云ふ號で獨文科在學中詩集を出されたことがある。自費出版である上に一向世評にも上らなかつたが、偶々數年前辻潤氏がその詩集を古本屋の棚の間に發見して、非常に珍重して愛讀して居られたことがあつた。そのことがあつてから何時か私も

氏の兄君が勝れた詩人であつたことを信じてゐる。」かうした家庭に生活して、學問又は智識をほこる一種のアリストクラシズムに墮することは決して偶然ではない。

馬場孤蝶氏は、菊榮氏にとつては文壇（又は論壇）の先達である。いつの頃からか氏は菊榮氏その他の一圏の婦人敎導に當つて居られたものである。馬場氏が讀書家で博識であられたことは世間周知のことである。菊榮氏がその馬場氏のことを驚嘆してこんなに話されたことがあつた。

「私は馬場先生を知らなかつたら、どんなに傲慢な人間になつてゐたのか知れないと思ふ。と云ふのは、私が知つてゐる範圍内では私はいつでも誰よりもよく讀んでゐた。私が知つてゐることとで私より年上の男達が知らないことが澤山あつた。すると心が驕つて、ともすると、私は世間の人を馬鹿にしやうとした。そんな時馬場先生のところに行くと、先生は又いつも私がまだ讀んでゐないものを澤山よんでゐて、滔々とそのお話をなさるので（馬場氏が自分がよんだ小說の梗概を傳へられる座談は、講談以上と云ふ評があつて一時一部の人々の間に人氣があつた）歸途にはまだ〱自分は充分に讀んでゐないと反省させられた。

菊榮氏の述懷は、勝氣で讀書生をもつて任じて居られた頃の氏の學生時代の生活が表れてゐて興味を引く、しかし私に云はせれば智識偏重の氏はアリストクラシズムはまだ氏が安心して居られるほどには脫けてはゐない。それは氏が自分の論敵に對して取つて居られる態度と、氏が文學少女として出立し嘗ては小說でも書かうかと云ふ意氣をもつてゐて文藝にも相當の理解をもち乍ら、論文以外の文學を强ひて無視しやうと云ふ態度をとられるに見ても明かである。

○

この菊榮氏が山川氏を配偶として選ばれたことは、幸福であつた。山川氏夫妻の清新な家庭生活は、主義者の中の評判である。固より高潔な心情の人であつた菊榮氏は山川氏の人格に觸れた時、始めて生甲斐あることを經驗されたであらう。智識は可なり深く調査研究なども努めてするやうに心がけてゐた人ではあつたが、その人生觀は未だ安定してはゐなかつた。その氏が山川氏の社會主義の根本信條を受け入れられた時、久しい間の學殖と蘊蓄とは一時に爛漫と咲き出でて、日本の婦人界に異數の立派な實を與へたものであつた。

兩氏の結婚について、私にとつて置きの面白いエピソートがある。こゝでそれを御披露して私のこの短い文章を結ぶこ

とにする。

　山川氏が大逆事件後（？）田舍に隱棲して暫時經ち、再度上京して來られた時分（大正五年？）のことである。私共の仲間の一人が、堺利彦氏が均氏と菊榮氏との間を斡旋したらばといふ話を齎して來た。私共にもそれは大變好い考へであるやうに思はれた。そして宮島氏夫妻と私とが發議して、ある日均氏が宮島氏のところに來て居られる時、私が菊榮氏を誘ふて宮島氏のところに行つた。そしてお二人を紹介した。掛値のない私共の氣持は、紹介をしてさへ置けばどちらかより多く相手に興味を感じた人が積極的に出られるであらうからといふ、私共の方では非難のない自然な事をしたつもりでゐた。

　すると秘密にして置かるべきその陰謀が、いつの間にか二人のお耳に入つたものらしい。菊榮氏が他人の生活に干渉を試みたと云つて、カン／＼に憤慨して居られると云ふ話が傳はつた。私共は困つて了つた。お互に他人の自由獨立と云ふことには最も注意を拂ふ筈である仲間の間で、その根本原理を無視して他人の運命に暗示を與へるやうなことをしたとを私共は非常に恥しく考へた。そして菊榮氏に逢つた時、重々過失を認めて詫まりに詫まり拔いた。宮島氏もさうであつた。

　ところが暫時すると、妙な噂が傳はり始めた。一人の仲間が來ての話に、

『昨日賣文社に行つて見ると、あそこのボールドに、

　　新見附九段の道は近けれど
　　　まだ逢ひも見ず鐵と金縁

と書いてあるのです。何ですかと聞くと、皆がクス／＼笑つてばかりゐるのです。あとでＡ――に聞いたら、何でもこの頃山川君が菊榮さんと時々逢つてゐる風で、文通をしたり時には菊榮さんが電話をかけてよこしたりすると云ふのです。おまけに二三日前山川君が菊榮さんの家がある新見附とは目と鼻ほどに近い九段の下宿屋に越したもので賣文社の連中が默つてゐずに、高畠（素之）君が一昨日ボールドに何か當てこすりの歌を書いて置いたさうです。すると昨日山川君が朝例の通りやつて來るとそれだもので、一句返歌をしたと云ふ譯です。山川君は金縁をかけてゐるし、菊榮さんは鐵縁でせう。仲々旨くやりましたね。』

私共は大笑ひした。それでもお二人の間に接觸が始まつてゐるらしいと云ふことにはまだ半信半疑でゐた。

それで愈々お二人が結婚されたと云ふ通知をうけとつた時は、別に驚きもしなかつたが、一寸意外な感もした。でもさう極つて見ると『なあーんだ、そんなら何もあんなに迄怒らなくても好いではないか。いつか詫つたのはどうして下さる積だらう』と私共はお祝ひしたり笑つたりした。

ところがこれが又どう間違つたか、私共がそれを根にもつて何時までも悪感情を解かないやうに考へてゐる人がある風である。山川氏御夫婦はそんなに考へて居られるかどうか知らないが、少くも堺氏はさう信じて居られるさうである。もつての外のことである。私共のことだから『餘程おごつてゞも頂かなくては割が悪い』位の戯談は云つたことであらうが、お二人の結婚については前から望んでゐたゞけに心からよろこんでお祝ひしたことを覺へてゐる。私などは問題でないとして序だから私以外の人々の爲めに辯明して置く。

○

『無花果の木は、他の無果花の木を見て成長する』これはアラビヤの諺である。凡ての世相の上に、勝れた人々は全體としての人類の進化向上の險路にランドマークを打つて行く人人である。人はそれらの人々に與へられたその目標に力づけられて、何時の間にか目的の地に近づいてゐる

菊榮氏は日本の婦人に對してその働きをしてゐる婦人の一人である。私は氏が情操の働きの上には成功して居られるとは思はない。しかし理智の明快さと意志の力の強さとの上では、私共は少くも氏に學ばなくてはならない。(十三年六月)

世界婦人欄

ジイナ夫人の近刊書

千葉龜雄

The Soul of Woman.

Gina Lombroso.

「婦人の本質」とでも譯すべきこの新しい婦人論は、「Reflections on Life」といふ傍題（タイトル）をもつて居る。そして、「私は、悩む人々の爲めに書く」といふ引用句が、題紙の下に小さく書き添へられて居る。この本の著者についても書かれた内容についても、私にとつては、云はうとする興味が非常に豐富だ。が、簡單に述べる。

この本の興味が、第一に著者に係るといふのは、この著者が一人の女性であり、しかもそれが、イタリイの人類學者で、「天才論」の著者としてだけでも、すでに世界的に知られて居るところの、故 Cesare Lombroso 教授（1836-1909）を父とし、これも歴史家として世界的な Guglielmo Ferrero を良人として持つて居る外である。其上彼女自分は女性ながら、法律と醫學と、博士の學位を二つも持つて居る。彼女ジイナ・ロンブロゾオ夫人は、父の爲に、大きな傳記を著した外に、父の研究を參考として、「犯罪者」と、「狂者」の二大研究を著述してゐる。その外「廢頽の効利」とか、「女性參政權の省察」たる「贊否論」とか、「保護的勞働法」とか、「何故に機械が古代に用ゐられなかつたか」とか、諸種の著述をして社會を驚ろかして居る。それでもわかる通り、彼女が醫學、人類學の知識に深いことはいふまでもなし、更に、社會學と、經濟學の問題に深い思索を潜めてゐる。

ところで、この博士ロンブロゾオ夫人のこの「女性の本質」であるが、この本がイタリイ語からフランス語に反譯されたために、フランスにおける女子參政權論者が、すつかり失敗して了つたといふ有名な挿話を持つ。それによつて推察されるであらう。博士ロンブロゾオ夫人は、熱烈な女子參政反對論者なのである。

私の讀んだこの本は、一九三二年に、始めてアメリカで英譯されたものである。著述の年月は確かにわからぬが、それが最近であることは、ラシアのボルシヴェキ政府の婦人觀を、方々で攻撃して居ることでもわかる。

近代世界の傾向は、家庭の主人公であつた女性を街頭にひき出して、男性と平等の權力を爭そはせやうとして居る。それが果して合理なものであるか、どうか。ジイナ夫人は、それをその得意な社會學、經濟學、もしくは生物學の立場から綜覈に省察した。その結果は何であつたか、彼女はこの近代的傾向に對して、眞向から、容捨なく否決權を抛げつけた。曰く、「女性はたゞ家庭に歸れ」これがこの大版三百頁の唯一の結論であつた。

「私（夫人）はかういふ確信を持つ。女性の衝動と特性を特殊に決定するものは、敎育でもなければまた强制でもない。たゞ情熱と運命づけられた女性の天職とである。そして、この衝動と特性とそは、丁度、肉體が男性とちがつて居るやうに、女性の魂と心を男性から差別させるものである。この著書の目的は

その事實を、兩性に證明し。これによつて、女性を男性化しやうとするところは、近代の傾向に反抗しやうとするのである。なぜならかゝる傾向は、長い間に、女性が得ることが出來ると思ふ幸福を女性に與へねばかりか。社會から、一つの尊とい財産を奪ひ亡ぼすことになるからである……」云々。

彼女の論據　、女性は、一切が自他中心主義（アルテロ、セントリズム）から出發し、男性が、それと反對に、自己中心主義（エゴセントリズム）なものとして存在する。そして兩性は、永遠にこの主義を對立さして行くべきだと云ふ爭から生れる。自他中心主義とは何か女性は彼女の感情享樂、野心等を、すべて彼女でない他の者の上にのみ集中する。彼女は彼女の爲に何事をもなさぬ。たゞ他の者に對する情緒の衝動、卽ち愛に驅られてのみ働らく、他者とは何か、彼女がそれを愛し、またそれによつて愛せられやうとする者である。子である。夫である。父母である、朋友である。さらば男性の自己中心主義とは何か。彼は何事をするも自己の爲である。その歡樂も活動も、すべて、自分を、自分の生きる世界の中心とする。そこに女性の犧牲の悲劇がある。けれども女性は、この悲劇によつて、始めて男性の上に高く優越を唱へることが出來るのだ。私（夫人）が南北アメリカの大學や諸學校で研究した結果は、女性と男性の差別は量の差別ではない。全く質と方向の差別であることを結論するやうになつた。まだその差別は、決して環境や傳統から起るものでない。たゞ「女性」が、「母性」といふ大きな天職を持つことから生れるので、どんな社會も傳統も、それだけは變化されるものではない

女性は叡知の上から云つても、男性と全たく始めから違つて居る。女性が滿足を見出し自然に擴張され、展開される知識の分野といふものも、必然に「情緒的」な範圍だけに制限される。たとへば、彼女の興味の發展は、精々彼女が棲む具象的な世界、もしくは周圍に居る人間ぐらゐ以上に進まぬ。奉仕と犧牲が彼女の世界だからである。抽象的なものに興味を感ずるのはたゞ男性の仕事である。だから、政治とか、科學とか、抽象した理論によつて働くのは、決して女性の本質ではないまた男性は殊に愛において、極端に自我中心である。彼が愛を求めるのは、たゞ享樂と、慰藉の爲に過ぎぬ。精々で、所有と征伏の滿足だけに過ぎない。その點では、自他中心で愛の犧牲となる女性はずつと道徳的である。母性をもつて人類につくす女性はまた道徳的である。故に男性を教育すべきものは必らず女性であらねばならず、教育するものが、いつも教育されるものよりも、優越者であるべき必要からも、女性が母性そのものであり、それが爲に、奉仕と犧牲の權威たる法則はいつまでも破られてはならぬ。で、現代においても、改たむべきものは決して女性の社會ではない。どこまでも、改良さるべきものは。男性の女性に對する態度そのものでなければならぬ。卽ち男性が母性を尊重し、その奉仕と犧牲の尊とさを正しく認めて、それに充分の敬意を表する習慣になるべき事である。

要するに、女性を男性までに混合するのは、兩性を共に滅すことである。女性が男性を愛するのは、男性が、女性と反對した性だからである。もし男性が女性のやうになつて了つたならば、女性はなほそれでも男性を今日のやうに愛するだらうか。

一體、女性が男性化するのを、當然と思ふのが、生物學上から見ても大きな間違ひである。兩性が益々違つたものに分化して、來る

のが、文明が進むことを證明するもので、混一こそは原始に歸るものだ。動物も、植物も、原始時代にあつてはたゞ女性だけのものであつた。それがだんだんと兩性に分化したのである。そして世界の偉大な進化は、決して性の統一によつて求められずに、却て、細かく細かく差別されて行く性の分裂化によつたものである。そして一つの性の持たぬものを、他の性のが補ふことによつて、調和がうまくとれて行く。報償（コンペンセイシヨン）の理性が結構そこに生きて働らいて行く。然るにたゞ男性が同じ權利を持つといふ理由だけで、女性も同じ權利を求めやうとするのは、求めるのは造作ないが結果は女性に有害なばかりか、無用である。女性が異性たる力を、どこまでも男性の前に使ふところに、始めて女性たる權威が生れるからである。つまり現代女性の主義は、自由や、平等や、絶對なる互惠主義の勝利の上にはない。それは兩性が協調した土臺の上に立つ平等の勝利であり、ある標點と、相對的な互惠主義を達するための、自由の勝利でなければならないのである。

そういふ意味から、當然ボルシエギズムの論理的に許したやうな、自由愛の解放といふ如きものも、また斷じて承認されない。欲しいからといふて、どんなものでも勝手に取るならば、愛の權利は、盗み、伴はる權利と同一なものになる。もしまた男性が愛の自己中心主義を勝手に振舞つたならば、眞の母性を愛する女性が悉くふり捨てられて、淫婦の魔術だけが男性の悉くを引き寄せるであらうなぜなら、娼婦の自由と技術に一番上手なものは、何とい云つても、そうした職業的な淫婦に何人も叶はないであらうから。云々

これは彼女の論據の幾分をよせ集めたものである。彼女自身が云つたやうに、純學術的な著作でないだけに、それだけ論述の自由さがある。充分うなづかるべき考察はあるが、また理論に相應のすきがあり、無理もある。當然立向はねばならぬ諸種の價値のある反對論がある筈なのに、それを無視して、理論を進めて行くところにも、滿たされぬ慊らなさがある。しかし一通りは着眼の斧鑿と、情熱の強さと、文章の明快さに與へることの多いものがある。

最近の米國婦人界

市川房枝

▼美以教會派内に於ける婦人の地位

この五月初めマツサチウセツツ州のスプリングフイールドで開かれた美以教會派の全米大會で、婦人にも男子と同等の權利をあたふべしとの同派憲法改正案が議題にのぼされました。

反對派が婦人の結婚及出産等は牧師としての仕事の上に支障を來すから、男子と同等に牧師となる權利を與ふることが出來ないと主張したのに對し、贊成派は今や婦人はあらゆる方面に於て同等の權利を獲得してゐるからよろしく教會内にても同等の權利を與ふべしと主張しましたが、投票の結果は贊成派が少數でやぶれてしまひました。

然し一九二〇年以來特別委員會で調査中で

あつた田舎の教會だけに婦人の牧師を採用する件は可決され、從來說敎者としてのみ許されてゐたのに比すればともかく一歩だけ擴張された譯です。

▼排日問題に對する婦人會の態度

去る四月三十日から五月六日迄ニユーヨーク市で開かれたキリスト敎女子青年會の大會は、日本女子青年會からの要求により『上下兩院の移民委員會の委員長に排日條項を除く事、尙亦大統領に排日條項を含んだ移民法に署名しない事を要求する』と決議しました。

四月二十五日から二十九月迄バアファロー市で開かれた婦人有權者聯盟の大會も『日本移民問題については、友邦に禮を失はないで合衆國の國内政策を遂行することを望む』と決議しました。

▲陸軍大臣婦人團體に謝罪のこと

去る三月十五日と二十二日とのデヤボーンインデペデント誌（自働車王ヘンリー・フオド經營）に掲載された『婦人會は共產主義者に利用されてゐるかどうか』の一方から、はしなくも最近一の大きな事件が起りました。

筆者は此の題目の下に、米國に於ける多くの有名な婦人會は數名の現在の政府を倒さうとしてゐる共產主義者によつて左右されてゐると斷じ、第二回の記事にはその婦人會の名や、個人の名をあげた表を附け加へ、婦人議會委員會を眞向から攻擊して居りました。

婦人議會委員會といふのは、十七の有名な大な全國的の婦人團體が米國議會に對しての運動を協同して行ふために、各々代表者を出して組織した團體で、婦人有權者聯盟のパーク夫人が會長をしてゐます。

所でこの記事を見た婦人會の人達殊に議會委員會の人達は非常に憤慨して、早速そのために小委員會をつくりその出所等の調査を初めました。その結果これは米國陸軍省の一官吏の筆になる事、並にその表は陸軍省で印刷して方々へ配布したのだといふ事、及それにはフリー將軍が關係してゐる事迄判明しました。

そこで婦人達はだまつてゐず、直に强硬な抗議文をつくり、陸軍大臣ウイーキ氏を訪問してその回答を迫りました。

その抗議文には先づ事實相異の點をずつとあげ、最後にフリー將軍をしてこの表は事實相違してゐる旨、並に陸軍省は何等これに關係してゐない旨を發表せしめる事、尙その發表した陳謝書をさきの表を配布した個所へ全部送る事を要求し、若し陸軍省が右の要求を納れなかつたら、他に相當の手段をとる旨認めてありました。

右に對して陸軍大臣は四月十六日附で、問題の圖表の殘部は早速破棄してしまつた事、並にフリー將軍をして發送先へ事實相異の點があるから破棄してくれるやう書面を出させた旨報じ、最後にあなた方から指摘されたやうな問題を含んだ圖表を、陸軍省の或部局から發表してすまなかつたといふ書面を婦人議會委員會へ出しました。

此の事件は近來米國婦人團體の間に平和運動が盛んなのに對し、所謂米國の軍閥者流が心よからず思つて居る事から起つた衝突で、共產主義云々は、宣傳のために用ひる彼等の常套手段なのです。

▲婦人に開かれた新らしい地位

婦人の公債委員會員—ウイスコンシン州のミルウオーキー市長はミユートラー女史を同市の公債委員會員の一人に任命しました。委員の一人として、女史の名は同市から發行されるすべての公債に署かれる筈です。婦人でかやうな種類の役人になつたのは、女史が最初だといはれてゐます。

婦人の市會計課員——レオナルド女史はロード・アイランド州ニユーポート市の會計課員に選擧されました。米國西北部即ニユー・イングランドは一般に保守的な所なので、此度の女史の當選をめづらしがつてゐます。

▼コロンビヤ大學總長の禁酒反對

ニユーヨークのコロンビヤ大學の總長として米國は勿論、世界によく知られてゐるバトラー博士は、最近ニユーヨーク市で開かれたミゾーリー會に出席し、『禁酒法は不道德だ、到底勵行する事が出來ないから改正せよ…』と眞向から禁酒反對の意見を發表しました。

禁酒法はその結果がどうも思はしくない事から、最近は特に全國的な問題になりつゝある折柄とて、又博士が教育家として著名な人であるだけに此の演說は非常な反響を起しました。この事は當時日本へも電報で通信された程でした。

抑々米國の禁酒法といふものは大部分婦人團體の努力によつて制定されただけに、かうした反對議論に對しては婦人團體はだまつてはゐず。直接バトラー博士並に令孃（共和黨婦人部の幹部）を訪問したり質問書を出したりし、一方その各大會ではどれも法律勵行を主張して居ります。

この禁酒問題は此間クリーブランドで開かれた共和黨の全國大會でも問題になり、法律勵行の一條項をその綱領に挿入しましたが、今ニユーヨーク市で開かれつゝある民主黨の國民大會では、大統領候補者としての一方の大立物である現ニユーヨーク州知事スミス氏か禁酒反對を政綱に揭げてゐるだけに、一層問題になつて居りませう。

▼世界平和に對しての新目標

去る五月一日から七日迄ワシントンで國際婦人平和自由聯盟の大會が開かれたとは前號の本欄に書きましたが、同會は三十有餘ケ國からの代表者集合の上、同聯盟の今後の目標として左の四項を決議しました。

一、陸々、海軍、航空隊を問はず總べての軍備の撤廢、食糧封鎖、破壞的な目的のための科學の應用の廢止、

二、社會的、政治的、經濟的な協同をはかるための世界的團體の組織、

三、男女の性、人種の區別、階級の別、宗敎の相違に關係なく、總べての人々に對しての社會的、經濟的、平等、

四、人類共存の精神の養成、社會正義の樹立によつての軍備撤廢、

可成徹底した非戰論、平和主義を唱へてゐる事、世界平和を現在の社會組織及產業組織との關係　或程度迄はつきり握つてゐる事、然してこれを正義の道にうつたへて行かうといふのがこの社會の特徴といへませう。共產主義社會主義を銘うつた婦人團體を除いたすべての團體中では一番此の團體が過激でせう。

▼婦人會近狀一束

ガール・スカウトの社會館—ガール・スカウ

トはボーイ・スカウトと同じやうな趣旨で出來てゐる會ですが、最近の大會で此度五十萬弗でニューヨークにその本部會館を建築することを決議しました。此の會の會長は今の商務大臣フーバー氏の夫人です。

婦人有権者聯盟の新會長―バアファローで開かれた同聯盟大會は、今迄第一副會長であつたベル・シヤーウイン女史を新會長に推しました。それは同會の創　以來四年間會長として令名のあつたパーク夫人が再選を辭退したからでした。尚新第一副會長には前勞働省兒童局長として有名な又十二名流婦人の一人に數へられてゐるジユリア・ラスロツプ女史が、第二副會長としてはカンニンガム夫人があげられました。

兩親と先生の會の大會―五月六日ミネソタ州セントポール市で第二十一回の年次大會を開きました。

女醫會の大會―六月八日から十日までシカゴ市に第十回年次大會が開かれました。

家庭經濟學會大會―第七回年次大會が、六月三十日から七月三日までバアファアロー市で開かるる筈です。

（一三、六、三〇）

英國其他の新婦人問題

永井萬助

○英國の下院では、去る五月中、勞働黨議員アダムソン氏から國會議員選擧資格の改正案が提出された。此案の主な目的は現在女子の年齡資格は三十歲以上であるのを男子同樣二十一歲以上に低下しやうとするものである。

之について五月中旬倫敦に開催された女子勞働黨大會では、政府に對し右アダムソン案の通過に便宜を計るか、または政府自身一案を提出して女子に對する差別を撤廢し、次の總選擧に間に合ふやうに努力せん事を望むといふ決議案を討議を用ひずに滿場一致で通過した。それかあらぬか、政府も右アダムソン案に對し其の目的達成の爲に努力すべき事を約束し、案は六月上旬常任委員會を通過した此案が通過すると選擧資格の點では男女ほゞ同等になる。

○前記英國の女子勞働黨の五月の大會は、過が勞働黨の天下だけに、是迄に曾て例のないほどすばらしく盛んなものであつた。此大會で女子又は少年少女に關する教育保健待遇などに就いて報告や決議が行はれたが、その中で左の如き產兒制限に關する決議を大々數で通過した。

「女子勞働黨大會は、科學上又は道德上の理由で制限の實行に反對する人々の意見を批評する考は毛頭もないが、保健省は希望の者に對しては保健の係りの官公吏をして產兒制限に關する相談に應ぜしむるを至當なりと考へる事をこゝに表明する。」

贊成演說者の中には、醫者はもう此の上子供を孕んではいけないと忠告して呉れる場合でも、避姙する事に就いては教へて呉れない。制限に關する知識は、今日世間にざらに行はれてゐる。墮胎を防ぐ最良方便だと論じたものもあり、バトランドラツセル氏夫人は、產兒制限は、貧乏で醫者に澤山の相談料を拂ふ事の出來ぬ婦人に依つて過去二十五年間實行されてゐると言つた。ドクトル加藤時次郎が創設しようとしてゐる產兒制限相談所と共に、

これが今後どう展開するか頗る興味ある題目である。

○

倫敦の赤十字協會聯盟では九月一日から看護婦の講習會を開く事になつたが、其目的は看護婦としての技術上又は行政上の智識を修得させるにあつて會期は十個月、入會資格は認定された看護婦學校の卒業者たる事、尙教科目の中に隨意科として心理學と現代產業に關する諸問題及び經濟學の二科がある。

○

デンマークでは過般の總選擧の結果交迭した社會民主黨の內閣に、ニナ・バング夫人といふのが同國最初の婦人の閣員として文部大臣に任命された。當年とつて五十七歲、若い頃からの社會民主黨員で、二十年來同黨本部の要職を占めてゐる。コペンハーゲンの市參事會員をしてゐた事もあり、現に上院議員である。經濟史に造詣深く五六の著書も出版されてゐる。因にデンマークでは二十五歲以上のものには男女とも同等に國會議員の選擧權と被選擧權とを與へてゐる。英國の下院には八名の婦人議員が去年の總選擧に選出されたが、此國では婦人議員は社會黨保守黨急進黨各一名づつで、過日の總選擧にもこの三人は再選された。

○

過般佛國の議會で、私生兒の法律上の資格に關する民法を改正する議案が通過した。之に依つて、不義の結果で生れたものを除き、內緣の夫婦の間に出來た子供は、件の夫婦が其後に於いて正式に結婚する事に依つて嫡出子となる。但し夫婦は其結婚前に又は結婚の儀式を行ふ際に自分達の子供であるといふ事を認知するを要する。又不義の間に出來た子供でも、或場合には其子の父母が其後に正式に結婚する事に依つて嫡出子となる事になつた

流行概觀

大橋房子

總合美

巴里でシイクな女と呼ばれる爲には、單に最新流行の服を着け、目新らしいものを持つてゐるだけでは足らない。だから、巴里の三越ともいふべきラファイエットに飛び込んで流行品を買ひ集めたからといつて、即席シイクなパリジアンヌに成り終せるものではない。シイクは瀟洒とでも譯すべきであらうかシイクたる爲には垢拔けなければならない。持つて生れた容姿を爪の先まで磨き上げ、全身に一貫した快い新味を漲らせねばならない

日本でも此の頃はずゐぶん服裝の調和といふことが說かれもし、考へられもされてゐるやうであるが、此の調和が單に靜的な色や線に止らず、其人の持つてゐる關係の輪廓とか身のこなしとか、步き方とか內部にも働き、更にその人の生きそして動いてゐる環境や雰圍氣と、有機的な關係を結ぶに及んで、初めて全きLa femme chic が出來上るのではないかと思ふ。だから、假りにシャンゼリゼーの街樹の下を步いてゐる典型的な巴里の美女を、新興の東京に電送して來たとしても、彼女が私達の眼に果してシイクに映るかどうかは疑問である。第一彼女の濡れたやうな靴は立所に埃を被り、彼女の步行美や輪廓美は凹凸の多い路で體軀のバランスを取る努力の中に完全に打ち壞されてしまふであらう。かうなつてくると、ラ、ファム、シイクを水際立たせ

る爲には――或ひは流行の効果を强める爲には須く女と復興局或ひは都市計畫局とを握手せしむべしといふことになるのかもしれない。

流行？飛行？

巴里の雜誌屋には日本の婦人雜誌と子供雜誌とを合せたほどの流行雜誌が並んでゐる。月刊のもあれば四季刊行のもある。實際巴里には、その雜誌の數に比例する新流行が現れたかと思ふと又忽ち飛び去つて行くのである

流行の命はたゞたい三月とせられてゐる。つまり春夏秋冬の廻り行くと共に變つて行く譯である。たまにブーローニュの森などを散歩すると、常綠の樹林を背景に遊んでゐる女達の衣裳が、全く目新しいものに變つてゐるのに驚かされる。

飛んで行くものを徒歩で追ふのは愚である遅れたら足搔きがつかなくなることは、流行の場合にも眞理である。要は圏外に立つて流行乃至飛行の趨勢を見ることにある。その力點を摑むことにある。自分の持つてゐるものをその趨勢に順應させれば――或ひは、この趨勢を自分に順應せしむることが出來れば、それで瀟洒たる新時代の姿態が形造られることになる筈である。

ラ・フアム・シイク

では、瀟洒たる巴里女の出立はどんなであるかといへば、もとより千差萬別ながら、だいたいに於いて、下半の輪廓のキリヽとしまつた黒つぽい衣裝に節のあるかない小型の帽子、薄色の靴下に踵の高い靴、と相場が定つてゐるやうである。たゞ忘れてならないのは、彼女が着物の着こなしの巧さと同時に、何ともいへぬ歩行の優美さを持つてゐるといふことである。

いつたい巴里の女が黒つぽい衣裳を好けるといふことには、理由がないでない、由來佛蘭西人は經濟的に案外細かな頭を持つてゐると同時に一面に於いては非常におしやれな國民である。そして一方には目まぐるしい、流行の眩惑がある。財布の腹を痛めず、時好おくれの風をすまいと思へば、目立たぬ色合の中で、小細工なからくりをするより外ない。だから巴里の女は申合せたやうに黒つぽい服を着けてゐる。それが又彼女等の肌を、化粧を、一層水際立たせる役に立つのである。

概して言つて現在の巴里の着物の型は非常に簡單である。着物といつても、朝晝晩の區別がある、同じ夜の着物でもお夜食のと舞踏會のとではかなりの相違があるけれども、今午前或ひは午後の訪問用のワン・ピース・ドレスに就いていへば、襟は肩から肩まで一様の鋏を入れたやうな開き方、胴は大したゆとりのない筒形の袋、それを頭からすつぽり被れば仕度するのに一分とはかゝらぬ輕便さである。勿論腰や袖には多少の加工がある、腰のくゝりは二三年來腰骨まで下つてゐたが、最近更に下向して膝の邊りに扮飾を施したものも現れて來た。從つて胴は棒に近い輪廓を見せることになる。袖は去年あたりから著しく細く長くなつて來てゐたが、今夏はその名殘で薄物を手先まで伸したものと、夏向の肩近くまで腕を出したものと並　してゐるやうである。

新傾向二三

外套を脱ぐと同時に問題になるのは肩の恰好である。去年の夏は背中から羽根を出したやうな布をぴらぴらさせる型がはやつた。それからとんと風呂敷のやうな絹手布を三角に折つて肩を包むことがはやつた。今年はそれ

が細く長く伸びて、薄いファンタスティクな肩掛や面紗をいろいろに用ひ始めた。肩掛を様々の氣以つた形に捲いたり、細いのをカラーの代りに首の周圍に掛けて一端を長く垂らしたり、スートの上衣の襟に同じ布で、首を捲いて背後に垂れる形の紐を附けたり——つまり肩掛の應用乃至趣味によつて、露出した襟を肩との形をごまかさうとしてゐる。

更紗——主として埃及の更紗模様は此の冬の流行であつたが、それが西班牙風の花模様などと入り混つて、此の夏は模様物全盛の觀がある。夜會服などには、日本の裾模様などを眞似たものらしいずゐぶん思ひきつた花模様などもある。が、それらの模様はバランスやスインメトリーの點に於いても、構圖が肉體を立體的に生かさうとしてゐる點に於いても、日本の裾模様などより遥に藝術的である。

夜會服に限らず、外出用のスートなどにも、要所々々——例へば袖口や裾の廻りや肩掛形の襟先などに、氣のきいた縫取や南京玉の模様を置いたものが多い。服の一部に更紗模様の別の布を入れることもはやつてゐる。

帽子は靴其他の小道具と同様終始流行物に左右せらるべきものである。此の冬はあるかないかの鍔が全く無くなつて、いろいろの形がくづれてゐたものであるが、日を除ける爲であらう、夏になつてから相當鍔の廣いのも見當るやうになつた。狹い鍔から一二寸、ちやうど目の隱るほどに面紗を垂らしたものも目新しい。いつたい巴里の女は思ひきつて帽子を深くかぶる、あれで見えるのかしらと焦れるほど目を隱してしまふ。鍔のない帽子の縁が熱情に潤んで眸と溶けて、その中央からつんと出た恰好のいゝ鼻の下にあでやかな口紅を添へたところは、とても妖艶なものだけれど、これはジャポネーズとして生れた我々がいくら眞似たとて出せる色合ではない。唯おでこまるだしの被り方も考へものだとは思ふ。

フランスの女流畫家

デルスニス

今回上野に於て開催の佛蘭西現代美術展覽會へ出品の女流作家は極めて少數で又其作品も充分揃つてゐるとは言へません。

佛蘭西に於てもこれまで女流作家家達は女性と云ふ理由から常に不利な立場に立つてゐましたが、急激な婦人解放の運動は遂に藝術運動の方へも進んで行きまして、今日では男性と對に女流作家が其力を自由に揮ふやうになりました。

マルヴァル夫人、マリー・ロオランサン・ベアトリス、ホウ、コスト、ゴビヤール、の五名が此度の展覽會へ出品して居ります。彫刻家としてはマツケーン、アンナ・パスの二名が其作を出品して居ります。僅かですが此等女流家の制作を各々比較して見ますと可成面白い研究にならうかと考へます。其手法や主題は各自別種の物ではありますが、細かに見て行きますと其等作品の中に一貫した特質のある事が知られます。又彼の男性作家等の中には見られない女性獨自の感なり個性なりが、その制作中に表現されて居ります。線や色調に迄斯うした特質が現はれてゐる事を誰が否み得ませうか。又男性が持ち合はせない一種の靜寂境を此等女性の作家達が持つて居るやうに思はれますし、又此所には女性のみが所有するある朗かさが在ります。

フランスの女流作家達は其制作を爲す場合には自らの爲めにのみ唯餘念なく樂しみ描いてをります。そして今やフランスの女性作家も久しい間の壓迫から脫して、男性が成就した藝術の世界に立派な位置を占めるやうになりました。(展覽會場にてある日の談)

世

案　二、一九〇六年の諸法案　三、一九〇七年の諸法案

西洋諸國の協議離婚制度

第一、序論　第二、フランス風の協議離婚　第三、スウィスの協議離婚　第四、間接協議離婚　第五、

〇世界的名著

研究

案　二、一九〇六年の諸法案　三、一九〇七年の諸法案

西洋諸國の協議離婚制度　第一、序論　第二、フランス風の協議離婚　第三、スウィスの協議離婚　第四、間接協議離婚　第五、王許離婚　第六、ユダヤ人の協議離婚　第七、結論　知らぬ間の離婚

ロシア革命と婚姻法　一、革命前のロシア民法典　二、革命前の改正民法典草案　三、一九一八年九月十六日の親族法典　四、民事婚主義　五、婚姻手續　六、當事者の意思と父母の同意　七、婚姻適齢　八、高齢者の婚姻　九、重婚　一〇、近親相婚　一一、其他の婚姻障碍　一二、婚姻の無效　一三、離婚　一四、婚姻と姓及び國籍　一五、夫婦の共同生活關係　一六、夫婦財産關係　一七、夫婦の扶養關係　一八、結論

ノルウエーの新婚姻法　第一節、婚姻の要件　第二節、婚姻公告　第三節、婚姻の儀式　第四節、婚姻の無效及び取消　第五節、離婚　第六節、訴訟手續　第七節、附則

離婚原因論（五篇）　民法施行前の離婚原因　一、妻の離婚請求權　二、妻の姦通　三、夫の尊屬親に對する虐待侮辱　四、犯罪による處刑　五、行方不明　六、疾病　七、「不熟」又は「不得意」

判例に現はれたる離婚原因　一、離婚原因の法定　二、確定的離婚原因に關する判例　三、惡意の遺棄の標準　四、虐待侮辱の程度

夫の姦通　一、小河－加藤－婦人婚風會　二、判例の傾向　三、イングランドの問題　四、スコツトランドの實驗　五、諸國法の夫妻平等六、離婚原因夫妻平等案　七、婚姻の根本義と法律の根本權威

精神病離婚　一、ドイツ法　二、スイス法　三、其他の諸國　四、イギリスの問題　五、我國の問題

相對的離婚原因　一、ドイツ民法第一五六八條　二、スイス民法第一四二條　三、民法第八一三條修正案

六月三十日發賣

定價拾圓
送料四十五錢

改造社（振替東京八四〇二）

米國國民性の側面觀

池田龍藏

（一〇）無造作至極

米國人は洒いから至つて無造作だ。所謂繁文縟禮と云ふ事がない。例へば上院を參觀するにしても何の手續も要らぬ。僕が行つた時には丁度開會中であつたが、何の許可もなしに傍聽席で暫く演說を聞いて來た。何んでも共和黨らしい議員が勞働會議に關する攻擊をやつて居つた。また訪問なども至つて簡略だ、所が英國と來ると中々やかましく、豫め紹介狀を紹介された人の內へ自分で持つて行くなり、又は郵便で自分の手紙を添へて發送するなりして、その返事によつて出掛る事になつて居るが、その紹介狀なりによつては、會つても吳れぬ事がある。然るに米國では前に云つた樣に至つて無造作に出來て居つて、突然會社などに紹介狀なしに訪問しても時間さへあれば社長でも支配人でも喜んで會つて吳れる事が多い。僕は此の式でよく銀行や信託會社等の幹部連に會つて話を聞いたものだ。米國人の無造作加減がよく北米大陸橫斷の汽車の仕事に現はれて居る。カンサス州とか、コロンド州などの停車場に來た時に、その驛名を讀んで時間表を見るとない、餘り小さい爲めに載つて居らぬのかと思つて、今度大きいステーションに來た時に檢べると同樣に見當らぬ、餘り不思議なので車掌を捕へて聞いて見ると汽車の都合で一寸外の線を通つて居るのだと平氣で答へる樣な譯だ。また技術上から見ても同じだ、汽車が停車場から立つ時に、日本や歐洲などの樣に自然と滑り出る樣な事なく、突然酷い音を立てゝ出て行く、僕の神經過敏のせいもあつたらうが、寢臺に休んで居つた際汽車がステーションを出ると屹度目が醒めた位亂暴な運轉をする。勿論專門家でないから斷言出來ぬが、米國の機關車の牽引力が一千八十萬貫あるとはいへその爲めだけではなからうと思ふ。

（一一）何處でも無遠慮

佛蘭西の樣に精練した文明は持たぬ、まだ殖民地氣分の拔けぬ米國の國民は、一般に無遠慮である、だから佛人や英人は米人を極端に輕蔑して居る、無遠慮と無作法とで押通すらしい米人はよく云へば豪放で、惡く云へば下品となる譯だ。東部のニューイングランド邊はそ

ちでもないが、西部のカルホルニヤ邊になると特に甚だしい、僕が前文相鎌田先生及び氣賀博士のお供でサクラメント日本人會のお世話で加州の政廳を見た時の事だ、排日で有名なエキザミナーの記者が早速やつて來た、二十一二の若僧で、何んの學問も無い奴らしい、ハンチングを冠り葉卷を口にし乍ら僕等の一行に近づいて來た。そのレポーター先生、

「今度國際勞働會議に日本から政府側の大使として來たのは何の人だ」

と云ふから

「その體の大きい方サ」

と答へると

「それぢや日本では何んな身分か」

と聞く、此の奴何も知らぬ馬鹿だナアと思つたが、仕方がないので

「貴族院議員で、慶應義塾大學の總長だ」

と返事をした。所がまた

「鎌田氏の側に居るのは誰だ」

と尋ねたから

「慶應義塾大學の教授で法學博士此方は政府側顧問で來られた氣賀勘重と云ふ代議士だ」

と敎へてやつた、それでいいのかと思ふと、最後に

「そんならお前は何んだ」

と來た、初めからの態度が餘り不遜で癪に障つて居つたのが、更にから云はれて見ると癇癪玉が破裂して怒鳴りつけてやらうと惡罵が口まで出たが、場所柄を考へて默殺してやると、鎌田先生は見兼ねて

「俺の秘書だ」

と僕の後を引受けられた。

無遠慮な米人が突飛な事を始終やつてゐるのは當然の事であるが、今度紐育に遊んで居つた時の事、日本では造り話としか思へぬ珍無類の事件が起つた。それは十六歳の小娘が、その母の病氣で大手術を要するので、その料金一千弗を呉れる男と結婚したい、妾は自分で美しい女だと自信して居るとウオールド紙に廣告したものだ、所が更に面白いのはその廣告に應じて二日間に二十二人の結婚申込と、六十五人からの手術料を呉れようとの手紙が來た事だ。娘も娘だし、男も男だと呆れざるを得なかつた。

無遠慮を通す米國人は概して云へば野卑だ、下等の評を免れない、此の前米國から歸る時の船に米國人の夫婦が十二三の男の子を伴れて乘つて居つた、或る日僕が甲板を散ルして居ると、その小倅がやつて來て

「一寸ネクタイピンを見せて」

と倩々眺めて居つたが、軈て

「オヤ矢張人が造つて居るゾ」

と獨言を云ふ、然し何うもその意味が解らぬかと

「君一體ネクタイが何うしたと云ふノ」

と聞くと

「昨日一人の日本人から今日金を貰ふ約束をしたんだ、所がその日本人がよくあなたと似て居るので胡麻化されると馬鹿らしいからそのネックタイピンに見覺をつけて置いたノサ」

と話し、僕の顔を見乍ら

「あなたも僕に金を呉れない？」

と來た

「お金を貰つて何うするんだ」

と問ふと

「貯金をするつもり」

と洒々たるもんだ。

「お前のお父さんから貰つたらいゝぢやないか」

とやつつけると

「お父さんもお母さんも一仙だつて呉れないヤ」

と云つていきなり僕のズボンのポケットに手を入れ、銀貨を一つ摑み出して逃げ去つた。何んと云ふ下等な小兒だらうと呆れて怒ることも出來なかつた。

（一二）辻褄の合はぬ平等

米國が自由平等の國たる事は大した說明を要せぬ所だ、元來建國の主旨から見ても平等國たる事は解るが、特に米國には階級の無い事が非常に嬉しく感ぜられる。英國や獨逸に來て見て、日本よりもつと醜い階級觀念が殘存して居るのに一驚を喫したが、流石に米國は平民の國だけあつてさつぱりしたものだ。第一汽車を見るがいゝ、獨逸へ行くと一等から四等まであるが、米國には事實上はプルマンカーとか、チューリストとがあつても、一等だの二等だのと云ふ名稱がない。階級がないから青年の野心を唆るものは金だ。だから米國人が拜金宗だと云はれるのは無理ならぬ事である。然し勿論金が萬事な譯でなく、平等國たる一面は群衆の國だ、更に露骨に云へば衆愚の國だ、然るに假令衆愚政治の國であつても階級がないから人材の拔擢が自由に行はれて居る、今迄田舍で辯護士なり實業家であつて中央に全く名の聞かぬ人が一朝にして臺閣の諸公なり、大公使となるのは別に珍らしい事でない、こう云ふ風に述べて來ると米國は實に自由平等の天國の樣に聞えるが、米國人は一方に平等を無視した非常な偏見を持つて居る、例へばネグロに對する白色米人の態度だ、日本で一般の人が所謂新平民に對するより更に烈しい、特に南部の方に行くと普通のホテルやレストラントに黑人の出入する事を許さなかつたり、電車や汽車の中で別室に隔離されたりする、紐育邊でも矢張黑人を毛嫌する事甚だしく、黑坊が或る街に移つて來ると地代が安くなつて行く。かくの如き屈辱を甘じなければならぬ彼等が白色米人に對する反感は實に非常なものだ。僕は或る時夜遲く汽車のスモーキングで黑のボーイと話した事がある。その男が

「貴方は新聞紙で黑人虐殺事件を時々讀むでせうが、米國の新聞紙そのものが白人の經營だから事實を正直に報道して呉れぬので

す、あの有名なシカゴの虐殺の如きは其の數實に三百人に及んで居るんです。そして其の殺し方と來たら實に酷いもので、黑人の女や小供を町から追ひ出して、或る堀割の所まで追ひ詰める、もう逃げる所がないさればと云ふて逃げなければ殺されるので皆水の中に飛び込んだが、苦しがつて這ひ上つた奴は片端から叩き殺され、水から上れないものは皆溺れて死んだんです」と涙を流して白人の如何に非道なるかを愬へた。此の話の眞相は勿論保證の限りでないが、以つて米人の黑人に對する態度を察する事が出來よう。また自由平等の國たる米國は言論が自由なるべきだのに、實際は必ずしもそうぢやない、例へば過激派を恐るゝ事甚だしく、僕が此の前紐育に滯在した時分、即ち一九一九年の春には露國過激主義者ゴールドマン女史以下二百名がバルフォードと云ふ廢船で追放された、その後約二千八百名以上も同樣の運命に遭ふたと云ふ始末だ。こんな具合だから何う考へても米國の平等は全く辻褄が合つて居らぬと云はざるを得ぬ。

（一三）極端から極端

兎角若い時には矛盾が多く極端から極端に流れ易い、だから若い米國はまだ矛盾の國だとも云へる、二重人格でも三重人格でも持つて居るのだ。早い話が米國には極端なる理想家が居ると同時に徹底的な現實主義者が多い、米國で非常に評判がよくて一年以上も興行したキエーダウン、イーストと云ふ有名なグリヒスの活動がある、紐育で二度見たのに倫敦へ來てからまた行つた位いい寫眞である。其の映畫の中にニュー、イングランドの田紳のアマサ、バートレットと云ふ老人が出て來るが、その人は全くピューリタン的な人格者だかくの如く俗に染まぬ高潔なタイプの人はよく西部に見られる。然るに一方には同じフイルムに活動して居るワクス、サンダーソンと云ふ樣な金と女しか眼中にないと云ふ俗惡極る男がバートレツドの樣な理想家と雜然として同居して居る。また話なら金の範圍を出でない俗臭紛々たるものが多いかと思ふと、紐育のグリニッチビンゲに集つて居る樣な藝術を至上の權威とする連中も居る。勿論何處の國だつて理想家も居れば、惡漢もあるに極つて居るが、米國ではその對照が餘りに甚だしい。此のコントラストに就いても一つよい例を擧ぐると、今度僕が紐育に行つた時、確か三月の三十日と覺えて居るが、メトロポリタン、オペラ、ハウスで有名な「胡蝶夫人」を見た。元來ジオン、エル、ロングが初めて此のマダム、バッタフライを書いた時には餘り人氣がなかつたが、デービット、ベラスコが戯曲にし、イルカとジイアコッサが伊太利語で歌曲にし、プチニーが作曲したので、今では歌劇では最も受けのよいものの一つとなつたのである。オペラは英國などと違ひ、米國では原語、此の「胡蝶夫人」なれば伊太利語でやるので聞いて居つても歌句は解らぬが、大體の筋は有名なオペラだけに知つて居り、特にエルキャンが伊太利語から飜譯したのを讀んだ事があるのでよく解る。僕は此の歌劇を見て海軍士官のピンカートンは米國人の俗惡な方を代表し長崎駐在の米國領事

シャープレスは米國人中の理想家を代表して居ると倩々思つた。今云ふた樣に米國民は國民的に渾然とした人格を成して居らぬ、だから女の力が強かつた爲めもあるが禁酒令が制定された同時に、之を平氣で破つて居る手合が多い譯である。ドライの米國で酒精を得る事は錢さへあれば何んでもないのだ。米國で有名な私刑の如きもそうだ、一方では嚴正な社會制裁が直接に行はれる樣であるが、他方から見れば全く暴徒の横行だ、一九二〇年に私刑に行はれた者が全國で六十一人で、官吏によつてリンチが喰ひ止められた數が五十六件、その中私刑をやらうとした暴徒を撃退する爲めに軍隊を用ひたのが十四件、內發砲して死傷者を出したのが四件あつた。私刑された六十一人の中八人だけが白人で、殘り五十三人は共黑人である。理由から云ふと强姦の十八人が筆頭で極端なのになると窓から婦人を覗いて私刑にされた黑坊があるとは本當に嘘の樣な話だ。また以上の內燒き殺されたものが三人まであるとは之れでも文明國かと云ひ度い位だ、僕が二度目に米國に着いた頃盛に噂されて居つたリンチ事件を談で一例として書いて見る。一九二〇年の十一月二十五日感謝祭の夜の事八人の兇漢が舞踏の歸りの一少女を輪姦した所が段々警察の手が廻つたのでその中三人はサンタローザ市に逃亡したのを警官が逮捕に向ひ三人までの犧牲者を出して漸く惡漢を捕縛した。然るに市民は殉職の警官に同情すると共に、斯る惡徒の行爲を憎むの餘り、數千の群衆はその犯人を收容した監獄に押かけその犯人を奪はんとしたので、警官と人民との間に爭鬪が行はれた、所が漸く判決の演説により一旦群衆が解散したが、驚くべし彼等の公判の開かるゝ前夜の十二時三十分頃百名許りの覆面の一隊が自動車で牢獄に忍び込み、巡視中の警官にピストルをつき付けて鍵を奪ひ取り、悠然と三名の惡漢を裸體で曳り出して近所の墓地で大木に釣つてリンチに處して終つた。その間僅かに十五分、寫眞まで取つたといふからそのリンチが如何に計畫的に行はれたものであるかを想像するに難くない。

何しろ矛盾だらけの米國は、第三者として之を見る時には非常に面白い、例へば兩端に小包を投げ入れる大きな箱がある。天氣のよい時などには何うかするとそれに入り切れぬので、その箱の上に突み重ねて置くが、誰一人その郵便物を盜むものがない。そんなら云ふ具合に公德心が發達した米國には泥棒がないかと云へば大違だ、所謂ホールド、アップ、といふ拳銃を突付けて金や貴金屬を强奪する奴が非常に多い。また大仕掛の强盜團も中々多く、活動そのまゝのやつがよくある。支那に馬賊があるなどと笑はれる柄でない、それで居て巡査は隨分駄目だ。第一その人員が足らぬ、例へば紐育六百萬の人口中一割は浮浪漢だが、警官總數は一萬七千人で、その中交通係が千四百人だ、また警官の墮落も甚だしく惡漢から買收されて居るものが中々多いそうだ。また日本の巡査などに比べて臆病で賢い道でホールドアップがあつても、巡査は却つて逃げ出す位だ。

（一四）何時でも樂天的

一體に西洋人は日本人に比べると樂天的に出來て居るが、特に米國人は著しい。それだけ淺ぽい所があるが快活だ、冬には眞黒な霧で一間先も見えぬ事が度々ある所に住んで居る英國人より、日本晴とでも云ひ度い位な天氣が多く、且つ生活は容易な樂土に育つて居る米國人が――勿論植民當時は決して樂ではなかつたらうが――樂天的なのは別に不思議がない事だ。米國人が一體に樂天的な事はよく米國の芝居に表はれて居る、米國では六ケ敷い戲曲は餘り向かぬ、ミユージカル、コメデー或はボーデビルと云つた樣な唄の澤山入つた、喜劇的なものが流行する。例へば紐育のキンターガーデンだ、綺麗な衣裳を着た若い女が澤山出て來て、踊つたり、唄つたり、下らぬ道化を云ふたりするだけで、全く筋のない他愛もないものだが、此の式の劇場が何時でも滿員で、毎日押すな押すなと云ふ騷ぎだ、またニユーヨーク、ヒツポ、ドロムと云ふ五千六百九十七も座席のなる舞臺の廣さから云へば世界第一の劇場である、舞臺に出る連中が五百五十人位、大工、衣裳方等が四百人、その他の使用人が百人と云ふベラ棒に大仕掛のものだ、このヒツポドロムは一種高等寄席で、その出し物は名前から如何にも樂天的に出來て居る。一九一九年に米國に行つた時には Happy Times で、一九二〇年に渡つた時には Good Times と云ふのだつた。此處は水藝が得意で舞臺に大きな池を造つて綺麗な女が美しい衣物を著、列をなしてその池の中に下りて行つて再び浮んで來なかつたり、若い娘が非常に高い所から飛び込んだりして觀客を嬉しがらして居る。勿論こんな式のものは歐洲各地にあるが、米國のが第一番子供らしく他愛なく出來て居る、であるからこう云ふものを亞米利加式と云つて居る。米國人は樂天的で深刻な所がないので藝術と稱すべきものが殆んどない。ロングヘエロー、ホイツトマン及びポーを除いては世界的藝術家が一人も居らぬと云つても過言ではない。畫家でホイスラーや、サーヂエントがあるにしても、世界的には餘り問題でない。音樂家に就いて見ても、米國人は屹度我が米國にはマクドウヰエルやオルンシユタインやレツフラアが居るちやないかと云ふだろうが、今米國人に一歩を讓つて是等の三人を世界的の音樂家と見做しても、氣の毒な事には全部米國で育つた人でない。マクドウヰエルは紐育に生れはしたが、佛獨の音樂學校で教育を受けた人だ。オルンシユタインは露國で生れ、米國に來た十二歲前に既にペテログラード音樂學校に入つて居つたのだし、レツフラアは獨逸に生れ、伯林で教育を受けて終ひ、二十歲で米國に渡つたのだ。こう云ふ風に檢べて見ると、今の所米國には藝術なしと云つていいのである。トルストイは非藝術的の英國を罵つて、世界で文明國と稱する内で最も野蠻な國であると言つたが、米國は更に之に毛がかかつて居ると斷ぜざるを得ぬ、

樂天的の米人は鹿爪らしい英人などと違つて至つて氣輕で、冗談を云ふ事は世界一だ。だから綽名と略語などが非常に流行する、人の名前のみならず、都市にも綽名がある。例へば紐育をエンパイヤーシチーとか、メトロポリスとか云つたり、市俄古をガーデンシチーと稱したりする類だ、略名も同じだ大統領の如きも本名を云はずに、略

名で間に合はせる事がある、キルアム、タフトはビリで通り、セオドオーア、ルズベエルトはテッディーで通り、キッドロウ、キルソンはキデイと略す。日本では極く輕蔑した場合は名士を略名で呼ぶが、米國では別に侮蔑せずに氣輕に寧ろ極く親みを云ひ表はして居る。

(一五)何んとなく鷹揚

米國は世界の成金國だ然も年の少い分限者だから、國民は一般に鷹揚で、物質に就ては何んとなく鷹揚な、こせこせせぬ所がある、例へば米國人は讀殻の新聞をよく電車の中に棄てゝ行くが、英國や歐洲大陸では一寸見られぬ事だ。ホテルに備付の便箋なども米國が一番潤澤である。中歐諸國のホテルでは用紙代を取る、料理屋に行つても米國では特に肉切れなどの大きいのに目がつく、米國の料理は餘り上手でないが、原料がいゝから食へる。英國の料理は頗る不味い。それと比べると米國の料理は上手だと云へるが、勿論佛蘭西には及ばぬ、米國が裕福な事は自動車でも解る、一九二〇年の調によると米國には九百二十一萬一千二百九十五臺あるから七人に一臺の割だ、更に個人の收入を見るに、一九一八年に政府の調査した國民の年收額は五百萬弗以上一人、四百萬弗以上二人、三百萬弗以上四人、二百萬弗以上十六人、百萬弗以上三十三人、五十萬弗以上百七十八人である。日本とは大分桁が違はないだろうか。紐育市道路掃除局長の年俸が七千五百弗、チャプリンの子役ジアッキー、クーガンの一週の俸給が七百四十弗などと云へば、日本では一寸信ずる人が少いと思ふ、米國で富豪の子弟が夕刊賣や皿洗をして獨立して修學する事が出來るのは米國だから行けた話で、此の事實は最も雄辯に米國の富裕な事を語つて居る。こんな調子だから米國人が一般に鷹揚なのは當然の話だ。

(一六)飽迄大袈裟

若い時には誰でも大袈裟な事をしたがるものだが、米國人も同じくやる事が飽迄大きい、下らぬ事でも大きく行く、或るシカゴの樂器會社の廣告用のテルノホルンと云ふ喇叭の樣な樂器は世界で一番大きいものだが、その重さが二百封度あつて、高さが日本人の約二倍だ、馬鹿馬鹿しく大規模なのは米國のサーカスだ、一九二一年の春紐育に滯在中米國で一番大きいと云はれて居るリング、リング、ブラザースサーカスとバーナム、アンド、ベアーレー、ショーの合同團を見た。云はば日本の曲馬團を非常に大きくした樣なもので、連中が一千人以上、勿論世界一だ、サイドショウと云つて付けたりの、見世物がある。皆片輪の人間を集めたもので、その中獨逸から新に伴れて來た大男のルードイッヒ、シュルテンと云ふのが七呎六吋ある。また此の男と同時に獨逸から來た男の名をエルンスト、ホエネーと云ふ、三百三十五封度即ち四十貫の肥大漢だ、またその伴れにヤニエ、リンドセーと云ふ女が居るが、その身のたけが僅か一碼だ、尚面白いのは一寸法師の夫婦で、シュナイデル君が三呎六吋で、シュナイデル夫人が夫君より三吋だけ高い、二人の目方を合はして七十五

封度即ち九貫目だ、ローレロと云ふ男は首を完全に後に廻す事の出來る怪漢だ。

建物の馬鹿に大きいのも米國だ。巴里のエッフエル塔よりは　くないが事務所建物として世界で一番高いのは紐育のウールオース、ビルデングだ、高さが七百九十二呎で六十階、全體の床の面積が百二十萬平方呎、電燈の數が八萬、エレベーターが二十八あつて全延長が二哩、二千三百のオヒスがあつて、二萬人の事務員が勤めて居ると云ふ途轍もない大さだ。またその附近のエクイタブル、ビルデイングは三十六階だが大きさから云ふと一番で、四十八の昇降機があつて、その延長が四哩と稱して居る。二度と見ようと思はぬ市俄古のストックャードもまた巨大なものだ、五百英反の場所に五萬人の使用人が居り、スヰフト會社だけでも地方から家畜の受入が一九一八年には一千七百三十萬八百四十四頭で、生產高が四億弗だ、米國の景色は日本や歐洲の樣な雅致に富んだものがない。たゞ矢鱈に大きいだけだ、ナイヤガラやヨセミテと數へ初むれば幾何もあるが、その一例としてパンダイック教授が世界第一の驚異と云ひ、詩人ミラーが世界の最も雄大にして壯嚴なるものと稱したグランド、キアネオンを擧げる。これはコロラド河の流に川來た一大溪谷で、その地層によつて種々な形をなして居る頗る雄大な景である。その深さが、三千呎から五千呎、長さが二百十七哩で幅が十哩から十三哩と云ふ一寸日本では想像もつかぬ大きな景色だ流石のルーズベルトも「グランド、キアネオンを見た時には、畏懼の念に打たれた、グランドキアネオンには比較すべきものもない、描寫するのも愚だ、世界を通じて全く並ぶものがない」と驚いた所を見てもその偉大さが想像される。こんな環境に育つ米國人が何につけても大袈裟で豪放なのは尤も千萬な話である。

（一七）女の天國

男の方から云ふと年寄よりも若いものが女に憧憬する、勿論老人が若い女と結婚などすると孤の樣に可愛いがるが、それは寧ろ娘に對する愛に似た樣なものだ。然るに若い男は矢鱈に女を崇拜したがる、米國人も若いから矢張それだ、西洋では一般に日本に比し男が女を大事にするが、米國のは極端だ、エレベーターに乘つた時女が居れば男は帽子を取らねばならぬ、最も酷くなつて來ると電車に女が入つて來て、席がないと男が帽子を脫いで席を讓る、所が女は昂然として一言の禮も云はずに腰を掛けるのを時に見受くる事がある、こんな具合に米國の女は增長して仕末に了へぬのが多い。或る日某米人に招待されて夜遲く歸るさ、上町から地下鐵道に乘つたもんだ、もう電車が多く出ぬので非常に込んで居つたが、次のステーションに來ると入口の所へ更に雪崩を打つて人が押込んで來た、すると前から乘つ居つた一寸小綺麗な女が

「此處にレデーが居ります ョ」

と怒鳴つた、然も二三人の連れがあつたのにレデーと云つたのが實に振つて居る。若し日本の婦人が之を目擊したら本當に何んなに思ふだ

らうと三嘆した。尤も米國の女は男に比べて教育のあるものが多い、混合教育だから女の大學生が非常に澤山だ。僕がコロンビア大學を參觀しに行つた時、有名なシーガー教授の講義する所を見たが、學生の半分は女だつた。それに授業が終つてから質問したのは全部女生徒であつた。また結婚後も英國や獨逸などと異つて家事が忙しくないから讀書するので概して朝から晩まで阿堵物に追　れて居る。夫などより上品に出來て居る、だからこうした立派な婦人の間からは時々理想の高い運動が生れて來る。禁酒法の如き一方から云へば戰時中の穀物浪費を防ぐ爲めでもあつたが、女の力が大になつた事は爭はれぬ事實だ。何しろ米國に於ては教養ある女にしろない女にしろ家庭に於ても、社會に於ても全く暴君だ、世界廣しと雖も米國ほど威張られる所はない、本當に米國は女の天國だ、そのコントラストは日本で男の天國だ。

（一八）若い米國

以上簡單に僕の米國に於けるインプレッションから判斷した其の國民性を書いて來たが、要するに米國人は活動的で開放的、無邪氣で正直、無造作で無遠慮、徹底せぬ平等主義で極端、樂天的で鷹揚、大袈裟で女を矢鱈に崇拜する、是等の事柄を綜合して見ると矢張米國に初めて上陸して感じた若い國だナアと云ふ最初の印象に一致する樣だ、竟り米國は若い國だ、老人は兎角若い者を輕蔑したがるが英國人が米國人を野蠻人の樣に見下るのは此の邊から來て居るとも云へる。今の米國人は一般にカルチアのない田舍者だ、然し若い米國人は恐るべきかなだ、東夷と蔑んだ關東武士から大宮人は政權を奪はれた、米國の將來はこれからだ。

本稿は名付けて米國々民性側面觀とした、だから其の國民性から見た米國の外交や政治や經濟に論及せずにこれだけで擱筆する事とする。

學童の半ヅボン

岸邊福雄

日本の男の子のヅボンは馬鹿に長過ぎる、小學兒童でも大人並に靴のかがとまで達する。中學生は無論の事である。馬鹿に長い。誰に聞いて見ても其理由は判明しない。殊に制服として其寸法まで强制してゐる。所謂厳格なる學校でも、何故に長いヅボンを穿せてゐるかについて、明瞭な説明を與へられた事はない。ヅボンは長く作るものと單純に考へてゐるやうである。元來日本服の作り方は、子供と大人と同型である。只だ大人の寸法の短いのが子供服であり、子供の着物の寸法の長いのが大人の着物であるから、其の慣習からして、洋服も同樣、殊に詰襟の兵隊の制服の型による學生服なるものは、日本服を見ると同樣に、兵隊服の小型なのが、卽ち學童服となつたのであらうが、頗るいやな型だ。

いやな型、それも人々による趣味による事として見れば、あの長い腰抜けのやうな、鈍馬なやうな長いヅボンの學生服も、あれでなくてはと悦に入る人もありませうが、外國人の子供のヅボンはいづれの國でも短い、短い、それは流行ではない、長い間の習慣である。其習慣は單に時の流行が、無意味に繼續されたものではない。日本人中には左樣に解釋してゐる人もありませうが、決してそうではない。全く性の問題に依つて、此の短袴が行はれてゐるのである。

性の問題とヅボンの長さ。これは又面白い理由である。外國人はさう云ふ、『長いヅボンは性慾を刺激し易い。』と、そりやそうだ。長いヅボンは自然下體部を温めるのである。其の下體部を温暖に保たすと云ふ事が、性慾を刺激し易くすると云ふ事は自然の道理である。それ故に短かいヅボンによつて腰から下を温かくしないやうにして、性慾の刺激を削減しやうと云ふのである。これはたしかに合理的の説明である。然らば其短袴の實行を何歳位から始めると云ふ事に至つ

て、更に説明を要する。性慾問題の起るのは、兒童の第三危險期、卽ち十三四歳頃からであるが、其年頃に至つて突然に實行しようとしても、嚴冬の季節には寒冒に罹る恐れがある。それ故に、幼少の時から實行して自然に訓練すれば、皮膚が丈夫になつて防寒能力が出來ると云ふのである。如何にも外國人の子供は幼少の時から短いヅボンに慣されてある。日本人の吾々から見ると、いたいたしいやうに感ずるまでに嚴冬でも短袴を穿せてゐる、そして膝から風を引くと云ふ事は云はない。時には、帽子を被らないと頭から風を引く、靴を脱ぐと足から風を引くと云ふ事を聞いて、日本人はクスと笑ふ事はあるが、外國人は眞面目である。

どう見ても日本の學童のズボンは長い。

短いヅボンが、性慾削減に有効であると云ふ事は、日本でも氣がついてゐるのである。衣は肝に至り袖腕に至ると、薩摩兵子を歌つた南州翁の詩は、全く上野公園の翁の銅像によつて證されてゐるが、殊に出水兵子と云ふのは、薩摩藩中での短袴短袖であつたと聞いてゐる。薩摩隼人の尙武の精神教育は、實に此邊にまで注意されてゐたのである。

此の薩摩兵子の風俗は、英國にもある。北の方スコツトランドの一部で尙武の氣風の盛んな所では、大人でも半ヅボンで、毛脛を無雜作に出してゐる。無論嚴冬の期節でも平氣でゐるのは、矢張り幼少からの慣習であるに違ない。又獨逸でも尙武の風習の旺盛なミユンヘン地方では、矢張り大人でも半ヅボンの剛頑な服裝をしてゐる。歐洲大戰の際に、勇敢に戰つた獨逸軍隊中の、更に勇猛に奮戰した軍隊は、此の半ヅボン地方の兵士だつたと稱されてゐる。

學童の半ヅボンは、性慾問題の上から云ふても、一異議なく實施してほしいが、運動から云ふても、丸く太つた長い、土左衞門のやうなヅボンを穿いて、バタバタしてゐるのは見惡くいと云ふ形式ではない。運動家其ものをも鈍らすのである。イヤそれは單に運動を遲鈍ならしめると云ふ丈けではない。少年の潑溂たる元氣をして澱滯せしめるのである。

頃日、電車内に於ける學生の居眠りの盛んな事は、實に國民の士氣の墮落せる反映とも云ふべきであつて、限りなく歯がゆさを覺える。一方には不良少年は激增してゆく、それが更に不良なる軟派と稱するものが激增してゆくと聞く。寒心の至りである。

學童の半ヅボンと性慾問題につき、こゝまで說明すると、只だ無意味に長きヅボンを穿かせてゐる小學校も中學校もであるが、更に家庭教育の問題として顧慮してほしい。



樂聖シューベルト（續）

——（菩提樹に就いて）——

馬場二郎

（下）

娘は、今、低い建物の傍に在る粗雜なあら木造りの長椅子に腰かけて居りましたが、ちよつと體を動かしました。そして、視線をちらと後の方へ流してやりました。森には深い暗闇が宿つて居て、時々風が梢を亘るとき、ちら〳〵と彼の女の周圍に月の光がゆらぎます。でも、直ぐにまた、もとの靜寂に還つて了うのです。

娘は性急に嘆息を吐きました。今宵も恰度いつかの晩のやうです。あゝーでも、あの人はとう〳〵來ないらしい！娘は顏を伏せて、それを細い、たわやかな指の中に埋めて了ひました。そして、しばらくは、ぢつと身動きもいたしません。何にか深く思ひ惱む事でもあるのでせうか？總てはたゞ默々として、仄暗い瞑想の中に沈んで居ります。

と、影がかすかに動きました。でも、低い家の傍に居るこの娘には、今、眼が見えません。耳も聞えません。娘は、總てを忘れて、たゞ一つの思ひに心を亂して居ります。過ぎし日の、あの懐かしい、美しいメロディは、今もなほ彼の女の周圍に漂うて居るのです。

影はまたも動きました。でも、娘には、今、それを見る眼がないのです。その影は綠に……白く……神秘に浮動しながら、蒼ざめた月の光の中を……そして、短かく刈り込まれた芝生の上を……横斷つて彷徨ふて居ります。やがて、それは、音もなくすーツと流れて來て、この低い家の影の中に靜かに消えてゆきました。

かちーッ！ と一と音——扉のハンドルが夜の氣を顫はせて響き亘りました。が、然し、そのあとは、また、もとの靜寂へ還つて行きました。それでも、娘は、まだ身動きもいたしません——あの懷かしい思ひ出の音樂が、娘をしつかりと捕へて居るのです。それは娘の心に……彼の女の魂に……低く、美しく、食ひ入つて、その心臟を刺戟し、その鼓動を早めます。

　娘はやつと少し體を動かしました。そして、掌の上に頰を載せました。ぱつちりと開かれた娘の眼は、たゞあてどもなく地面を見つめて居るばかりなのです。と、今度は、勢ひよく、ぐるりと顔を廻して、自分の傍の格子窓に一瞥を……閃くやうに流してやりましたが、やがてまた、もとのやうに、その視線を落して了ひました。そこには、丸木のやうな形をした光が流れて居りました。娘ははつとして飛び上り樣、窓の方へ近く一足進み出ました。それからまた立ち止まつて、手を腰の所に置きました。その呼吸は急に激しくなつて來ました。……可愛らしい曲調が……夢にだにも忘れ得ない、あの懷かしい、思ひ出での曲調が……夜の中から彼の女を呼んで居るのです。

　娘は、足早やに動いて行きました。入口の戸は、娘が手を觸れると、音も無く、すーッと開きました。娘は、再た、彼の傍へ來たのです。

　音樂は、この二人の周圍に……二人の上に……鮮やかに溢れて居ります。その美しい……純な……曲調は、二人をひたと寄り添えます。彼はその大きな、不細工な顔を靜かに動かして、娘をしげ〳〵と見守りました。それでも、音樂は決して止みません……それは淸く、高く美しく、夜の氣を顫はせながら、唱ひ續けて居ります。

　伯爵の若い娘の顔はうなだれてしまひました。何んとも形容する事の出來ない優しみが　その雙の眼の中で　或るなにものかを待ち構へて居るのです。

　一心不亂にピアノを彈いて居たフランツは　ふと　この表情を見ると　はつとして立ち上り樣、手を延べて、それを遮りました。

「駄目です！駄目です！私ではありません……それは音樂です！あなたは決して惑はされてはなりません……孃さま。」

　フランツは　殊に「孃さま！」に力を入れて　嚴然と言ひ放ちました。そして　恰度呪文でも拂ひのけるかのやうに、素早く、右手で空を切るのでした。

娘は　青年の手をしつかりと捕へて、しばらく待つて見ました。でも、いくら待つて見ても、返事はありませんでした。

「わたしは……わたしは……あの——う……惑はされて居るのでせうか？　フランツさま？……。」

その聲は、聞きとれない程低く、而も、呻くやうに彼の女の口を漏れました。そして、微妙な表現を含む眼は　たゆたへながらも、またも彼の眼に見入るのでした。

「さうです。たしかに惑はされていらつしやいます。」

フランツの語勢は　何ものも犯す事が出來ません。その聲は祈禱のやうに聖く、義しい響を漲らせます。

「そんなら　あなたは？……フランツさま。」

「私は　たゞ　あなたを愛して居るだけです。」

「そして　わたしも、たゞ　あなたを愛して居るだけですわ。」娘も、落ちつき拂つて　靜かにかう繰り返しました。然し　それは、なかば　獨語のやうに消えてゆくのでした。

娘は、ふと　そのメロデイを少し歌つて見ましたが　直ぐに中止して、今度は、非常に愛くるしい眼を上げて、フランツを見つめました。

「これは、わたしの歌曲ですわねえ……フランツさま。」

娘は、懷かしげに、小首を傾げました。そして、再た思ひ出したやうに、

「わたしのために、探しに行つて下すつたのねえ。」

から、附け足しました。フランツは勝ち誇るやうに、頭を上げました。

「さうです。あなたのために出て來た歌曲です。」

娘は悦し相に眼を見張つて頷きました。そして、靜かに手を動かして、そツと、彼の大きな顔に柔らかく觸れました。うら若い伯爵令孃のたわやかな雙の手は、フランツの兩頰をおさへて、靜かに撫で廻し始めたのです。

やがて、娘は深い嘆息を吐きました。

「あゝ！　懷かしい顔！」

娘は、ちよつと息を切つて、再た續けました。

「あゝ、慕はしい……？　醜い顔—わたしの音樂の顔！」

……………………………………………………

……………………………………

二人は、はツとして飛び退きました。仄白い伯爵の姿が、開け放たれた入口の中に見えたのです。

娘は、すました顔をして、前へ進み出ました。そして、左の手をフランツの兩掌の中に辷らせながら、外の方へ聲をかけました。

「こゝですよ！　御父樣。」
娘は、落ちつき拂つて申しました。フランツの手は、令孃の白い手をしつかりと握りしめて居ります。
「外へ御出で……カロさん！　お父さんが來るまで、こゝで待つて被居い。」
父の語勢は、少し強く響きます。娘の困りぬいた眼がフランツのに見入りました。二人の眼はもう笑つては居りません。
「いやよ。お父樣。御父樣こそ外で待つて被居つて頂戴……わたし達は、今、訣別をして居る所なのよ……」
伯爵は、長い間、じつと娘を見据ゑて立つて居りました。それから、年若い作曲家の方へ對き直ほりました。父の顏は憐愍に滿ちては居りましたが、然し、また、何んとなく、嫉妬の表情を隱すことが出來ない樣子でありました。
「君……伯爵はおもむろに……でも、少し、輕蔑的な……そして反抗的な……口調で、言ひ出しました。
「ぢや、これから五分間……許してやりませう……それからはもう、直ぐに歸つて行つて下さい……そして、もう、決して……ふ——む……もう、決して——いや、永久に……」
シューベルトは傲然として、一揖しました。彼の眼は、なほも、熱心に、娘の顏に注がれて居ります。
入口の扉が閉ぢられると、娘は、再た、フランツの方へ對き直ほつて、手を差し出しました。二人は、しつかりと手を握り合つて、默つて、互に相手の眼に見入りながら、立つて居ります。やがて、娘は、長い嘆息を吐きました。
「人が死にかゝつて居る時には、何んなことを言ふのでせう？フランツさま……」
娘は、突然、かう尋ねました。
「さあ……私は……知りません……」
フランツの語尾は怪しく顫えました。
「たいした事でもないわ……ねえ、フランツさま……さうですわねえ……何んでもない事よ……。」
娘は暗い顏をして言ひました。娘は、今度、ピアノの方へ一歩進み寄りました。フランツの手は、なほも、娘の手の中に固く……固く……錠を下ろされたやうに握られて居ります。
「ねえ、フランツさま。後世ですから……どうぞ、もう一度はつきりと仰つて下さい。わたしを愛して下さると……
娘は、フランツにひたと寄り添ふて、その耳にかう囁きました。フランツは、あの圖拔けて大きな眼鏡を外して、亂雜に畫き散らされた五線の紙片の上に置きました。

「私の眼を御覧なさい……御孃さま。……」

彼は靜かに申しました。神々しい、嚴肅な風貌が、彼の素野な姿に現れて來ました。青年の雙の眼からは、輝くばかりに、人間の有つ純な魂が、覗き出て居ります。

娘は、兩手をフランツの肩に投げかけたまゝ、しばらくは身動きもしませんでしたが、やがて、その胸に顏を埋めて了ひました。微かな、すゝり泣きの聲が、娘の唇を漏れて參ります。……と、娘は、狂はしげに手を延べて、鍵盤の方へせはしく動かして申します。

「ねえ。フランツさま……どうぞ仰つて下さい……フランツさま！　もう一度……どうぞ……はつきりと……

悲しげな微笑を浮べながら、フランツは、娘の言ふまゝに、ピアノに對ひました。あの美しいメロディは、またも部屋を溢れるばかりに滿たし、月の光は、その中にゆら〳〵と漂ひ出しました。

ピアノの上の燈火は、はた〳〵と瞬き、その光はピアノの向ふに立つ人の姿の上に落ち、怪しく朦朧として踊る影の中に、融けて行きます。音樂は、それに纏はつて漂ひます。緊張した悲哀は、その仄かな影の中を、風のやうに吹きまくられ、美しい高い曲調は朗らかに、その上に浮び出るのです。

少し隔つて、その浮動する光の中に、娘は思ひに沈んで居ります。彼の女は石像のやうに固く立ち盡してゐるのです。と、彼の女は、その胸の前に、兩手を合はせて、祈るやうな態度を示しました。それが終つて、手を揺ると見る間に……俄かに兩手を擧げて、フランツの方へ對き直りました。

その時！　飛鳥のやうに、部屋へ飛び込んで來た父は、娘をしかと、抱きとめたのです。

父と娘は、相並で、亡靈の樣に、夜の暗へ消えて行きました。

音樂は、いつまでも……いつまでも……夜の寂寞を破つて、美しく鳴り響いて居ります。

時は過ぎ去りました――

フランツ・シューベルトは、彼の若さと、その榮光の冠と、粗野な顏と、燃ゆる心を抱いてその昔、この世を去りました。然し、その心は、今もなほ、焔々たる焰を揚げて居るのです。

エステルハーツエ伯爵令孃のカロ姫は、愛の捕擒となつて彼の女の大理石の建物の中で、全く土に還つてしまつて居ります。

夜毎に――音樂は、靜かに、彼女の墓を廻て奏でられます。

夜の音樂は、夜の落ちる所には、何處にでも、必ず、奏でられるものなのです。

（完）

小說作法講話（2）

森田草平

(一) 小說の目的

小說作法の研究に入る前に、先づ文學の一形式としての小說の目的から決めてかゝりたい。これは文學以外の他の藝術、繪畫や音樂にも關係があつて、藝術の本質は美にありや、眞にありや、はた善にありやと云ふやうな所から學者的に考へれば、隨分面倒なことになる。從つて又異論も生じようと云ふものである。が、そんな事は私の柄でもなければ、この講話の主旨でもない。で、便宜上、私はたゞ小說の目的は人生の眞を寫すにありと云ひたい。又さう云ふのが、前にも述べて置いたやうに、近代の小說は寫實主義を採用するに及んで始めて體を成したと云ふ事實から見ても、實際に當て嵌つてゐると云はなければならない。

で、小說の目的は人生の眞を寫すにある。詳しく云へば、想像されたる事實の系列の中に人生の眞理を體現するにある。

處で、小說は歷史や傳記ではない。要するに拵へ物である。その拵へ物と人生の眞實とは相容れなからうと考へるやうな粗忽漢もあるまいが、世間では拵へ物と云ふ言葉が、別の意味で小說を惡く云ふ場合に用ひられてゐるやうだから、一應辯じて置きたい。成程、拵へ物は事實ではない。事實とは反對々當をなすものである。が、眞實とは決して、相反するものではない。處で、事實と眞實とは同義異語ではない。寧ろ作家はより好く眞實を讀者に傳へるために、事實の世界を見

捨てる。讀者をして人生の眞相に觸れしむるために、現實の世界から連れ出さうとしてゐるんだとも云はれるのである。吾々は先づ事實と眞實、現實と眞相との區別を知る必要がある。

事實は一般的法則が特殊の形をとつて現れたものである。そして、その一般的法則が眞實若しくは眞理である。林檎が木から落ちたのは事實であつて、距離の次乘に反比例した力で物と物とが互に引き合つてゐると云ふのは眞理である。事實は具體的であつて、肉體的經驗の對象であり、眞理は抽象的であつて、心的理論の對象である。現實は事實の世界であつて、眞相は眞理の世界である。眼で見、耳で聞かれるやうな宇宙は現實であつて、吾々の悟性に依つて理解せられるやうな宇宙の諸法則は物の眞相である。

あらゆる科學は吾々の眼で見、耳で聞いた事實の裏に横はつてゐる眞理の發見に努力する。あらゆる哲學は、かくして發見されたる眞理を理解し、評價することに努力する。そして、あらゆる藝術は、かくして理解し評價されたる眞理を明白に、且有効に表現することに努力するものである。人間の歷史は眞理に對する絕えざる追求の歷史に外ならない。事實の世界の眼の前に立つて驚愕の眼を睜つた人間は、それ等の事實を裏づけてゐる眞理の發見に渾身の勇を鼓して從つた。が、最初の數世紀間は、その探究も極めて不秩序なもので、云はゞ眞理はたゞ直覺に依つて捕捉せられ、敎條として宣言されるに止まつた。處が、近世に及んで、眞理探究の上に一種の方法が發見された。卽ち近世の科學者は先づその間に關係のありさうな幾多の事實を蒐集して、それを整理按排することから探究の歩を進める。そして、それ等の事實の觀察から、その間の關係を說明するに足るやうな一般的法則を導き出さうとする。尤も、さうして出來たものはまだ假說であつて、眞理とは云はれない。が、眞理と云ひ得る確信の着くまで、それを他の事實と照合することを罷めない。然る後始めてそれを抽象的な理論の中に取り入れるので、科學者の仕事はここに終る。

處で、恰度その點から哲學者の仕事が始まるのである。哲學者は科學者の手から多くの眞理を受取つて、それを比較したり、調和したり、聯絡を附けたりする。そして、それ等の眞理から一個の組織立つた信念を建設するのである。たゞその信念も、哲學者の手にある間は、何時までも抽象的であり理論的であることを免れない。で、いよいよ藝術家の番になる。かく科學者の手で發見され、哲學者の手で組織立てられ

理論的眞理を受取つて、藝術家はそれに感覺で認知することの出來るやうな形體を賦與する。卽ち元の具體的な狀態に眞理を還元するのである。自分が發明して造つた事實をそれに着せて、現實に馴れた人の心にも想像の上でそれを認知することの出來るやうにしてやる。一言にして云へば、かくして眞理に表現を與へるのである。

で、以上の如く、科學者の發見と、哲學者の評價と、藝術家の表現とは分けて說いたやうなものゝ、それはたゞ解り易いためで、偉大なる小說家は皆この三つの資格を兼ね具へてゐなければならない。小說家が他の眞理の探究者と異なる所は、その思惟の方法にあるんでなく、たゞその題材にある。小說家の題材は人生其者である。人生の或眞理を發見して、それを理解し評價した上、更にこれを有効に表現するのが小說家の任務である。それがためには科學者とも、哲學者とも、又藝術家ともならなければならない。先づ實人生の幾つかの事實を綿密に觀察して、それを汎い經驗に照し合せた上、その中からそれ等の事實を裏づけてゐる眞理と考へられるやうな一般的法則を抽き出したとすれば、その作家はその場合科學者の仕事をしたものである。次に、その作家に思想家の素質があれば、それ等の眞理の間に脈絡を附けて、一個の信念を建設する。この場合彼は哲學者である。最後に、その作家は自分の發見し考究した眞理を例證するに足るやうな場面や性格を想像の上で創造して、その眞理を明白に且つ有効に讀者に傳へたとすれば、さうすることに於て彼は藝術家である。

で、あらゆる小說家はこの三重の資格を平等に具有する筈ではあるが、その人に依つて、或作家は科學者的素質の勝つてゐるのもあれば、哲學者的素質の優れてゐるのもある、又或作家は藝術家表現に重きを置くと云ふやうな差別のあることは免れない。それに依つて、一々の作家の個性が生じて來るのである。例へば、エミール・ゾラは自分でも言明してゐるやうに實人生の事實の科學的研究に沒頭してゐた。晩年のトルストイを哲學者的素質の勝つた作家だとすれば、ガブリエレ・ダンヌンチョは彼自身の抱いた夢の世界の藝術的表現に最も多くの興味を寄せてゐたとも云はれよう。日本の作家に就いては、どうも是程はつきりしたことが云はれない。田山花袋氏や島崎藤村氏は、自分では實人生の科學的研究を唱導せられたけれども、二人とも餘りに詩人的素質の勝つた人人である。私は寧ろ森鷗外作品の或物に科學者的素質の精彩があらはれてゐることを認めたい。で、若し幸田露伴氏を以て哲學者的素質の勝つた作家だとすれば、尾崎紅葉は藝術家

肌の作家だと云はれる。私の知る限りに於ては、夏目先生は小説家としての三つの資格を平等に具有してゐる唯一の作家であつた。たゞ先生の作品には、藝術家として先生の際立つてあらはれてゐる作もあれば哲學者としての先生の面目を窺ふに足る作もある。が、實人生の科學的研究がその特徴となつてゐるさうな作は、先生自身さう云ふ作風を好まれなかつたために、遺憾ながら見當らない。併しそれはたゞ先生の作品には、さう云ふ方面の觀察が生のまゝ現はれてゐない、先生の哲學と藝術とに依つて濾過され淨化されて現はれてゐると云ふに止まつて、實人生の科學的考察が作の根抵になつてゐることは固より云ふ迄もない。それでなければ、先生は偉大なる作家でも何でもないのである。

化學的比喩を用ふれば、小説は蒸溜した人生のやうなものである。作家の頭腦の中で、實生活が眞理といふ氣體に蒸發する。それが再び想像の人生に凝結せしめられるのである。作者は先づ人生の具體的事實を抽象的な眞理に變化させる。次にそれ等の抽象的眞理を具體的な想像の人生に還元するのである。かくの如き順序を間違ひなく經たものであれば、そこに出來上つた想像の人生は必ず眞實なものであらなければならない。何となれば、それは實人生から歸納された眞理を體現したものに外ならないからである。

作中にあらはれた想像の人生が眞實であるとは、その人物が生きてゐることである。生きてゐる證據に、吾々は婦人問題などを論ずる際、イプセンのノラやヘッダ・ガブラーを宛ら實在の女でもあつたかのやうに例に引くではないか。同じ事が沙翁のハムレットに就いても、オフエリヤやコーデリヤに就いても、シヤイロツクやフオルスタツフに就いても云はれる。モリエールのタアチユツフエに就いても、バルザツクの老父グランデエに就いても、ゲーテのウエルテルに就いても、ゴーゴリの主人公チ、コフに就いても云はれるのである。我邦に例を取らうなら、光る源氏の君のやむごとなき際は云はずもがな、市井の間には彌次郎兵衞喜多八が生きてゐる。八百屋お七も生きてゐれば、小春や梅川も生きてゐる。彼等が生きてゐるのは、それ／＼の作家が長い間實人生の多くの事實を觀察して、その中から歸納した眞理を體現してゐるからである。例へば、セルヴンテスがドン・キホーテに表現したやうな、あゝ云ふ理想主義者の眞理を摑む迄には、作者は何千といふ世の夢想家を觀察したに違ひない。(尤も、作者は、或は唯一人の夢想家を見て、天才の直覺から直ちにあゝ云ふ理想主義者を認識したかも知れない。が、天才の直覺は

凡人の長い間の經驗を一度に經驗するものだから、結局何千といふ夢想家を觀察したと同じことになる。こゝいらで屁理窟は云はないことにして貰ひたい。)で、作中の著名な人物は皆人類の大きな階級の典型的代表者である。從つて彼等は諸君や吾々よりも一層眞實に生きてゐる。何となれば、彼等は吾々及び他の多くの人々から造られたものであるから。要するに、彼等は偶然の事實である吾々や諸君よりも、生きた人間として一層確實性を有するものと云はなければならない。これが吾々の彼等を認めて、恰も實在の人間の如く見做す所以である。佛蘭西では吝嗇漢のことをハルパゴンと云ふ。恰度我國で色男のことを丹次郎と云ふやうに。しかも前者がモリエールの主人公であると同じやうに、後者は爲永春水の手になつた假作の人物に過ぎない。ハムレットに對しては、吾々の前に同じ心の動搖と躊躇逡巡を體驗した人物として、兄弟の如き親しみを感ずるではないか。

處で、同じやうな意味合ひからして、吾々は小說又は戲曲中の人物を實際にあつた歷史上の人物よりも一層實在性を帶んでゐるものゝやうに考へ勝ちである。マーカス・ブルタスと云へば、吾々は直ちに沙翁に依つて描かれた戲曲「シイザア」の中の假構的人物ブルタスのことを考へる。羅馬史の中にその事蹟を曖昧に傳へられてゐる實際のブルタスは、今の人に依つて殆ど忘れ去られたと云つても可い。ハムレットも丁抹の古い王室にあつたヘンリー・フレデリック・アミエルといふ公子の事蹟から取つたものだと云はれるが、誰もそんな人間のことを記憶えてゐるものはない。處で、我國の大星由良之助と大石內藏助に就いては、後者も近時浪花節や講談で喧傳されたから、どつちが有名だとも云はれない。しかし浪花節や講談の內藏助も、程度の差こそあれ、由良之助と同樣に假構の人物であることは爭はれない。一步進んで考へれば、實際の人物は、傳記者の手に依つて、その性格や事蹟を一種の小說に變形されて、始めて百代に生きるんだとも云はれるのである。實際、一八一五年には唯一人のナポレオンがあつた。然るに現今ではその傳記者の數だけ何百といふナポレオンがあると云はれるのは、道理ある言葉だと云はねければならない。最近我國に於ても親鸞上人や俊寬僧都を材料にした幾多の小說や戲曲が續々として現はれた。若しそれ等の作がそれ〴〵人生の眞實を捕へて、そこに描かれた人物が本當に生きてゐるとすれば、矢張り親鸞上人や俊寬僧都はそれだけ數が殖えたと云はなければなるまい。

かくの如く小說や戲曲の中の偉大な人物が吾々の眼に眞實

として映るばかりでなく、單なる架空の事件が眞實として信ぜられる場合も少なくない。德富蘇峰氏の「近代國民史」に據れば、三代將軍德川家光が初めて將軍職についた時、天下の外樣大名を集めて、余の父祖は嘗て諸公と同輩であつたので、參勤交代の際にも品川や千住に出迎へるなど、諸公を遇するに禮を以てした。余は生れながら將軍である以來はその禮遇を廢止する それに不服の者は、乞ふ、國に歸つて戰備を收めよと申渡したと云ふ、あの有名な傳說は事實無根である。少なくとも、その事實を證明するに足るやうな根據がないと云ふことである。しかも吾々にはさう云ふ事實のあつた方がどうも家光らしく思はれる。と云ふのは、その出來事が吾々の家光といふ人物に於て認める眞實と合致してゐるからである。同じやうに、羽柴秀吉が備中高松の城を水攻めにしてゐる際本能寺の變を聞いて、直ちに主人信長の枉死を敵方に通じて和議を求めた。敵方にも小早川隆景といふ智者があつて、群議を排してそれに應じたと傳へられるのも、史家の云ふ所に據れば、全然「太閤記」の作者の捏造した虛構の事實であるさうな。しかも「太閤記」の耽讀者であつた吾々は、史家がどう云はうとも、吾々の愛する秀吉にさう云ふ果斷な英雄的行動のあつたことを疑ひたくない。その外小說や戲曲の中で、史實を變じて、しかも眞實性を失はないものを求めたら、隨分その例に乏しくあるまい。尤も我邦在來の戲曲や演義小說は、史實を變更するも、たゞ筋の面白さ場面の變化ばかりを覘つて、その人物の性格や周圍の事狀を顧慮しないので、却て嘘らしい感じを抱かせるものが少なくない。例へば「太閤記」の十段目にしても、敵方の大將が間者になつて入り込んでゐるのは、どうもあの儘では受取れないが、あれを超越して見るか、さもなければ、あれをマクベス流に主人公の心の幻影として見ると、非望を企てゝ、しかも形勢日に非なる狀態にあつた光秀が、焦燥のあまり敵方の大將と間違へて、老母を刺し殺す——一たび主君の血に塗れた手を二たび肉親の血に汚すと云ふことは、決して吾々の考へ得られないことではない。殊に一旦老母を刺し殺してからは、おひおひ自己の大望が肉親の愛と齟齬して行くのを見ながら、尙且それを乘り越えて進まうとする奸雄の苦衷に於て、實際人生の眞實を捕へ得たものがある。若しこの十段目に今なほ生命があるとすれば、全くその點にあると云はなければならない。

處で、吾々は一つの作を見て、それが人生の眞實を語つてゐるか否かは、理窟よりも先づ直覺で判斷する。理窟は後か

ら附けたものである。實際、吾々の直覺は決して作者の嘘を見遁さない。若しその人物が與へられた性格に應はないやうなことを云つたり行つたりしたら、そして、その云つたり行つたりすることが實生活に於ける一般的法則と調和してゐなかつたら、いくら作者が胡魔化しても、もう駄目である。到底吾々をして彼の云ふことを信ぜしめる譯に行かない。云ふことが信じられなかつたら、それを書いた目的は全然達しられないと云はなければなるまい。小説には、幾多の眞實を語る方便があるから、又それだけの嘘を語る方便もある譯である。若し作者が人生を觀照する上に聰明を缺いてゐたら、先づその主題からして嘘になる。若し又作者が一旦人物に性格を賦與した後で、その性格に從つて彼等自身運命を開拓して行くことを許さないで、作者の氣隨から自己の目的に添はせるさうに、それに干渉するやうなことがあつたら、そこに性格描寫の上の嘘を生ずる。次に、若し作者が場當りなぞを覘つて、專斷的に局面を拵へるさうなことがあつたら、それは脚色上の嘘である。若し又人間の性質としてどうしてもそんな事を云ふ筈がないと思はれるやうなことを強ひて口にさせたらそれは對話の上の嘘である。最後に、作者が他の文でこれはかう／＼云ふ性格の人物だと評してゐるのに、その人物が作者を裏切るさうなことを云つたり行つたりしたら、それは註釋の上の嘘だといはなければならない。勿論、これ等の嘘は、一つの嘘が他の嘘の原因となり結果となつて、互に相關聯して起つて來るものであることは云ふ迄もない。たゞ分ければ、かう云ふやうに分類することも出來る。以下、それ／＼の嘘に就いて、出來るなら實例を擧げて、その中の主なるものを説明して見たい。（この項つゞく）



パライソ・テレアル

蒲原春夫

参らうや参らうや。パライソの寺に参らうや。パライソの寺とは申すれど。廣い寺とは申すれど。狭い廣いは我胸にあり。

――肥前浦上地方俗謡――

その一

紅毛の悪魔は夕暮になると、初めて見た長崎――いや、日本の土地を見物しようと思ひ立つて、そつと黒船を抜け出たのである。そして、ぶらぶらと浦上山里村の薄闇の中を風のやうに歩いた。見るもの聞くもの皆が皆、物珍らしいもの許りであつた。暫らくは其れに心奪はれて歩いてゐたが、歩いてゐる中に彼は例の心を動かしたのである。例の心と言ふのは、彼の本質である悪虐な遊戯心の満足である。

彼がさうした心を抱くやうになつたのは、彼の平調な氣持を亂されたからであつた。と言ふのは………

歩き疲れた彼が、そこゝと休憩する場所を探してゐたが間もなく探し得たのは、藪際のささやかな草原である。そこには、水々しい野百合の花が二三本、薄闇の中にもほの白く咲いてゐた。香氣が強く四邊を包んでゐる。悪魔は浮々とそこに腰をおろして、額の汗を拭いた。

野百合は御承知の如く、天主が最も好む花であつた。彼がいつぞや教へを山上で垂れたとき『われ爾等に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其装この花の一つに及ざりき』と言つて百合の花を稱へた位である。その神聖な花が、殊に悪魔の尻に敷かれたとあつては、さすがの天主も輕い憤りを感

じたに違ひあるまい。

デウスのさうした心持を察したのであらうか一匹の藪蚊が、悪魔の頬をチクリと刺したのである。悪魔の行爲を憎んだ藪蚊の攻撃は格別だつたと見えて、彼は眉を顰めて首を縮めた。そして、そつと右の手を擧げて、藪蚊を殺さうと計つた。が、其計畫は美事に失敗して、彼は我と我が頬をなぐつたのである。藪蚊は續いて、悪魔の足を螫つた。そしてまた……悪魔は腹立たしさうに、何やら叫びながら立上つた。藪蚊は、その勢に愕いて遠退いた。

悪魔に限らず誰しも同じであるが、心が和らいでゐるとき突然蚊に襲はれたこと程、微妙な感情の昂奮を覺えることはあるまい。その昂奮は苛々しさである。悪辣な氣持を涌かせるものとなるのである。

立上つた悪魔は険しい眼を光らせながら、四邊を見廻した。さうした感情の捨場を物色してゐるのであらう。

遠くに足音がする。悪魔は其方を注目した。

脊の低い、百姓體の年寄りが、腕組みながら元氣なく歩いて來る。暗い處であるが悪魔にはハッキリと解る。餘程の心配事があるのであらう。色蒼ざめて、口を堅く結んでゐる。悪魔は、その顔色を一目みて、年寄りの心の底の底まで直ちに讀むことが出來た。

年寄りの名は重助と言つた。浦上在の百姓である。

重助の娘婿ヤコボ久兵衞とその母親マリアお作は、邪宗門に歸依してゐることが此ほど露見して、四五日前に捕縛された。そして今は、立山の薄暗い土牢の中に呻吟してゐるのである。

重助は久兵衞親子の安否を氣づかつて、長崎の町に出た。そして、其となく奉行所の意向を探つて見ると、久兵衞親子は八月七日、西坂の刑場で火炙りにされるとの事であつた。七日と言へば明後日である。家には娘と三人の孫が自分の歸りを待ち詫びてゐる。彼は一時も早く娘に此事を告げてやらうと氣は早つたが、足は鈍かつた。心は重かつた。

彼の家は小高い丘にあつた。まだふきかへて間もない藁屋根は黄色く、梨の花に包まれてそれと一目で見られた。彼は藪ぞひの道を取つて、石ころ多い道を歩いてゐたが、いつの間にか日はトツプリと暮れて、悪魔が彼の身體を包む始末となつたのである。

「おゆう、おゆう」

重助は上り框に腰を落すと、がつかりした調子で娘を呼んだ。その言葉も元氣がなかつた。

「はい」

美しい聲が其に答へた。そこに現はれたおゆうの姿は、聲を聞いで豫想し得られる美しさがあつた。年は二十五か六か。色の白い細面である。細面ではあるが、肉附が好く、從つて血色も好いので、頰のあたりは艶々と、いや、水水しい愛嬌があつた。それに百姓家の女とは思はれない程の氣品があつた。そして彼女の瞳は、かうした場合にも似ず、靜かな落着を見せてゐた。寧ろ冷たい位な。

「どんな樣子で御座いました」

おゆうは父を勞る前に、氣にかゝつた事柄を訊ねかかつた。その調子は張つて、訊ねると云ふよりも、なじると云つたが適當な位であつた。

「うむ。まあ、悠くり話すよ。わしは喉が乾いてならないがな」

「はい、いたりませんで」

惡魔は、その時おゆうの横顏を泌々と見ることが出來た。おゆうは今お茶を入れてゐる。なんと云ふ美しい女であらう。彼はすつかり感心した。自分が日頃見馴れてゐる紅毛の女と、趣を異にした女だと思つた。

惡魔は女が好きである。女好きの彼が、おゆうを見て大いに心を動かしたのも豫想に難くない。心を動かした彼が、重助を捨てておゆうの身體に身を移したのも無理はない。おゆうがその爲に、如何に苦しんだか悲しんだか、その後の彼女の運命は惡魔の傀儡となり、その微笑となつたのである。

傳說に依ると、此時に紅毛の惡魔が、おゆうを見ておゆうの大變氣に入つた爲に、その惡魔は夫れから後ずつと、日本の女を傀儡した。だから、現代の女はヒステリツクなローマンチツクな、無貞操で無道德になつた……いや、是れは作者の言葉でなく、作者もさうとは信じないが……

その二

嘉永十一年八月七日。此日はヤコボ久兵衞とその母マリアお作が處刑される日である。

お作は朝早くから、長崎奉行所に驅けつけた。朝早いことゝて、奉行所の扉は重く閉されてゐた。四邊は薄暗く、氣味惡いほど靜かである。遠くで啼いてるのは一番鶏であらう。その啼聲が細長く、闇を裂いておゆうの胸に來た。

おゆうの胸の中は寂しいものであつた。彼女が良人に最後の告別の爲に奉行所を訪ね度いと父に願つたが、重助は子供があることゝ、良人の顏を見れば此上の悲しみと未練がおゆ

うに襲ふことを恐れて赦さなかつた。そこで彼女は、父の寢靜まるのを待つて、夜道の怖さも忘れて奉行所を訪ねたのである。彼女がさうした心を抱くやうになつたのは、良人に會ひたい希望ばかりではなかつた。最一つの理由と云ふのは、良人と共にイエス・クリストのおん名の下に死ぬる――殉敎の榮えを荷ない度い事であつた。

切支丹取締令によれば、家長の罪はその家族全體に及ぶのが例であつた。然し、今度びはどうしたものか、久兵衛に及んだ掟のかせは、おゆうや子供にまでは及ばなかつた。彼女は其れが不滿でならなかつた。不滿でありながら彼女は、家に閉ぢ籠つて、役人が捕へに來るのを待つてゐた。全く、今日か明日かと首を長くして、取締令の自分に及ぶことを待つてゐたのである。が、その事はなくて、良人の處刑される日とはなつた。

良人に會ひ度い心持とさうした心持が二重となつて、彼女の愛慕となり苛々しさとなつたのである。

軈て、扉は八文字に開かれた。

おゆうは、役人に面會すると共に、心に蟠まつてゐる其事を願つたが、駄目であつた。幾度願つても同じ結果である。役人は煩さゝうにその願を拒絕した。そこで彼女は、その事を思ひあきらめて、良人に面會することを願つた。役人にも憐憫な心がない筈はない。安々と承知して、彼女を土牢に案内した。

土牢は玉園山の麓にあつた。稲佐獄に面してゐる崖にある。入口は楠にかこまれて、たゞにさへ薄暗い土牢が、樹木に日をさへぎられてゐるので、一層陰氣に、一層じめじめしい。

久兵衛は、母と共に同じ牢内にあつた。表の足音に、疲勞した心の好奇心を僅に動かして、大儀さうに目を送つた。

「誰だらう」

それがおゆうだと解ると、懐しさの餘り母に告げることも忘れて立上つた。

「あなた――」

「おゆうか。好く訪ねて來て呉れた」

おゆうは胸が一杯になつた。面窶れた良人の顏を二度と見る元氣もなく項垂れた。日頃、髭濃い良人の頰には、ボウボウと伸びて別人かと疑はれた。それに言ひ度いことも喉に塞つて、氣がいらつ許りである。その氣持をヂッと押へてゐるうちに、悲しみは胸にこみあげて、頰はいつの間にか淚に濡れた。神經のすべてを感情に奪はれたかの如く、彼女はたゞ

泣いた。牢格子に身をもたして、役人が側に居ることも忘れて…………

すると　久兵衞の頰に浮んでゐた優しい情味はいつの間にか影をひそめて、彼の眸は見る見るうちに險惡になつて行つた。そして、いまいましさうに取り亂した妻の樣子を、寧ろ冷やかな調子で眺めてゐたが　急に吐き出すやうな荒い調子で、恁う言つた。

「お前は何を歎いてゐるのか。何も悲しむことはないではないか。死を悲しむのは異敎人の女々しい心だ。わたしは今、母上とともに長らく待ち佗びてゐた天主の國に參つて、樂しい來世を過さうとする門出の今日を歎くとは、餘りといへば不覺ではないか。おん主のおん敎へを信じてゐるお前にも似合はしからぬではないか」

良人に叱咤されると、おゆうは急に顏を擡げたそして良人を眞面から見た。その瞳はうるんではゐたが今迄歎き悲しんでゐたとは思へない程澄みきつてゐた。

「いえ、いえ、――妾は貴郎にお別れするのが悲しくて、歎くのではありません。妾は貴郎が天國に參られるのを、心から喜んでゐるので御座います。それに引きかへて、妾ばかりが――」

おゆうの言葉は次第に鈍つた。彼女は　俯向いて切なささうに身を慄はしてゐたが、「どんな罪劫があるのか。デウスの御心にめさないと見えて、一人この世に取り殘されて、未だ未だお仕置の沙汰も御座いません。いつになつたら望みが叶ふのやら、それが悲しくつて、悲しくつて……」と、途切れ途切れに細い調子で言つてゐたが　もう堪へられなくなつたと見えて其儘、身を土に投げ出して嗚咽した。

「うむ」おゆうの心が久兵衞に解ると　彼の心は和らいだ。

「さうだつたのか。わたしはお前の其言葉を聞いてヤツと安堵した。必ず歎くには及ばない。何事もデウスの御計ひぢや　聖寵さへあれば　お前の望みもいつかは遂せられるであらう。お前もその心を忘れないで、彌撒を忘れないで、祈禱に勉めてゐたならば、必らず天國に召される日が來るであらう」

その時、姑もかたはらから彼女を慰めた。

「わたしは一足先にパライソに昇つて、お前の爲に祈つてあげるから、お前も力を落さないでお祈りなさい。デウスの御國で再會することも遠いことはないでせう。屹度、屹度、心を頼もしく持つて、お祈りすることが肝心ですよ」

「はい。難有たう存じます」

おゆうは、牢番にうながされて力無く立上つた。面會の時が過ぎたのである。そして、幾度か、土牢を振返り振返り、とぼとぼと役人の後から重い足を交はした。

久兵衞母子も心は同じである。彼は今日を限りの離別を心から悲しんで、役人に引き立てられてゆくおゆうの後姿を、いつ迄もいつ迄も見送つた。おゆうの姿が役人の詰所に消されてからも、彼等は牢格子から離れなかつた。

「ゼゼス・マリア――我等に憐れみを垂れ給へ」

お作は、その儘腰を落して合掌した。そして、家にある三人の孫の幸福を祈つた。久兵衞も同じく、母と共に祈り續けた。そして刑場に引立てられる時の來るのを待つた。

空に啼くのは不如歸か――立山の松より離に、啼聲を殘して姿を消したのである。

その三

大根の花、朝はほのぼのと白く明けた。おゆうはお祈りをすますと庭に立つた。掃かれた土はしつとりと露にしめつて、ところどころ、すいすいと伸びた草は朝風の儘になよなよ動いてゐる。まだ四邊には靄が漂うてゐる。薄くはあるが、樹木を、丘を、海を、山を、苦い浮世を神秘に包んでゐるのである。彼女はさうした大氣の中に、東の空を見詰めた儘に動かなかつた。彼女は陽の昇るのを待つてゐるのである。

太陽のなかに天國がある――彼女はさう教へられさう信じてゐた。さう信じてゐる彼女が太陽のなかに良人久兵衞の靈魂や姑お作の靈魂が安らいでゐると思ふのも理屈であらう。彼女は、太陽を見て良人の後世を弔ふのが此頃の常であつた。從つて、太陽の姿は、日に依つて樣々の形をしてゐるやうに彼女に思はれた。彼女が太陽に向つて一心に祈禱を誦してゐると良人は其處にあらはれて いろいろと話かけた。しかし、良人は、彼女が最も望ましいことである殉教の事に就いては未だ何んとも云つて呉れない。――それが何よりも寂しい。

日は一日二日と過ぎた。太陽はさんさんと幸福な笑を毎日見せて一日として曇つたことはない。良人は幸福に暮してゐるのだ。――さう思つた後の彼女は定つて自分の前世は罪深き女であつたらうことに考へを及ぼさせては悶へ苦しむのである。

いま、彼女は、地に跪座して太陽の出るのを待つてゐる。が、今日はどうしたものか、太陽はいつ迄も出なかつた。靄はすつかり晴れて、海は青々と綠の山の間に横たはつてゐる。が、いつの間にか東の空には薄紫色の雲が足早く流れは

じめた。

「何か不吉な事の前兆ではなからうか」………。不吉は、彼女には寧ろ幸福となるべき今の場合である。彼女は胸を踊らして、とやかくと想ひを馳せたのである。それは、彼女の顔を見ても判る通りに、蒼白い頰には見る見るうちに血の氣が漲り、瞳は生々と動き、身體の動きも別人の如く溌剌となつたのである。朝あけの空色のやうに……

　悪魔は、おゆうのさうした變化を苦々しく思つた。彼女の所作は悪魔に反撥して、彼の不愉快となつた。不愉快になつた悪魔が、その氣分を消さうとするのは當然のことであらう。そこに、人の世の悲劇は醸され、悪魔の哄笑が起るのである。

「御免なさい」

「はい、誰方で御座います」

　おゆうは眉を顰めながら、聲のする方に振り向いた。そこに二人の男が立つてゐる。羽織姿に、腰に長刀をさした物々しい姿である。「村役人だ」彼女は、その直感が來ると、もう凝乎としてゐられなかつた。

「奉行所からですか。どんな御用で」

と、性急に訊ねかけた。聲の調子も張つてゐる。

「あゝ、乙名の役宅から參つた者だ。長崎の奉行所から久兵衛の遺子三人を捕縛して來いとの達しを受けたに依つて、我等二人出張したのぢや。子供は何處に居る。神妙に渡したら宜からう」

「えゝつ、夫れでは……」

　おゆうの聲は高かつたが、別に愕いた樣子も見えない。いや、覺悟して待つてゐた結果の早かつたのを喜んだのである。

「はい。捕縛なさるのは子供許りでは御座いますまい。妾も――妾も勿論のことで御座いませう」

「いや、お前を同道する必要はない。我等が命を受けたのは、お前の子供を捕縛して來いとのことだつた」

「えゝつ、ど、どうした譯で御座います。何故妾の子供を死なせてこの母の御仕置をなされませぬ。子供の罪は母の罪よりも重しと思召されるのか。此子供を御仕置なされるのも、元はと云へば妾故のことでは御座りませぬか。良人に罪あらば、その罪は妻に及ぶのが掟ではありませぬか。それに子供を殺して、この母を殘すとは、恐れながら合點致し兼ねまする」

「いや、お前の言ふ事は一理あるが、その事を我等に言つて

も無駄な事だ。左様なことは、我等の預り知らぬことぢや」
役人は冷然として、彼女の心を汲まうともしない。彼女はあきらめねばならなかつた。子供と共に殉教することを……
そこで、彼女は裏庭に遊び戯れてゐた子供を呼び寄せた。長子ミカエルは九歳、次子ヨハネは五歳、末子イナスは三歳の頑是ない年頃である。
彼女は子供に別れるのが悲しいのではなかつた。子供は切支丹のおん主の爲に捕縛されるのである。子供に一時でも離れることは痛い悲しいことに違ひないが、信仰の上に立つて見れば、子供は今、殉教して父や祖母のゐる天國へ昇つて、デウスの永遠の聖寵を受けようとしてゐるのである。悲しいと云ふよりも喜ばしいことである。
「さあ、お役人がお前たちを連れに在らつしやつたのだ。兼がね母が言ひ聞かせた通り、ゼゼス・キリスト樣のお召と思ふて神妙にお供致さなければなりませぬよ」
母の氣持は、子供にそれと解る口氣であつた。彼等は驚きも、また悲しみもせず大人しく奥の室に這入つて、聖水で口を濡して壁間の南蠻佛に向つて十字を切つて祈禱した。最後のお祈りである。祈りがすむとミカエルは母に向て言つた。
「母さま、坊やはデウス樣のお側へ參るのぢや。さあ、この髪を直して、よい着物を着せて下さい」
おゆうは子供の覺悟をいぢらしく思つた。そして、子供の希望を滿してやらうと、後に廻つて髪を直し始めた。三人の子は、物見にゆく化粧でもされてゐるがやうに、大人しく母のなすが儘になつてゐたが、おゆうの身體は顫へ瞼は重かつた。
子供の外出の支度は出來た。役人は彼等を連れ去らうとした。その時、近所の人の知らせを聞いてレオ重助は慌たゞしく畑から歸つて來た。
彼は子供のいぢらしい樣子を見ると言ひたくとも、どう口を切つていゝのか分らない。手足が强張つて、舌は動かない。彼は只、三人の孫を交る交る抱きすくめてゐた。そのうちに目に涙がにじんだ。と、やうやく途切れ途切れの言葉が口から出たのである。
「おゝ、よい覺悟ぢや、それでこそわたしの孫と言へる。いさぎようお仕置きを受けてデウス樣の側に參るのぢやぞよ。パライソに行つても爺のことを忘れてはなりませぬぞ。爺も早うパライソに行かれるよう。ゼゼス樣のお側で祈つてお呉れ」
「あい、忘れないでお爺さまの爲にお祈り致します」
「おゝ、好く言つて呉れた」

重助は、今一度、ミカエルの身體を力一杯抱きしめた。子供の此言葉を彼はどれ程嬉しく聞いたことであらう。

――子供は役人に引立てられた。小さな歩みをいそいそと、樹の間に消した。重助の家に、噂を聞いて集つた異敎徒は、その後姿を見送りながら、

「天使ぢや、デウスのお使ひぢや」

と、囁き合つたのである。

その四

いつの間か、空は青々と、太陽はさんさんと輝いた。庭の葉櫻は裏を返して狂つた。おゆうは涼しい風に、肌をすくすくと撫でられながら、いつまでも物思ひに沈んでゐた。

「子供たちは今頃どうしてゐるだらう」

さうした思ひの後に不思議な感情が彼女を襲つた。彼女は、悲しくも嬉しくもない。愛するものが自分を振捨てて、幸福さに赴くことは妬ましいやうな羨やましいやうな、一種言ひ表し難い感情である。殊に此事が、宗教的な神秘さに包まれてゐるだけに、彼女の氣持を一層復雜にした。言ひ換へれば子供の幸福を喜んだ後に、自分のみじめな立場の反省からの空虛な氣持に、彼女はあくあくと惱んでゐるのである。

その時、玄關に足音がした。

「誰だらう」

彼女は立上つた。しかし心は形のやうに輕快ではなかつた。足音の主は、先刻の村役人である。

おゆうは今度こそは自分であらうと喜んだ。――「お役目御苦勞に存じます。神妙にお繩をお受け致します。

併し、それは彼女の早合點に過ぎなかつた。捕へらるべきものは、矢張り彼女ではないのである。

「退け、お前を召取りに來たのではない、召取るのはお前の父重助ぢや」

その聲に、裏庭にゐた重助は、いよいよ自分も神のお召を受けるのだと、喜んで役人を迎へた。

彼は、その足で、西坂の刑場に引かれることになつた。西坂の刑場は丘一つ越えて長崎の港に面してゐる。重助が刑場に引かれた時は、竹矢來は黑山のやうな見物人で圍まれてゐた。彼等は口々に、勝手な噂を交はしてゐた。噂の中心になつてゐるのは三人の小さな殉敎者であつた。云はずと知れたおゆうの愛兒である。

三人の幼兒は、今や斬首にならうとしてゐる。非人は、ミカエルの後に廻つた。ミカエルは、大人しく首をさし伸べて、

最後の祈りを捧げてゐた。非人とても同じ人の情を持つものである。どうして無雜作に刄を下し得よう。殊にいたいけな子供の身體に。

彼は幾度か躊躇した。馴れた手先は鈍ひ、常になく心は亂れた。然し時は來てゐる。いつ迄も斯うしてゐるべき場合ではない。彼は思ひ切つて刄を落した。が、第一の刄はミカエルの肩先を輕く斬り下げたに過ぎない。ミカエルは泣き叫びながら倒に臥れた。そこに第二の刄が下され、ミカエルの魂は昇天したのである。

非人は、ほつと吐息してヨハネに向つた。顏色も蒼白く、吐く息も荒々しい。心後れてゐる彼は、ヨハネの首もまた一太刀で落すことが出來なかつた。

イナスは僅か三歳である。彼は未だ好く坐れないので、莚の上に足を投げ出して、合掌してゐる。圓々と肥へた彼の頰には、血の色が漲つて、可愛さはひとしほ深い。イナスの後に廻つた非人の心中も察してやらなければならない。彼は正狀を失つたものゝ如くである。振りかざした刄は、見物人の目にも其震へが解る程である。また斬り損じるのは當然である。見物人の同情はイナスに集つた。彼等の同情は、イナスの命を救けることに動くのではない。イナスの苦しみを短かくして殉教させることである。

「斬り手を替へよ――」

「斬り手を替へよ――」

見物人は騷然となつた。然し其願ひは容れられなくて、非人の太刀はナイスの身に加へられた。が、案の如く首は落ちづにイナスの身體は、悲鳴と共に横に倒れた。そこに第二の太刀を、狂つた非人が力任せに斬り下げた。その太刀は幼兒の首を落して、なほ土深く喰ひ込んだのである。

記錄に依れば、此時の處刑ほど殘酷な感銘を見物人に與へたことはなかつたさうである。それを側から、見てゐた重助の心は如何程であつたらう。彼は心の動搖を、信仰の力で僅かに押へることが出來た、彼は一心にデウスの御慈愛を求めながら、その氣持に打ち克つことが出來たのである。

三兒の殉教を見屆けたレオ重助は、何ら心殘すこともなく、新に入れ代つた斬り手の太刀を受けて、安らかに地を去つたのであつた。

惡魔は、その頃から空を暗らくした。そして雲の如く空に集つて、殉教した小兒の生血を吸つたのである。夕暮れのことでもあるし、惡魔も空腹であつたのであらう。その舌皷の音は雷の如く響いて、見物人を四散せしめた――と、さう

長崎の傳說は傳へてゐる。

その五

アガタおゆうの、其後の生活は寂しいものであつた。良人も姑も子供も、また實父を奪はれて、世に賴るものもなく落寞たる地上に獨りながらへねばならなかつたのである。そこに性的の苦痛もあつた。彼女は後家である。悲しみもまた其處に深かつた。

彼女は氣拔けしたやうに呆然、毎日毎日、仕事も手につかないで日を過した。神に祈りを捧げる元氣もない。只、罪業深い我が身を責むるより外はなかつた。

「妾は、神に命を捧げることが出來ぬのであらうか」

敎に殉ぜなければ自然の死を待つより外に道はない。若い自分に天命はいつ下されることやら。さう思ふと、彼女は苛苛とした。狂ほしい氣持になつた。「自殺しようか」……そこには、みだりに命を損ふべからず、とのおん主の誡命があつた。

「あゝ――」

彼女は　沈思の後は必らず溜息であつた。

秋も近よつた。雨戸を洩れてさす日も弱々しかつた。半ば病人のやうに　不規則な生活を送つてゐる彼女は　未だ寢床を離れなかつた。明るい日ざしに、半ば目を開いたが　彼女は身を起さうともしなかつた。呆然、灰色に動いてゐる室ぬちを、見廻してゐた。其内に深い眠りに落ちた。彼女は前後を忘れてゐた。

「おゆう。おゆう」

誰やら、しきりに自分を起す者がある。

「はい」

慌てて、目を開いて見れば、そこに久兵衛が立つてゐる。久兵衛だ。良人だ。「あなた」――彼女は喜びの餘り調子高い聲を出して、良人に近寄つた。

しかし、久兵衛は默念として、嬉しさうな色も見せない。嚴然たる調子で、立上つた彼女に斯う言つたのである。

「おゆうよ。靜かに聞け、たゞ一言御身に告げることあり。今生は夢まぼろしの如し。御身の今の苦しみも、御身の修行一つに依ることである。美しきもの、苦しきものも死に逢へば忽ち泡の如く消え失せる。しかも時の經つは隙間ゆく白駒のならひぢや。移り行く世の姿の心の總てを奪はれて、久遠常住のパライソの勸行を怠るとは、何たる愚かしきことぞ。心して神を稱へよ」

と、言つたかと思ふと、久兵衛の姿は忽然として消へ失せたのである。

「あッ」

夢だ。――夢は醒めたがおゆうの心から、今の良人の言葉が、いつ迄もいつ迄も去らなかつた。と、同時に、さまざまな感情が彼女の氣持を閉ざした。殉教することの出來ない苦しみ、良人や父や愛兒を失つて廣い浮世に誰一人頼る者もない寂しさ――そこに此夢のことが彼女の心を攪つて、暗い氣持を一層暗くしたのである。いや、自分で自分の氣持を押へることが出來ないやうになつたのである。何故かと言ふに、寢床から離れた彼女は既に氣が狂つてゐた。どうにも手に負へない淺ましい女となつてゐた。

――その後、アガタおゆうの運命はどうなつたか、記録は甚だ曖昧であるが、わたしの手許にある傳三郎衛門と言ふ切支丹伴天連の日記に左の一項がある。

『このほど夜毎夜毎に海邊をさまよへる老婆あり。身には襤褸々々の衣服を纏ひて物腰始好正氣の人と思へざるも、昔はさぞや美しかりし人なるべし、何處の人か知らず、名を問へばおゆきと答へ、多くは語らざるも切支丹信徒なるべし。いつも手には白百合の花を持ちおらつしよを口誦さみて狂ひさまよへるは、奇異と云ふもまた淺ましきことなり。』

右の文中におゆきとあるは、おゆうの間違ひであらう。傳三郎衛門の手記に信を於いても好いとすると、おゆうは氣が狂つてからも、隨分長らく生きてゐたものである。

惡魔は氣の狂つたおゆうに、白百合の花を持たせたのは、詩趣を加味してのことか或は――美しき榮華は此花の一つに及ざりきと、心ゆくまでに皮肉な遊戯心の滿足を續けたのであらうか。

なにはさて、人の世の苦しみは紅毛の惡魔がはびこるやうになつてから一層甚だしさを加へたと、ものの書に見えてゐる。そして惡魔は女を苦しめ傷づけてヒステリーになれ、而して氣狂になれと強ひてゐる。そこに惡魔の樂園、パライソ・テレアルはある。

パライソ・テレアルは惡魔が人生に敎へた苦惱の安息場である。

（十三・六・二六日作）

猫の死骸

萩原朔太郎

海綿のやうな景色のなかで
しつとりと水氣にふくらんでゐる。
どこにも人畜のすがたは見えず
へんにかなしげなる水車が泣いてゐるやうす。
さうして朦朧とした柳のかげから
やさしい待びとのすがたが見えるよ。

うすい肩かけるからだをつつみ
びれいな瓦斯體の衣裳をひきづり
しづかに心靈のやうにさまよつてゐる
ああ　浦　さびしい女！
「あなた　いつも遲いのね」
ぼくらは過去もない未來もない
さうして現實のものから消えてしまつた。…………
浦！
このへんてこに見える景色のなかへ
泥猫の屍骸を埋めておやりよ

螺旋哲學の食卓講座

内田魯庵

「犬・猫・人間」が大正・明治の隨筆中の第一の名作だとは萬人の均しく推讃する所だ、今茲に内田氏の本書に對するいとも趣味深き批評を掲ぐ。

○

長谷川如是閑の「犬、猫、人間」は此頃での會心の快著である。如是閑は旋毛の曲った王國の哲人、何でも物を螺旋的に考へる名人である。且總ての者を裏から見て時々表面を忘れて了う。鼠を取らない猫に同感したり人間に噛みつく犬を正認したり、脚の無い人間を想像して見たり四本足の動物を二本足で立たせようとしたり、如是閑で無ければ云へもせず考へもしない。人間の賢愚は脳髄の襞の密度に由つて定まるさうだが、如是閑の脳髄は唐獅子の毛のやうに處々でドグロを卷いてゐるらしい。どんなものでも正面から直線的に見ないで、側面や背面か、屈折的に或は拋物的に或は放射的に見て縱斷面や横斷面や斜斷面を想像したり、角兵衛獅子のやうに逆さ立ちして下から覗いたり、飛行機の上から見るやうに垂直的に見卸したり、立體を平面に、圓體を多角體に假想したり、四方八方から變則的な不思議な見方をする。其上に如是閑は時々二二が五だの六だのと勝手な玉を彈いて讀者をマゴつかせる。が、ドンナ變てこな看方をしてもドンナ出放題の玉を彈いても結局最後の算盤とキチンと合はして煙に卷いた讀者を首肯かせる。『犬、猫、人間』は即ち如是閑の螺旋哲學の食卓講座で、丁度メリゴラウンドでグル〳〵廻されて最後にドカンと投り出されたやうな氣がする。が、眩暈がするやうな感じがしても氣を喪ふやうな事はなく、魅されたやうでもあり數へられたやうでもある。誰も覺えがある人間通有の弱點が揶揄されたり飜弄されたり罵倒されたりしてゐる。如是閑の諷刺には姑が嫁をイビルやうな意地惡さ、南京蟲に螫されたやうな痛痒さは少しも無くて、丁度名人の鍼醫に金の針を打込まれたやうなスッキリしたイヽ感じを覺える。水島爾保布のものを讀むと平掌でピシャリと打たれたより細い指で抓られたやうな氣がするが、如是閑の背筋をチクリと刺されて頭の頂邊から足の爪先迄擽くやうな感じがある。尤も二人乍ら名人だから痛くない（長谷川如是閑著「犬・猫・人間」「定價壹圓八十錢改造社出版）



遍路行

荻原井泉水

青い海の中から、むつとりと島が、小島が綠の脊を、又、頭を出して春の光を浴びてゐる。四年以前の春、眺めた通りの麗かさである。私の乘つてゐる汽船が瀬戸内海の島の間を縫ひながら、其等の島の内では最も大きいといふ小豆島に――そこの中心である土床の港に――着けられ時、こゝのIが棧橋に立つて私を迎へてくれたのも四年以前と同じ風である。麥の穂が長く綠に光つてゐるのも見た、雲雀が高く幽かに鳴いてゐるのも聞いた、其間の水を傳ふて來て、淵崎といふ所のIの家では、曾祖の古い昔からあるらしい大きな柳がしつとりと葉を垂れ、庭石の苔むした上に梅の若葉が鮮かな光と影とを揺いてゐる。緣に置いた籐椅子まで、此前に私が腰をおろして、無雜作に据ゑた其儘に斯うして置いてあるのか、とさへ思はれる。

×

以前、此島の此Iの家へ、私は妻と一緒に來てゐた。小豆島といふよりも「島四國」といふ方が世間に知られてゐるやうに、此島には四國八十八ヶ所になぞらへた弘法大師の靈場があり、其を參拜する巡禮を遍路と云つて、春は殊に其遍路

達の禮讃の聲が、至る所に滿ちてゐる。私はIから遍路達の精進に就て、歸戒に就て、又お互に未知の彼等が佛の道の同行として信實を施しあふといふ話をも聞いた。空の光といひ、海の色といひ、山の形といひ、草木の匂ひといひ、こゝの自然が實に美しいものである上に、佛の慈悲、人間の親愛が、あつまり、花さいてゐる、こゝの風俗をめづらしく、尊いものと思つた。Iは私達の爲めに山の別莊を與へてくれたので、私はそこの主人のやうに寛ぎ、妻は谷の水で濯ぎ物などもして、二人は心から平和に、而して、此地が二人の氣に入つて半月餘りもとゞまつてゐたのである。其時、麥の穗の間に遍路の白衣姿が通るのを見、雲雀の聲に和して遍路が振る鈴の音を聞きながら、私はいつか遍路に歩きたいものだな、とほんの興味としての輕い氣持から云ひ、Iも其時にはお伴しませうと笑つたりしたが、私は其後、妻だけがゐる時、少し、しんみりとして、

「何だな、爺さん婆さんになつて、あんな風に二人で巡禮してあるいたら、面白いだらうな」

「そりやいゝわ、けれど私、そんな年まで生きようとは思はない」

「ぢや、お前が先に死んだら、其供養におれが歩るいてやらうか、若しおれが先に死んだらお前がおれの爲めに歩くか……」

「えゝ、でも、そんな事は決してありませんわ」

斯んな話をしたかと思ふ。而して私は今、亡き妻の爲めに、私一人が、其遍路として島の佛に詣でる爲めに、此島に渡つて來たのである。

×

亡き妻の供養の爲めに――之も、私が遍路行願を企てた動機の一つには違ひない、まして、苟めながら妻とかはした言葉もある。然し、それだけの爲めにわざ〱此島に來たのではない。

妻が急の事で歿してから、私は妻の短い生涯に就て、彼を愛するよりも、如何に多く彼を苦しめて來たかといふ事を顧みさせられた。其後、やがて私の母も亦歿した。私は母の恩愛に對して何一つ酬ゆる事をせず、世間なみの安心をすら得させずして逝かしめた事が悔いられた。是は皆、私の主我主義の爲めである。人の命の無常を痛感せずして自分の心の淺いはからひに從はせようとして、妻をも母をも其犠牲にしてしまつたのである。私は妻や母の死を悲しむといふよりも、取返しのつかぬ「惡」を犯した事の自責の念に苦しめられ通

した。私は頭を剃つて、佛門に入つたならば、其苦しみから免れられようかとも思つた。然し、其は私の機縁の熟しない爲めに許されなかつた。それでは、せめて、白衣を着、頭陀袋をさげ、佛を尋ねて旅する遍路となつて精進懺悔の行願をしよう、さうしたらば幾分か私の心も輕くならう。――これが私の遍路として此島へ來た他の一つの動機である。――然し、それだけの爲めではない。

　私は自分の罪は救はれ難いものと思つてゐる。けれども、自分が斯うして生かされてゐるといふ此事實が其まゝ、大きな佛の慈悲に依つて、私が許されてゐるといふ事の證據ではないのか。されば、私は自分の大きな罪に就て、自分を責めるよりも、其程の罪をも許してくれる、一層洪大無邊な佛の愛に向つて感謝すべきではないか。其佛の愛とは、枯れきつた冬木から新しい春の芽を吹かせる太陽の光其物ではないか、私は自分のかたくなゝ心を以て、自分から其魂に暗い影を作つてゐるのではないか。あゝ、自分の心の暗い室を出よう、春の光の中に出よう。小豆島の輝いた海と空、麥の中の道、彼處へ行つて思ふ存分に、光明の中にひたらう。心に光明を禮讃しながら、口に眞言を唱へながら、身を運んで隨所の佛を詣拜しよう。さうしたならば、心の底から自分のさびしい生命の貴さをも痛感し、同時に佛の悲願のありがたさをも體驗する事が出來よう――これこそ私が遍路として此島へ來た最も主なる動機である。

　あゝ、私の求める所の佛は、必ずしも堂の中に祀られてゐる所の彫像ではない。道端に咲いてゐる蒲公英の一本、畑から簇立つてゐる麥の穗――其美しさ、其の生きる力に若し私の心がぴつたりと合せる事が出來たならば私は恭しく合掌するだらう。以前此島に遊んだ時の作。

　　佛を信ず麥の穗の青き眞實

といふ拙い作にも、私は今、斯うした私の心を寄託したいと思ふのである。

　麥の穗の青さに佛を見、雲雀の聲に佛の言葉を聞きながら、おゝ、私は獨り、限りなく、旅をつゞけてあるきたい。嘗て、母が病み又妻が病んでゐる時、私は殆ど旅に出るといふ自由を持たなかつたが、妻が歿し、母が歿し、全く私一人となつた時、これは又何と存分に與へられた「旅をする自由」であらう。然し、此の存分に與へられた自由の淋しさを、誰が知らう。

×

遍路の身につけるものとしては多少の支度を要する。白

衣、頭陀袋、白い脚胖、白い手甲、納札筒等は新たに作つて持つて來た。檜木笠、金剛杖、納札筒、鈴などを此地で求めて貰つた。靈場の一つである西光寺の住職にして、近頃私達の同人となつたGが、支度に就ての一切の指圖をしてくれた。白衣と金剛杖とには梵字を、頭陀袋には「南無大師遍照金剛」といふ文字もGが書いてくれた。檜木笠には「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」といふ文字、納札筒には「奉納四國八十八ケ所靈場巡拜、同行二人」と、住所姓名月日、是は私が書いた。外に念珠、參拜靈場の順序里程などを記した地圖。

×

私は素より單身でも――といふつもりだつたが、Iが共に連れるといふ、Iは途中の雜費などを自ら拂ふて私の心を煩はすことのないやうに、とのつもりもあらう。Gも共に連れるといふ、Gは靈場の案内役として、又、私が同向しようとする佛の爲めにも經を讀み添へてくれるつもりであらう。Iの老僕玉七といふものも連れるといふ、彼は私達の爲めに雨具、辨當の類を荷うてくれようとするのである。私はIから物施を受け、Gから法施を受け、玉七から勞施を受ける。ありがたい事である。遍路は皆「同行二人」といふ文字を笠に戴いてゐる　これは誰もが弘法大師に依つて守られ扶けられてゐるといふ意味を聞くが、私も遍路として先づ斯樣に惠まれた事を感謝しなければならない。而して、IはIとして、自分の生れた島を今日初めて遍路として一周する機會の惠まれた事を喜んでゐる、GはGとして、私と共に數日の起臥を共にして語り得るといふ事を喜んでゐる。而して玉七は玉七として――彼は熱心な信仰家で、主家に暇がない時には、拔け參りをしても一年に一度は遍路をするといふ爺だが――今年は公に、ゆつくりと遍路が出來るといふ事を喜んでゐる。

×

私達が打揃ふて遍路に出たのは五月七日である。其朝、私は亡き妻を紀念する爲めに碑の文字を書いたりして居たので、出達したのは、朝も遲くなつてゐた。私とIとは單衣の尻をかゝげ、腰蒲團といふものをつけ、――これは尻の先にひら〳〵してゐて、何處の岩の角、土の上に腰をおろしても其儘尻に敷かれるやうに考へたものである――草鞋に脚を堅めた。Gは法衣をつけ、朴齒の下駄をはいてゐる。玉七は荷物を振分けてつけた天秤を擔つてゐる。皆が檜木笠を被つてゐるので、Iは自分の土地とて行きずりの人の知らぬ者とて

ないのであるが、其とは氣づかれずに行く。たまに、Iを認めた者が驚いて

『おゝお遍路に御出やりやすか……西光寺さんも御一緒で――』

と聲をかける。御遍路も幾人か通らぬではないが、斯うした四人一組の風體はめづらしい。顧ると、從者玉七の古風な姿が紺青の海を背景にして、古い名所圖繪から脱け出したやうでもある。

×

遍路は島を右めぐりにするのを普通とする。札所の番名は必ずしも路の順と一致しない。私達の打初めは、先づ五十七番淨源坊である。本尊地藏菩薩、Iが小錢を用意した金巾を取出して、先づ私達の爲めに御蠟をあげてくれる。Gは「拜し奉る此の處の御本尊、大師、大神宮、鎭守、總じて日本大小の神祇、……父母師長、六親眷屬、乃至法界、平等利益」と祈念文を誦する。而して皆が夫々に願文と姓名とを記した納札を佛前に捧げる。私は、自分のものゝ外に亡き母と亡き妻と亡き子との爲めに戒名を記して來た別の納札三葉をも添へて捧げる。

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴
從身語意之所生　一切我今皆懺悔

私達は聲を揃へて斯く唱へるが、此の懺悔文は、私にとつては、私の感情を本當に突詰めて打出した所のものである。私が今、佛の前に立つて懺悔しようとする所の心が斯くも端的に斯くも適切に云現はされて居て、其が自然に私の口に上せしめられるといふ摩訶不思儀に私はしんじつ打驚くのである。昔から此語句を口にした人は何億人に上るであらうが、多くは斯る場合のきまり文句として誦するに過ぎないであらう。然し、私こそ是を本當に自分身自の言葉として述べる、心の底から述べる。是こそ私をして唱へしめる爲めに作られてあつた言葉であるかとさへ思はれるのである。たゞ／＼合掌する外はない。

×

「へんろみち」と記して「指さし」を添へた道標が岐れ路の何處にも立つてゐる、多くは石で或は畑の隅などに――さうした處には青い麥の穗が二三本、石の面に垂れかゝつて、そのまゝ一つの俳諧である。次の札所、六十五番、光明庵では、堂守の女が一人ゐて、お蠟を上げる者の爲めに、般若心經を誦してくれる。それは私達も佛を禮拜する毎に必ず誦するのであるが――。

衣、頭陀袋、白い脚胖、白い手甲、納札筥等は新たに作つて持つて來た。檜木笠、金剛杖、納札筥、鈴などを此地で求めて貰つた。靈場の一つである西光寺の住職にして、近頃私達の同人となつたGが、支度に就ての一切の指圖をしてくれた。白衣と金剛杖とには梵字を、頭陀袋には「南無大師遍照金剛」といふ文字もGが書いてくれた。檜木笠には「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」といふ文字、納札筥には「奉納四國八十八ケ所靈場巡拜、同行二人」と、住所姓名月日、是は私が書いた。外に念珠、參拜靈場の順序里程などを記した地圖。

×

私は素より單身でも——といふつもりだつたが、Iが共に連れるといふ、Iは途中の雜費などを自ら拂ふて私の心を煩はすことのないやうに、とのつもりもあらう。Gも共に連れるといふ、Gは靈場の案內役として、又、私が回向しようとする佛の爲めにも經を讀み添へてくれるつもりであらう。Iの老僕玉七といふものも連れるといふ。彼は私達の爲めに雨具、辨當の類を荷うてくれようとするのである。私はIから物施を受け、Gから法施を受け、玉七から勞施を受ける。ありがたい事である。遍路は皆「同行二人」といふ文字を笠に戴いてゐる　これは誰もが弘法大師に依つて守られ扶けられてゐるといふ意味を聞くが、私も遍路として先づ斯樣に惠まれた事を感謝しなければならない。而して、IはIとして、自分の生れた島を今日初めて遍路として一周する機會の惠まれた事を喜んでゐる、GはGとして、私と共に數日の起臥を共にして語り得るといふ事を喜んでゐる。而して玉七は玉七として——彼は熱心な信仰家で、主家に暇がない時には、拔け參りをしても一年に一度は遍路をするといふ爺だが——今年は公に、ゆつくりと遍路が出來るといふ事を喜んでゐる。

×

私達が打揃ふて遍路に出たのは五月七日である。其朝、私は亡き妻を紀念する爲めに碑の文字を書いたりして居たので、出達したのは、朝も遲くなつてゐた。私とIとは單衣の尻をかゝげ、腰蒲團といふものをつけ、——これは尻の先にひら〳〵してゐて、何處の岩の角、土の上に腰をおろしても其儘尻に敷かれるやうに考へたものである——草鞋に脚を堅めた。Gは法衣をつけ、朴歯の下駄をはいてゐる。玉七は荷物を振分けてつけた天秤を擔つてゐる。皆が檜木笠を被つてゐるので、Iは自分の土地とて行きずりの人の知らぬ者とて

ないのであるが、其とは氣づかれずに行く。たまに、Ⅰを認めた者が驚いて

『お丶お遍路に御出やりやすか……西光寺さんも御一緒で——』

と聲をかける。御遍路も幾人か通らぬではないが、斯うした四人一組の風體はめづらしい。顧ると、從者玉七の古風な姿が紺青の海を背景にして、古い名所圖繪から脱け出したやうでもある。

×

遍路は島を右めぐりにするのを普通とする。札所の番名は必ずしも路の順と一致しない。私達の打初めは、先づ五十七番淨源坊である。本尊地藏菩薩、Ⅰが小錢を用意した金巾を取出して、先づ私達の爲めに御蠟をあげてくれる。Gは「拜し奉る此の處の御本尊、大師、大神宮、鎭守、總じて日本大小の神祇、……父母師長、六親眷屬、乃至法界、平等利益」と祈念文を誦する。而して皆が夫々に願文と姓名とを記した納札を佛前に捧げる。私は、自分のもの丶外に亡き母と亡き妻と亡き子との爲めに戒名を記して來た別の納札三葉をも添へて捧げる。

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴
從身語意之所生　一切我今皆懺悔

私達は聲を揃へて斯く唱へるが、此の懺悔文は、私にとつては、私の感情を本當に突詰めて打出した所のものである。私が今、佛の前に立つて懺悔しようとする所の心が斯くも端的に斯くも適切に云現はされて居て、其が自然に私の口に上せしめられるといふ摩訶不思議に私はしんじつ打驚くのである。昔から此語句を口にした人は何億人に上るであらうか、多くは斯る場合のきまり文句として誦するに過ぎないであらう。然し、私こそ是を本當に自分身自の言葉として述べる、心の底から述べる。是こそ私をして唱へしめる爲めに作られてあつた言葉であるかとさへ思はれるのである。たゞ／＼合掌する外はない。

×

「へんろみち」と記して「指さし」を添へた道標が岐れ路の何處にも立つてゐる、多くは石で或は畑の隅などに——さうした處には青い麥の穂が二三本、石の面に垂れかゝつて、そのまゝ一つの俳畫である。次の札所、六十五番、光明庵では、堂守の女が一人ゐて、お蠟を上げる者の爲めに、般若心經を誦してくれる。それは私達も佛を禮する每に必ず誦するのであるが——。

×

海添ひの崖道にかゝると、風が強く出て來た。笠が吹きとられさうである。笠の緣に手をかけてゆく。小さな村に出る。低い、古い家の一つから聲がして、

「お遍路さん、お摂待がございます」

と呼びとめられる。振返ると、豆飯をへぎ盆に盛つて、待つてゐる。私達と同じ風をした同行の衆が箸を動かしてゐる。又、行くと、道端に遊んでゐる子供が走りよつて來て合掌する、而して其手を明けながら差出して

「お遍路さん、豆おくれ」

といふ。炒豆を袋に入れて持つて歩いて、道の子供に與へるのが習ひともなつてゐるといふが、私達は持合せなかつたのである。

×

伊喜末の松林寺といふ第六十八番の札所で、初めて納經の御判を受ける。昔は筆寫の經を奉納して其受領の印に御判を受けたものであらうが、今は僅かな金を納めればいゝ事になつてゐる。私は白衣の布の上に其御判をいたゞく、之れを八十八ケ所から受け終る時には、白衣の背も袖も眞赤に染まつてしまふ事であらう。

笛の音も松吹く風も琴引くも
　唱ふも舞ふも法のこゑ／＼

私達は誦經を終へて、本尊の前に揭げてある松林寺といふ名に因む此詠歌を見てから、其緣を借りて、晝の物をすませようとする。一行中にGが居るので、住職が出て、皆に座敷に上つて休んでゆくようにと云ふてくれるが、熱い茶だけを貰ふて、玉七が擔ふて來たバスケットの中から皆の分を取り出す。柳行李の辨當箱も古風にして珍らしい。別の小さい器からは、昆布の煮しめ、鹽豆の甘煮などが出る。其を皆なしてつゝきあふて、殘つた分は、次の折の爲めとして玉七が又丁寧に仕舞ふのである。

×

こゝまで來ると、小豆島の西北端になる。島の周りには、小さな島が限りないほど點綴されて、其が相似てはゐるものの、又、相異つてゐて、それ／＼の風景をつくるのであるが、こゝの海上近くにある沖の島の眺めは殊に佳い。岸と島との間の水が深く、流れが速い處を小江の瀬戸といふ、風を避けた船が幾艘か碇泊して、潮の色に濃い影をひたしてゐる。中國へも程近い、備前の牛窓へは三里と聞く。まん／＼とした海の藍を隔てゝ、山陽の山、岬、港などが明るい緣を以て塗

り上げられてゐる。それは、まことに刷毛を以て描き上げた如くでもあるが、寧ろ造物主の大きな手で土をひねつて盛りあげたといふ風である。ともかく、暫く山の蔭を歩いて來た眼に、此の美しい展望をつきつけられると、大きな創作に對すると同じ心持の驚嘆を感ずる。はるかに雪を戴いて輝いてゐるのは伯耆の大山ださうな。

×

札所の中には、ほんに小さくて、古びた辻堂のやうなものもある。六十七番、瑞雲堂、六十九番、瑠璃堂など——其等の堂では、雨の時の參拜者を庇ふ爲めであらう、堂の前に別にさしかけの洞ろの堂を作つてあるので、本尊のあたりは、しんに暗く、そこに小さく黄色の蠟燭の花がヒラ〱と咲いてゐる。ふしぎなる情趣である。さしかけの堂には幾つかの緣臺をおいて、遍路達の疲をねぎらふものとしてあるが、其は又、村の婆さん達が腰を休める日蔭ともなつてゐると見える。筵を敷いて赤子が寢かしてゐる。

「お婆さん、お遍路さんが蠅を追ふてくれやはりましたわ」

「それはそれは、ありがたい事でござんした」

用足しに其處を離れたらしい婆さんが赤子を抱き上げる、蝶があたふたと飛んでゐる。

×

笠瀧山の岩石を縫ふて僅かに足がゝりの小徑が作つてゐる。其道端の岩の上には、千手觀音、十一面觀音、阿彌陀如來、藥師如來などの小さな石像が其々に願主の名を刻んだ臺石を以て建てられてゐる。Gはさうした險しい岩路を、朴歯の下駄でコチ〱と踏んで行く。私達の杖の音も岩の頭に當つてコチ〱と鳴る。山が高くなるに連れて、風はいよ〱強く、笠をつけてはゐられないので、笠は木の茂みの中に結びつけて登る。そこからは鎖である。絕頂から鎖の音が響いて來る。——本尊不動を祀つてある所は其中腹岩窟の中である。其下に舞臺を組み掛け、護摩の土壇を築いて、參拜に便してある。お蠟を上げると、

「申の歳午の歳の夫、諸願成就の爲めに二燈」

堂守が呼び上げる

「へーい」

丁度、不動明王の在すあたりで、可愛いらしい子供の聲がする、そこの岩窟の中に本尊と共に子供をひそませて、蠟の火をつけさせてゐるのである。

×

笠瀧山を下りると第七十二番、瀧湖寺である。本尊無量壽如來の前に祈念、懺悔、歸戒、菩戒誓言、眞言、廻向と申し、型の如く納經の御判をいたゞき終ると、寺の人々が私達に切りに泊つて行けとすゝめられる。Gは此寺とは親しく、Iも爰の住職と相識であるといふ――

「是は珍らしい、さあさ、ゆつくりなされ……これから先へ行つたとて、なんぼも行けやせん、風呂も沸いとるし……」

氣輕な住職は斯う云つて、それから玉七に

「さあ、荷物はあちらへ運んで……皆さんの杖を濯ぎなされ」

と云ふ。まだ日は高いのであるが、親切に甘へて、泊めて貰ふことゝする。境内には八重櫻が多い、花瓣の青白い色をした、極めて遲咲きの一種と見える。それが風呂の中にまで美しく散り敷いてゐて、遍路に出た身に勿體なくも、斯うして早くから佳い宿を得て、綺麗な風呂をつかはして貰つてゐる夕べの明るい心に、其落花がひた〱とはりつくのである。

×

遍路の二日目は雨になつてしまつた。寺では、急ぐ事もあるまいから晴れるまで逗留するがよいと云ふてくれる。私達は雨具の用意もして來た事であるし、途中の困苦はさして厭はないけれども、押して强行するまでに力む程の事でもない。IとGとから、「どうしませうか」と私の意志に依つて定めるやうに問はれて見ると、私自身は兎も角、私の爲めに二人を犧牲にしては悪い、といふ氣持も起つて、「では、もう一日御厄介になりませうか」と云つてしまふ。寺では、こゝの饂飩は名物といふ程でもないが……と、晝には自慢の饂飩といふのを打つてくれる。晝すぎから、空が明るくなり、向ひの山で鶯が鳴き、近くの畑で雲雀なども鳴き出して、望みが見えたが、次には雨蛙がケラ〱と鳴き、池の蛙がガヤガヤと鳴き出して、雲雀を沈默させ、而して、又しきりにザンザンと降るのである。

此寺を俗に笠寺といふ、笠瀧山麓にあるからである。「奥の細道」に芭蕉が笠島の郡を過ぎ五月雨に苦しめられて「蓑輪かさしまもさみだれの折にふれたりと……」と書いてゐる。その口調を藉りて云へば、笠寺で雨に降りこめられるのも、折にふれたものかもしれない。

×

三日目は幸に霽れた。第七十三番、小馬越の救世堂といふ札所から札を打ちつゞける。昨一日の雨の爲めに、山路はひ

どい泥濘である。白い草鞋足袋、白い脚絆が忽ちに泥まみれになる。東京の妻の里を訪ふた時、私は近く遍路の旅に出る其仕度をしてゐるといふ事を何かにと話してゐると、姉が「脚絆は白に限るものですよ、何故其を私が氣をつけてゐるかといひますと、あの道端に休んでゐる順禮といふものは、きつと脚絆にハネをあげてゐるものでね、其が白い脚絆なのでよく目立つのですよ」と云ふたので、成程さうかと、わざわざ白いのを作らして來て間に合つたのであつた。

「先生、ずいぶんハネが上つてゐますよ、然し、それですつかりお遍路さんらしくおなりです」

私の後ろから來るIは斯う私に云つた。多分脊中までも、とばしりがかゝつてゐるのであらう。

第七十五番大聖寺といふのは、古びた本堂の軒に澤山の燕が巣くひ、又、欄間には石油箱で鳩の巣が作つてある。燕の聲、鳩の聲、あゝ何と麗かな佛縁ではないか。

×

第七十七番、歡喜寺といふのは、播磨、備前、備中等を眺める展望を占めた所にあつて、佛前の松の大樹には何といふ澤山の雀が集つてゐることであらう。遍路の中には佛前へ米を撒き供へてゆくものがあるので、お札所には、どこでも雀が集つてゐるのであるが――

第七十二番、金剛寺から遠くない所に一つの新しい寺がある。當地の實業家が菩提の爲めに建立したもので、其姓を其まゝ名けて藤原寺といふ。尼さんが一人、住してゐて、金剛寺の住職に案內されて來た私達の爲めに、茶を入れてくださる。年は四十ばかり、まるまると肥えて、眼鏡をかけて、何か話をしつゝ愉快さうに笑はれる。私は此の尼さんを見て、此人は非常に苦勞をして來た人だ、若い時は泣いて暮らして來たのであらう、さうした人生をあきらめ切つて、黒髪を剃りおとして、今はからりとした氣持にはいつた人であるに違ひない、さういふ事が何となく感じられる。斯ういふ女の人と一日しんみり話したいものだ。鶯が好く鳴く處である。

×

島には流が少いが小海のあたりには、山手に瀧がかゝり其が落ちて溪流をなし、其を左にし、右にしつゝゆく路がのびやかである。こゝの山裾に雲故庵といふ淋しい札所が一つある。岩を疊んだ裏山の庭には躑躅がすがれ咲いてをり、其山の中腹には石で垣が築き廻してある。それは鹿垣で、山から鹿が里を荒らしに來るのを防ぐものださうな。こゝは寒霞溪の裏側である。

×

紺碧の海潮を眼下にして、亭々たる石磴を導き、鬱蒼たる松の枝が風に囁くところ――。海潮山觀音寺といふ。第八十番である。まことに

妙音觀世音、　梵音海潮音、　勝彼世間音、

の微妙音を耳にするかと思はれる。こゝにも亦雀が多く、本堂の屋根に顔を並べて何やら囀りあひ、十王堂の縁に下りては跳ねかへり踊り上り、又は持佛堂の賽錢箱の上では交り戯れてゐる。こゝの寺でもGを認めて、今夜はお宿をしようから寛げといふ、然し、まだ正午である。松の葉影が自ら日蔭をなす椽臺を借りて、晝餉とする。お寺から豆腐やひたし物の小皿の数々に酒さへ添へてもてなされる。酒は堅く辭退したが――あゝ然し、何とすばらしい白日の眺望ではないか。

×

札所は何れも次々へ詣ですぎるやうな道の順になつてゐるのだが、打離れて山の中にあるやうな處は、往つた道を再び戻らねばならない、之を遍路の言葉で「うちもどり」といふ。第八十一番、堀拔庵は十八町の打戻りである。さうした道のかゝりには掛茶屋があつて、手荷物などを預つたりするが、道端に何げなく置き捨てゝあるものも多く見受ける、遍路の持つ物は何處に置いても決して紛失する事がない、と云はれてゐる。山路にかゝると、若葉の匂ひがなま〳〵しく息にせまり、念珠を掛けた手に汗が光つて來る、而して白い手甲にまで汗がにじみ出てくる。

「南無大師遍照金剛」

さうした聲が自然と口からほとばしるのである。本尊を祀つた洞窟の前に到つて、檜木笠をとると、ほつと涼しい風が顔をなでる、其風が納め札をひら〳〵と吹く、其札を風に散らさぬやうに長い鐵の紙通しが立つてゐる。脚元には藤の花がぺつとりと散つてゐる、打仰ぐと堂の上を蔽ふ青葉の枝には藤が絡みついて、春の名殘の色をふさ〳〵と垂れ懸けてゐる。

×

惠門嶽への道は登るに隨つて松の林があり、次には杉の木立がしん〳〵として肌さむい。

「お苦勞さんです」

「お早いことです」

上から下りて來る遍路と聲を交しながら私達は上つてゆく。大きな槽に湛へた清水に大きな杓が添へてある、其で手を清めてから、きつたてに削いだやうな巖の腹を鎖にすがり、更に頭上にのしかゝつてゐるやうな巖窟へ、草鞋をぬいで、梯子をつたふのである。巖窟には不動を祀つてある。降魔窟といふ、護摩を焚く爲めに室内は黒くいぶり光つて、黒耀の石を以て飾つた如くである中に、明王の背に負ふ焔が赫尖としてゐる。其窟に續いた第二の窟には弘法大師を祀つて、瑜△

窟といふ。第三の窟には藥師如來を祀つて、瑠璃窟といふ。窟の外に掛け出してある舞臺に立つと、若葉の茂り杉の梢を越えて、海は銀を溶かした如く輝いてゐる。既に夕日である。

×

恵門岳へ登る前に、こゝも亦「打戻り」なので、其麓の少部といふ所の木賃へ宿をとつておいた。

「お遍路さん、あんた、山の不動さんへお行きやしたら、あしこの岩の梯子の下にな、珠數を忘れて來やしたから、取つて來て下さりませ」

「はいはい」

Gは其の頼まれた珠數を、はや薄ぐらくなる中に、あちこちと探つて、梯子の下にはないが、とある岩の上に殘してあつた一つを是だらうと持つて戻つたのである。木賃には、既に大勢の御遍路達が泊つて、まだ灯のついたばかりであるのに、床に入つてゐる者もある、彼等は夕飯をすますと直ぐに寢て、朝は暗い中から立つのが例である。私達は二階の座敷へ案内されたので「六疊へ十人」といふ風な窮屈な思ひはせずにすむらしい。けれども、女中が座蒲團を持つて來るでもなし、茶を持つて來るでもなし、米は幾程炊くかといふ事を聞きに來、風呂の明いたのを知らせて來たばかりである。私達は脚絆の砂を拂つたまゝで、疊の上にごろりとしてゐる。やがて膳を二つ持つて來て置いてゆく。私は是は二人分で、あと二人分來ることかと思つてゐたが、よく見ると一つの膳には茶碗が二つ付いてゐて一膳が二人分づつなのである。碗の中には麩と干瓢と湯葉とが少しづつ、小皿に菜つ葉がチョボ〳〵。斯ういふ事もあらうとIが家から用意して來た納豆や梅干などを、バスケットから取出して添へる。但し米は、各自がどの位たべるものかも知らず、一升炊けといふたので、飯櫃に一杯あつて、四人かゝつて其半分も消ないのである。

×

隣室の襖が明いて、五十ばかりの女が手に葉書一枚持つて、いざつて來る。

「すみませんが、一つ御願ひします」

「はい、何と書きますか」

「けふ、小部の御不動さんを打つて泊りましたと、それだけ……」

「お所は」

「岡山縣衣笠郡××村……」

Gが承つて代筆する。此の隣の室は女連れの遍路ばかりだと見えて、靜かである。私達も寢ることにしよう。——と云つても、座敷の隅に積んである蒲團を勝手に引つぱり出して、勝手に敷いて、横になるばかりなのである。外はすぐ海だが、しづかな湖のやう、浪も寄せてゐない。七日ばかりの月がうす〳〵と照つてゐるらしい。

子供と科學

子供の理解と科學的心性の開發

谷　騰

ルツソーの懺悔錄が私たちの生活に力強い暗示を與へてくれるといふのは、それが人類の失はれたる無邪氣で充たされてゐる點だと思ひます。カントは道德哲學原論の中に「無邪氣といふことは極めて立派なものであるが、唯これが安全に保護せられず、又誘惑に陷り易いのは、甚だ悲むべきことである」と言つてゐますが、ほんとに其の通りで何等武裝のない子供の無邪氣は無造作に破壞されつゝあります。此の痛ましい事實がヤレ『文化運動』の『兒童の世紀』のと叫ばれつゝある現代社會の實際に於てより甚だしくはないでせうか。果して世の文化の發展は人類に眞の幸福を卽ち人生の意義を齎しつゝあるかを疑はない譯には行きません。斯うして深まりつゝあるとも思へるでせうが、更に又同一平面上の周圍をグルグル廻つてゐるに過ぎないやうな氣もします。

カントの純粹理性批判書の序言の註にあるやうに「現代は眞に批判の時代であります。一切の事情は批判せられねばなりません。宗敎はその神聖によつて、法律はその威嚴によつて批判を免れやうとするのが普通でありますけれど、さうすると彼等は當然なる疑惑を自己に對して招くことになりま

す。そして理性がその公明正大な吟味に堪へおゝせた者にのみ許容するところの僞らざる尊敬を要求することは出來ないことになります。」親たちや教師の重大な仕事である子供の教育も、その本然性によつて批判せらるべき、時代であると思ひます。因襲や傳統が偏見のうちに隨分勢力を得てゐましたけれど、靜かに内省する時當然な疑惑や不安を私たちに對して招いてはゐないでせうか。理性の公明正大な吟味に堪へる力を現代教育は要求してゐると思ひます。又緻密にして電光の如き機鋒を逸しないだけの研究的改良心のデリケートな洞察を欲してゐると思ひます。

家庭や學校に於て、子供に對する直接の教育者としての母や教師の思惟が、思惟の法則に背いて嚴正なる眞理を傷つけ、又それにも増して、自己がいかに殘忍無情であるかに氣付かずに情の理法を蹂躪して、子供の柔和にして純眞なる無邪氣さを奪ひつゝある恐ろしい出來事が、餘りに普通なことになつてゐることを私は殘念に思ひます。神の藝術品であり同時に其素材である子供の處女性を害ねつゝある多くの日本の母師たちよ！貴女たちはさうした權能を神聖にして避くべからざるものとして何時誰から授けられたのですかと詰問したくなります。子供の經驗は夫自身目的であり理想であり最高善であると私は思つてゐます。特に子供の經驗に於てさう思ふのです。決して成人の理想目的によつて評價さるべきものではありません。夫自身絶對的の價値を持つてゐるのだと思ひます。アリストテレースは「それ自身のために求められるものは最高善である」と言つてゐます。子供の生活に於て子供自身に要求する凡ては彼等の究極目的として求めるのであつて決して方便としてゞないことは、生の貧婪者なる彼等の實生活の中に容易に見出すことが出來ます。私たちはもつと子供の前に愼深く謙遜でなくてはならないことを嚴正な意味で要求したいと思ひます。

宇宙の奧底に默々として流れてゐる力の顯現を子供の高貴な個性的生命の生長原理の中に感じる、それは私たち成人の想像だも及ばぬ清くしてやさしいものであるでせう。私たちは自分が嘗てあのファンタシカルな子供であつたことをカラリと忘れてゐます。そしてその天眞の美しい表現をまともに見ることが出來ないまでに私たちの心情が荒涼たるものになつてしまつたことは悲しく淋しいことです。然しそれは無理ないことかも知れません。私たちの虐げられた子供時代の生活が、その基調をなして、因襲の恐しい力で現在の私たちの生活が包まれてゐるのですから。傳統的になつた時既にそ

の本來の精神を失つて型の末些事に捉れてゐることになります。

斯うして子供の教育が嚴正に批判せられるとき、そこに自覺ある母や教師の新しい使命が與へられるやうに思ひます。

ルツソーがエミールに於て「最初の教育は消極的でなければならぬ。」と言つてゐる意味は教育は教へるのではなくて子供の原型的可能的のものを引出すべきであると言ふにあります。積極的に能動過ぎることは獨斷に陷り易いばかりでなく教育を誤るものであります。子供の個性の緻密なる觀察と不斷の考察には積極的態度であり度いのですが、その助成輔導に於ては消極的でなければなりません。事實に於ては母も教師も子供のためにと腐心してゐます、而かも結果に於ては多くは全然害ひつゝあります。それは私たちの教育作業が子供の眞の理解の上に建設されないからではないでせうか「理解は愛の別名」であると言へるでせうが、其の逆說が直ちに眞理であるとは言へますまい。

子供は私たちの知らない廣い世界に住んでゐます。例へば子供の想像にしても西田博士の「想像は作用と作用の結合でアプリオリのアプリオリである」と言はれた境地はそのまゝ子供に適してゐると思ひます。眞に子供の想像は時空を超えて宇宙の無限性に觸れたアプリオリのアプリオリであまりす。彼等は此の奔放的なる內的衝動に驅られて絕えず活動してゐるのです。彼等の享樂すべき世界は實に廣くして自由であるべきであります、子供は子供として生活享樂せしめることが大切であります。私たちが成人の思想によつて子供を束縛しその生活を支配しやうといたしますならば、永久に償ふことの出來ない罅隙を、子供の生長線のうちに殘すことになるのであります。

眞に個性を尊重し、自由な立場において子供を教育し、彼等の個性的生命の生長を助成することが母や教師としていかに樂しく尊い仕事であるかを體驗して頂き度いと思ひます。天眞爛漫で純な心の持主である彼等の生々とした態度、それは常に私たちに瑞々しい魅力と無限の快感とを與へてくれるものです。子供の美しい世界には、成人のさゝくれ立つた神經を醫し、疲れきつた筋肉を力付けるに十分なる凡ての要素が具はつてゐると思はれます。幼さい子供たちは神に近いのでせう。私は神や佛に事へる心持で絕えず子供たちと共に生活し度い、子供に親しむことと自然を樂しむこと私たちにとつてこれ程幸福なことが他に見出せるでせうか。大自然の中に於て子供と自由に遊ぶことそれが私の理想であるのです。

素直で忠實な觀察眼と神秘的な想像力とを具へて自然界に親しむのが幼い子供の生活です。子供の周圍に自然といふ環境がなかつたら子供の心は枯渇して砂漠のやうに荒んだものになり果てゝしまふことでせう。『成人で自然を見ることの出來るものは少い。見るとしても皮相な見方をしてゐる。太陽は成人には眼しか照さないけれど、子供にはその眼に照り入り心に照り入る。自然を愛する人とは內部及び外部の官能が最もよく調和してゐる卽ち幼年時代の精神を成人期まで保有してゐる人のことである。』と言つたエマースンの言葉はやがて人間は子供の時代に於て、自然に接觸することが最も密でその恩惠を受けることも最も深いといふことを反證的に說明したものではないでせうか。子供の心眼を啓發しその生活を潤澤にしてくれるものは實に大自然そのものの力であり「自然と子供の心」とは切つても離すことの出來ない深い關係にあります。子供の自然に對する驚異の心、自然に對する神秘の靈感の鋭利さを誘導することは教育上第一に考慮すべき大切な事柄であると私は思つてゐます。母や教師の言動を最高のものとしてそれに信賴することを強ふる教育は、教科書を自然界に求めて自ら教育する能力の所持者である子供の本性を沒却して自由なる『疑ひの心』を阻止するものだと思ひます。早くから讀むことゝ書くことだけをやたらに強ひて、子供を自然から遠ざける教育は、彼等の自然的興味を無視して卒急に大人らしく卑びさせると思ひます。母や教師が子供の心を尊重しない間は、自然界に焦るゝ子供の心を善導することに努力しない間は、時の流れは永遠に遷り世紀は幾度改まらうとも私たち人類の向上發展――よりよき生への一歩は得て望むことが出來ないのではないでせうか。

私は思ひきつて子供を自然界に解放し度いと思ひます。ルツソーのやうに、ペスタロッチのやうに、フレーベルのやうに自然界の中に於て教育し、自然の恩惠に浴せしめなくてはならないと思ひます。自然界には子供が眼で讀むことの出來る奇妙で而かも本當の話が澤山あつてお伽同樣に子供の想像力を伸展してくれると同時に、子供に物の正しい見方を教へて、色彩形態音樂の觀念や、詩の材料を與へて美を愛する心を養つてくれるものです。幼い子供たちはいつもその周圍の對象に鋭く眼をつけ耳を傾けてゐるのです。西の空に堆積した

夕立雲にも、楡の梢に閃めく金色の馬の翅にも、または雲のかげの紫色にも　小さい蝶々の羽根の茶色に輝くのにも驚異の眼をとめてゐます。鳥のオーケストラの樂譜を讀み、どの部分の音をどの鳥が受持つかを聞きわけることが出來ます。窓うつ五月雨の音、松吹く風の深い溜息、溪流のさゝやかなる響。子供はかうしたものでも心にかけて愛しそれによつて心の裕さを靈感し、羨ましい程のうるほひのある生活を續けてゐるものです。自然兒オーパルの日記に『私は寢室の窓からぬけ出して星と話がしたい。彼等はいつも懷しげに微笑んでゐます。生きて行くのに何と言ふ愉快な此の世界なのでせう。』

幼ない子供たちに自然科學の初歩そのまゝを敎へ込まふといたしましてもそれは向きません、成人の觀たる世界を子供たちに口說いたところで彼等には何の趣味も起きないばかりでなく、却て科學そのものを輕蔑して科學的心性の開發を妨げる結果に陷り易い傾向を持ちます。子供の注意と興味を喚起する自然研究の對象は庭に咲く朝顏の花、軒に飼育せる兎、子供の玩ぶ風車等、數限りもなく子供の周圍に見出すことができると思ひます。最も手近にある鳥、昆蟲、草花等の個々の生活を觀察飼育栽培させて子供の經驗を出來るだけ豐富にし、物の見方を正しく指導して行くうちに、遂には科學的の最も良き學び方を體驗するやうになり綜合した知識から定りきつた敎はり方よりもはるかによく自然全體に關する理解を得るに到るものであります。要は子供をして土と空氣と日光とに親しませつゝ、ノンビリとした心持の間に適切な刺戟と暗示とを與へて自ら發見せしめ理解せしめ、想像せしめる如くに導かうとする母や敎師の態度が必要であります。自然科學でなくもつと根本的な本質の自然を對象として、その想ふところを思はしめ、感ずるところを感知せしめ、想像し思索させ度いと思ひます。自由なる子供の心を思ふさま擴充させることに依つて、個性的生命の伸展が遂げられ、やがて自然科學者の態度にまで、哲學者の思索にまで、到達し得るものだと思ひます。私は子供をして何時までも自由に無邪氣に自然に對する「疑ひの眼」を見張らしむるところに、創造進化、向上發展の曙光が認められるであらうことを確信します。

（完）

自然界の不思議と子供

山川菊榮

『お母さん、鯨はお魚?』
『いゝえ獸です。』
『だつて海の中にゐるぢやないの?』
『海の中にゐても、鯨は獸です。お魚の血は冷たいけれども鯨の血は溫いんです。お魚は子供を生む時に玉子で生みますけれども、鯨はちやんと鯨の形をした赤ちやん鯨を生みます。だから鯨は、身體の格好はお魚のやうでも、身體の中は獸のやうに出來てゐるので、馬や牛と同じやうな、獸の仲間です。』此時お父さんが橫から口を添へて、
『おつとせいも海にゐるけれども鯨と同じ獸ですよ。』と說明した。それから水に棲むことは出來ても獸でないもの〻一例として、蛙が擧げられた。ツイ一ケ月許り前に、散步の歸りに小さな蛙をつかまへて來て、お母さんと二人で子供の理科の本と照し合はせて、蛙の特質を研究した坊やは、この事實をよく理解することが出來た。
『鯨も昔、昔、大昔には陸にゐたのが、段々地球の表皮が變つて、陸だつた所が海になつたりしたので、海の中に棲むようになつたのです。』とお母さんがいふと、
『じやあ大地震で鯨の大昔のお祖父さんが陸から海へ落ちたんでせう。』と坊やは應じた。
『いゝえ、大地震で急に陸から海へ落ちれば鯨でも何でも皆な死んでしまひます。そんなに急でなしに、長い〱間に、何萬年だか、何百萬年だか分らないほど長い間に、地球の表の、元は山だつた所が海の底になつたり、昔は海の底だつたりしたところが今は陸になつたりしたので、其間に、鯨の身體も、獸でありながら、海に棲めるやうに變つたんです。』
『さう、面白いね。鯨は人間を食べる?』
『いゝえ、鯨は鰯のやうな小さなお魚しか食べないの。口が

さういふ風に出來てゐるから。』

□

『お父さん、豚のお祖父さんの、お祖父さんの、その又お祖父さんの一番始めのお祖父さんは何だつたの？』

總ての動物は、現在の形が本來のものではなくて、或原始的な祖先から、久しい年代の間に進化したのであるといふことが度々繰返された結果としていつともなしに頭にはいつてゐるので、『始めは何だつたの？』といふのは、動物が問題になる時、必ず發せられる質問の一つである。

『豚とよく似て牙のある動物は何だらう？山にゐるが？』

『猪！』

『さうです。其猪と豚とは、大昔には同じものだつたんです。大昔の先祖は今の豚でもなければ、今の猪でもない、その二つに似た動物だつたが、其子を何千年も何萬年もかゝつて飼ひ馴したのが段々に豚になり、山や野原を荒しまはつたまゝで人に馴らされなかつた方の子供が、猪の大昔のお祖父さんになつたんです。』

『分つた。その一番始めの 猪や豚のお祖父さん はライオンでせう。』

『いゝえ、違ひます。それはモウ無くなつてしまつたのです。今ゐる動物の大昔の先祖は、其大昔の形のまゝでは、殘つてゐないのです。』

□

『お父さん、僕はこんなに小さいのに、僕の影ん坊師はこんなに大きいよ。どうして？』

お父さんと一所に風呂場でじやぶ／＼やりながら、突然大發見をしたやうに坊やは叫んだ。

『モウ少し壁の方へ寄つて御覽』

『アラ、僕が小さくなつちやつた。これぢや影ン坊師と僕と同じ位の大きさだ。向ふにゐると、僕の影ン坊師が大入道になるのに、此方に來ると、こんなチッポケな小僧になつちやつた。どうしてなの？ お父さん。』

『マアお待ち、今お風から上つたら、繪を書いてゆつくりお話しして上げるから。』

お風呂から上ると、襦袢一枚のお父さんと、浴衣姿の坊やとは、お父さんが手近にあつた原稿用紙の裏に、赤インキとで描いた光と影との原則を示す繪を中央にして向き合ひ、蠟燭や電氣の光で熱心に光線の作用の實驗をしてゐた。影ン坊

師の研究の序を藉りて、お母さんは、お父さんと坊やの影繪をとつた。坊やからは、『僕の鼻おでこより低いや』と抗議が出、お父さんは、額の恰好が實物より惡いと不平だつた。

□

『お母さん、お月樣にはほんとうに兎が住んでるの？』

『いゝえ、それはお話です。ほんとは、月も地球と同じような星なんです。』

『あら星なの？ そして地球みたいに人間が住んでるの？』

『いゝえ、月の世界は凸凹ばかりで空氣がないから生物はゐないの。草も木も生えてゐないんです。』

丁度坊やのために買つてあつた『宇宙の不思議』といふ、平易な科學的讀物の口繪に、外國の某天文臺から觀測した月世界の圖があつたので、それによつて坊やの好奇心を充たすことが出來た。月の話から星の話に移つた。お母さんは覺束ない智識をたよりに、太陽系の圖を描いて、覺束ない說明をした。

□

『僕は夜なんか大嫌ひだ。夜がなければ寢ないでいゝから幾らでも遊べるのに。每日夜が來るから僕厭になつちまう。』

『でも夜がなければ、人間はゆつくり休めないから、弱つて死んでしまひますよ。』

『晝寢すればいゝじやないか。太陽が惡いんだ。夜だつて出てればいゝのに。』

『太陽は夜になつても寢やしませんよ。たゞ地球がぐる〳〵まはるから、アメリカの方が太陽に向つてる時は、日本の方が暗くなるだけですよ。』お母さんは電燈を太陽に見立て、地球儀をくる〳〵まはして地球の自轉と公轉を說明した。

『アメリカの子供はいゝナア。これから起きて遊ぶんだから。僕なんかモウ遊ばないで寢なくちやならない。』と坊やは不平な顏をしながら、それでも地球儀を寢床に持つていつて、お母さんのした通りに、くる〳〵まはして、

『ヤア、アメリカの夜、今度は日本の朝。嬉しい〳〵。僕が起きて遊ぶんだ。』などと獨り言を云ひながら寢てしまつた。

□

自然界の事實と共に、社會的事實についてもなるべく分り易い言葉で、ありのまゝの眞實―科學的な見方―によつて說明を與へたいとは、兩親の思ふところである。が、これにも

時々說明の不足や手ぬかりから、坊やにとんだ横槍を入れられる。

『お母さん、巨人つて本當に在るの？』

『いゝえ、お噺にあるだけですよ。』

『だつてそんな筈ないよ。チャイアントは本當にゐるにきまつてますよ。お母さん云つたじやないの。何でも本當にその物があつてからその名前や言葉が出來るんだつて。だからチャイアントつて言葉も、チャイアントがゐるから出來たんでせう。チャイアントが本當にゐなければ、チャイアントつて言葉もない筈じやないか。』

坊やが眞面目な顔をして、お得意の理屈をまくしたてるのに、一本まゐつたお母さんは思はず吹き出してしまつた。

『何故笑ふの？ 何にもをかしくないじやないか。お母さんがいつも云ふのが本當なら、チャイアントがゐないのに、チャイアントなんて言葉は出來なかつた筈だよ。』

坊やは欺かれたかのやうに、幾らか憤慨氣味で追求した。

『でもおばけだつて、本當はないのにさういふ言葉があるでせう。だからそれと同じやうに、本當にはなくても、昔の智慧のない人や野蠻人が、間違つて在るやうに考へたものに、さういふ名前をつけたために、名前だけあつて、本當には無いものがあるんです。』

それからお母さんは、大分骨を折つて、人間の想像と、實在の事實との間の相異を說明した。雷とは、電氣のために起る音なのに、昔の人は、太鼓を叩いてゐる鬼のやうに考へてゐた例などは、兼てから坊やのよく承知してゐる事實なので、その鬼と同じく、チャイアントも實在の人物ではなくて、想像の產物であることを承認させる有力な援けとなつて呉れた。

□

お母さんは坊やの根掘り葉掘りの質問に出會ふごとに冷汗をかくほど、科學的智識に乏しいことを告白しなければならぬ。その上何をいつても坊やはまだ今年始めて一年生になつた子供であるから、いかに平易に說明しても、事實そのものが、坊やの理解力を超絕してゐる場合も少なくない。けれども、分つても、分らなくても、とにかく、說明を與へられぬ限り滿足しないのが坊やの常である。そこでお母さんは說明に窮するといつも、お父さんと書物とに應援を求める。『お母さんにもよく分らない』などといへば、

『ぢやあお父さんに相談して御覧なさい、』『本で調べて頂

戴』などと坊やに命令されるので、どうも中途ではぐらかす譯には行かなくなる。殘念なことに『子供の聞きたがる話』など〻銘うつてある科學的讀物は、餘りに文章が拙劣であつたり、內容が子供に適切でなかつたりして、兒童にも喜ばれず、親の參考書としても不滿足なのが多い。此春以來、尋常四年、五年、六年用の理科の參考書を備へておいて、折々、花や虫の實物と引合せて、子供に讀んでやることにしたところが、非常な興味と滿足とを感ずる樣子である。近所にゐる尋常四年の子供が、學校で習つて來るのと、略ぼ同程度のことを、折々ではあるが、坊やに話して見せると、花の解剖などは、遊戯の一つのやうに心得て、大體に於て理解し得ることが分つた。一度敎へたことを、無理に覺えさせようとせずに、たゞ興味本位で氣の向いた間だけ、十分か二十分、話して聞かせたり、本を讀んで聞かせたりするのであるが、それでも、自然界の神秘は、子供に取ては、グリムやアンダーセンの空想的なお伽噺以上に、永續的な驚異と興味とを呼ぶらしく思はれる。

少年は科學者

倉橋惣三

一

夏が來た。庭の涼み臺で空を見て居た妹の方が「あれなあに」と問ふ。「天の川」と答へてやると「川なの、水が流れて居る川なの、誰れが渡るの」と問ひつめて來る。その小さい頃は、もう一ぱいの想像になつて居るのである。詩の問ひには詩で答へずには居られない。すると、兄の方がだしぬけに「うそだい」と來る。でも妹の眞面目な感興を破るのを惜むやうに、耳の傍へ口を寄せて、「ねえ、ほんとうは星なんでせう」と小さな聲で云ふ。それにも一寸うなづいてやる

と、「でも、星つて一體何なんだらう」と、獨り言のようにいふ。そこへ、螢がすい〱と飛んで來る「ほうたる來い、ほうたる來い」。妹のソプラノが直ぐ歌になる。植込みの闇を、消えてまた明るく、淡い光りが音譜の様に動く、と思ふと、兄の方は、もう團扇を上げて追つて行つた。そうして掌に載せて來た小さい光りを、それでも流石に暫くはうつとりと見て居るが、「何故なんでせう。虫の體が、どうしてこんなに光るのでせう」と問ふ。去年の夏から持ち越しの不思議が、去年よりも一層强い疑問といふものになつて湧き立つて居るのである。妹は五才、兄は八才、同じように可愛らしい目が、同じ星に、同じ螢に、斯うも違つた二つの世界をつくらせるのである。今此の涼み臺の右の方には、小さい詩人が居り、左の方には、小さい科學者が居るといつてよからう。

二

六、七才から始まつて、所謂少年期に於て、すべての子供は科學者になる。もつと適切にいへば、科學者的な心の動きをもつて來る。自分の慾求を中心とした想像化の見かたから、物は物として、それ自身の事實として知らなければならんといふ、所謂客觀現實の態度に變つて來る。そして、その意味での追究と探求とに、抑へられない興味と衝動とを持つ様になつて來る。何？何故？これが少年期の、總ての興味の中心を占めるものであり、それに對して、なんとかして、合點のゆくだけの滿足を捕へ得ることに、いひ様のない歡喜をもつ。

科學敎育の必要といふことは、近來の敎育者のよく言ふことである。しかも、それは、たゞに兒童の生活の將來のために、科學的敎養が入用だといふ意味ばかりではない。——それも勿論大切だが——純眞な少年期の自然の要求に對して、正しい滿足を與へてやり度いといふ意味をも見逃してはならない。詩人的な幼兒期に、兒童詩としての童話や童謠が缺くべからざる様に、哲學者的な靑年期に、それ相當な宇宙哲學觀と人生哲學論とが與へられなければならぬ様に、科學者的な少年期の心には、是非とも科學が、科學的の滿足が、與へられなければならないのである。それなしには、彼等の心の生活を充實させることが出來ないからである。

科學は六かしいものだといふ。六かしい科學は六かしいものには相違ないが、科學的である少年にとつて、科學的であることは、決して、成人が思ふ様に六かしいものではない。兒童の個性によつて、多少の相違もあるけれども、二と二と加

えて四となる方が、五になるかも知れないと思ふよりは容易いことであり、石は自分で落ちたいから落ちるのだといふ話よりも、地球の引力によつて落ちるのだと説明されることに、非常な愉悦がある。勿論、其の知力が要求する以上の精と密とは、彼等の堪え得ないことであるけれども、其の程度以下の非科學的空想は、より以上彼等の堪へ難い不快である。そこを適切に、丁度一ぱいの科學的滿足を與へて、科學心から科學心への成長を樂ませるところに、少年の科學教育の原理と秘訣があるのである。

三

科學心の滿足は、科學的知識を學ぶことにも得られるものであるが、それよりも、科學的に心を働かせてゆく處に、一層の興味があるといへる。つまり結果よりも過程を主とするのである。結果よりも過程を主とするところに、學問乃至實用よりは遊戲としての性質が多くなる。科學といへば固い窮屈なものに聞えるが、少年にとつては自由な、樂しい遊戲である。普通の遊戲の中に多くの科學があると共に、科學の實驗の樣なことでも、少年にとつては一つの遊戲として樂まれる。遊戲は見て居るのでは足りない。自分ですることを求める。時計の針が何故動くのだらう。ナイフを出して、裏蓋をこぢあけて見ずには居られなくなる。幻燈は何故映つるのだらう。自分でボール紙を切つて拵へて見ずには居られなくなる。大抵は時計をこわして仕舞ふ。惡くすると電球であぶなく怪我をしかける。遊戲が通り越して、いたづらになる。そんないたづらをしないで、勉強なさいと叱られる。理科の本でもおさらひなさいと言はれたりする。それ程、遊戲の形で科學生活が行はれるのである。遊戲といふと輕いことになつて仕舞ふ樣だが、結果を離れ、効果を離れて、その過程の興味そのものに沒頭する點で、藝術が兒童の遊戲と一致すると同じ樣に、純粹の科學が、兒童の遊戲に一致して來るのである。

四

科學は事實を求める。事實としての自然が一番裸で、少年の前に接觸して來る機會の多いのが夏だ。四季素より自然の興味に富むが、室內から戶外へ、土に水に、山に海に、直接することの多いのが夏だ。そこにすべての少年が研究心に富んだ自然科學者となる。蜻蛉と、蟬に、少年昆虫學がある。金魚と、目高に、少年水產動物學がある。松葉牡丹と朝顏に、少年植物學がある。更け易く寢にくい夜に、神秘を交へた少

年天文學がある。どうせ机の前に、坐り込めない暑中休暇だ。朝涼の一二時間を「本を讀む勉強に」使つた後は、短い半ズボン、簡單な薄シャツ、強烈な日光の直射だけ避ける鍔廣の經木帽子、少年を思ふ存分放つてやり度いのは此の夏の自然だ。もち竿一本、掬ひ網一つ、小さいシャベル一挺、それに時々お父さんの望遠鏡でも拜借出來れば、わが少年科學者は、得々たる其の科學的收穫に、日に焦げた頰を輝かすものである。

　自然科學ばかりではない。午後の噴水と水鐵砲に水の物理學があり、夕方の線香花火と廻り燈籠に、火と熱の物理學がある。たゞ此の場合には、自然界に對するのとは興味の働き方が少し違ふのである。自然物の探究には本能的に働いて來る興味でいいのであるが、物理的事實に對しては、その事實のあらはれの面白さと、其のあらはれを起す理法への理智的興味とが必ずしも一致して居るものではない。噴水の太鼓たたきや、曲藝毬のあやどりを、笑ひ興ずるのが、すぐ、その水の壓力の理法に學理的興味を持つて居るのではない。然も、物理的科學興味としては、どうしてもそこまで進まなければならない。そうでないと、たゞのたわむれに止つて、科學心に關係をもたない。急に噴水が出なくなつた。樋へ水をそゝぐと再び見事にほとばしり出る。何故だらう。水を增しただけでも出ないことがある。硝子管の口を吸ふと出初める。管の口を吸へない時に、管のもとの方に一度水を通すとふき出して來る。これは、一體どうした理由なのだらう。斯う疑ひ出して見て、初めて科學心になる。それに對する說明は、簡單にも復雜にも說けるとして、とにかく、事實を、たゞの事實のあらはれのまゝとしてゞなく、其の由つて來る理法までせんさくして行かうといふ處に、科學興味が汪然と湧いて來る。それは水の壓力によるものだ、その水の壓力は又何のために起るのだと聞いてゆくと、益々その興味は科學的に强くなつてゆくのだが、その時でも、興味の本質は矢張り、「何故？」にある。そこが、自然科學の興味の「何故？」と「如何に？」とを主とすると違ふところである。そうだとすれば、常に少年をして、「何故？」にまで導いてゆかなければならぬ。もつと適當にいへば、「何故？」の心を刺激してやらなければならん。そうでないと、折角の物理的科學的の事實に接して居ながら、眞の物理的科學心まで觸れて行かないことが屢々あるからである。而して、そのためには、どうしても、傍に居る吾々が物理的科學興味をもつて居るのでなければ出來ない。自然界に對する興味でさへも、吾々が、その興

味をもつて少年の爲になることが、大きな關係をもつものであるけれども、物理的科學心の誘導のためには、是非とも必要なことになる。少年は科學者だ。しかし、うちすてゝ置いていゝといふ譯のものではない。

子供の科學的教育

三宅やす子

×

子供に科學的の素養を持たせる事が必要であるといふことは、一般に考へられて居る事實である。

それに對して、實行のための方法が講ぜられて居ることもまた事實である。

殊に、學校で學ぶだけでなしに、家庭に於て、實際に科學的方面に興味を向けさせるようにしなければならないといふので、此頃では、多少なりとも、以前より、子供に讀ませる課外讀本のようなものが出來、自然科學を解り易く、子供に會得させるように企てられたりして居る。

けれども、それだけで、子供が本當に、科學の方面に興味を喚び起されて居るかどうか、又、子供の科學教育といふものが果してそんな程度で安心して居られるかどうかといふことになると、それには幾多の問題が横る。

×

大體男兒と女兒とは、先天的に科學的興味に差異がある。

小學一年の先生から「男女兒一緒に理科を教へて、男兒は蒸氣とか自動車、風船そんな理科的方面に多くの興味をもつのに、女兒はそんな時にはつまらない顏をして居て、男兒が面倒がること、たとへば兎の飼育などは面白がつて親切にし、四つ葉のクロバーを探す時などいつまでもあるまで探さうとする」と其差異を話された事があるが、これは本當によく

うがつた言葉だと思ふ。

子供に興味を持たせようといくら只親があせつても其子の先天的素質があるから、さう氣をもんで、附燒刃に科學の知識を吹き込んだところが、それは只、子供に面倒臭いな」といふ感じを起させるだけで、何等の生きた効果はない。

しづかに、其子の興の赴く所、自ら求めて知らうとする時に、懇切な説明を與へる事が最もよい方法であるが、それならば、子供は度々求めて知識を得ようとするかどうか、其求め方が賢いものであるか否か、それらが考究の點である。

×

汽車などに乘つてよく見聞することは、子供が親にいろいろの質問をして居る、其質問が、只親から全部を説明して貰はうとするものと、親の説明をきいて更に疑問を起して自ら考へたり、質問をしたりするのと二樣ある。

人から説明して貰つてそれだけで安心して居る子供には科學的教育といふこともまづ大して期待を持ち得ないと云つてよい。親が充分望をかけ得べきものは、説明を得て、更に疑問を起す種類の子供である。

「これは何であるか」といふ疑問は極めて普通にみる子供の質問である。「何故これが斯樣なるか」といふ質問は尊ぶべき知識の種子を胚胎するものである。

×

私の心持から云へば、子供に科學的教育をするといふことは、まづ親自身がもつと萬物に對する注意の眼界を廣め、其深さを増して、凡てに觀察の態度を失はない事にあると思ふ。

凡ての人が科學者になる譯ではない。しかし凡ての人は科學者のもつ緻密さと考へ深さを以つて、世に臨む必要がある。

人生の全部が科學を以つて解決し得らるゝものではない。然し、此社會に起る出來事に對して、學術的に、解決をつける事は當然必要な事なのである。

科學的に頭をむけ得る子供と云ふのは、學校の理科が滿點であり「子供に聞かせる理科の話」を暗んじる處の子供の謂ではない。

「かうしたためにどうして斯樣なつたのだらう。更にこれを斯樣したらどうなるであらう」

盡きる事のない疑問の發生が彼等を賢く導くところのもの

なのである。

いつの場合にもさうであるが、殊に注入は最も忌まれなければならない。注入を絶對に忌む事は、正しく悉しい説明を與へない事ではない。説明は出來るだけ悉しく正しく、懇に、子供の消化し得る範圍より少し許り多くてもよい。それを子供の頭は適宜に取捨し消化するだらう。或は其時消化し得なかつた何物かを更に殘して後にまたも一度研究するであらう。

×

何につけても手早く、實績を擧げ度がることを、殊に科學の方には避けなければならない。

「あんな大地震を前にわからなくて地震博士のねうちがあるものか」と言ふ言葉は昨年の大震以來幾度途上で耳にしたかしれない。

學問を豫言者や魔法使ひの範圍にまで適用しようといふ國民性はとてもたまらないものである。

同時に「これからの人は科學的素養が第一だから」といつて「子供に聞かせる動植物の話」「天文の話」そんな本を數冊買ひ與へて安心して居る母があつたら恐ろしいことだと思ふ。

子供に聞かれる質問に實際答へ得る母はないと思ふ。専門家ですら一々調べなければわからないのだから。それを知つたふりをせずに子供と一所に研究する態度で或は書物で調べ或は人に訊き、さうして出來るだけ悉しい智識で疑問を解く事に努めるといふ此一事だけでどれだけ子供は學ぶところがあるかもしれない筈である。

×

なほ附け加へたいのは幼い時に理科に興味を持つて居た子供でも女兒で十四五歳になると、さつぱり其方に無興味になる事がある。これは年齢の影響で、盛んに詩的空想を描いて想像力を無限に伸してゆく時代であるから、此時期に無理にまた科學書を讀ませる事はさほど效果はあるまいと思ふ。

只あまり感傷的に偏らぬように注意して惡い讀物をさけるためによい文學書でも與へておけば理智の發達すると共に、また科學のものにも注意する年齢に達しるであらう。

要は狹義の科學のための科學教育でなくて、もつとよりひろい意味で我人生を歩むために大切な科學的要素を出來るだけ多量に包含させる事が必要なのである。

サイホン應用の玩具

藤五代策

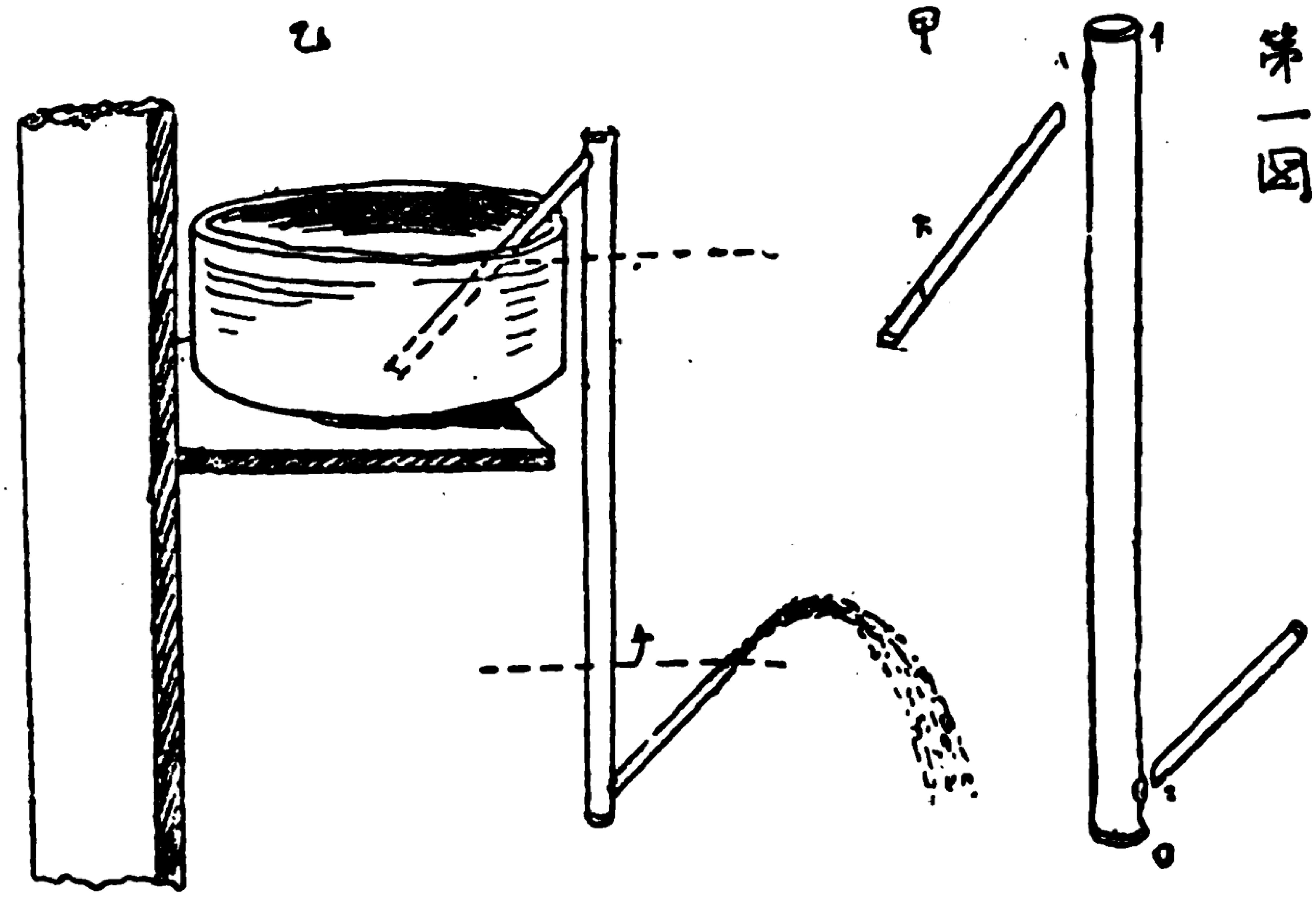
最近の進歩した玩具には、物理學や化學の學理を應用したものが非常に多くなりました。此の後益々増加することゝ思ひますが、子供は玩具に對しては多大の趣味を有つてゐるものです。少し大きい子供になりますと、自分の玩具は、自分で作つて見たいと云ふ賴母しい考へを有つて居ります。そこで「好きこそ物の上手なれ」の眞理にならひ、子供達の好きな理科玩具を、家庭で製作せしめたならば、子供は大喜びで製作に熱中し、此の間に物理學の六ケ敷い法則や化學上のこみ入つた現象などをも、殆んど自發的に理解することが多いものです。從つて母姉の方々は、子供の要求に應じて、小刀、鋸、ハンマーなどの工具も與へやうし、厚紙、木竹片、針金などの諸材料をも渡して、子供達が思ふまゝの玩具を作らせ、其間製作の相談相手となつて、子供達の研究心を益々進めるやうにしたならば、そこに偉大な研究的趣味を惹起し、工夫創作、自治、勤勞等の賴母しい精神が養はれてきます。こゝにお話しいたします「サイホン」應用の玩具は、特に男の子供に歡迎されるものですが、夏休みを利用して母姉の方々に指導製作して下さることをお願ひします。

（一）簡易なサイホン

第一圖甲の(イ)(ロ)は直徑三分位の長い竹管で、上と下とに節があります。今上下の各節に接近して、徑二分位の斜の孔(ハ)と(ニ)とを穿ちます。(竹管に大なる孔を穿つには、錐先きの三つに岐れた鼠齒を使ひますが、或は初め小錐で孔を明け、後小刀の刃先で適宜に太く割り廣めても宜敷のです。)次に徑二分の筆軸を(ホ)と(ヘ)の二つに切り、初め穿つた斜孔に確く嵌めれば、所要のサイホンは出來上つたのです。

乙圖は一つの吊し板の上に水を充した水鉢を載せ、之れに

第一図



先きのサイホンの上の管口を浸したものです、さうすると水は下の管口から盛に噴出いたします。

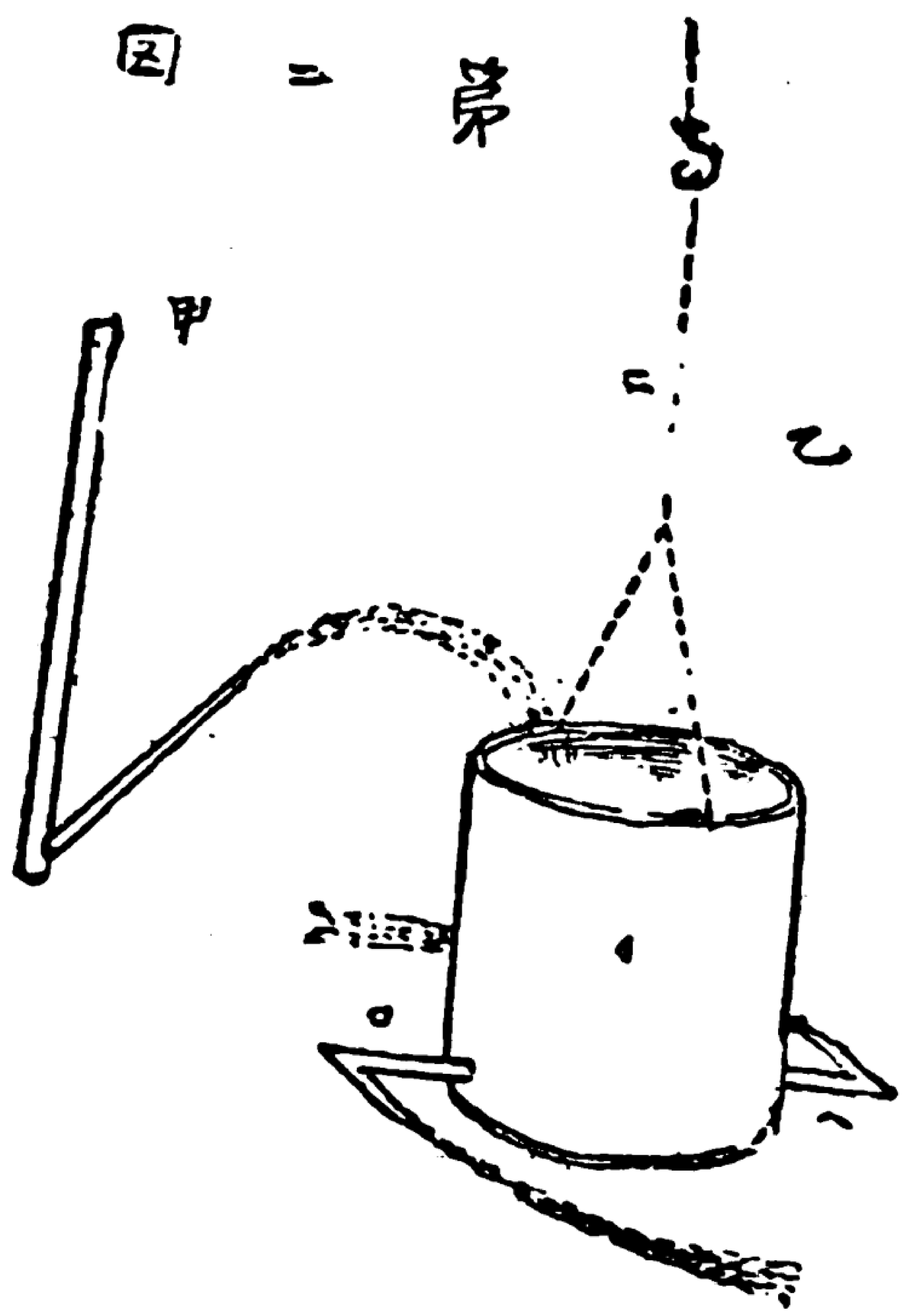
「サイホン」の理を説明するには、是非、空氣の壓力のことを申上げておかねばなりません。さて、地面に近い空氣の壓力は、一寸四方に、約一貫五百匁の壓力が加はつて居ります。それ故に私共が掌を開いた位の廣さにも、十五六貫位の大した壓力で押へつけられてゐるのです。そして空氣中に、少しでも壓力の弱い處か或は眞空などが生じた場合には、直ちにそこを埋め塞がうとするものです。こゝにお話申上げますサイホンは、實に空氣の壓力や、液體の有する重さなどを利用した一の現象であります。

以上の如く水鉢の水面は、非常に強い壓力で押へつけられてゐますから、上の管口から水は押し出されることになります。然るに下の管口も同樣に空氣の壓力が加はつて居ります。しかし下の管口は、上の水面より(ト)(チ)丈下方にありますから、つまり(ト)(チ)の水の重丈、弱いことになります。斯樣の理由によつて、水は圖の如く噴水するのです、九州地方では、「サイホン」のことを『馬の頭』と申しますが、之れは其の形が馬の長い首に、長い頭のついてゐるのによく似るからです。此の「サイホン」は水瓶の水を間斷なく注ぎ換へるとを

や、金魚鉢などに仕掛けて至極便利に用ゐられて居ります。

(二) 反動回轉車

第二図



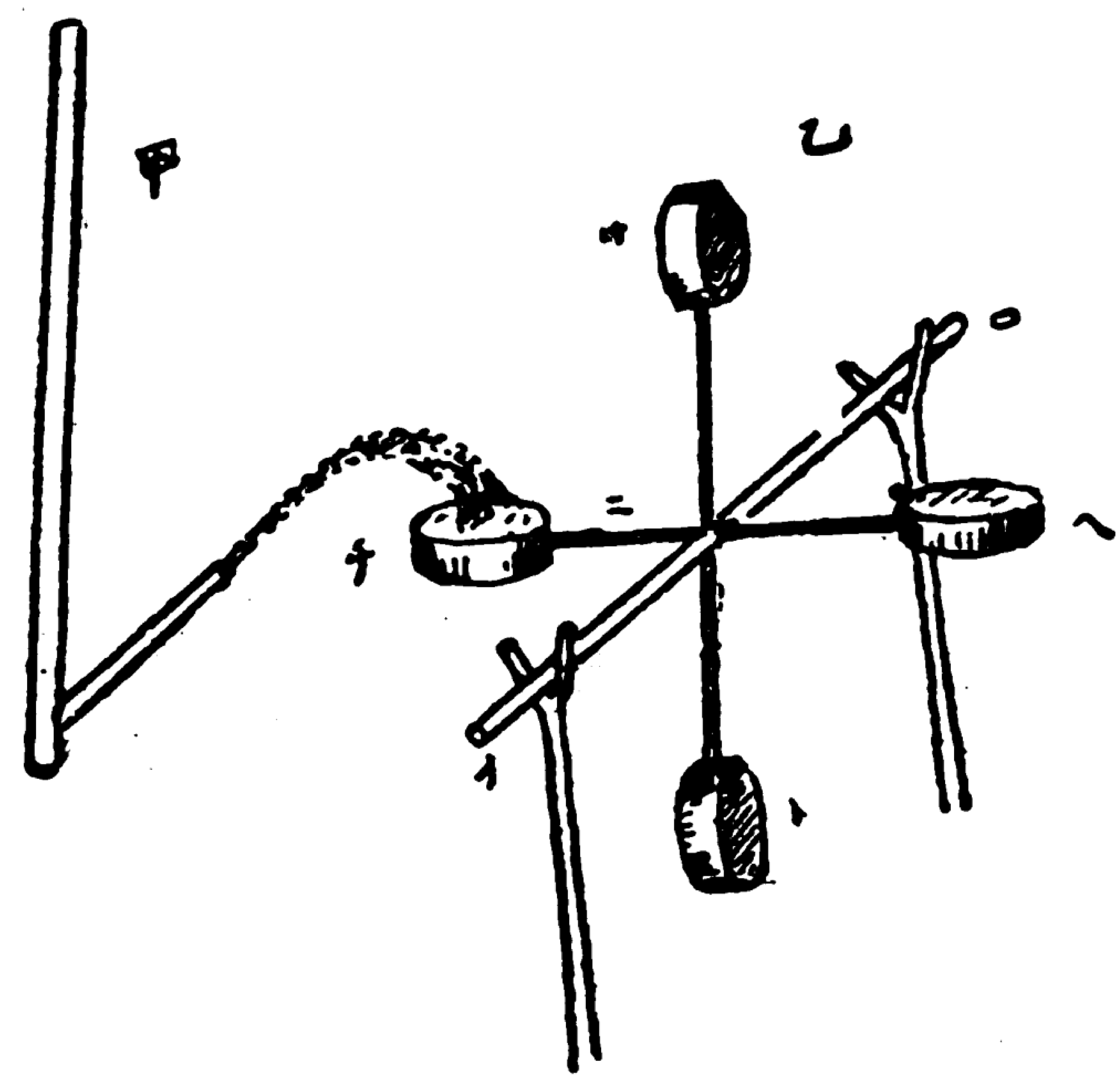
第二圖乙の(イ)は直徑二寸高さ三四寸位の竹筒で、下に節があります。筒の左右底節に接近して徑二分位の孔を穿ち、之れに直角に曲げた細口の硝子管を(ロ)(ハ)の如く嵌めます。硝子管を切るには三角鑢で、管の周りを擦りとつて折ります、又之を曲げるには「アルコール」燈か、瓦斯火の上で、硝子を熱しつゝまはし、適當の時を見て曲げるのです。延ばすときも同樣に熱して引き延ばします)次に筒の縁に(ニ)の提げ糸を付け、之を軒端の鈎に吊るし、最後に(一)に說明いたしました「サイホン」の噴水を筒内に注げば、涼しい反動回轉車が出來ます。若しこの「サイホン」から流れる水を赤色に作りましたならば、一層綺麗に見えるでせう。

反動と申すことは、物體が或一方に働かうとするときに、之れと反對の方向にも同樣の働を生ずることです。彼の鐵砲の丸を打ち出すとき、銃の臺尻で強く肩を衝くのも、之れがためです。此の回轉車の噴水管は、直角に曲つてゐますから、水が前方に噴出やうとする際に、その反對の曲り角を後方に押してそこに反動の作用が起りますので斯く回轉するのです。

(三) 水車

細竹の軸の中央部に、四つの錐孔を直角に穿ち、之れに長さ四寸位の細割竹を貫いて、水車の柄に作ります。次に葡萄酒瓶の栓に用ゐた「コルク」を四つに切つて、(ホ)(ヘ)(ト)(チ)の水受けを作ります。

是より(イ)と(ロ)の股木を地面に立てゝ之れに水車の心軸の両端を掛けるのです。

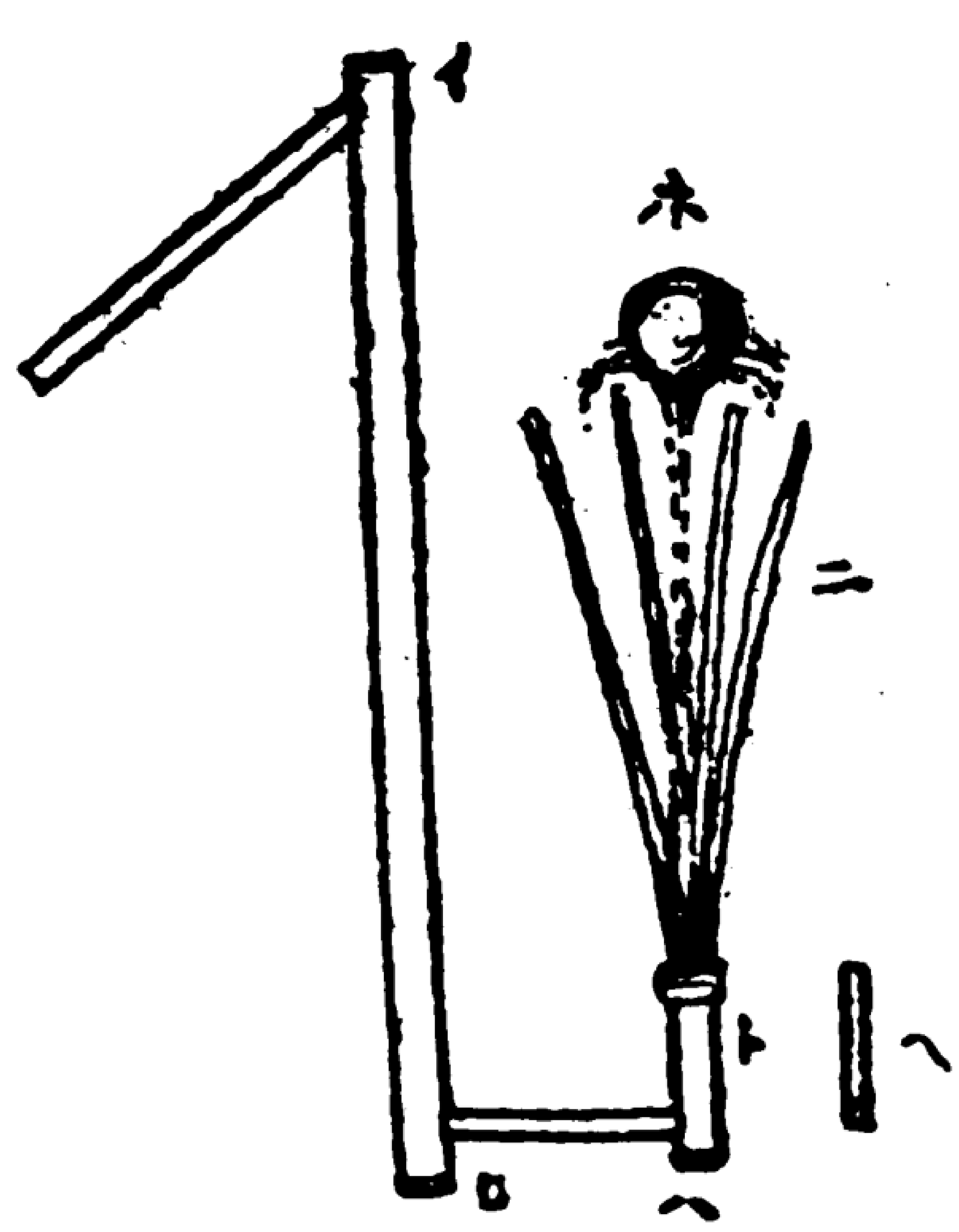


第三図

今甲の「サイホン」の噴水を圖の如く水受けに注ぎかければ、水車は面白く回轉し始めるでせう。水車に注がれる水が、高所より低所に落ち下る高低の差を落差と申します。此の落差は大なればなる程、水の力は益々大なるものです。即ち三尺の落差よりも、五尺の落差の方がより大なる力を作すると云ふことになるのです。彼の水力電氣に用ゐる水を、遠方の川より高い山腹に導いて、幾百千尺の高所より落下させるのも、畢竟此の水の勢力を增大させるためであります。

（四）球吹きげ

第四圖の(イ)(ロ)(ハ)は竹製のサイホンです。(ロ)(ハ)の管は平に横になし、右端には(ト)の竹管を嵌め、その二寸許りの上部を糸にて確く結び、上部は四つに割つて四方に開き、玉受けに作ります。又(ト)管の内部には更に(ハ)の小管を挿入して水の噴出口を狭めるのです。



第四図

今「ほゝづき」の袋を脹らして、(トの管口に載せ、(イ)(ロ)「サイホン」より水を送れば「ほゝづき」は噴水のために(ホ)の如く打ち上げられ中空にてクル〳〵と舞ひ踊るので甚だ面白いものです。

婦人生理學講座（9）

永井潜

人體美

『偉なる哉「人」。渺たる五尺の軀、よく宇宙の大を包み、足、地を離るゝ能はずして、而して頭は日月の外を照らす。彼れを生みたるものは自然なり、而も自然界に於ける法則は悉く彼によりて與へられたり。彼は全能の神に服從す。而も神を造りし者は彼なり。齡百に滿つる能はずして而してよく久遠の生命を傳へ、體や美の極致にして、心や眞の奥底に徹す。彼れ地上に現はれしより、茲に二十有幾萬年。二脚巨頭を支へて頭愈々發達し、双手大工を奪ひて、工益々神に入る。不思議なる哉、人、彼や眞に小宇宙たるの名に負かず。』

是れは拙著「人生論」の自序の一節であります。人間の偉大さは、果して如何なる詞を以て云ひ表すことが出來るでしやうか。希臘の有名な哲學者ソフオクレスは云つて居る。

『天地間に偉大なるものは許多あるが、而も其の中の最も偉大なるものは、卽ち人間である。』

實際、大宇宙の間に、人間ほどいみじくも亦奇しきものは外にないのである。時間と空間とを超越せる彼れの心が、あらゆる驚異の中の驚異であると同時に、物としての彼れの體も亦何物の追隨をも許さゞる美はしさを有つて居るのである。一莖の草、一朶の花にも、神の御影が宿ると云つた人もあるやうに、生物の體は、一として美はしからざるものはないのであるが、併し之れを人間の體の崇かく尊く美はしきに較べ

ると、到底日を同うして論ずることは出來ぬのである。古往今來、幾多の詩人文士が、其の至靈の筆を揮つて、麗はしき人の姿を言ひ表はさんとしたり、一代の名工巨匠が、其の絕妙の技を傾けて、人體美を寫し出さんとして而も容易に其の表現が出來ぬのを見ても、人間の體が如何に極致であるかを想見することが出來るのである。

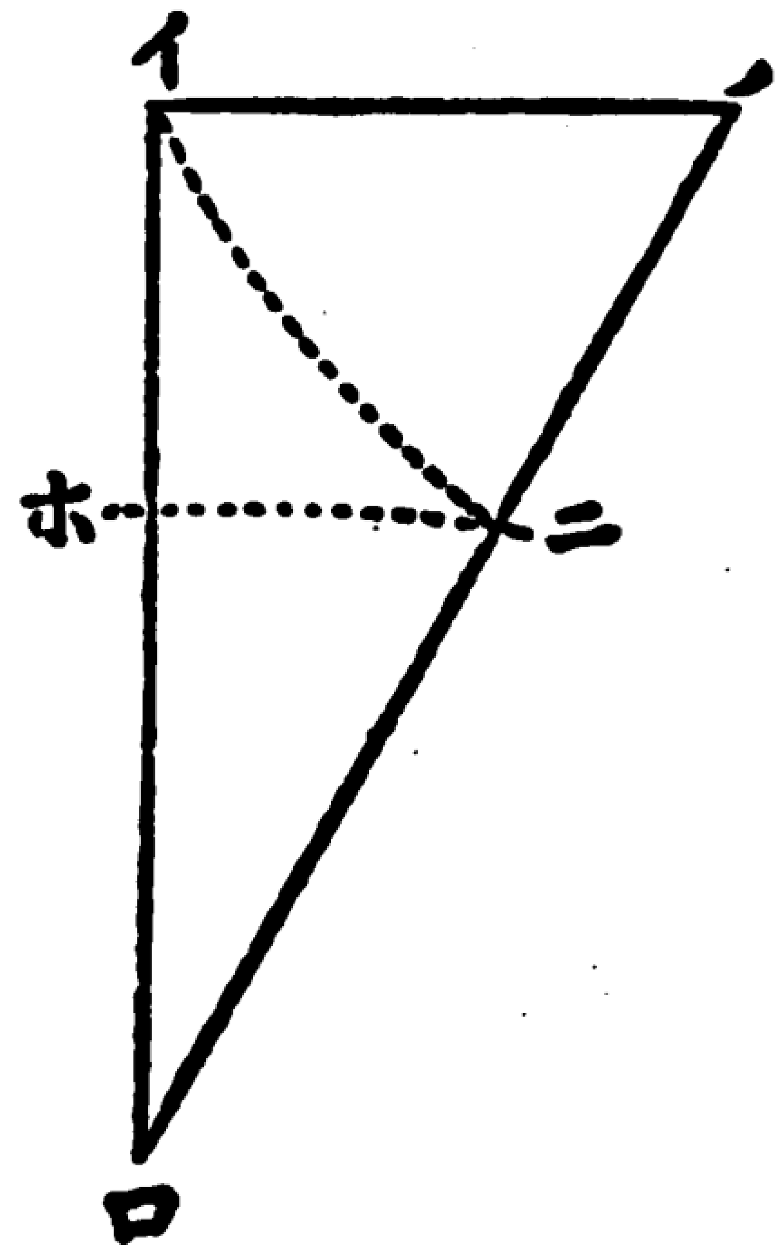
吾等の體は單調な死物ではない。吾等の體は活きて居る。活きて而して其の中に至高至妙の靈魄を宿して居る。否な吾等の體は、肉にして即靈であり、靈にして即肉であるのである。茲に於てか、物に觸るに事に感じて、喜怒哀樂の情緒の動くにつれて身體も亦た、時々刻々千變萬化する。斯くて梨花一枝春帶雨てふ優にやさしき姿を示したり、惡鬼羅刹も逃げまどふべき恐しき形相を現はしたり、笑んで城を傾けたり、眼で人を殺したりする。其の有樣は、恰度大宇宙に於て、時に或は和風麗に吹き、時に或は疾風迅雷交々至り、移り變はつて極まる所を知らないのと同じである。寔に人の體は、大宇宙を縮圖せる小宇宙であり、將た大地の精粹を鍾めて咲き出でたる華であつて、其の一本の眉毛にも、其の一片の額の皺にも、大自然の鑿の香が、高く淸く漂うて居る。吾等は實に、吾等に加へたる斯の天の恩寵に對して、心より歡喜し感謝すると共に、自尊し、自重し、自愼し、以て吾等の享けたる此の尊き白玉を、微塵だも傷けない樣に戰々競々たる心懸がなくてはならぬ。

斯くて天恩洽く詩趣豐かなる吾等の身體は、之を冷靜なる科學的見地から觀察するも之を究むること愈々精細であればある丈、益々幾多の善美なる點を發見することが出來るのであるが、茲には其の一端として、先づ人體各部の釣り合に關して述べて見たい。

何人も知る如く、音の調子(高低)は、發音體の一定時間內に於ける振動數の多少によつて定まるものである。而して樂音はなぜ愉快の感を起し、之れに反して、噪音はなぜ不快に聞えるかと云ふに、樂器の音には一定の振動數を有する原音なるものがあつて、其の原音の振動數に對して、$\frac{5}{4}$とか、$\frac{4}{3}$とか、$\frac{3}{2}$とか、或は恰度二倍とか云ふ樣に、簡單なる割合の振動數を有する種々なる音波が、同時的にか、或は繼起的にか起るもので、其の場合、夫れが快よく耳に響くのであるが、之に反して、斯る規律正しき關係なく、種々雜多の振動數を有つた音が、無秩序に起る場合、夫れは非音樂的の雜音となつて、不快の感を伴ふものである。斯る關係は、獨り耳と云ふ感覺器官に於けるのみならず、眼てふ感覺器官

に於ても亦、同様であつて、事物の形象が、程よき釣り合を示し快く美はしく見へることの爲には、必ず各部分の間には一定の割合が保たれて居なければならない。例へば單に一面の額縁を造るとした所で、其の長けと幅とが、一定の割合を保つ場合、狹からず長からず、最も恰好のよいものになる。心理學者は、一定の長さが二分されて出來る二つの長さが、斯る釣り合の好い割合を保つ爲には夫れが斷金法によつて分たれねばならぬと云つて居る。

斷金法とは、上圖に示す様に、「イロ」なる一定の長さを有する與へられたる直線があるとして、夫れを「ホ」點に於て二分し「イホ」と「ロホ」の長さが好い割合を保ち、快よい感じを起すことの爲には、二分點たる「ホ」點を何處に求むべきかを示す方法である。夫れには、「イロ」の半分の長さを有する「イハ」なる直線を「イ」點に於て「イロ」に直角に交はらしめ、「ロ」點と、「ハ」點とを結び附ける弦「ロハ」なる直線を描いて、「イロハ」なる一つの直角三角形を造り、「ロハ」の線上に、「ハ」點より「ハイ」に等しき「ハニ」を取り、次ぎに「イロ」線上に「ロ」點より「ロニ」に等しき「ロホ」を求むると、其の目的を達することが出來るものであつて、即ち「イロ」は「ホ」點に於て斷金法によつて二分されたのであり、斯の場合各部に於ける割合は次の如くになる。

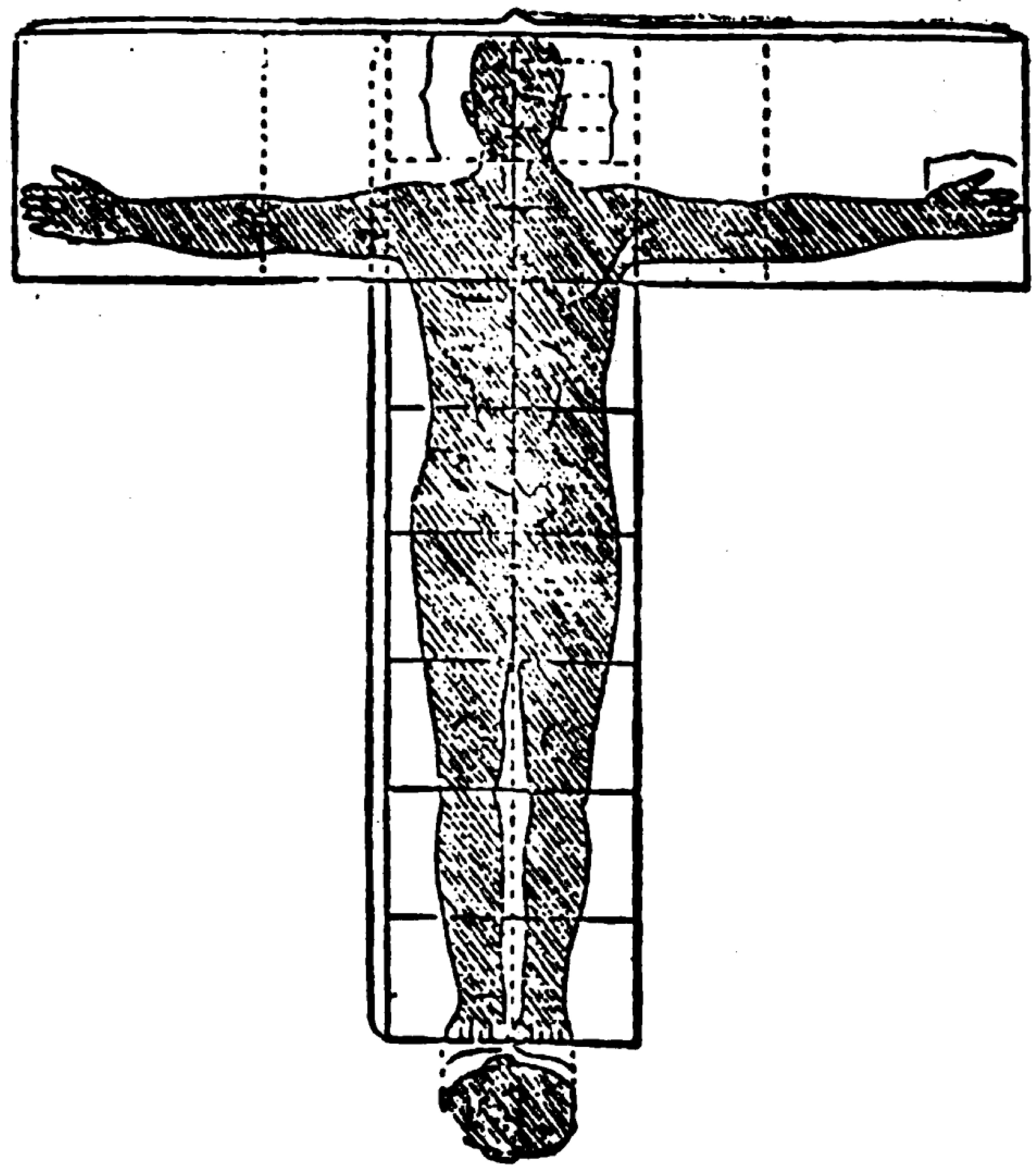


イロ：ロホ＝ロホ：イホ

シアイジング氏によれば、人間の體の各部の割合には、此の斷金法が適用されて居る、例へば全身長と、臍から上部と其の下部との間には、上述の割合が成り立つて居るもので、臍と云ふ目に附き易き點は、恰度前例の「ホ」點に相當し、斷金法に従つて人體を二分して居るのである。

聰明敏感の希臘人は、流石に豪かつた。彼等は夙に人間の享けた天の恩寵が如何に饒かなるものであるかを自覺した。さうして其の享有せる尊きものを尊からしむべく、あらゆる努力を捧げた。彼等の教育、彼等の藝術、彼等の宗教、何れも皆な斯の思想を基礎とし背景として居ないものはない。靈と肉と自然と人生とは、古代希臘人に於て、最初の而して恐らく最後の最も緊密なる楔合を示したのである。希臘生活の尊き所以は實にそこにある。斯くて彼等の教育は即ち體育と

なり、體育は即ち教育となつた。繪畫に彫刻に、美の極致として人體が主題となつた。他の凡ての古代文化民族が、神を現はすべく、奇怪珍異の形像を假り來りて、恐懼禮拜せんとしたに反して、獨り希臘人は、自己の體を喚び來つて神を寫



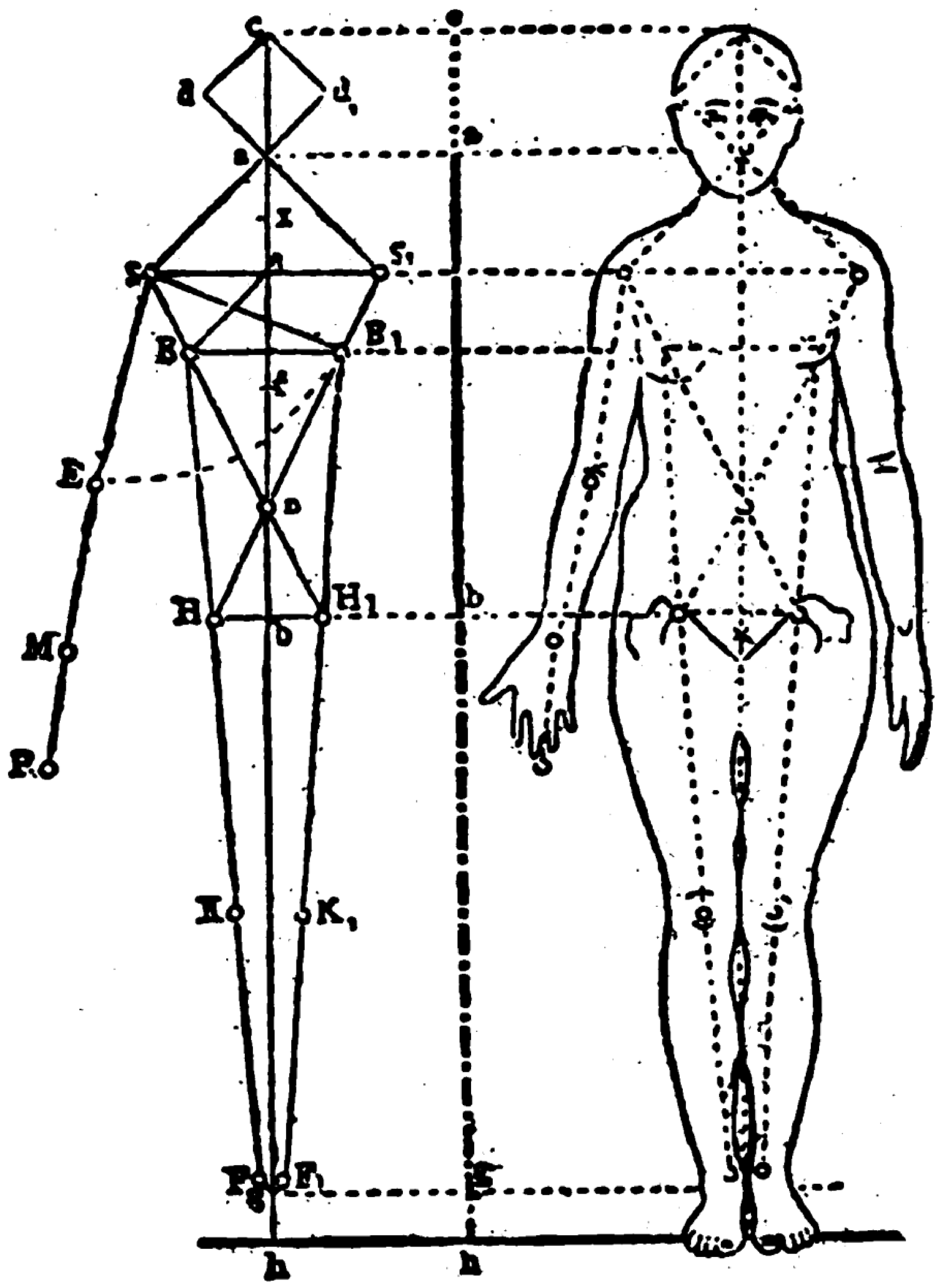
した。彼等は「人」に於て「神」を認め、進んで之に隨喜讃美することを忘れなかつたのである。

理想的の人體、即ち人體の典型を定めるには、其の標準は様々であつた。古代埃及では、中指の長さを測定の標準尺とした。さうして其の十九倍が、恰度全身長に等しいものとして居た。希臘では、手や、足や、頭の高さが、好んで標準尺度として用ゐられた。希臘の有名な彫像家であるポリクレットの方式から導かれたものに從へば、頭の高さ（顱頂より下顎の下緣迄）を八倍すれば、男子の身長に又た夫れを七倍半すれば、女子の身長に相當することになる。而して兩足の幅は、恰度頭の高さに等しく、又た顏面の長さは、手の長さと等しくして、之れを三等分することが出來る。其の第一部は、毛の生際から眉毛迄、第二部は眉毛以下鼻の下緣迄。第三部は、鼻の下緣より下顎の下緣迄である。而して是れ等各部は、何れも身長の三十分の一に相當する。即ち顏面は恰度身長の十分の一に當たることになるのである。又兩手を水平に擴げた時、左右の中指間の距離即ち所謂指極を測つて見ると、夫れは恰度身長に等しい。而して又身長及び指極は、共に左右相對的の等しき長さを有する部分に分たれる。身長に於ては、第一部は頭の頂から乳頭迄、第二部は乳頭より股の附き根迄、第三部は股の附き根から膝迄、第四部は膝頭から踵迄が夫れである。次に指極に在りては、第一部一側の中指の尖端から肘關節に至る迄。第二部肘關節より脊柱に至る迄。第三部脊柱より他側の肘關節に至る迄。第四部肘關節より中指に至る

迄が夫れである。

又近時獨逸の知名の彫刻家シャドウ氏によれば、「ツオル」（約我が八分六厘に當る）を單位とする時、人體各主要部は、三ツオルの倍數になる。先づ頭高卽ち頭頂から下顎の下緣迄は三ツオルの三倍卽ち九ツオルであり、下顎下緣から心窩（左右兩乳頭を結び附ける水平線にあたる）迄が同じく九ツオルにあたり、心窩から臍、及び臍から胴の下端（背部では臀部の下緣）迄が、各相等しくして、何れも九ツオル宛ある。又た兩乳頭の距離も九ツオルである。又た胸廓の最大直徑竝びに臀部の最大直徑も、各九ツオルである。手の長さ（腕關節から中指の尖端迄）も九ツオルであり又た肩幅は三ツオルの六倍卽ち十八ツオルで、頸の高さの二倍に相當する。同樣に膝の下緣から足の立面迄が十八ツオルになる。次に下垂せる上肢の長さ（肩端から中指の尖端迄は）、三ツオルの十倍卽ち三十ツオルであり、胴の下端（背面では臀部の丸味の下緣から足の立面迄も、同樣に恰度三十ツオルになる。併し脚卽ち下肢の全長は勿論、上肢の全長である三十ツオルよりも長い。全身長は平均三ツオルの二十二倍卽ち六十六ツオルで、夫れは大約頭高の七倍半（$9\times7\frac{1}{2}=67\frac{1}{2}$ツオル）に等しい。

次に最近に最も屢々人體典型の標準とせらるゝものはフリツシュ及びシュミットと云ふ人の定めた方法で、脊柱の長さ、



卽ち直立の姿勢で、鼻の下端から恥骨縫合部（腹の正中線で、下腹部に手を宛てると、觸れることの出來る骨部）の距離、「ab」なる長さを以て、標準尺として居る。先づこの「ab」なる長さを ae、ef、fn、nb、なる四つの等しき部分に別ち、「a」點に於て、標準尺度の四分の一、卽ち「ae」に等しき「ac」線を、垂直に立つると、「c」點は、丁度頭の頂きに相當する。また「e」點に於て、水平に、左右に、

並びに「es」並に「Es'」なる線を引きて、各の其長さを「ae」に等しからむときは、「ss'」なる點は、丁度左右の肩の關節に相當する。次に、「b」點に於て、其左右に標準尺度の八分の一の長さ、「bH」「bH'」を取る時は、「HH'」なる二點は、股關節に當る者である。各肩關節を、其反對側の股關節と連結する線、「sH'」及び「s'H」なるものは、「n」なる點に於て交叉する。而してこの「n」なる交叉點は、丁度臍に相當する。又各肩關節より、「a」なる點を通じて、線「das'」、及び「das'」を引き、而して「c」點より、夫れ〲この二線と並行せる「cd'」、及び「cd」なる二線を引きて、「d'」及び「d」なる二點に於て、交らしむる時は、「cdad'」なる正方形を得る。其正方形の對角線、「dd'」は、丁度頭節骨の幅に一致するのである。

次に「e」點より「as」に並行せる「eB」なる線を設くる時は、この線が「SH'」と交はる點、「B」は右の乳房の頭に相當し、同じ理によりて「B'」は左の乳頭に一致する。

また四肢の長さを定めて見ると、次の通りになる。先づ、肩關節から、腕關節に至る長さ「SE」は丁度一側の肩關節から、反對側の乳頭に至る長さ、即ち「SB'」に等しいのである。次に腕關節より、手關節に至る長さなる「EM」は、乳頭より臍に至る距離なる「Bn」と全く同様である、また手の長さ「mP」は、臍より股關節に至る長さなる「nH」と同一である。

脚の長さに就ては、一側の股關節から、他側の乳頭に至る距離「HB'」は、大腿の長さなる「Hk」に等しく、又た同側の股關節より乳頭に至る距離「HB」は、脛の長さなるkFと同様であり、而して足の高さghは、標準尺度「ab」の八分の一と同じである。

又全身長「Ch」は、「ae」なる標準尺度の四分の一の長さの、十倍半、若くは、十倍と三分の一に相當するのである。

斯く仔細に觀察して見ると、人間の體の各部分の間には、歴然として一定の割合が成り立つて居つて、決して無意味に造られてあるものではない。之れを音に譬へて見れば、人體は實に劉喨たる樂音に比すべきものであつて、決して不快なる雜音ではない。

以上述べたところは、無論、人體美の典型とすべきものであつて、誰れでも斯様な體を具へて居るといふ譯ではない。各人種に就て檢べて見ると、開化した人種程、この典型に近い體をもつて居り、又同一人種の中でも、職業、階級等によりて、尠からず相違があつて、心身共に健かに身體の各部分

を過不及なく働かせる人體、立派な體を具へて居るのである。また、年齡の上から論ずると、子供は、比較的大きな頭、長き胴、短かい下肢を具へてゐて、不恰好であるが、成熟するにつれて、其の體が、漸次に以上述べた典型に近づいて來るのである。

以上は、單に身體各部に於ける割合の測定を基礎として、人體美を論じた迄であるが、人體をして美麗ならしむる要素は、決して是れだけで盡きて居るのではない。尙ほ他にも幾多注目に値すべきものがある。抑々人間の特色は、其の智能の優秀なること、直立歩行の習性あることゝである。而して之れによつて、其の體制にも大なる特徴が現はれて居る。其の第一は、智能の器官なる腦髓殊に大腦が著しく發達して居ることである。人間の腦重は、平均一三〇〇—一四〇〇瓦で、之を類人猿たる猩々の四〇〇瓦、黑猩々の三四五瓦に比するに、とても追隨を許さない。勿論鯨や象の如き巨大なる動物の腦重は、後條述ぶる如く驚くべき價を示すものであるが、併し體重と腦重との比を求めて、腦髓發達の程度を比較して見ると、到底同日の論でない。卽ち人間の腦重は體重の四五分の一乃至四六分の一であるのに、鯨の腦重は僅かに體重の一〇五七一分の一、象では五六〇分の一となつて居る。其の他黑猩々の腦重は、六一分の一、猩々では一八三分の一である。斯樣に腦髓の發達が、人間では拔群であるから、之れが容器たる頭蓋骨の發達も亦、頗る顯著であつて、類人猿の最大なる者たる「ゴリラ」の雄に於てさへ、六〇〇立方糎を超えないのに、原始人類の腦容積でも、一二三〇立方糎に達し、更に進みて現代白人では、小なる頭蓋骨でさへ一、四〇〇乃至一・五五〇方糎に達して居る。就中文明人では大腦前頭部の發達に伴つて、前頭骨もよく發達し、前額は強く前方に隆起し、之に設けたる切線は垂直に近づくが、動物では、其の隆起は一般に極めて微弱であつて、動物の階級を下るに從ひ前額は後退して、其の切線は垂直の位地から水平の位地に移り、且つ顱頂部も低くなり、終には眞の前額と稱すべきものはなくなるのである。

斯く人間では、頭骨の上半を占むる頭蓋部が、腦髓の發達に伴つて著しく發達する反して、頭骨の下半をなせる顏面部は却つて動物に比して發達が微弱である。是れは咀嚼及嚥の武器たる下顎骨が、動物では甚だ有用であり、隨つて顯著なる發達を爲すに反して、人間では、夫れが大に優さしく出來て居る。隨つて動物に見る樣な口吻の突出を起すことがない。但し下顎骨の頤部は、動物よりも人間殊に文明人に於て

佳良なる發達を示し、著しく前方に挺出して居る。是れは言語の發達が完全となるにつれて、直接發言に作用する舌や口腔底部の諸筋がよく發達する結果として、夫等の諸筋の附着點たる頤部に、發生的刺戟が與へられ、其の佳良なる發育を促すからである、凡て以上の關係は、人間の顏貌をして、獰猛疎野なる動物の顏貌より、一轉して、典雅優美ならしむる原因をなすものである。

次に直立歩行の習性を有するに至つた結果、水平に體軀を保てる動物に比して、垂直に之を保てる人間は、重き頭を支ふることに向つて遙かに有利な條件を具へ、爲に腦髓の發達をして愈々好良ならしめたことも、想像するに難くはない加之、頭部を高く支ふることは、高等なる感覺器官たる眼や耳の働きを敏感ならしめ、且つ又視聽の領域を擴張せしめて、益々腦髓の發達を促進せしめたに違ひない。重き頭部を支へ且つ、其れに對する衝突を緩和して、大切なる腦髓を保護すべく、人間の脊柱は、動物の脊柱が單調なる一直線をなすに反して、徐ろにS字狀を現はし、輕滑なる「リズム」的の快感を惹き起さしめて居る。

直行歩行の習性は、人類に於て始めて見らるべき、上肢と下肢との分業を喚び起し、下肢が専ら體軀を支へて之を移動するの任務を爲しつゝある間に、上肢は大なる自由を得て、意志の命ずる所に從つて確實に其の命令を外界に向つて遂行すべき行力なる武器たると同時に、又鋭敏なる感覺器官として外界を觸知し得るもので、實に優秀なる人間の精神は、大半手を通じて其の活躍を外界に向つて實現しつゝあるのである。而して又、直立歩行に際して、直接働かなければならぬ下肢の骨は、上肢に比すれば遙によく發達し、太さ長さ共に上肢の骨を凌駕する樣になる。このことは、人體をして、如何にも纖細輕捷の感を起さしむる所以のものであり、之を動物就中人間に近い類人猿に比するも、動物が一般に肥充遲重の態あるのと甚だしい相違である。別言すれば人間は如何にもしなやかに貴公子然たる所があるが、動物は、如何にたれが人間に近寄つて居ても、沐猴にして冠する者とでも云うか、何處迄も重苦しい土百姓の面影が殘る。

人間性の特徴として、人間美を發揮する上に最も大切なる關係を有して居るものゝ中に、人體の外面を代表せる皮膚を除くことは出來ない。人間の皮膚には動物の如き羽毛がない。一定の場所を除くの外、毛髪は悉く退化して、單に纖細なるものとなつて仕舞つた。斯くて皮膚が裸出する樣になつたことが、如何ばかり、人間の輪廓美をくつきりと描き出す爲に有利な條件を滿足せしめたかは、云はずもかな、更に又皮下に分布せる毛細管の血色を透見することによつて、獨特

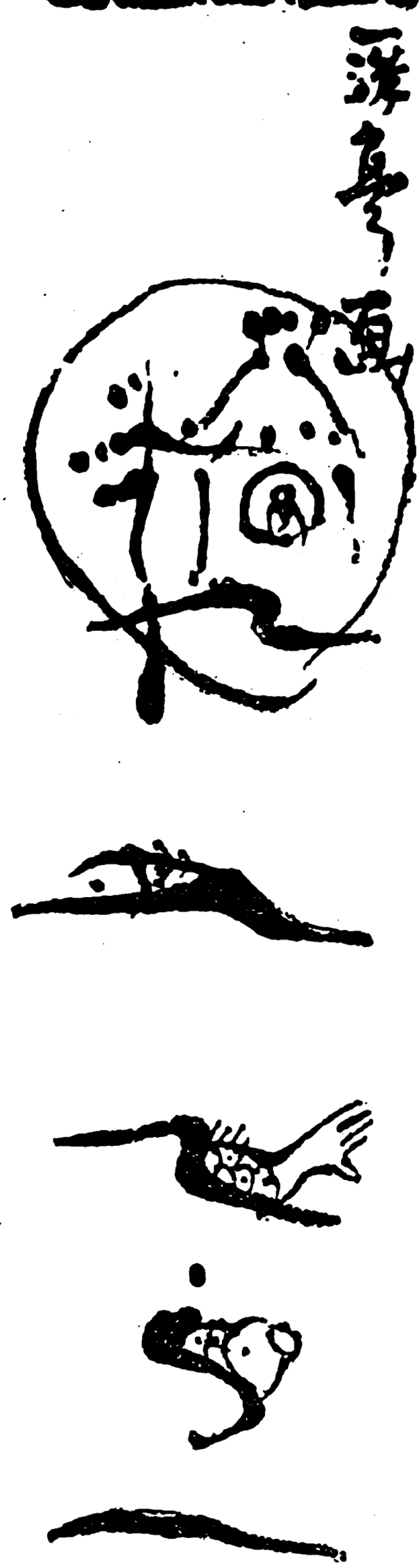
の血彩美を感得するに至らしめた。皮下には又た、許多の脂肪が貯へられて、これによつて、稜々たる骨や、隆々たる筋肉の粗硬なる暴露を包み、豐艶潤澤なる曲線美を帶ばしめる。人間の皮膚が其の大部分に於て毛髮を退化したことは、獨り人間の美觀を增したのみならず、又夫れをして敏感なる感覺器官たらしめ、智力の發達と密接なる關係を結ばしめた。

筋肉も亦、人體美に關して疎外することの出來ない聯繫を有つて居る。骨と皮との間を充實して大部分の實質をなせる者は、何んと云つても筋肉である。其の意味に於て、筋肉が人を造つて居るとも云へるのである。而も其の筋肉は、神經系の發達顯著なる人間に於て、最も明瞭に外界からの刺戟に應じて反射性に絕えず一定の緊張を示して居るものである。試みに一個の樂燒の茶碗を見ても、名人の作には、死んだ土塊でありながら、何んとなく、活々した引き締つた感が窺はれるものであるが、大自然の靈妙なる鑿によつて彫まれた人間の體が、此の筋肉の緊張によつて、どれ丈け、強い、深い印象を、觀るものに與へることであらう。特に其のことは、表情筋と云ふ別名さへ與へられて居る顏面の諸筋に於いて、最も重要なる意義を有つて居るものは云ふ迄もないことであつて、一顰一笑が、よく歷史の頁を革め、全人類の運命を左右する樣な場合がないではない。が併し斯る表情は、獨り顏面の筋肉ばかりではない、夫の有名なラオコーンの像を見る者は、何人も、頭より足に至る滿身の筋肉に於て、大なる苦悶の表徵の充ち滿ちて居ることに心を戰かさずには居られまい。夫れにつけても自分は曾て倫敦のテート畫廊で、或る知名の畫家の『エバの悔』と題せる傑作を見たことを憶ひ出す。其の畫には「エバ」が後向きになつて、背を弓の如くに曲げて居る所が描かれてあつて、顏面は全く隱れて居た。而も痛恨の意が凡ての背筋に滿ち亘つて、觸れなばピリピリと打ち顫はんかと計り感ぜられたのであつて、今更ながら其の構圖の大膽さと、天禀の技能とを嘆賞することを禁じ得なかつた次第である。更に進んでは、筋肉の作用によつて姿態に千變萬化が與へられ、之れによつて靜的美が更に動的美となつて躍出することは、言を待たずして明かである。

あはれ偉大なる人よ。妙靈なる人の體よ。之を仰げば愈々高く之れに臨めば益々深い。吾等の筆がどうして之を語ることが出來やうぞ。吾等の口がどうして之を寫すことが出來やうぞ吾等は唯天より享けたるこの無限の恩寵を顧みてひたすら歡喜に胸を跳らすのみである。


イージーおしめ
決して衣服や蒲團を汚さず
外出にも絶對御安全!!
到る處の藥店にあり
特長
◎伸縮自在の純ゴム製おしめカバーにして體裁頗る上品◎大小便は決して漏れず、赤ちやんの衣類は常に清潔◎着脱に手數がからず、洗濯はたゞ水をかける計りで奇麗になりますカサ張らず旅行携帶に便利
イージーおしめ定價
別）子）小形（二一吋）七〇錢 （純ゴム製）八〇錢
（製（ル大形（三四吋）八〇錢 九〇錢
純ゴム特製 一圓十錢 一圓卅錢
◎振替口座東京一三〇〇二番 直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に御願ひ致します。代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい。
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和ゴム製作所
電話墨田局四二一、一〇三三、一〇三四番

僻見



芥川龍之介

四　木村巽齋

今年の春、僕は丁度一年ぶりに京都の博物館を見物した。が、生憎その時は元來酸過多の胃嚢が一層異狀を呈してゐた。韶を聞いて肉味を忘れるのは聖人のみに出來る離れ業である。僕は駱駝のシャツの下に一匹の蚤でも感じたが最後、たとひ坂田藤十郎の演ずる「藤十郎の戀」を見せられたにしろ、到底安閑と舞臺の上へ目などを注いでゐる余裕はない。況や胃嚢を押し浸した酸はあらゆる享樂を不可能にしてゐた。のみならず當時の陳列品には餘り傑作も見えなかつたらしい。僕はまづ佛畫から、陶器、佛像、古墨蹟と順々に惡作を發見して行つた。殊に龔半千か何かの掛物に太い字のべたべた並

んでゐるのは殆ど我々胃病患者に自殺の誘惑を與へる爲、特に拵つたものとしか思はれなかつた。

その内に僕の迷ひこんだのは南畫ばかりぶら下げた陳列室である。この室も一體にくだらなかつた。第一に鐵翁の山巒は輕石のやうに垢じみてゐる。第二に藤本鐵石の樹木は錆ナイフのやうに殺氣立つてゐる。第三に浦上玉堂の瀑布は琉球泡盛のやうに煮え返つてゐる。第四に——兎に角南畫と云ふ南畫は大抵僕の神經を苛いらさせるものばかりだつた。僕は顏をしかめながら、大きい硝子戸棚の並んだ中を殉教者のやうに歩いて行つた。すると僕の目の前へ奇蹟よりも卒然と現れたのは小さい紙本の山水である。この山水は一見した所、筆墨縱横などと云ふ趣はない。寧ろ何處か素人じみた罷軟の態さへ帶びてゐる。其處だけ切り離して考へて見れば、玉堂鐵翁は姑く問はず、たとへば小室翠雲にも數歩を讓らざるを得ないかも知れない。しかし山石の苔に靑み、山杏の花を發した景色は眇たる小室翠雲は勿論、玉堂鐵翁も知らなかつたほど、如何にも駘蕩と出來上つてゐる。僕はこの山水を眺めた時、忽ち厚い硝子越しに脈々たる春風の傳はるのを感じ、更に又胃嚢に漲つた酸の大潮しやうに干上るのを感じた。木村巽齋、通稱は太吉、堂を蒹葭と呼んだ大阪町人は實にこの山水の素人作者である。

巽齋は名は孔恭、字は世肅と云ひ、大坂の堀江に住んでゐた造り酒屋の息子である。巽齋自身「余幼年より生質軟弱にあり。保育を專とす」と言つてゐるのを見ると、兎に角體は脾弱かつたらしい。が少數の例外を除けば、大抵健全なる精神は不健全なる肉體に宿るやうに、巽齋の精神も子供の時から逞しい力を具へてゐた。其處へ幸福なるブウルヂョアの家庭は敎養の機會を與へるのに殆ど何ものをも吝まなかつた。今試みに巽齋自身のその間の消息をもの語つた傳記の數節を抄記すれば、——

「予幼少より生質軟弱にあり。保育を專とす。家君余を憫んで草木花樹を植うることを許す。親族に藥舖の者ありて物產の學あることを話し、稻若水、松岡玄達あることを聞けり。十二三歲の頃京都に松岡門人津島恒之進、物產に委しきことを知り、此の頃家君の京遊に從つて、始めて津島先生に謁し、草木の事を聞くこと一回。翌年余十五歲、家君の喪にあ

ひ、十六歳の春余家母に從つて京に入り、再び津島氏に從學し、門人と爲ることを得たり。」

「余五六歳の頃より、頗る畫事を解き、我鄉の大岡春卜、狩野流の畫に名あり。因つて從つて學ぶ。春卜嘗て芥子園畫傳に倣ひ、明人の畫を模寫し、「明朝紫硯」と云ふ彩色の繪本を上木す。余之れを見て始めて唐畫の望あり。此頃家君の友人、和州郡山柳澤權太夫（即ち柳里恭である。）毎々客居す。因つて友人に托し、柳澤の畫を學ぶ。（中略）十二歳の頃、長崎の僧鶴亭と云ふ人あり。浪華に客居す。長崎神代甚左衛門（即ち熊斐である。）の門人なり。始めて畿内に南蘋流の弘まりたるは此の人に始まれり。余從つて花鳥を學び、池野秋平（即ち大雅である。）に從つて山水を學ぶ。」

「余十一歳の比、親族兒玉氏片山忠藏（即ち北海である。）の門人たるを以て　余を引いて名字を乞ふ。片山余が名を命じ、名鵠字は千里とす。其の後片山氏京に住す。余十八九歳の頃片山再び浪華に下り、立賣堀に住す。余從つて句讀を受く。四書六經史漢文選等を讀むことを得たり。」

是等の數節の示してゐる通り、巽齋の學藝に志したのは弱冠に滿たない時代であり、巽齋の師事した學者や畫家も大半は當時の名流である。そればかりではない。南蠻臭い新知識に富んだ物產の學に傾倒したのは勿論、一たび「明朝紫硯」を見るや、忽ち長江の蘆荻の間に生じた南宋派の畫法に心醉したのも少年らしい情熱を語つてゐる。

この聰明なる造り酒屋の息子はかう云ふ幸福なる境遇のもとに徐ろに自己を完成した。その自己は大雅のやうに純乎として純なる藝術家ではない。寧ろ人に師たるの藝十六に及んだと傳へられる柳里恭に近いディレッタントである。が、柳里恭のディレッタンティズムは超凡の才力を負うてゐると共に、デカダンスの臭味もない譯ではない。少くとも隨筆「獨寢」の中に男子一生の學問をも傾城の湯卷に換へんと言つた通人の面目のあることだけは兎も角も事實と言はなければならぬ。しかし巽齋のディレッタンティズムは變通自在の妙のない代りに、如何にも好個の讀書人らしい淸目なる風格を具へてゐる。柳里恭は乞食の茶を飲んだり、門上に瞽女の三味線を彈いたり、あらゆる奇行を恣にした。或は　恣にしたと傳

へられてゐる。けれども巽齋に關する傳說は少しも常軌を逸してゐない。まづ世人を駭かしたと云ふのも、「江戸の筆丁鳳池堂のあるじ浪華に遊びしところ、蒹葭堂を訪ひしに、しばし待たせ給はれ、その中の慰みにとて一帖を出せり。いかなるものぞと開き見れば、江戸の筆丁の家號をしるしたる名紙といふものを一枚の遺漏もなく集めたりしとぞ」（山崎美成）と云ふ程度の逸話ばかりである。尤もこの逸話にしても、「その好事の勝れたる想像すべし」と云ふより外に考へられない次第ではない。巽齋は明らかに鳳池堂の主人へ無言の一拶を與へてゐる。更に無造作に言ひ換へれば、アルバムに滿載した筆屋の名刺を「どうだ？」とばかりに突きつけてゐる。その遊は勿論辛辣なる機鋒を露はしてゐるのに違ひない。しかし柳里恭に比べれば、――殊に「獨寢」の作者たる柳里恭に比べれば、はるかに温乎たる長者の風を示してゐることは確かである。

「余幼年より絶えて知らざること、古樂、管絃、猿樂、俗謠、碁棋、諸勝負、妓館、聲色の遊、總て其の趣を得ず。況や少年より好事多端暇なき故なり。賻貨を好まざるは余甞養の意あればなり。」

巽齋の所謂娛樂なるものに少しも興味のなかつたことはこの一節の示す通りである。

「余が嗜好の事專ら奇異にあり。名物多識の學、其他書畫碑帖の事、余微力と雖も數年來百費を省き收る所書籍に不足なし。過分と云ふべし。其の外收藏の物、本邦古人書畫、近代名家文人詩文、唐山眞蹟書畫、本邦諸國地圖、唐山蠻方地圖、草木金石珠玉鱗介禽獸、古錢古器物、唐山器物、蠻方異產の類ありと雖も、皆考索の用とす。他の艶飾の比にあらず。」

巽齋は是等のコレクションを愛し、蒹葭堂を訪れる遠來の客に是等のコレクションを示すことを愛した。いや、コレクションと云ふよりも寧ろ宛然たる博物館である。年少の友だつた田能村竹田の「收藏せる法書、名畫、金石、彝鼎、及び夷蠻より出づる所の異物奇品棟宇に充積す」と言つたのも必じも誇張ではなかつたであらう。巽齋は是等のコレクションを「皆考索の用とす」と言つた。唐山蠻方の地圖の中には歐羅巴亞米利加の大陸もはるかに橫はつてゐた筈である。い

や、蠻方異産の類の中には更紗だの、銅版畫だの、虫眼鏡だの、「ダラアカ」と云ふ龍の子のアルコオル漬だの、或は又クレオペトラの金髪だのも（勿論これは贋物である）交つてゐたのに違ひない。是等のコレクションを「考索した」この總明なるディレッタントは不可思議なる文明の種々相の前に、どう云ふ感慨を催したであらうか？少くとも世界の大の前にどう云ふ夢を夢みたであらうか？

「京子浪華の地、古より藝園に名高きもの輩出し、海内に聞ゆるものありといへども、その該博精通、兼葭堂の如きもの少し。（中略）曾て長崎に遊歴せしところ、唐山の風俗を問ひこゝろみ、歸りて後常に黄檗山にいたり、大成禪師に隨ひ遊べることありしに、人ありて唐山の風俗を禪師に問ふものあり。禪師兼葭堂をさして、この人よくこれを知れり。吾れ談を費すに及ばずにいはれたりき。禪師はもと唐山の人にて、投化して黄檗山に住せしなり。」（山崎美成）

「この人よくこれを知れり。吾れ談を費すに及ばず」の言葉は賛辭かどうか疑問である。或は生死の一大事をも外に、多聞を愛するディレッタントへ一棒を加へたものだつたかも知れない。しかも一棒を加へられたにもせよ。如何に巽齋の支那風に精通してゐたかと云ふことは疑ひを容れない事實である。巽齋は云はゞ支那に關する最大の權威の一人だつた。支那の畫を愛し、支那の文藝を愛し、支那の哲學を愛した時代のかう云ふ兼葭堂主人の多識に聲譽を馳いたのは當然である。果然海内の文人墨客は巽齋の大名の擧がると共に、續々とその門へ集まり出した。柴野栗山、津藤二州、古賀精里、賴春水、桑山玉洲、釧雲泉、立原翠軒、野呂介石、田能村竹田等は悉その友人である。殊に田能村竹田は、……大いなる藝術家といふよりも寧ろ善い藝術家だつた竹田はこの老いたるディレッタントの前に最も美しい敬意を表した。「余甫めて冠して、江戸に東遊し、途に阪府を經、木世肅（即ち巽齋である。）を訪はんと欲す。偶々人あり、余を拉して、將に天王寺の浮屠に登らんとす。曰、豐聰王の創むる所にして、年を閲すること既に一千余、唯魯の靈光の巋然として獨り存するのみならずと。余肯かず。遂に世肅を見る。明年西歸し、再び到れば、則ち世肅已に沒し、浮屠も亦焚滅せり。」

（この項未だ終らず。）

夏季の好讀物

改造社藏版

著者	書名	判型	版	定價・送料
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	四六判上製	廿六版	定價參圓 送料廿一錢
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六判上製	新刊	定價貳圓 送料十七錢
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六判上製	六版	定價壹圓五十錢 送料十五錢
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊判上製	新刊	定價拾圓 送料四十五錢
經濟學博士 本庄榮次郎著	日本社會史	菊判上製	十八版	定價貳圓五十錢 送料十七錢
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六判上製	六版	定圓壹圓五十錢 送料十五錢
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六判上製	六版	定價參圓五十錢 送料貳十一錢
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六判上製	廿二版	定價四圓廿錢 送料廿一錢

夏季の好讀物

改造社出版

谷崎潤一郎著	愛すればこそ	百二版	四六判上製	定價壹圓六十錢 送料十五錢
谷崎潤一郎著	愛なき人々	卅五版	四六判上製	定價貳圓 送料十七錢
吉田絃次郎著	芭蕉	十一版	四六判上製	定價壹圓六十錢 送料十五錢
吉田絃次郎著	タビデと子たち	十一版	四六判上製	定價壹圓八十錢 送料十五錢
賀川豐彦著	死線を越えて	二百八十一版（改版中）	四六判上製	定價參圓 送料十九錢
賀川豐彦著	太陽を射るもの	百七十六版（改版中）	四六判上製	定價貳圓 送料十七錢
賀川豐彦著	星より星への通路	四十八版	四六判上製	定價壹圓五十錢 送料十九錢
廚川白村著	近代の戀愛觀	百十三版	四六判上製	定價壹圓五十錢 送料十九錢
廚川白村著	苦悶の象徴	五十版	四六判上製	定價壹圓五十錢 送料十五錢

改造社運動叢書

著者	書名	版	定價・送料
熊谷一彌著	テニス	十七版	定價貳圓參拾錢 送料十七錢
三宅太助著	野球	九版	定價貳圓八十錢 送料十九錢
梅澤親光著	水泳	五版	定價壹圓八十錢 送料十五錢
香山蕃著	ラクビー	近刊	
山田浩二著	撞球	近刊	
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四版	定價貳圓五十錢 送料十七錢
槇有恒著	山行	四版	定價參圓 送價十九錢

書 22 ダウイット。ソクラテス 23 ダウイット。聖ベルナルドのナポレオン 24 ダウイット。サビニ女 25 ダウイット。戴冠式 26 ダウイット。レカミエ夫人 27 ダウイットの畫室（ロシュロー） 28 ジエリコ。メドウサの筏 29 グロ。ジャファのペスト患者 30 ドラクロア。一八三〇年 31 レオナルド。風景素描 32 ホベマ。風景 33 レンブラント。風景 34 コロー。風景素描 35 クールベ。風景 36 マネ。風景 37 モネ。新緑 38 モネ。ポプラ 39 モネ。テームス 40 モネ。ゴニス

法學博士 穗積重遠著

離婚制度の研究

定價拾圓
送料四拾五錢

斯界の第一人者穗積博士が學生時代より研究したといふ「離婚制度の研究」は刻苦十年。玆に完成いたしました。離婚そのものであり、法學そのものである博士の此著は世界的に權威を有つものであることは此の大冊を手にしたものの何人も首肯する所です。我國の離緣は彼の有名なる『三くだり半』の一札で代表され、『緣切寺』で代表されています。今此の由來を故實より詳細に尋討し、査覈して現在制度に至るまでの經路を詳述し、學的に研究して我國の離婚制度の研究を完成されたのです。然しながら、本書の立場は從來の親族法、離婚法の解釋と其軌を一にせず、ズット進んだ立場に於いて、即ち社會問題、婦人問題を解決する法律的、慣習的立場よりかかれたものであれば、婦人の社會的地位の進化を知らんとする人は何人も左右になければならぬ大著であり、それにクリスト教の婚姻非解消主義、イギリス離婚法、フランスの革命と離婚法、勞農ロシヤの婚姻法、諾威の新婚姻法を說いたもので材料の豐富なる、引證の該博なる、論斷の剴切なる世界に無比といつても差支ない程で、ベーベルの婦人論と共に東西の双璧と稱すべき大著述であります。思想の新舊を問はず、何人も、そして何れの團体でも、學校でも、學生でも必ず備へらるべき著述です。今や本書は全國の法曹界に異常の評判であります。將來の離婚法は本書を中心として何人にも論議されませう。それほど重要の書で、そうして趣味津々たる名著です。

のかも知れないが、たしかに新時代だけは語つてゐるだらう。敢えて一個の爆弾を送ると云はう。沈黙した爆弾?それを讀者がいかに點火し、如何に精神の中に爆發さして新らしい世界をひらくか、……その企畫を許せ……新生活の中途に於ける故有島氏の靈に此一卷を贈る。

王の異端——太陽崇拜——アクナトン王の治世に於けるエヂプト

第五章　ツタンカーメンの生涯

アクナトンの位を繼ぐ——彼れの名前について——その起源——彼れの生活——幼年時代——結婚——王女との結婚——結婚式——祝婚歌——クート・アトンに於ける彼れの住居と職掌——皇位登極——テーベに於ける戴冠式——戰爭——首都に於ける彼れの宮殿と日常生活——在存わづかにして崩御

第六章　墓陵の意義

墓陵の巨大——墓泰盗賊——偶像破壞者——墳墓の形狀と類別——古代と第十八王朝時代——ツタンカーメン王陵の圖形——象徵彫刻と碑叙——精靈の住居——カアとは何ぞや——精靈の生活——近古風習の類似

第七章　ツタンカーメンの木乃伊

人民働突——遺骸を木乃伊とす——帝國に用ひられた木乃伊の製法——他の方法——綿布繃帶——死人の書パピルス——スカラブ(甲蟲)と呪符

第八章　葬　祭

寺院に於ける葬禮——ナイル河の渡渉——兩岸の幽靈——獻納品——副葬物——埋葬

既に、歐羅巴が自らその首を締めた五年の戰爭の間に於て、私は、愛と、兄弟としての相互扶助との理想に忠實に留まつた歐羅巴の魂を集めることに努力した。（中略）

世界は、他の偉大な力がその援助に來ることを必要としてゐる。亞細亞が「人種の會議」に於て、その席を再び取るべきである。

亞細亞の若き人々よ、一の人種の他の人種の上に占むる空しき優越が問題ではない。私たち總てのために、脅かされてゐる人類を救ふことが問題である。人類は英雄主義の一の確固たる意志によつてのみ成長した。人類はそれによつてのみ存續する。その存在の本質そのものが一の英雄的な行爲であつた。筋肉と意志との如何に巨大なる努力によつて人間は、地球の熱い泥土から脱出することに、一層よく武器を備へた、一層強い數百萬の他の生物の上に拔んずることに、その言葉を鍛え作ることに、その思想の大厦を石一つ石一つから築き上げることに、「夜」を貫き透す「精神」の光りを元素的な諸の力から奪ひ取ることに成功したことであらう

（中略）

その光榮ある諸の文明が、一の長い眠りの後に、その力強い聲を新たに世界に聽かせようとしてゐる亞細亞の若き人々よ。人類の天才の最も輝ける力がその中に呑み込まれてゐる國民と人類との無益な爭鬪を再び始めることが問題でないことに注意せよ！人類は、その數千年の歩みの間に（中略）

日本の兄弟たちよ、あなた方の歐羅巴の兄弟があなた方に手を差し伸べて而していふ……「お互に助け合はう！お互に愛し合はう！」

谷崎潤一郎作

戲曲 愛なき人々

（四六判 上製）

定價貳圓 書留送料拾七錢

卅五版

幽谷に白蘭を見る氣高さ、天上の星と語る神祕さ、美はしさは此作者獨歩の境地であり、そして人間の底ひも知れぬ惡魔的愛慾を自由に解剖する氏の藝術力の絶大なるは古今比儔すべきものがない、我々の心の奥に潜む煩惱、憤怒、悲哀を無造作に引きずり出して肩に擔ふ宿命の情緒に涙をそゝらし、對角、三角、四角の戀愛をも曇りなき名刀にてグン／＼解決して行く冴えは讀者をして一種の恐れをさへ抱かしむ、明治大正は云ふも更なり、我國の古今を通じ、世界の各國を通じて氏の如く惡魔的精神に徹するものありや、谷崎氏を通じて不朽の藝術力を味へ、そして唯美的精神の琴線に觸れよ。本書は「愛すればこそ」の姉妹篇であります。

谷崎潤一郎著

愛すればこそ

（百版）

定價壹圓六十錢 送料十五錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二〇

創作

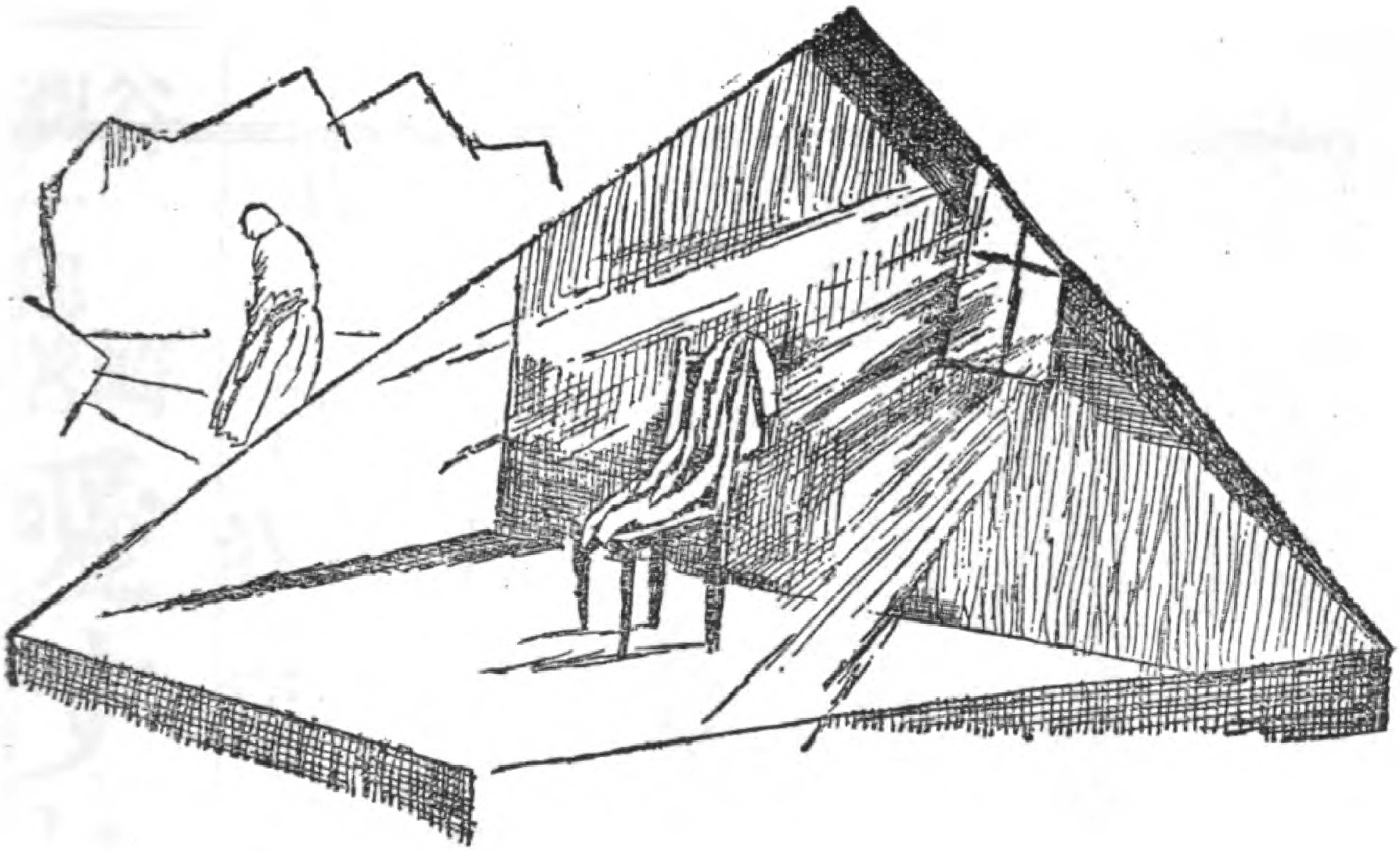
春遠からじ（長篇小說）　ハッチンスン作　木村毅譯

日曜日（小說）　丹野てい子

林檎畠のスケッチ（小說）　長坂きくじ

愚かな口髭（小說）　豊島與志雄

わが生ひたち（長篇小說）　佐藤春夫



春遠からじ【第二回】

ハッチンスン作
木村毅譯

五

セェバアが現在所藏してゐる書籍の蒐集をはじめたのは、前號の終りで述べたバイロンの挿話があつてから――もつと詳しく言へば、ケンブリッヂを卒業してから、運よく病身な少年の家庭教師の口にありついて、その轉地につき添ふてはかなり廣く方々を旅行してから、又ショヴェンズベりなる父の家を去つて、フォチュン・イースト・エンド・セェバア商會の事務見ならひのため身を落ちつけてから、まだ二三年後の事であつた。即ち書籍に對する彼の強い愛着は、あたりまへの者なら、文藝熱がさめやうと云ふ時になつて、初めて生じて來たのであつた。彼は廿八から三十の間に於て文學を耽讀した。尤も文學はどうせ誰もが一度は病みつくにしても、大抵はもう十年も若い時に讀むので、丁度その年頃は趣味も文

學に向ふし、そして又恰も若い旺盛な野獸が肉を求めるやうに、いくら讀んでも滿足すると云ふ事を知らないものである。ところが二十八才から三十才の間に於て初めて文藝書に接した彼は、勿論時とすると天啓の如き感じに打たれた事もありはしたが、槪して言ふと心ゆくまでの滿足を以て鑑賞する事が出來た。特に詩人に於てさうであつた。彼は最初、バイロンの數行に胸を震撼させられたのと同じやうな感動をもたらす美しき詩句を、その後ひもとく多くの詩人の中にも、絕えず見出した。

　彼の藏書は直ちに彼の趣味性が頗る廣汎で多岐な事を語つてゐた。尤も多岐とは言つても、彼自身の眼から見ればそこに一貫した共通の特質――でないとすれば數系の連絡ある特質があるのだつた。即ち史籍數卷、社會學書數卷、スペンサアが數卷、ハクスレイ及びヘッケルが數卷、地理學の小敎科書一卷、それに比して純文藝書はかなり多く、モウリイ版の文學者評傳、裝幀の美しい英國の評論集、いろ〳〵と版の變つた幾種かのシェークスピヤもの。詩書は殊に澤山あつて、一見した所では彼の藏書は全部詩ではないかと思はれる位であつた。これら凡てはチッドボロウの古本屋から買集めたので、二三シリングより高いのは一冊もなかつた。此等の本をつなぐ共通の一貫した特質と云ふのは、それが皆彼に、空想的思索を刺激してくれる事であつた。幻影を見せて與れることであつた。因果を暗示し、過程を闡明してくれる事であつた。又それらの書籍が提示してゐる數系の特質と言ふのは、美と神秘と、敏感と驚異とであつた。書物は彼に萬事に就いて思索させた。彼は萬事について思索することを好んだ。又多くの詩人は彼の心を美感で充たしてくれた。彼は美に對すると、あやしい感動を覺えるのであつた。

六

讀書によつてセェバアの心に傳へられた美感と想念とが彼の上に及ぼした影響――それは最初バイロンから受けた感激

の中にも窺えるが――を究めると、彼の個性の特長がわかる。その萬先生、どうもそこがはツきりしませんが……』と言つて、額に八の字をよせた『頭腦混亂』の少年セヴァと、今迄同じ習慣をもちつゞけて來た成人のセヴァとの間には、一脈の連絡があつた。彼は肉眼を以てよりも、寧ろ心眼で、遙かに明かに、遙かに強く、ものを見た。想像に描かれた物象の美は、彼にあつては、肉眼で見る美よりも生き〲としてゐた。そして萬事がこの調子であつた。彼が興味をもつのは、直接、眼で見たり、耳で聞いたりすることではなかつた。彼が興味をもつのは、視野や言説の裏をさぐつて、心に會得の行くことであつた。彼は時とすると、その力強い理解のため、異常な感動をおぼえる事があつた。そしてこの心眼に映る美が、最も奥妙で痛切な深刻味を心に觸れさせてくれるのと同じ程度に、氣に食はない環境や、邪惡なる人の顏は、彼を困迷せしめて、ふしぎなる恐怖、いな、ほとんど戰慄にまで、彼を導いた。――

蜜月の旅にロンドンへ上つたある日曜日のこと、セヴァはメーベルと一緒に、乘合自動車に乘つて町々を馳けぬいて見やうと思ひついた。――『どこでも構はん。やつて來た最初のに乘らう。』その最初の自動車は二人を乘せて南ロンドンを馳けぬけ、大通をそれて、數哩走つた後、汚い、建てこんだ裏長屋へ彼等をつれこんだ。高い建物のあけ放つた窓には、しよんぼりと女か坐つて居り別の窓にはシャツ一枚の元氣のない男の顏が見え、たて切つた窓の後ろには子供達の顏が重なり合つてゐた。すべての者が――男も、女も子供も――無感覺にこんな處に閉ぢこもつてあてもなく見つめてゐた。一棟の下に幾世帶もが積まれてゐるので、一つの建物の入口に、五つも六つもの呼鈴がとりつけてあり、中には丁度人の首でもぶら下つたやうに、だらりと下へ垂れてゐるのもあつた。通りには人ツ子一人ゐなかつた。そして町はどこまで行つても、かうした生氣のない住民と、壞れた呼鈴の垂れてゐる戸口とを收容した汚い家々が、はてしなく續いてゐた。

セヴァは、暗い底知れぬ憂鬱の氣にとざされた。彼は自分がこの首を垂れた呼鈴をひき、薄氣味惡い扉を排し、物のすゑたやうな臭ひのする階段をのぼり、同じく暗くて臭い室に入つて行くと、ここに幽閉された住民達――その男や、女

や、子供が、その牢獄を開いて、まじ〳〵と彼を見つめながら迎へてくれる有様を、想像して見た。彼はそれらの室の一つに住つて、毎日それを見、それを感じ、それを匂ふてゐる自分を想像してみた。更に又かうした室の一つにゐて自滅する自分を想像した。

ホテルへ歸つてお茶の時、妻のメーベルは二人で見て來たことを調子づいて喋りはじめた。『私、ほんとに行つて見たことを喜びますわ。あんな身分の人達がどんな暮らし方をしてるかつて事を、知つとくのは、大變にいゝ事だわ。窓際にゐたあの恐ろしい人達ッたら！』――彼女は笑つた。セェパアはこの時初めて、彼女がこんなに突拍子もなく、又あけッぱなしな高笑ひをすることに氣づいた。

併しセェパアもとにかく同意はした。『さうだ。僕も彼等の生活の概念を得ておくことは結構だと思ふ。だが、行つたことを喜ぶとは言ひ得ない。あゝした生活がどんなに僕を憂欝にしたか。お前には想像もつくまい。』

彼女は再び笑つた。『憂欝にしたんですつて？　どうしてさうなんでせう。ほんとに、あんたは不思議な人だわ。』

更に彼女はつゞけて言つた。『私は自分に實地に見たことが嬉しいんですわ。なぜつて、あんな人達があなたの下に雇はれる時、高慢ちきな風をして、不相應な要求を持ち出すでせう。だが今はその人達がどんなお里から出て來るかをつきとめたんですもの。』

『なるほど、それがお前を喜ばせたわけなのかい。』

『さうですとも。』

併しセェパアがそれについて考へたことは、メーベルの考へたこととはまるつきり違つてゐた。

七

『頭腦混亂』先生と、その昔豫備校にゐた友達は彼を呼んだ。――今や成人したセェバアは依然としていつも額に八の字をよせては、世間とは全くかけ離れた思索に沒頭してゐる人間となつた。彼は昔ながらの混亂家であるばかりか、ますますひどい混亂家になつて行つた。彼はメーベルと一つの室にゐる事をやめ、むしろ滿足を以て自分自身の室に閉ぢこもるやうになつたと同じく、結婚後五年にして彼と妻との間には何等思想のつながりのない事を、はつきりと知るに到つた。彼は自分の思想を慈しみ、思索の興味にいよ／＼專念になつて、自らの心生活を展開して行つた。

セェバアはいつもよく、幼い豫備校時代のある出來事を、言葉までそつくりその儘思ひ出すことがあつた。あの頃、學校の隣地に停年後二三年住んでゐる或る有名な哲學教授が、一週に一回宛――單に若い人達に接し、清新な若々しい心に觸れたいと云ふ念願から――少年達のため『科外講演』をしてくれた。セェバアはその言葉をそツくりその儘覺えてゐた。老教授の講演は、題目はどんなに變らうと、結論は大抵次のやうな勸告に終つた。

『だから皆さん（彼はいつもさう言つた）毎日少し宛でも物を書きとめておくと云ふのは大變にいゝ事です。立派なことです。一切の行爲のうち最上のことです。少しづつでも書きとめる。だが毎日これを怠らぬ習慣をつける。尤も御存知の通り、私は決して日記をつける事をすゝめてゐるのではない。あなた方のした事を書きとめておく必要はない。そんな事はしたつて何の利益もない、吾々が物事をなすには凡て理由があるものです。大切なのは現はれた行爲でなくて、隱れた理由であります。皆さんが毎日の小さな手記は、皆さんが思索せられた何物かの記錄でなくてはなりません。あなた方の行爲は、一部分他人の考へで左右される事があります。そう云ふ事は屢次ある。併しあなた方の思索はあなた方自身のものである。それを書きとめておくのです。さうすればそれこそは小さいながら眞實のあなた方の一斷片であつて、「たしかに、本當の自分だ」と言つて眺め且つ言ふことの出來るものであります。この小さな手記は云はゞ鏡であつて、あなた方はそれに眞の自我を映してみ、且つそれを矯正する事が出來ます。ガラスの鏡を見ればあなた方の顏が汚れたり、髮が亂れたり

してゐる事が分るので、あなた方は直しに行きます。だが、あなた方の僞りなき自我、あなた方の心、あなた方の精神が、どんなものかを映して見せる鏡をもつことは、更に一層大切なことではありますまいか。それしきの事が出來ないかどうか、まあ、初めて見ることです。少しづつ書いて行く、それはまことに氣持をおちつけてくれる。……堅實な道です。』

野の仔馬も同じく、おちつくなんて云ふ事はてんで問題にじない幼き聰衆は、鞭や放課後のお掃除などと云ふ罰の加へられる心配のない此の老哲學者の頸の運動に對しては殆んど何の注意も拂はなかつた。彼等はそれを茶化して、學校の流行語にして了つた。『おい。毎日少し宛書きとめて、君自らを沸騰させろよ。この馬鹿奴！』と。併しそれが少年エセバアの心には朧ろげながらにも、一種の思索的性質を植えつけた。彼は手記をつくる習慣をつけやうと心に誓ひ、練習帳の一冊にどの文章も『僕は今日考へた――』との書き出しで、丹念に書きつゞけて行つた。この習慣は成人の後もそのまゝに殘つて、その時々に起つて來た感想――讀書の際その本について感じたことや、更に一層强く、自由に思索に沒頭して思ひついた事を、書きとめて行つた。

『あなた方自身、僞りなき君――。』

結婚後の生活がます／＼孤獨の感じを深めてゆくにつれ、手記をとる事は、恰もひとり落付くことの出來る自分の室のやうな、又親しく肌についてゐる着物のやうな氣がし初めた。この密室、この着物の袖裏にひとり閉ぢこもつてゐさへすれば、彼が茫然としか思ひ浮べてゐなかつた此の普通の世界から脫離したやうな情爽な感じがした。

八

全く茫然だ！――彼は自分の思ひ煩らつてゐた多くの問題には解決をつける事が出來なかつた。又、その解決の與へら

れさうな領域のことに就いては、はつきりした知識さへも持つてゐなかつた。この別な意味の修道院――彼自身の世界――で、彼は此のこんがらかつた思想の間を往きつ戻りつした。それは丁度復雜な機械の裝置をほごして、その處置に迷ふてゐる技師のやうであつた。技師は各部の組立法及びその運轉の有効なことは、心得てゐる、が、如何にすれば一體それが實地に運轉され得るかは知らなかつた。……『これはそこに置くのだ。それは此處におくのだ。だが全體何うすればいゝんだ……？』彼はこの修道院の中へ、自分を思ひ煩はせてゐる凡ての謎――第一はメーベルとの關係、第二は樣々な形を取つて現はれて來る生活と云ふ奇怪な事務に對する感じ、第三はその時々に於てまだ一般の視聽を集めない前に社會問題や産業問題、それから政治問題に向つて働く彼の強い興味など――を、みんな持ちこんで來た。

扉はぴたりと締め切つて、それらの問題の一つ一つを寄せ集めたり、用もないのに持ち出して見たり、吟味し直したり、そして――『全體どうすればいゝんだ。……何だてんだい？』と首を拈つてゐる彼は、讀者も想像に餘りあらう。だがその思索の中にこそ凡ての問題を解く鍵はあるのだ。一々を平等に生かす道はあるのだ。とは言へ結局その鍵、その道とは何か？

彼はかうした謎に包まれながら、主としては自分の營んでゐる生活からであつたが、併しそれのみでなく廣い一般人生に於ても、ある神秘な大切なものが見落されてゐるやうな氣がし初めた。

以上がやつと彼の會得し得た凡てゞあつた。早く言へば彼は、大きな扉の鍵穴に手をさし入れて、その向う側にある筈の鍵をさぐつてゐる人も同じであつた。穴をのぞいたつて何も見えはしない。腕だつて肘までしか入らないのだ。鍵の形も又その在りかも皆くれ分らないのだ。

たゞその鍵がそこにある事だけは、彼は絕體的に確信してゐた。

いつかはそれを手に取る事が出來るであらう。

第四章

一

メーベルはセェバアよりも二つ年下で、結婚した時が廿五歳、はじめて良人と別室に寢起きするやうになつたのは丁度三十回目の誕生日が過ぎたばかりの時であつた。彼女の突拍子もない高笑ひ、あの貧民窟の訪問で二人の考へが齟齬を生じた時セェバアが初めて氣づいた彼女の癖は、むしろ彼女の性質を代表するものであつた。その笑は、彼女を面白がらすものがありさへすれば、實に突拍子もなく、そして心からこみ上げて來るので、興味をひかれた事をはじめに微笑とか又はその他の表情で暗示するなどと云ふ用意はてんでこの女にはなかつた。それは全く、平常は端嚴な表情を以てゐる顏へ爆發するやうに、こみ上げて來るのである。セェバアの謂はゆる『ふくれ面』と同一の心作用から恐らくは生じて來る習慣であつた。彼女は初めに言葉で警告する事なく、すぐに『ふくれ』上つた。だが突拍子もない笑ひの爆發とは違ひ、そのふくれ上るのには最初顏に前觸れとも言ふべき一種の表情が現はれることに、彼は氣づいてゐた。それを彼は『緊張』と呼んだ。特に鼻の兩側が眼に見えぬ毛抜きでゞも壓えたやうに、微かだが珍しい收縮をすることに氣づいてゐた。

彼女はどちらかと言ふとよく通つた鼻筋の持主で、それは自分でも自慢してゐた。と云ふのは何かに、よく通つた鼻は貴族的だと書いてあつたのを見たからだが、それを讀んだ時彼女は思はず自分の鼻を撫でてみた。

彼女の顏色は蒼白かつた。それがじみな好みのために餘計に際立つた。姿は目に立つ程よく整つて優雅だつたが、眼だけが多少斜視の氣があつて明眸と稱する譯に行かなかつた。セェバアがこのチッドボロウの牧師の娘と結婚した時、彼は『美人なる令孃』と結婚したものだと噂された。又『上品な娘』と結婚したものだとも言はれた。先づさう云ふのが定評であ

つた。彼女は男の友達が好きであり、又男の仲間から好かれた。(讀者はこゝで饒舌なハプグッドの意見を思出されるかも知れない)彼女は又自分の同年輩か、でなくばもつと年上の社交界が非常に好きで、そのために有名になつた。未婚、既婚を問はず、年下の若い女は好きになれなかつた。

二

女には、話を『ちよいと、大切な話があるよ……』とか『あてて御覧なさいよ。』とか『あんたも御存知の……』とか云ふ言葉で初めて、後半を消して了ふ人が多いが、メーベルもその仲間であつた。人の氣持をそそるやうな此の調子は、元來を言ふと何が異常な事件を語り出だす時の緒口である。だからそれを始終口にしてゐる人は始終物に驚いてゐるのかと想像する人があるかも知れない。が心配はないので、さう言ふ言葉を濫發して聽き手を惑はす者は、その償ひとでも言ふのか心は存外しつかりとしてびくつかないものだ。現にメーベルには、人が生れる事にも、生きて行くことにも、又死ぬる事にも、神秘などと云ふことは卵の毛程も感じられないのであつた。この三つの事の中に何か神秘があると聞かされても、彼女には譯が解らないであらう。人が生れ、人が生き、人が死ぬる?それに何の不思議があるか。又彼女は、一羽の胡蝶がうつとりと花に醉ふてゐるのにも、木陰に櫻草が靜心なく咲いてゐるのにも、何の神秘をも見なかつた。胡蝶――だつてあれは始終人が捕えて殺してゐる者ではないか。櫻草――あれなら何時でもみんなの引き拔いて來てゐる草だ。それに何の神秘、何の不思議があらう。

　彼女の今迄の生活は自分と同じ身分の人々の間に送られて來た。彼女が男でも女でもはかる時の標準はたゞ、それは彼女と同等の身分の人かどうかと云ふ事であつた。もし同じ身分の者であれば、喜んでその人達を迎へ、その交際を非常に娯しんだ。その人達が愉快な人か、不愉快な人か、又は愉快でも不愉快でもない無味な人かなどと云ふことは、てんで彼

女には問題にならなかつた。彼女が問題とするのはたゞ一つ、育ちがいいか悪いかと云ふ事だけであつた。彼女は自分より育ちの悪いものは皆『下層階級』と呼んだ。下層階級の人達が彼女に係はつて來ない限り、メーベルも亦彼等を仲間外れにしておいても、少しの心淋しさも感じなかつた。尤も、ある點で彼女は彼等を好んだ。彼女は、丁寧な小商人や、慇懃な日傭女や、頭の低い勞働者が大好きであつた。彼女のやうな身分のものに當然仕へるべき人達――婢僕や、小商人や、庭丁や、大工、鉛管工、郵便配達、巡査など――が、彼女のやうな身分の者と出會ふ度に、慇懃に應待してくれると、彼女は心からの歡び、本當の歡びを感じた。彼女のやうな身分の者に仕へる事を最上の幸福とすべき筈の下層階級と一口には言つても、それが如何に樣々に別れてゐるかは彼女の思ひ染めもしない事であつた。よし誰かが彼等も如何に多樣に分れてゐるかを話して聞かしたとしても、些少の興味をも抱かなかつたらう。メーベルは、それ等下層階級の者達も家庭をもつてゐるのだと云ふ事を考へたこともなければ、又、彼等は寄合世帶を張る以上に少しの餘裕もないこと、もし彼等が働かなければその日から食べて行けなくなること、將來も勞働以外の運命は惠まれさうもないから、勞働より外の事には些少の望みもかけてゐない事などを、思つても見なかつた。たとへそれを聞いたとしても、興味は少しも持たなかつたに違ひない。たつた一つ下層階級について彼女の知つてゐた事は、非常に無駄費ひばかりしてゐて、儲けた丈けみんな財布からはたいて了ふと云ふ事だけであつた。グリインへ來る或る洗濯女は子供が六人もあつて、亭主と言へば百姓で、一週僅かに十八シリング六ペンスしか儲け得ない癖してゐながら、それでゐて此の八人は三間の室を借り、おまけに『どうぞお掛け下さい』と言つて、蓄音機までもち出すと云ふ事である。メーベルは初めて此の話をきいてから數年間、話の度にそれを例に擧げた。こんな階級の人が晩餐後三間の室を賑はすためにこんな浪費をするとは、實に怪しからぬ事だとメーベルは思つた。彼女がこの蓄音機の噂を耳にしたのは一九〇八年であつたが、一九一二年になつてもまだそれを例にあげて、かう言つてゐた。『あの人達は本當に油斷がなりませんわ。私達はあの人達のために國民保險證劵を買はされてゐるんですの

に。』

三

メーベルは無表情な女であつた。彼女は情熱も同情ももつてゐなかつた。他人に情熱を感じたり、同情をもつたりすると云ふ事を、彼女はもち前の高笑ひを爆發させて一笑に附し去つた。尤も彼女は、或る人達のやうに、同情を要求する話は我慢がならない性質ではなかつた。たとへば健康な人間は、病氣の話や身體の弱い話には我慢が出來ないものだが、彼女はさうでなくて、辛抱强さは充分にもつてゐた。『私はこれこれしか〲の事には、とても我慢が出來ませんわ。』などとは決して言はない。と云ふのは偏へに彼女は、何事に對しても想像と云ふものを持たない女だからである。何を見ても、聞いても、讀んでも、たゞ其處に現はれた事だけを見、聞き、讀むに止まつた。たとへ彼女は扉を眺めたとしても、單に把手と鍵穴とのついた板を見るのみである。全くそれは把手と鍵穴のついた板だと立派に言ひ切り得るし、又それが實にメーベルの言ひさうな事でもあつた。しかし又一面から云ふと扉程探偵的興味をそそるものはない。その向ふ側に何があるか分らないし、又何事が起つてゐるか分らないのだから。併しメーベルは扉の向ふ側に何物をも何事をも見なかつた。

病に苦しんでゐる人間や動物は、メーベルに取つては、只單に『横になつてゐる』人又は動物たるに過ぎなかつた。横になる——活動から除外される——これは尖の折れた鉛筆も同じく役に立たないものであつた。繪畫は顏料で彩つた裝飾物であつた。だから彼女に問題となるのはそれが裝飾として美しいかどうかと云ふ事だけであつた。音樂はよい音色であつた。音色か、でなくば單に音調で、それ以上のものではなかつた。書籍と云ふとすぐに物語を聯想した。もし書籍が物語でなければ、書籍はたゞ書籍たるに過ぎなかつた。花は裝飾であつた。

靜けき朝は灰色の

草履うがちて去りゆくや

と云ふやうな詩句も、何等眞實の意味のない文字の羅列であつた。彼女はそこに書かれた事を讀むだけで、どんな意味をもそこに汲み取らうとはしなかつた。立派な行爲も、それをなしとげた人の社會的地位によつて立派と評價するのであつた。一九一三年、南極に於けるスコット大佐の死が傳へられた時彼女がそれを勇敢だと思つたのは、大佐が紳士なるがためであつた。同年に起つたウエルスのサンゲニイドの鑛山に埋沒せられた坑夫の奇禍は慘ましかつた。『まあ可哀さうに』――最初の日、新聞を擴げたまゝその記事を讀んで、彼女は『まあ可哀さうに』と言つた。それから新聞をたゝむとそこに現れて來たある記事に眼をうつして、もう氣持よく讀んでゐるのであつた。その記事を裏返しにした紙面で、彼女は今度スコット大佐の死を讀んだ。彼女は大佐未亡人とその令息との寫眞を喜んで眺めた。彼女はサンゲニイド鑛山で死んだ四百二十九人の鑛夫の女房や家族達の寫眞についてゐる見出しも一つ丈けは拾つて讀んでみたが、それ以上讀まうとはしなかつた。それで彼女の氣付いたのは要するにさうした階級の女房はみんな變てこな綿製の帽子を被つてゐる――坑夫の女達はチッドボロウ界隈の裏長屋の女とそつくりだと云ふ事丈けであつた。

彼女は、自分のために何かつくしてくれたり、物を贈つたりする者があつても、特に喜ぶと云ふ事は決してなかつた。尤も全然嬉しくない譯ではないが、贈つた相手の氣持まで想像して、贈物の裏にそれを汲むと云ふことが全然ないのであつた。燻肉一封度はまさしく燻肉一封度として受取つた。それに對しては燻肉を食べる時にお志はありがたうと言ふではないか。それ以外に何を言はなければならない事があるのだらう？

彼女は噂話――早く言へば自分達の階級の流行や他の人達の行爲を喋々と貶すことが大變に好きであつた。彼女の考へによれば、慈善とは貧乏人にジエリや赤いフランネルの施しをする事であつた。鷹揚とは誰かに金を惠んでやる事であつた。私慾とは誰にも金を與へないことであつた。彼女は、唯一の眞實な慈善は心の慈善であり、唯一の眞實な鷹揚は心の鷹

揚であり、唯一の私慾とは心の私慾であると云ふことは、考へそめもしなかつた。たとへ誰からか説明されたとしても、彼女には分らなかつたであらう。世間の眼には、彼女のやうなのは、上品な女とも、申分のない女とも、立派な女とも、見える。併し世間の評價には、彼女が、心知心情に根差す深い感情を全然所有してゐない事が、見落されてゐる。彼女のもつのは皮相な感覺の上に浮く感情だけである。だから感覺は彼女の前に提示される凡てのものに向つて正確な判斷を下すことが出來ないで、よく物を買ひ被つたり、見くびりすぎたりした。彼女は最も精練された、最も純粹な意味に於ける、完全無缺なsnob（俗物）であつた。

彼女は非常に他から好かれた。そして自分も多くの人達を好いた。

第五章

一

ペニイ・グリイン郊外邸宅擴張案は一九一〇年に初めて畫策された。麻疹の流行と、寢室を別々にした年なる一九〇八年には、まだその影だも投げられてゐなかつた。鐵道が何時かペニイ・グリインとチツドボロウ、及びその外の町々との間に通ずる事があらうと云ふのは愚か、チツドボロウ行の線が敷設されゝばいいと云ふ事だも考へられてゐなかつた。セバアは毎日自轉車で商會まで通勤した。毎日あちこちと乘り廻すことが彼には不思議なたのしみとなつた。

かうしてチツドボロウとペニイ・グリインとの間の人通りのない道を通つてゐる中に、ある日彼はふと、彼に於ける兩面の世界――事務の世界と家庭の世界との二つの中心から、妙に疎外されてゐるやうな、又その二つの間に中ぶらりんになつて浮んでゐるやうな感じに打たれた事があつた。そしてそれ以來と云ふもの、この感じが消えない許りか、益々強く

なつて來た。

毎日繰返すので、この感じは愈々發展して行つた。自轉車の途上、自分の二つの世界から奇跡的に遁れ出でて、その孰れにも屬せず、孰れにも責任をもたないのだと云ふ氣まぐれな考へは、次第に擴大されて遂に、自分は全宇宙から愉快に離脫して了つたのだと迄考へるやうになつた。彼の不思議に淡白な、自由な、責任に縛られない心的態度は、かうして彼られたのであつた。それは旋回する高塔の上から蟻のやうな人間の存在を見下した時の如くに、この心的條件の中にゐると、人間と云ふものが如何にも奇態で、如何にも無益で、そして興奮しながらせか〳〵と動いてゐるのが如何にも無目的である事が分つて來たのであつた。——だから實際を言ふと、自轉車の上でこんな考へに耽つてゐる彼の生活こそ、本當は寧ろ奇態であつたのだ。

この毎日自轉車に乘ると云ふ、簡單な、實際的な、しかも大切な——それは實に朝、寢床から起き出で、夜、寢床に就くほど簡單な、實際的な、しかも大切なことであつた——事が、常に心を練り直して、彼を瞑想的な規道の上に乘せやうとする傾きのあることを、彼はふしぎにも少しも氣づいてゐなかつた。けれども心と云ふものは元來極く簡單な習慣によつても形が變つて來るものなので、彼も亦、自ら知らずして、日々の習慣により、心を人並外れた方向へ展開させてゐたのであつた。これが若し哲人でもあつたら、單に交通機關だけの事に關してもどうかすると奧の奧まで考へて、不思議に殘酷な、無情な殺人事件まで思ひ浮べないとも限らない。即ちたとへば毎日乘合自動車に乘つてロンドンの商會に赴く習慣のある者は、たとへ初め菩薩のやうな心をもつて居らうとも、後には、それが他人の苦惱を冷淡に無情に見過ごすやうに、變げないとも限らぬ。つまり、このやさしい心の持主は、最初の出發點で自動車に乘るから、威厳と滿足とを以て悠々と自分の座席を占める事が出來る。そしてロンドン市に赴く途中、數々の乘合場で不幸な群集が座席を爭ふて、押し合ひ、へし合ひしてゐるのを毎日眺めてゐる中に、年數を經るといつかそれを見るのが娛みになり、最後には冷酷と殘忍

な氣持で眺めるやうにならうかも知れぬと云ふものだ。說明はこれで澤山であらう。

ところがマアク・セェバアに到つては、數年間、毎日、感覺から超然と脫離する習慣をつけて、心に非常な影響を受けてゐながら、自分では少しもそれに氣づいてゐなかつた。併し確かに影響は受けてゐた。歸宅するためペニイ・クリインなる渉の世界に入る時も、仕事にかゝるためチッドボロウの事務の世界に入る時も、途中で時々彼は、自分が本來所屬してゐるのではない奇怪な生活の中に落ちこむのだと云ふやうな不思議な感じに打たれる事があつた。時々この感じが持續すると(取り立てて云ふ程のことではなかつたが)彼は多少無意識的に、仕事に對して氣まぐれな、怒りつぽい、非實際的な態度を示して、仲間から折々注意を受けた。怒りつぽい態度――『あんたは時々ほんとに分らない人になるわね。』――とメーベルはよく良人に向つて言つたものだ。

二

自轉車の通勤が彼の心に及ぼした影響については暫く語らないとしても、メーベルの前には、良人が非常に理解しにくい人間だと云ふ事に對する一つの例證がここに持ち上つて來た。メーベルはそれを子供らしい惡戯だと評した。がセェアは毎日歸宅の際、ペニイ・グリインに入る坂の下り口の同じ地點で、ペタルを留め、自分の門前數碼の所で停止するまべで自然の滑走に任せた。それが同じ位置に停止すると云ふことは一週に二度となかつた。セェバアは毎日止まる所を正確に計つてみる事と、前輪を強く回轉させてバランスの敏活な輕業をやり、車の動量によつて進むだけ進ませてみる事とに非常な興味を覺えた。ある時たつた一度きり自分の家の門と垂直に留まつた事があつたが、これは最大の遠距離の記錄であつた。又自分の家の隣りのフアガス氏の門前で留まつた事は再三あつたが、これは悲しむべき最短距離の記錄であつた。此の記錄は長短とも門によつて目標がついてゐる譯だが、もつと正確にするため、わざ〳〵杭を打ちこんでそのしるし

とした。

それは子供らしい事であつた。メーベルは良人のこの娯しみに氣づくと共に、それを子供らしいと言つた。最長距離の記錄が作られた日、彼は聊か興奮して臺所へ駈けこんだが、そこには丁度メーベルが居合せた。『あの小さな斧はどうなつてたかね、此處にあるかい？』

メーベルはちびのジンクスがびくりと驚いて立上るのを見やりながら、お前さん方のしてゐる事位何でも心得てゐるよと言はぬ許りにちびをちらと睨んで、膳棚の下から小斧を取り出した。――勿論、膳棚は斧を入れておく場所ではなかつた。『まあ、こんなにだしぬけに、どうして此れが御入用なの。』とメーベルは良人に尋ねた。

セェバアは親指で刃尖に觸れてみた。『ちび公』――この言葉でメーベルの眉は急に逆立つた。この人はまだあの馬鹿みたいな、不作法な呼び方をやめないのだ。良人がさうした呼び方をする度にメーベルの眉は逆立つのであつた。――『ちび、お前は石炭を破るか、なにかそんな用事のため斧をそんな所へしまひこんでたのだね』それから彼はメーベルに話しかけた。『僕は肥つて來たらう。だが僕の肉を切り取るために斧がいるんぢやないんだよ。目標の杭をこさえやうと思ふんだ。僕は自轉車で走る世界的記錄を作つた。』

『あゝ、道理で！』とメーベルは言つた。

セェバアが庭の木立の中へ入つて行くと、ちびのジンクスは眉を怒らせて、その後を見送つた。一體この姉妹はよく拗ね、よくふくれるので、その度に、彼女達の謂はゆる『奥さんの奥の手』によつて宥められた。此の時もメーベルは臺所に起る非難を揉み消してゆく巧妙な方法で、靜かに言つた。『そりや物置が小斧をしまふ所だわね、レベカ。』

『さうですとも、奥さま。』レベカはてきぱきと答へただけで、メーベルのお世辭笑ひには笑ひ返さなかつた。

暫くの後、丁々と高い響が聞えて來たので、メーベルは門口へ出て見た。道の向ふでセェバアは勢よく斧の背で杭を

打ちこんでゐた。彼は踊んでゐたが、非常に得意さうに彼女を見上げて、かうでも言ひたげであつた。『見てくれ。どうだい！ 努力の結果はこんなもんだ。これ此處を見て御覧、僕は昨日、ここまで來たんだぜ。』それからファガス氏の門の方へ五六歩あるいて行き、靴の踵で土を堀つて微笑みながら彼女を見た。『いいかい、絶體に同じ條件なんだよ。風はなし、僕はいつでもきまつて、坂の上でペダルを止めて走り下るのだ。しかも落ちつく所はいつも違つてるんだからね。面白いぢやないか。』

彼女は良人のために門を開いた。『ね、女中達があの通りなのよ。』と、彼女は呟いた。

『あゝわかつた、わかつた。』と、彼は言つた。

三

しかし翌日になると、彼の記録標の杭が朝日に照らされて、純白に輝いてゐたものだから、彼は無性に喜んだ。メーベルは自分の室で縫物をしてゐた。

『おい、お針か。時にあの杭にペンキを塗つてくれたのはお前かい。なんて氣がきくんだろう。』

彼女は良人を見上げた。『あなたの杭にですつて？ 一體そりや何のこと？』

『例の記録標の事だよ。それが眞白に塗つてあるんだが、お前ぢやなかつたのかい。』

『いいえ。私は塗りませんよ。』

『誰なんだらう――下手人は。だが手を洗つて來やう。茶はまだだね。結構！』

ちびのジンクスがお湯をもつて彼の室に入つて來た時――メーベルが如何に巧みに家を治めてゐるかは此れでも分るので、主人が自轉車の手入れをする時には、いつも戸口まで出て、靴やズボンを掃ふためブラシを手渡し、それから室まで

お湯をもつて行くのが、レベカの役目であつた――セェバアは彼女に尋ねた。『僕の枕にペンキを塗つたのは、ちびさん、お前だね。』

ちびのジンクスは顔を紅めながら、言譯をするやうに言つた。『その方がはつきり分るかと思つたものですから……それに白ペンキが少し殘つてゐましたので。』

『全くよく目に立つ。まるで本物の決勝標のやうだ。氣がきくよ、お前は。ね、ちび君。』

その後二ケ月と云ふもの、自轉車は甚だ芳ばしくない記錄ばかりを作つた。駈け工合は最近、素晴らしくいゝんだから、これは實に不思議極まる事だつた。ちびのジンクスが出迎へては自轉車を受取ると、セェバアは彼女に言つた。『ちび君、どうもいかんよ。今日は僅かにフアガス氏の門のとこ迄しきや來なかつた。これ程不成績だつたことはない。』

ちびのジンクスは大變氣の毒さうに言つた。

『まあ、どうしてなんでございませう。自轉車がよくないのかも知れませんね。だが旦那さま、一番成績の悪い目標をもお立てなさらなければいけないでございませう。丁度、いつかの一番いゝ時の目標のやうなのを。』

『全くだ、全くだ。ちび君。だが今度はどんな色のペンキを塗る?』

『それは御心配なさいますな。私が致しますわ。』

併し彼は、この悪い記錄のことについては、一言もメーベルには話さなかつた。

第六章

一

自轉車で往復するもう一つの世界なるチッドボロウは、快走を恣にし得るやうな所ではなかつた。商會のある所は恐ろしく狹い、でこぼこの石道で、セェバアは時々、徒歩で、自轉車を廻はしながら、行かなければならない時があつた。

寺院學校用品供給並に意匠のフォチュン・イースト・エンド・セェバア商會は、チッドボロウでも商會仲間や同業仲間で、非常に信用のある所書きの一つとなつてゐた。首都の金貸し仲間が商賣を初めるによい所書き（都合のよい位置）はボンド街附近のエスト・エンドである。辯護士連に取つてい丶所書きはベッドフォド街の近くなるブルームスベリである。建築家仲間にはヰクトリヤ街近くのエスト・ミンスタアが所書きとしてよく、商人仲間には銀行所在地の近くの町が所書きとしてよい。案ずるに此れは、衣裳は必ずしも人を作らないが、い丶所書きは人を作る、寧ろい丶評判を呼ぶ。商賣と緣由のある何か有名なものを近所にでも控へてゐる宜い所書きさへ所有してゐるなら、決して破算とは隣り合せになることなく、數千哩も隔つてゐる事が出來るのだと、一般の人が思ひこんでゐる加減であらう。フォチュン・イースト・エンド・セーバア商會の所書きは素敵もない善い所書きである。なぜならその取扱ふ仕事は萬事、或は教會と提携して教會のために、或は專門學校、大學、その外の學校と提携して。それら諸學校のために、或は僧正、牧師、說教師、教會守、校長、女教師、監督、會計係と提携してそれらの人々のために、する事のみであつたから。

この商會の所書きにはPr.cin ts（諸寺院諸學校附近の意味）と云ふ字が入つてゐた。——即ちチッドボロウ、プレシンクツ街、フォチュン・イースト・エンド・セェバア商會、

この「附近」と云ふ字はいかにも愼しみの深い美しい響きと、愼しみの深い美しい暗示とを持つてゐる。此の商會の所書がいかに愼ましく美しいかを證明しやうと思へば、チッドボロウ本通り、チッドボロウ裏通り、チッドボロウ買街などと云ふのと、このチッドボロウ、附近街と云ふのと比べるだけで澤山であらう。この商會の名は口調がよいと共に又暗示的で體裁もすぐれて居り、垢ぬけのした功果を擧げてゐる。諄いやうだがフォチュン・イトスト・アンド・セェバア

と云ふと、愼ましくて而も美しい響をもつてゐる。更に又チッドボロウと言へば詩の最後の句のやうで、それ自身としては愼ましいとも美しいとも言へず、寧ろ非常に喧騒のやうだが、商會と事務關係のある僧正から會計に到るまでの教養ある人達、及び愼ましくて美しいチッドボロウ寺院やチッドボロウ學校、その他この中に含蓄されてゐる有難い、高名な一切の慣例を暗示してゐる。キンチュスタアと雖もそれ自身では、チッドボロウのやうな愼ましくて美しい感じを、教養ある人々に與へない。多年荒廢に任せてあつた寺院の修繕、子々孫々へと打ちつゞいて新らしく生れて來る者の教育を委ねるため破損した學校に加へる修繕が、言はゞ此の商會の收入の根元となつてゐた。

こんな次第で此の商會の全體の樣式と標號とはその拔目のない商賣ぶりと相並んで、愼ましい中にも美しい所があつた。チッドボロウ附近街フォチュン・イィスト・エンド・セェバァ商會。寺院用具販賣者としての彼等を知らない程、世事に疎いものが只の一人でもあつたらうか。『あゝ、あれか。あれはチッドボロウさ。チットボロウは彼等が作つてゐるのだよ。』（これは世界的に有名な寺院の話に出る言葉である）それから學校用具販賣者としてはどうであらう。『あゝ、あれはチッドボロウにあるよ。チッドボロウは彼等が作つてゐるのだ。』（これは帝國的に有名な學校の話をする時の言葉である）。

商會の正面は店が三つに仕切つてあつた。中店の一つの窓からは眞鍮製の鷲の形をした莊嚴な經机が見えて、擴げた翼の上には聖書がのつてをり、華麗な刺繍を施した祭壇掛の上には眼も眩ゆいばかりの聖餐式用の一組の皿がのせてあつた。その外大理石を巧みに彫んだ像、祈禱僧以外には誰一人として腰かける事を憚るやうな天鵞絨張りの樫の祭壇椅子、針細工と刺繍との妙を極めた獻金袋などが飾つてあつた。又中店のもう一つの窓には、如何な不信心者をも敬虔な氣に打たせるやうな美しい、勿體ない、樣々な法衣が飾つてあつた。それは、たま〳〵修學旅行でチッドボロウへ來た田舍の日曜學校の合唱隊の少年達に向つて、信仰が厚くて金さへあるなら、どんな法衣でも好きなのが得られる事を語つてゐた。

左の店の窓には"F. E. & S."の登錄商標を打つた學校用具が陳列してあつた。ここには少年達が決して猫背をして坐ることの出來ないやうな、そして背の高い少年のためには高くなり、背の低い少年のためには低くなる伸縮自在の机があつた。"F. F. & S."の机の商品見本を一わたり見わたしたなら、誰だつて信ずるであらう。――たとへシャム國の有名な双體一身の双生兒(一八一一年シャム國に胴は二つありながら肉帶で結ばれて一體になつてゐる双生兒が生れ、イン及ひシャンなる名前を付けられてゐたが、一八七四年に死んだ。)が突然入校して來たとしても校長か會計かゞ一度この商會へ電報を打ちさへすれば、その配達夫が附近街をはなれないさきに、もう、此の畸形兒にきつちり合ふやうに工夫された特殊な机が汽車に乘せられてゐるであらう――と。

"F. E. & S."印のインキの商品を見ると、新案裝置によつて蓋から零れないやうに出來てゐるし、机の蓋には裏にゴム球が打ちつけてあつて閉ぢても音の立たないやうに工夫されてゐた。少年達が机の蓋とはパタリと音を立てゝ閉ぢて教師の神經を尖らすために出來てゐるものだ。これを靜かに閉ぢるのは上の學校の學生のする事だと思つてゐる、その觀念はこの仕掛けで巧妙に抹殺し去られるに違ひない。

これと同じ工夫と、科學と、技術と、幾代の經驗とによつて、教師用の机も亦、生徒のそれに匹敵する立派な見本が作られてゐた。地圖は亦地圖で、音もなくハンドルを廻せば枠が上下してそこに思ふだけの圖が現はれるやうな裝置になつてゐるのが陳列してあるし、黑板は足付きにしたのが、石版石を嵌めこんで作つた壁の前に陳列してある机と向ひ合つてゐた。此の隣りの窓には小型の教室が展覽され、"F. E. & S."式教室換氣法がいかにも清潔で、新鮮で、これなら如何に居睡り好きな子供も、油斷なく先生の教へを聞くだらうと云ふ事を示してゐた。

右側の店は此の商會が教育上、宗教上の書籍出版者及び裝幀家としての技倆を語るものであつた。一つの窓には、紫な天鵞絨の上に、二冊、多くてせい〴〵三冊の、美しい裝幀を施した祭壇用の聖書と祈禱書とが並べてあつた。他の窓には、綠な羅紗の上に、チッドボロウの學校の古典的な紋章を現はした青い羊皮の美しい賞品用の書卷を取卷いて、凡

ゆる科目、凡ゆる程度の教科書が並べてあつた。

以上の事實の眞僞は、たゞ中店の扉を潜つたゞけでも解ることだ。一體商店が窓飾りに凝るのは當り前の事でもあり、時勢に添ふ所以でもあるが、フォチュン・イースト・エンド・セェバア商會としては、店飾りを最少限度にとゞめずして、それ以上にまでするなら、不適當で且つ傳統に背かうといふものだ。だから店の戸一つ開けてもそれは商店の戸と云ふよりも寧ろ教會の扉——それもこの商會で考案した扉のやうな氣がする。經机や祭壇の間に入つてもやつぱり店の感じはなく、禮拜堂のやうな氣がする。左に入れば、やつぱり店ではなくて、まるで學校の感じであり、右に入ればまるで行儀よく書冊の並んだ書齋だ。

もし暫く此の商會をぶらついて居やうものなら國内の宗教界、教育界の凡ゆる名士に會ふことが出來る、それも決して長く待つには及ばないから輕便だと、世間では噂してゐる位である。

あゝ、チッドボロウ、プレシンクツ街なるフォチュン・イースト・エンド・セェバア商會よ！

二

此の禮拜堂、此の教場、此の書齋では、賣るだの、買ふだのと云ふ俗極まる形式の仕事は實際上一つも行はれてゐなかつたのだから、たとへ窓には商店らしく板ガラスが嵌めこんであつても、第一階の諸室はいよ〳〵商店らしくない特色が顯著であつた。多くの近代的な、盛大な商賈は『絕對現金制』と云ふ騒々しい旗幟のもとに行はれる。が此の商會は現金なる言葉を知らなかつた。もし誰か（現金帳簿などと云ふ小面倒なものの存在については、たとへ口に出さないとしても）此の禮拜堂のやうな、書齋のやうな商會の中に、錢箱のある事を豫期したり、捜したりするものがあつたら、それは酒屋に祭壇や教室用の机を捜す愚と選ぶ所はない。『絕對信用貸』がここの主義で、勘定書は現品引換でなく年四回に配達

される。客は洗禮鉢を買つても、ズボンのポケットに手をさしこんで代價を拂ふことは決してなく、品物だけを脇の下へ抱えこんで行く。學校用の机に於ても同じことで、財布を取出すことはせずに、品物だけは頭の上に載つけて行く。只書籍室だけでは時折どうかすると、小うるさい取引が行はれるが、これとて稀で、しかも大抵はチッドボロウ見物に上つて來た地方の先生や生徒が、別に惡氣もなくて犯す謬ちであつた。(セバスチヤン・フォチュン僧正はさう云ふ事がないやうにと、いつも心から念じてゐた。)

どんな場合でも現金を出して書籍を購ふと云ふやうな不謹愼なことを、二度と繰返す者はなかつた。圖書室はトム氏の受持になつてゐた。これは葬式のお供のやうな風貌と、婦人用の下着を買ひに店へ入つた妻君を待ち合せてゐる男のやうな素氣ない不思議な態度と、風來の客に此れは婦人の下着を賣る店へ迷ひこんだのではないかと感じさせさうな特殊な能力とを持つてゐる紳士であつた。『手前共と取引がおありですか。』と、トム氏はきまつて訊ねる。『いいえ。』と言はれると、丁度婦人の素肌でも窃み見たやうに、惡い事をしたと云ふ顏付きで、あたりを見廻して囁く。『旣にお取引きを願つてゐる學校の先生以外、手前共では一冊賣りは致しません。これが手前共の店の方針でございます。』

かくして店を出た者は、決して二度とトム氏をして店の方針を破らしめやうとすることはない、

三

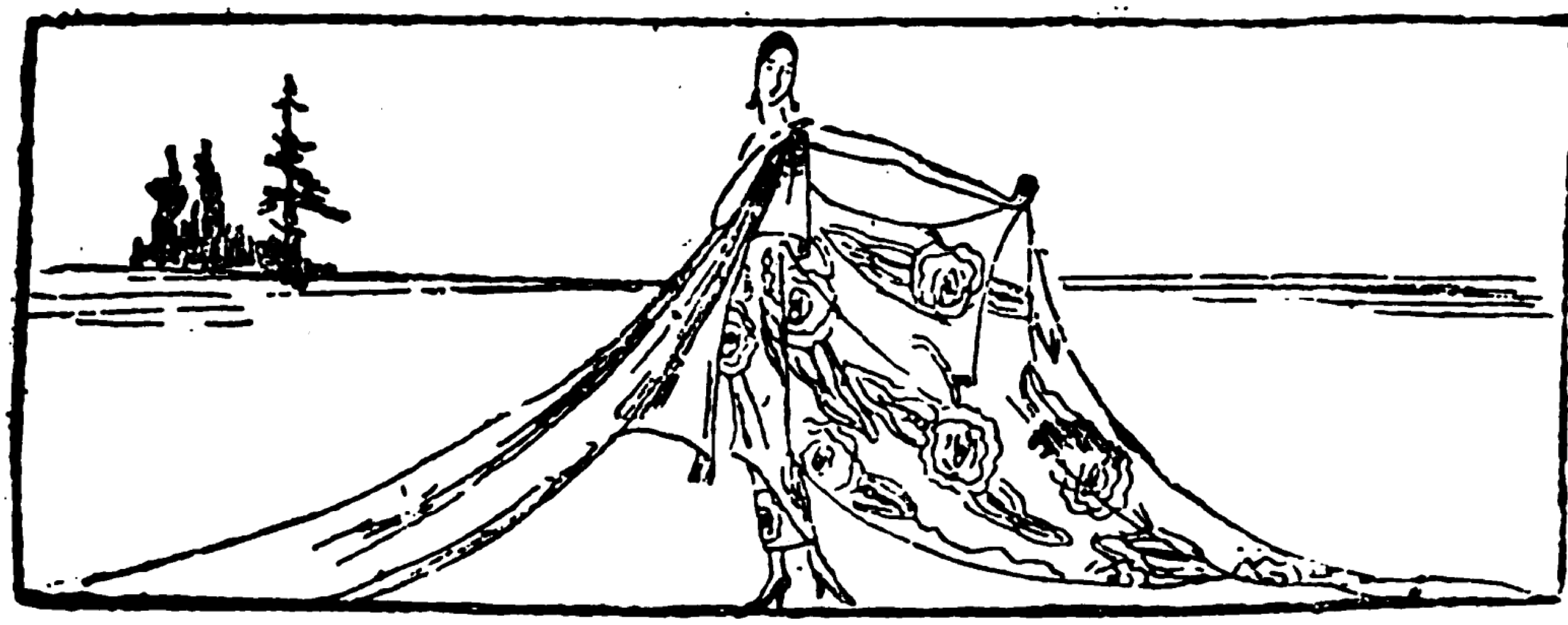
事務――絕體信用貸――は一階で、三人の支配人――セバスチヤン僧正とトワイニング氏とセェバアとに監理されて行はれてゐた。イーストは此の商會にはもうゐなかつた。眞中の禮拜堂のやうな陳列室から、幅の廣い緩勾配の階段が書記室のある中二階に通じ、そこから又フォチュン僧正の廣い室に通じてゐる。僧正の室には二つの扉があつて、一方はセェバア、一方はトワイニングの事務室と往來の出來るやうになつてゐた。多くの名士が三人の重役達往訪のため此の階段を上

つたり降りたりした。書記はこの階段を上り降りしなかつた。書記室の入口は建物の背後にあつて、それに通ずる階段が、中二階と外界、及び陳列室や圖書室や模型教場との通路になつてゐた。本壁さへなければ書記室は建物全體に擴がつて、設計室、調査室、發送室とも自由に聯絡出來るのだから．この設計は實際働く人に取つては不便極まるものであつた。その代りフォチュン僧正の癖なる萬事に『監視の眼を光らせる』上には、かう設計しなければならないのであつた。この僧正は、その眼瞼の落つる所毎で、誰からも毛虫のやうに嫌はれた。彼はその使用人達からヨナと云ふ渾名を頂戴してゐた。彼等がせつせと働いてゐる室へ僧正が入つて來やうものなら、それは必ず何か禍ひの前觸れとなつたからその意味でもヨナと言つたのだが、併し主なる理由は、彼の腹が尨大無双で、彼等の言ひ草によるとそれはまるで鯨の腹のやうであつたから、それで聖書をとんだ方面へ引用したのであつた。

四

彼はたしかにどこか發育不良の鯨に似た點があつた。主としてそれは下腹部であつた。彼の腿は、腿がなくして膝とつづき、彼の顔は、首がなくして胸とつづいてゐるやうに見えた。彼の顔は幅に於ても長さに於ても大きく、下半部は刷毛のやうに粗い灰白色の髯で掩はれてゐた。口は刷毛の間にのぞいて、への字形に兩端がひどく下つてゐた。額は突兀として威壓するかの如くに聳え、小さい灰色の兩眼は厳しい色に光つてゐた。聲は冷めたく、擧止は非常に洗練されて慇懃ではあつたが、奇妙に嚴格で果斷なところがあつた。『予は決斷せり』と云ふ表情をいつも持つてゐた。セェバアはそれを、彼はいつも氷の彫刻のやうな表情をしてゐると言つてゐた。それには全く氷のやうな調子がこもつてゐた。いな、氷山のやうに梃でも動かぬ堅さをもつてゐた。これを聞けば誰でも、僧正の表情に一味殘忍の色が漂ふてゐる事を容易に想像して取るであらう。

セバスチヤン・フォチュン僧正は廿八歳の時この商會へ入つて來た。今は六十二歳である。彼はこの商會のフォチュン家に屬する株を受け繼ぐと共に、商賣を監理することに非常な興味を見出した。そして卅四年間の共同經營のうち、最初の廿年間に於て、偶然な境遇と決斷に富んだ性質から、この店を自分一人で全部監理するやうな位置を占めた。彼は生氣と力とに溢れた若者の時此の商會に入り、富有な未亡人と結婚したゝめ、有用な資金を提供して商會内に一層の重きを加へ、その頃から既にイーストとセェバア（マアク・セェバアの祖父）とを自分の下風に立たせるやうにして了つた。二人とも、もう老人であつた。イーストと青年フォチュンとは地位が轉倒して來た。その頃から店に三分の一の權利はもたず、五分の一しか所持してゐなかつたセェバアは、理由もなく破産を魔魅の如くにおそれた。そして自分の分擔だけ自由に任かして貰へばいいと言つて、商會の他の一切の負擔から免れた。隨つてこの時からこの合名會社の仕事は形を換えて來た譯である。セェバアの父、及びセェバアが順次に繼承して來たのは、この誰からも制肘を受けない五分の一の分け前であつた。



日曜日

丹野てい子

ちか〳〵と背中を焦がすやうな秋の日が、椽がはにいつぱいさしてゐた。友だちの小山さんも森田さんも、下町の方へ買物に出かけたので、家の中は、しーんとして靜かであつた。沼田先生は、その靜かなのが、今朝は何だか、妙に張合のないやうな氣がした。日曜日だと思つて寢すぎたせいか、頭も重たいし、手足のさきがだるくて、體中が熱つぽいやうに思はれた。先生は、垣根のそばに咲いてゐる赤い小さな水引草の花を、ぼんやりと眺めてゐたが、ふと思ひついたやうに髮を結ひはじめた。木犀の花が絶えずにほつてゐた。

髮を結つてしまふと、先生は鏡をとつて前髮をかき上げた。生えぎはの癖が、どうしてもたほらない。それで、いくら櫛でおさへても、前髮がふつくらとふくらんでゐない。こんな妙な形の前髮を出してゐるよりも、いつそ思ひ切つて、この頃流行の七分三分にわけてしまふ方がましだと思つたが、自分の美しくない顔を思ふと、人たみ

に流行の髪なぞに結うのも、氣がひけるやうな氣がした。先生の眼の前には、ふと、髪をかつこうよくわけた美しい半井先生の姿が浮んだ。その先生の美しいために、大ぜいの女生徒たちが媚びて、職員室の半井先生の机の上には、生徒の贈りもの丶花が、しよつ中澤山のつてゐることを思つた。沼田先生は何といふこともなしに、淋しいやうな氣がして來た。

庭の垣根をこえた向うの家で、柱時計がけだるさうに十時をうつた。沼田先生は、いつもならば三時間目の授業のはじまる時分だと思つた。さう思ふと、きのふのその時間のすぎたあとの、あのいやな氣持を思ひ出した。それは、先生が、梯子段を下りて、あの長い汚い廊下を職員室の方へくる時であつた。後の方で、きやつ〳〵といふ笑聲がするので、何の氣なしにふりかへつて見ると、丁度二三間後を、西組の四年生が三人でこつちへくるところであつた。級長の後藤らしいのが、黒い大きな出席簿で顏をかくして、くつ〳〵と笑つてゐた。脊の低い小さな佐藤は、すまして、目をつぶつて、左の手をだらりとさげて、右の手で杖をつく眞似をして、

「あんま、ピー。あんま、ピー。」といつて、のろ〳〵と歩いてゐた。そしてそのそばに山本はきやつ〳〵と聲をたて丶笑つてゐたが、先生がふり向くと、ふと、笑ふのをやめて、あわて丶佐藤の袖をひつぱつた。沼田先生もひどくあわてた顏をして前を向いた。そして、いそいで職員室の方へまがつてしまつた。先生は、振りかへつて見なければよかつたと思つた。腹立たしいとも情ないともいへない妙な氣持で、胸をおしつけられるやうな氣がした。

いつたい、笑つてゐた生徒が、先生のふりかへつて見る拍子に、あわて丶笑ふのをやめるのはよくあることだから、それほど氣にかけることもないわけであつたが、沼田先生は、それをさう簡單に考へてはおけなかつた。先生を不愉快にさせたのは、その按摩の眞似であつた。

それはもう五六年もまへ、先生がまだ女子大學の生徒の時分のことであつた。同じ校舎におどけ者の下級生がゐた。友だちが眞面目にお辭儀をしてゐるのに、自分は、袴の兩はじをつまんで、片足を後にすつて、西洋の踊り子のやうなお辭

儀をしたり、二階の廊下から、庭にゐる友だちに、大袈裟な身ぶりをしてキッスを投げる眞似をしたり、ビツクリ箱で友だちを驚かしたりして、自分のまはりにゐる人を、しよつ中笑はせてゐた。沼田先生は、その下級生が好きで、一所にお菓子を食べたり、散歩や買物に歩いたりしてゐた。ある夕方、先生が一人で裏庭を歩いてゐると、風呂場で三四人が何かわや／＼話してゐる。すると、突然、あの下級生の聲で、

「いやーだ、あんな人、まるで、按摩みたいじやないの、私、沼田さんの顔を見るたんびに、何だか眼のない人つていふ氣がして仕方ないのよ。」といふのが聞えた。それを聞くと沼田さんは、はつとした。頭が熱くなつたやうな氣がした。そしてこつそりと自分の部屋に歸つて行つた。今まで自分の顔が美しくないといふことはよく知つてゐたが、それは、額が馬鹿にひろく、癖毛のせいだとばかり思つてゐた。自分の眼が小さいために、をかしな顔に見えるといふことは、少しも氣がつかなかつたのであつた。

　それから、また、しばらくしてからであつた。文科の生徒ばかりが集まつて、芝居をすることがあつた。その芝居には、女按摩の出てくる場面があつた。すると級のものがみんな一所になつて、沼田先生にその女按摩になれ／＼と言つてすゝめた。今まで、どんな芝居をする時でも、沼田先生に出てくれといつて頼んだことは、一度もないことであつた。それを、目盲の眞似をする時ばかり出ろ／＼とすゝめられると、ひどくいやな氣がした。はじめの内こそ、さう言つてすゝめる友だちの言葉を惡意にとるまいと思つて我慢してゐたけれど、あんまり毎日言はれると、とう／＼、

「私ばかりが女按摩になるとはきまつてゐないでせう。」と言つて、どん／＼教室を出てしまつた。そして寮舍の部屋へ歸つて、一人で泣いてゐた。

　きのふ生徒が自分の後で按摩の眞似をしてゐるのを見た時、沼田先生は、五六年前のこんなことを一時に思ひ出したのであつた。それは、あの佐藤といふ小さな生徒が、沼田先生のことなんか考へずに、ただ偶然に按摩の眞似をしてゐたの

かも知れなかつた。さうは思つても、やはりいゝ氣持はしなかつた。そして、今朝になつても、そのあとの妙な手頼りない淋しい氣持に、まだ胸を壓へられてゐるやうな氣がするのであつた。沼田先生は、鏡を膝にのせたまゝ、いつまでもつくねんと椽がはの日向に坐つてゐた。

「今日は、如何でございます。」と豆腐屋が臺所口で聲をかけた。沼田先生は、元氣のない聲で、

「今日はよござんす。」と返事をしたが、ふと午後から女學校の一年生が遊びにくる筈だつたと思ひ出すと、いくらか氣が輕くなつたやうな氣がして、油のついた手を洗ひに立つた。

手を洗つて帶をしめ直すと、先生は、また、何もすることがなくなつた。今日遊びにくる一年生にお愛想に見せる本でも出しておかうかと思つて、戸棚をあけた、戸棚には古雜誌や古いノートがいつぱいしまつてあつた。それはみんな、女子大學の國文科を卒業してから、中等教員の免狀をうけるので一生懸命に勉強した時分のノートであつた。殆んど一年間、ふだんの日は朝早くから圖書館に通ひ、日曜日には神田橋の國語漢文講習所に通つて、せつせと勉強したのであつた。沼田先生は古いノートを手にすると、その時分、白絣の單衣に紫の袴をはいて、暑い町の中を圖書館に通つた自分の姿が、眼の前に見えるやうな氣がした。あの時分は、まつたく、たゞ女學校の先生になれさへすればいゝと思つてゐた。免狀がとれて、先生になつた一年といふものは、たゞ夢中に、嬉しく樂しくすぎてしまつた。そして、二年三年とたつ内に、月日はいつの間にか、もう、何のめあても張合もなくすぎて行くやうになつてしまつた。

ノートをばら〳〵とくつては拾ひ讀みをしてゐた沼田先生は、ふと、何かを思ひ出したやうに顏を赤くした。沼田先生は、耳のはたに、あの若い士官のサーベルの音を、がちやがちやと聞くやうな氣がしたからであつた。

ある夕方であつた。沼田先生は講習所の門を出ると、いつものやうにお濠に沿うて、神保町の寄宿舍の方へ歸つて行つた。すると、何だか自分の後から靴とサーベルの音がするやうなので、ふりかへつて見ると、同じ講習所の生徒の、若い軍

人がくるのであつた。軍人は沼田先生がふり向くと、大急ぎで追ひついて來て帽子を脱つた。そして帽子の中から靑い西洋紙の切符を出すと、

「これを上げませう。これを持つてあした僕の學校へくると、御馳走もあるし、いろいろ面白い餘興も澤山あります。二枚ありますから、一枚はお母さんに上げて、二人でいらつしやい。」と言つた。

それがあまり突然であつたので、先生はぼんやりしてその札をうけとつてしまつた。そして、急に氣味がわるくなり出して、

「ありがたうございます。」とお辭儀をして、そのまゝ驅け出すやうに横町を曲つてしまつた。そして、寄宿舍の門の側までくると、その靑い切符を手の中でもみくしやにして、まるで盜んだものでも捨てるやうに、こつそりと溝の中に捨てゝしまつた。

そんなにしても、沼田先生は、そのあくる日一日中、切符をもらつた學校のことが氣にかゝつてゐた。そしてその翌日の新聞に、その日の學校の盛大な會の模樣が出てゐると、何といふこともなしに胸をどき〱させて、人にかくれてこつそりとその記事を讀みふけつた。新聞に出てゐる生徒たちの大ぜいゐる寫眞を見ながら、その中にあの軍人はゐないかしらと思つて、一々丁寧に見たりした。

そのつぎの日曜日、沼田先生は、その軍人と顔を合はしても、切符のお禮も言はずに、知らん顔をしてゐた。會ふたんびに知らん顔をしてゐた。その内に、その軍人は講習所に來なくなつてしまつた。

今、沼田先生は、古いノートを讀みかへしてゐる内に、この軍人のことを思ひ出したのであつた。それは、今まで、男の人で沼田先生に厚意を見せてくれた、たつた一人の人であつた。沼田先生は、ふと、あゝいふのが戀といふものではあるまいかと思つた。さういへばいつぞや、友だちの辻さんが、「人間は、一生に一度は人に思はれることがあるものだ。」と

話したことがある。三十にもなる自分に、これから戀のありよう筈はなかつた。沼田先生は、どうしても、あの軍人が、自分の一生に、唯一人の戀人であつたやうに思はれて來た。そして、今では顏も忘れてしまつたその軍人の姿をなつかしむやうに、いつまでも、ぼんやりと考へこんでゐた。

午後になると、きのふ遊びにくると約束した二人の小さな女學生が、おづ〳〵と庭木戸から顏を出して、

「先生。」と 小さな聲でよんだ。

椽がはの柱にぼんやりとよりかゝつてゐた先生は、手まねぎして、

「おはひりなさい。」と言つた。そして自分も下駄をはいて庭に下りた。

先生と生徒は、三人で庭に立つてゐたが、何も特別に話し合うこともなかつた。二人の生徒は、しきりに「先生。先生。」といひながら 手をひつぱつて、自分たちの小さな頭を先生の體にもたれかけさせたりした。

先生は何か面白い遊びごとを考へつかうとするやうに、三人手をつないで輪になつて、ぐる〳〵と廻つて見たが、それも手持無沙汰で面白い ことはなかつた。

三十分もたゝない内に 二人の生徒は、歸つて行つてしまつた。

太陽は、まだ高くかゞやいて、澄み切つた青空には、鳥の影が、石でも投げたかと思ふやうに早くうつ つては、またすぐ消えた。

夕方になると、沼田先生は、着物を着かへて家を出た。そして、小一時間もかゝる道をとつとと歩いて、遠くにある敎會へ行つた。

敎會の窓からは もう、灯が洩れてゐた。肌寒い夕方の風が、遠い道を歩いて來て汗ばんだ沼田先生の顏を吹いた。

うす暗い會堂の電燈の下には、かなりの人々が集つてゐた。男の信者は後の方に、女の信者は前の方に、みんなつゝましく腰をかけてゐた。胸に銀の十字架をさげた脊の高い西洋婦人があちこちと歩いては、人々の世話をしてゐた。沼田先生は、一番はじの席につくと、改まつた氣持で默禱をした。そして式のはじまるのを靜かに待つてゐた。

やがて、年をとつた牧師が、そゝくさと奥から出て來た。牧師は、今食べ終へた夕飯が融齒の間にはさまつてゐるのを、舌のさきでほじくり出すやうな顔をしながら、席についた。そして、嗄れた聲で、

「讃美歌、百二十一番。」と言つた。

オルガンが鳴ると、みんな一齊に唱ひ出した。ふとい男の聲と高い女の聲の中に、沼田先生の聲が、一段と高く聞えた。先生は今日一日の妙な淋しさを、おひ拂つてしまはうとするやうに胸を張つて、一生懸命に聲をはりあげて、興奮し切つて唱つてゐた。



林檎畠のスケッチ

○

長坂きくじ

お常さんは漸く起き出して見る氣になつたと言つて今日は緣端に出て眞晝の薄日が寒々とあたつて居る林檎畠の木立の方を懶さうに見て居た。五六日もぢつと寢こんで居た人の眼にはこの晩秋から初冬への風物がどんなにか變り果てて物寂しく哀多く映る事だらう。そんな事を思ひながらも私はお常さんがかうして起きて來られるやうになつたのが嬉しくその傍に腰を下ろして話した。

こんな薄日が當つて居るのに木枯がごーつごーつと高い空を嘯いて通る。裸になつた林檎の木の梢がゆれて一葉二葉殘つた青い葉が散るにも散れずぶる〳〵顫へて居るのを見ると何となくうら悲しさに誘はれる。

「もうこんな風が吹く樣になりましたのにまだ何も間に合はなくて。」

お常さんはぢつとしては居られないと言ふ風に氣の立つた事を言ふ。

「だからそんな事をおつしやらないで今度こそ御ゆつくりお憩みなすつたら。」と言ふと
「えゝ、でももう直つたも同じです。」
と言つて笑つて居る。私は目の前にお常さんの此の頃中の淋しい姿を思ひ浮べた、障子口のお炬燵に擂鉢などを掛けて力無げに横になつて居たお常さんはほんたうに何日癒るとも知れない人の様な氣がして心細くてたまらなかつた。それも皆無理の上に無理をして居るせいだ、殊にあの寒い風の吹き曝す日井戸端で一日中漬菜洗ひをしたのが障つたのだらう。私も一日閉ぢこもつて居て夕方水汲みに行つて見て驚いた。
「まあお菜洗ひだつたんですか。」
私は思はず聲をかけた。お常さんは寒氣だつた顔をしながらそれでも甲斐々々しく後片づけをして居た。私は手傳ひをしなかつたのが氣にかゝつて詫びる樣にうらむ樣に言ふと
「これ位の事にそんなに言つて頂くと却つてお氣の毒です。」
とお常さんはにこ／＼しながらあのぼんやりした眼で私を見た。次の日頃からお常さんは寝込んでしまつたのだつた。
私はふと氣づいてお常さんに話しかけた。
「それでも坊ちやんはよく大人しく御看病なさいましたねえ。」
あの幼い人が遊びにも出ないでお母さんの傍に寝そべつて一所に繪本を見たり言ひつけられる用事を足したりして居たいとしい姿を思ふと私はかう言はないでは居られなかつた。
「えゝ、それでもあんな子供でも心淋しいと見えて大人しくして居て呉れましたが今日は出かけてしまひました。現金なものです。」
お常さんはさう言つて笑つた。あまり強い風が吹くのでお常さんに障るといけないと思つて歸つた。

それでもお常さんがあゝして起き出して居るのを見ると嬉しい、この五六月はお常さんにとつて惠まれた休息だつたと言ふ氣もする。

旦那樣は年中朝の四時と言へば「ねいやツ、ねいやツ」と床の中から大聲をかけておいてとつとゝ起き出して雨戸をガラ〱繰つてしまふ。そして一時もぢつとしては居られないと言ふ樣にガタ〱と身仕度を整へてさつさと飯前仕事に出て行つて仕舞ふ。冬の日や雨降りには漢籍の音讀だ、お常さんは少し樂しい眠りに居たいと思つても旦那樣は坊ちやんまで起して仕舞ふ。かうしてお常さんの忙しい一日は始まるのだ、あの脆弱なお常さんが家の事も外の事もよくあの旦那樣の氣に入るまで働けたものだと思ふと不思議な氣がする。

一體に母と名の付く人々も同樣だがあゝも忙しない日々を續け得られるのは、弱い者のみに惠まれた強い氣の力によるのだらう。

○

お常さんはもうお洗濯をしたり張物をしたり一生懸命だ。少しでも憩んだ後は償ひの樣に一層精を出して居る。夕方水汲みに行くとお常さんはおへつついの前に坐つて火を焚きながら、火箸にすがる樣にして劇しく咳き入つて居る。

「まだ大變出ますのね、ほんとうにお大事になすつて。」

と言ふと、お常さんは咳き入りながら、

「でも少しいいとさうもして居られませんでねえ、せめて洗濯と御飯の用意だけでもと思へばこの騒ぎです。」

ときれ〱に言つた。

お常さんは自分のからだをいたはりもせず氣にもして居ない。それで居て私なぞにまで何くれとなく心を配つて呉れて、一寸した事に寢てでも居ると、あのお藥だこのお藥だと持つて來て呉れる、ほんたうになぜも少し自分の事も大切に

しないだらう。

○

又をぢさんの大きな聲が聞える。何かと言ひなだめて居るお常さんの聲もきこえる。何か又をぢさんの氣に入らない事があるのだらう。お常さんは一生懸命でなだめて居るらしい。

をぢさんは決して無慈悲なんと言ふ人ではないが實にきまりのいい人だ。約束は約束、條件は條件とキチン〳〵と片付けて行かないと氣のすまない人で、もしそれが思ひ通りに行かない時はすぐに氣を焦ら立てて大聲を出すのだ。此の頃も小作米を納めると言ふ日に朝から待つて居てもその人が見えないと言ふので、ずゐ分お常さんに當り散らしたさうだ、お常さんも仕樣なく「何か忙しい用でも出來たのだらうから。」と言ふと、「ぢやあ俺が今から車をひいて取りに行つて來る」と本當に出掛けやうとしたさうだ。然し夕刻その人が申し譯に來た時は打つて變つて優しく物を言つて延期の日を決めて歸したとか。家賃にしろ何にしろ人が少しでも遲れ樣ものならお常さんを當り場にして「一體俺を踏み倒す心算なんだ」と返事の仕樣もない程な惡態までつく、お常さんはいつかその話をして聞かせて、

「旦那樣は生れが武士のかた意地の處へもつて來て二十何年も縣の土木課に勤めた程あつてほんとうに面倒で困ります。私はこんな事をなだめ通して居る樣なものです」

と言つた。まだくど〳〵言つて居る旦那樣の聲がきこえる。然しこの位な旦那樣でもどう言ふものか、三圓だ五圓だと言ふお金を、外套のかくしなどに入れたまま忘れて居る、虫干の頃お常さんが見つけて出すと「さうかなあ——それにしてもお前は馬鹿正直だ」と言つて心から笑つて居るさうである。

「でも一蓮托生ですからねえ。正直にさへして居れば……」お常さんはそんな話のあとよくかう言つて聞かせてわだかまりのない笑ひを見せる。

寒い風が吹くのにお常さんは莚の上に上つて干してある漬大根の手入れをして居る、軒にかけてある梯子の下で、

「まあまだお顔色が惡いのに。」

と言葉をかけるとお常さんは手を休めて、ぼんやりこちらを見ながら、

「何ですか此の頃一寸も御飯が頂けませんでねえ、まるで姙にでもなつた人の樣に梅干ばかりおいしくてそのおかげでやつと少しづゝ食べて居ります。きつと十二指腸蟲のせいでせう。」

と言ふ、お常さんはもとの準看護婦と言ふ免狀をもつて居るさうでよくかう言ふ事を知つて居る。

「近い内にお醫者樣によく見て頂きます。」

と言ひながら又手を動かして居る。

「かあちやん何か――。」

芳ちやんが勢こんで表の方から驅けこんで來た、お常さんは

「をばちやんに笑はれるよ。」

と芳ちやんの方へ笑顏を向けておいて下りて來やうともしない。私も一寸芳ちやんにからかつておいて笑ひ〳〵家へ歸つた。お常さんが又ぶり返したら困ると心配になる。

○

かちん〳〵と堅い土を掘り返へす鍬の音が畠の方から聞えて來る。をぢさんが福壽草の根を掘り出して居るのだ、東京へ出て行つてお正月の用に立つのださうだ。サフランと、この福壽草で暮の買物には餘る程の收入があるさうだが、それは皆木立の下で日の當りさうな所を撰んで作つておくのだ。曇り勝ちな寒い日、かちん〳〵と堅い土を掘りかへす音は、

畠に、家の内に、殊に鋭くひゞく。

○

まだ夜の一時ばかりの頃から、母屋ではお餅つきを始めた。公園のおばさんの聲も聞えた。肝高い聲をきくとあの男の樣な眼を思ひ浮べる。ほんたうにあの人は相手をぢつとさせて置かない、くつろがせない人だ、この人は旦那樣の先妻の妹にあたる人で年ももう五十だらう。お常さんは「旦那樣を女にしたやうな方です」と言つて聞かせた事もある、かうした取込みの時といへば來てキビ〳〵と指圖をする。お常さんはにこ〳〵しながらはい〳〵と從つて居る。

「ペツタン、ペツタン」ゆつくりした音と音の間にあのおばさんの小さい息子達の子供らしい聲も聞える。

朝飯の時芳ちやんが暖かく美味しいお餅を持つて來て呉れた。

午頃から合憎天候が變つて風ぽい日になつて來た。畠の方から落葉が旋風に送られてカサ〳〵と地を這ふ樣に舞つて來る。もう杵の音もしなくなつたので二時頃一寸用達に出やうとして母屋の前を通るとお常さんは疲れた樣子もなく臼の中で色々なものを洗つて居た、緣側には奇麗に磨かれた桶や蒸籠などが並んで居る。朝頂いたお餅の御禮を言ふとお常さんは愛想よく

「不出來でしてねえ」

と笑つた。お常さんは睡眠不足と煙との爲に充血して疲れ果てた樣な眼をして居る、この人の無理はすぐに眼に來る。この後片づけが濟むと髪を洗ふのがきまりだ。お味噌焚きの時と今と年に二回しか髪を洗はないのだ、そしてバラ〳〵に下げて乾すのでなくて、手拭を一緒にまきこんできり〳〵とした束髪に上げて乾すのだ、お常さんはこんな寒い日にもそれをやるだらうと氣にして居た處が夕方歸つて見るとお常さんもおばさんもそんな妙な恰好をしてお勝手に働いて居た。

○

年越に家へ歸つて今日こちらへ來た、僅十里餘南から來て見ても此方の雪の深いのには驚く。陰鬱な空の下に白い屋根を連ねた家々の前には脊丈もある樣な雪の小山が並んで道は土も見えないまでに凍りついて居る、正月らしく行き交ふ人の小刻みな足音の中を家へ歸つて見るとお常さんが忙しい中からお掃除をしておこたに火まで埋けて置いて呉れた。雪に降りこめられて居るこの小ぢんまりした住居に歸つて來てかへつてのんびりと落付けるのは嬉しい。私はすぐに御年始に行つた。芳ちやんはもう朝から遊びに出たまゝお晝にも來ないとかで丁度お常さんが一人で居た、お常さんが一人だと私も寛いだ氣持になつてお茶など頂いて歸つた。何となく私の頭の中にははつとして見た瞬間のお常さんの樣子が殘つて居る、立つても居てもあの人の恰好が妙だつた、締めて居る前掛けなども何となくぴつたりして居なかつた。「もしや」——私は思つてはならない樣な事を思つて見た。私が玄關に立つた時出て來たお常さんの顏は今まで見た事もない樣な血の氣のさした顏だつた。おこたにあたつてからも何となくおど〳〵と羞かし氣に見えた。——然し——私は目銳い女でなければ起さない樣な疑を起した事を恥かしく思ふ、あの人は二十七になつたばかりでもをぢさんはもう六十六だ、ふと私にあの總入齒をとつて嗽ひを使つて居るをぢさんの老人らしい顏が浮んだ、一寸でもこんな疑を起した事を我ながら恥かしく思つた。

○

餘寒が酷しく、バケツや火鉢にぬれ手の凍みつく樣な朝、耀かしい日が上ると共にだんだん暖かになつて畠一面の白雪は目も明られけない程、キラ〳〵しくパシ〳〵〳〵〳〵と雪解の雨垂れに心和ませられる樣な日は、晝頃からは炬燵よりも緣側の方が暖かく、閉ぢこめられた樣な心も急に明るくなつた樣で何となし嬉しく輕々とする。今日もそんな日だ、表を一杯明けて家から貰つて來た手織縞を仕立てて居ると、畠の方のむろに用事に來たお常さんは久し振りで寄つて呉れた。いつも言葉をかけ合ふぎりで忙しさうにカタ〳〵と畠の方へ行つたり來たりして居るお常さんも、をぢさんでも留守の時は少

しはゆつくりして色々な話をして行く。

「まあこんなのをお家で――」

お常さんは皺やあかぎれに荒れた手にとつて悪い眼の方へ近よせ、太い指の腹でさする樣にして見た。

「こんなつまらないものを」

と言ふとお常さんは

「いゝえ、うち織にこすものは有りません。」

と言つて尚よく見た、二人はお炬燵の方へ入つて色々軽い話をした。旦那樣が今朝西國の病院に勤めて居る總領息子の方へ御年始旁何か相談に行つて二月一杯も居て歸るとの話も聞いた、お常さんにとつては背のばしである樣なものの考へる事も多いだらう。

○

畠の木立には「など」がおりて如何にも寒い日が續く、お常さんは南の障子ぎはに机を直して林檎に被せる袋を張つて居る、ザク〳〵に凍みる糊をあたゝめながら氣の毒な程荒れた手に刷毛を握つて毎日〳〵飽かず袋を張つて居る、出來た袋は缺餅など干す樣なかごに並べて縁側や踏石の上に出して乾す、色々な用事の間々に何萬と言ふ程張らなければならないので根氣よくやつて居る、ゴロ〳〵に氣眠れて毛糸の昔風な肩掛をかけて綠色のビロウド足袋を穿いて用心よくやつて居るが氣にかゝる咳は止まない。丁度そんな時通りかゝつて、もつと暖かになつてから……などと言葉をかけるとお常さんは障子を明けて蒼白い顔を見せ、

「少しも暖かになれば又洗濯物が忙しいものですから、」

かう言つて一つ一つ袋を張つて行く。

待たれた紀元節もとつくに過ぎた。でも此の頃はめつきり日も延びて早い春のきざしの見えるのは嬉しい。

○

三月に入つた。此の頃は珍らしく暖かい日が續いた。畠の方では雪の消えたあとの黒くほゝけた土の中から急に福壽草が茶紫の頭を持ち上げて來た。小坊子の行列の樣でほんたうに可愛らしい。おしひしがれて居た天人菊や名も知らぬ小草が緑の葉を立て直して嬉し相に日に照らされて居る。

○

お常さんは機嫌よく立ち働いて居る。旦那樣は旅から昨日歸つて來た。

「兄さんの方でも赤ちやんを儲けたさうです。」

お常さんはお土産の海苔や繪葉書を持つて來て呉れて二つ三つ話して行つた。何となく寂びしい手頼りない心持が私の心に殘つて居る。子のない本妻と子を生んだ第二夫人と同じ屋根の下に住まつて居ると言ふその話は考へても息のつまる樣な心持ちがする。

「子供が出來たら兄さんは餘計こちらの事に酷しく氣を配るでせう。」

お常さんはお常さんらしく何のわだかまりもない樣にいい顏付で笑ひながら言つた。もう財産が三つ――父と先妻の二人の息子――に分れて居ると言ふ事や兄さん達の心持の事やを知つて居るので何だか私も寂しい氣がした。それにしても去年の保險の話はどうなつたらう。旦那樣はお常さん親子の爲にお常さんを有隣生命に一時がけして、芳ちやんの取名前にして呉れると色々調べて居たが、さあと言ふ時になつて旦那樣が躊躇してしまつたと言ふのだ、――然しお常さんは決して明日の事に思ひ煩はされない人だ、その時でさへお常さんは平氣で笑つて話した、今ではもうそんな事は忘れた樣に何とも思つて居ないだらう、强いてでもなく自棄でもなくそれがお常さんの自然なのだ。

○

お常さんは暖かい縁側に仕事を持ち出して不自由相に針めどを通して居る。芳ちゃんは蜜柑箱から繪本や獨樂や汽車の毀れを取り出して一杯散らけた中で自働車を走らせ彼方此方突きあたつてがちゃんと轉ぶのを喜んで居る。

「それでも漸く學校へ上るまでになりました、芳ちゃん、大きくなつたら母さんに樂をさせておくれ。」

お常さんは色々とりとめもない話の末に笑ひながらこんな事を言つた、半分は私に半分は芳ちゃんに言つたのだ。

庭先の沈丁でも梅でも畠の方の木立でも灰色の小枝にぽつと赤みが通つて來てずん／＼勢づいて來た。此の頃土を破つて出たばかりの福壽草は見事に咲き盛つて居る。幾畝も幾畝もなので明るい日の下の木の下がまぶしい樣だ、夕方日の光りが薄れて行くと黄金色の花瓣を靜に閉ぢ褐色の苞に輕くつゝまる、その姿は不思議にもまた愛らしい。

○

今日は芳ちゃんと一町ばかり向ふの千鳥ケ池の堤の方へ芹摘みに行つた。霜にやけたゞれた葉のしんの方に若々しい新葉がよれをほぐして居る、ほく／＼した土から細い根の先まで掘りとるのは樂しい、芳ちゃんはもう下には青く芽ぐんで來た枯草の上に打伏したりころ／＼轉がつたりして遊ぶ。

「ワン、ニャン、チュウ、――なあに。」「何だかね。」

「をばさん知らないの。」「えゝ何だらう。」

芳ちゃんはそんな事にも得意になつて喜んで居る、小さるに一杯とつたので二人は遊び遊び歸つて來た、木戸口で旦那樣に會つた、働き仕度のまま興奮した顏付で出て行つた。

「摘めましたかな。」

切口上で言ふ旦那樣の口許は笑つて見えたが眼は何となくけはしかつた。縁側まで來るとお常さんが帯の間へ兩手を挿つ

つ込んで坐つて居た、私達を見ると笑顔になつて輕い言葉をかけ、芳ちやんが行つてとつつくとそつと離しておいて私を呼び止めた、芳ちやんは奥のお座敷の方へ行つて惡戯をはじめた。お常さんは小聲で、芳ちやんが師範學校附屬小學校の選拔によかつた事、公園のをばさんの方は一所に受けてもいけなかつたと言ふ事を話した。實は昨夜旦那樣の留守に小母さんが來てずゐ分嫌味を言つて歸つたと附加へた。

「立派な人達の子供の集る學校へ芳坊のやうな戸籍の子どもが行くのは恥の上塗りだと言ふのです、今日旦那樣にそれとなしその事を申して見ますと、取りつき處もない程おこりますので何も言はずあやまつてしまひました、私の胸にだけしまつて置きます。」

私は何とも返事の仕樣もなく居ると又、

「ほんたうに芳ちやんが人中で笑はれる事はないでせうか。」

と案じ顔に言ひ添へた。私も思はず興奮して、

「今の世にそんな事が何でせう本當に、……そんな事なんかで別け隔てをする樣な先生など一人もありませんもの……」

「さうでせうか」

お常さんは安心した樣にほつとして溜息をした、そして

「芳ちやんさへ可愛想でなければ……」

と氣を取り直した樣に言つた。ほんたうにお常さんは何と言ふ素直な人だらう、人を惡く思はないで自分の心をとり直し忘れた樣に快活になつてしまふ。それを思ふと涙ぐましくなる、芳ちやんはいつの間にかどこかへ出かけたと見えて奥もひつそりして居た。二人は樂し氣にとりとめない話をして別れた。

○

暖かい日だ、もうすぐ四月だ、お彼岸頃からめつきり團體の參詣が增えるのでお堂の方は賑かになつて來た、ひつきりなしになる鉦太鼓の音、ぞろ〳〵と續く遠い足音、流石に心誘はれてしみ〴〵佛都に住んで居ると言ふ心持がする。何がなし人戀しく母屋の方へ行つて見るとお常さんは丁度緣端に出て脊を丸めて足の爪を截つて居た、そしていつになくさつぱりとした着物に着替へて居た。

「お暖かになりました事。」

珍らしいお常さんの姿を見まはして聲をかけるとお常さんは上氣した顏を上げて、

「ほんたうにねえ、少しお掛けなすつて」と言つて、昨日は一晚中町の親戚へお產の手傳ひに行つて今歸つたばかりだと言つた。お常さんは疲れたらしく赧く腫れぼつたい眼をしよぼ〳〵させて話し出した。

「それは難產でしたよ。」

と血のさした顏を顰めてその人の生みの苦しみを話して聞かせた。發育し過ぎた其の子は親の力で生み出す事が出來なくて光つた器械と醫者の力によつて此の世へ出たのだ、お常さんはその話を悉しくして聞かせた、初めてそんな話を聞く私はお常さんの話に從つてその器械が目の前で光る樣な氣がした、そして何だか生木を裂く樣な音があり〳〵と聞える樣な氣さへした。お常さんは

「まああなた、そんな蒼い顏をなすつて、」

と言つて置いて、

「彼の人の處を見たらほんたうに女の因果が考へられました。」

と打ち悄れた、

「それでも不思議なものですねえ、そのあと親も子も達者なんですもの」

と言ひ添へた。

「恐い事ですね、」

私も平氣では居られなかつた。

「でもあなたなどさうやつていつまでも御氣樂で結構ですけれども。」

お常さんは聲を落して急に顔を赧らめた、それはどこへと言つて持つて行き樣もない苦しい訴へる樣な表情だつた、私は

「あゝもうきかなくてもいゝ」と息苦しい氣壓される樣な心持ちになつてお常さんを見た、

「若い者の眞似をして今頃こんな體になつて。」

お常さんは半啜泣きの樣に言つて眼も明けない程に興奮した顔を頂垂れた、私は何と言つて好いかわからなかつた、そして二人は暫く苦しい沈默に陷つてしまつた、私は思はず涙を拭いた、お常さんも啜泣いた、そして女故にそゝぐその涙を見て一層痛ましい思ひがした。私はこのまま默つて靜な部室の方へ歸り度い樣な心になつたがそれも出來ず其處に居た。十分か二十分か知らないが私には早く此の時が經へればいいと思ふ程長く感ぜられた。

「まあ失禮しましたねえ、」

お常さんは涙に光る頰を上げてから言つた、

私も何となくほつとした和いだ心持になつて來た、そして急に打ち解けた親みが加はつて言葉も自然に出た。

「ほんたうにお大事になすつて、餘り御無理がすぎやしませんか。」

から言つた時には流石に私の胸も溫くときめいた、お常さんはもうすつかり靜になつた。

「だつて旦那樣があの御年で朝早くから夕方晩くまで働き通してゐなさるんですもの、私だつてどうしても動かないでは居られません。」

尚二つ三つ話して居るとそこへ旦那樣が二人の雇人と十時のお茶に戻つて來たのでそこそこに家へ歸つた。

「お茶が入るかね。」

氣忙しく景氣を附けて大きな聲で言ふ旦那樣の言葉をきくと「今頃になつて若い者の眞似をして」と呪ふ樣に言つたお常さんの言葉が犇々と心に迫つて來る。そして尚私は幾度も幾度も繰り返し〳〵ひゞいて來るその聲をきいた。やつとこれからといふ年頃なのにかうまで苦しまなければならないとはお常さんも氣の毒な人だ、又一日々々と完成を急いで居る「いのち」を純粹な愛のみに包みきる事も出來ず怖れ戰き乍ら秘に抱いて居なければならないとは氣の毒な事だ。「芳ちやんは私の一人子です。」かう誰にも言ひ切る樣にして育てゝ來たお常さんの心根も今更に思ひやられる。

母屋では旦那樣も二人の雇人もお常さんも樂しさうに聲高く話して居たがやがて又旦那樣の聲に續いて出て行つた。

○

私は今迄よくお常さんの寂しい臥床を想像して見た。夏の夜なども私共がお堂から公園の方まで出歩いて歸つて來る頃まだ蒸す樣な暑さに裏も表も一杯明け放してある。母屋では奥座敷の眞中に廣々とした麻蚊帳を吊つてゆつくりと休んで居る旦那樣がある、玄關の次の間――お勝手と茶の間との間の室で多分女中部屋であらう――古びた箪笥や行李など置き並べてある三方壁の四疊半にお常さんの蚊帳が吊つてある、旦那樣は寢ながら裏の家の涼し氣な灯を見、その家の廣い野菜畠の南瓜棚や胡瓜の畝を通つて來る風を受ける事も出來る。お常さんは蒸し暑い臥床の中にはた〳〵と澁團扇を使つて居る。それはほんたうに主人と女中の隔たりより外に何も思はせない樣なものだつた。

○

あの日以來私はお常さんの事が頭を去らない、そしてお常さんの生涯を今迄聞いただけ聞いたまゝに書き止めて置き度い氣がしてならない。お常さんは二つ年下の私には何でも話し易いと見えて四年もこゝに住む間によく色々の事を話して

呉れた。私が明るい縁側でメリンスの切れでも弄つて居ると島の方へ干物に來るお常さんはよく立寄つてそんな物を手にとつて見、自分の着て居る長襦袢の裾なぞまで出して見せて率直な話をして聞かせる。

「昔の物はどうしてか虫が喰ひません、これは死んだ姉さんの形見ですから十五六年にもなりますす。」

お常さんは花の紅の色などもあせて地も薄くなつた樣なのを懐し相に見る。

「意久地のない親を持つたお蔭で……」

さう話の度にしみ〴〵付け加へるのであつたが、然しそれは誰を恨むと言ふ聲でもなかつた、靜に自分に言つてきかせて落ち付いた諦めの中に何にも煩はされず快く暮らして行く人の聲だつた。昔語りか人の身の上でも話す樣な風だつた。

○

お常さんの話の中でも殊に私の頭に浮ぶ二つの光景がある。

それはお常さんが七つ八つの頃の事であらう。父親が漂浪の旅から歸つてまだすつかり不啻になりきらない頃であつた、零落しきつた父親は藝を役立てて人々の頼むに應じて彼方此方と淨瑠璃を語り歩いた。

お常さんは晝は鉢卷などして近所の子供の守りをした身で夕方からは足の不自由勝な父親に隨いて知らない人の家の方へ行かなければならなかつた。

「何々樣の家で關太夫樣の淨瑠璃あるからきいて來ておくれよう。」

晩秋の夕暮れ子供達の群は人通りもない樣な宿場町を聲張り上げて呼び歩く、お常さんは招かれて行つた家の格子に摑つて來い風の中に通るその叫びを聞く時は子供ながら泣くにも泣かれぬ哀愁に胸は掻き挘られる樣だつたと言ふ。

茶の間と座敷とを取り拂つて廣々となつた間に大人子供が一杯集り器用な父親が弾き語りを初める頃は、お常さんは次第に頭も身も疲れ父親の後の方で赤い毛氈の端にうつら〳〵と睡つてしまつたといふ。

○

十二の年から親の許を離れて奉公に出た。お常さんはそこで更に苦しい生活をしなければならなかつた。宵から飲みつゞけに飲んで居る主人の側から奥樣は子供を寢せつけるのをいゝ口實にして臥床の方へ行つてしまふ。

十二や十三のお常さんがこの飲み拔けの主人の世話を一人でしなければならない、酒がなくなつて十二時に近くなつても主人はまだ杯を置かず却つて機嫌を惡くして買ひに出すのであつた。お常さんは五町も六町も先の酒屋まで行つて寢込んで居る家の戶を叩いて懇願して酒を買つて來なければならない、こんな事は三日にあげずであつた、けれどもこんな事はまだ〳〵いゝとして時々は十二時一時すぎになつて飲友達の事を言ひ出し是非その人を迎へに行つて來いと言つて承知しない、お常さんは提灯を點けて半道も向ふの其の家まで行かなければならない。踏切を越して桑畠の中の細い道をおも上りに十町も上りつめた處が松の木の疎に生えた丘で共同墓地だ、どうしてもそこを通らなければならない、一生懸命提灯の火をみつめて歩くと自分の草履の音がパタ〳〵と聞える。お常さんはもう自分の足音に追はれる樣な氣がして驅け出す。たゞもう夢中に駈け出す、漸くその家の門に着いた時は恐はさと嬉しさに頓狂な聲を張り上げて一生懸命戶を叩く、その家の主人はお常さんが可愛想な計りにその夜更に起き出て行つて主人をなだめて呉れたと言ふ。

○

お常さんは斯樣に幼少の時から苦勞した。舊い家に生れたと言ふだけでその頃は祖先傳來の財産は凡て父親の爲に失はれて居た。――事業の失敗と遊興とに――お常さんは「男の人のお金の失し方は大抵きまつて居ますね」と言ふ――小さい時から製糸工場に行つた三人の姉さん達は一體が虛弱である上に、苦勞が過ぎるので三人ながら十七八になると全身が衰弱して逝つてしまつた。今は小さな借屋に少しばかり食べものなぞを並べて街道を行く馬子達がお茶の一杯も飲んで休んで行ける樣な商賣をして居る母親も、そこに一所に住んで居る弟も、又かうして居るお常さんも皆父親の爲に病を背負

はされて居るのだ、皆にとつてこの樣に辛い生き方をさせた樣な父親は不隨の體を十六七年も世話させて一昨年の秋に亡くなつた。その時お常さんは十何年振りで故鄕に歸つたのであるが小さい時から旅に暮らした故か、故鄕だと言ふ懷しみもなく父親の遺骸に對しても淚も湧かず胸をかきむしられる樣な悲しさもなく靜な心持ちでお線香を上げたと言ふ。

○

お常さんはその飮みぬけの醫者の家に十八の年まで奉公した。製絲場が恐ろしさに其處で辛棒しぬいた。その間に眼の方も手當をして貰ひ、十七の歲には六ケ月の講習を受けさせて貰つて准看護婦の免狀まで取つた。十八の春に丁度奧樣の姉樣が人手のない家で重い病氣にかゝり難儀をして居ると言ふのでその看護に遣はされたのであつた。お常さんはほんの手傳の積りでやつて來た。病人が手厚い看護を受けてお常さんに感謝しながら逝つたのはそれから一年以上も後のことであつた、丁度島の方も忙しい六月に入つた處だ、お葬式に來た醫者夫婦もお常さんを連れて歸るとは言へなかつた、家の中の仕事を呑み込んでやつて貰ふには一年余も馴れたお常さんをおいていい人がなかつた、お常さんも旦那樣を唯一人此處において歸るにも忍びない氣がした、旦那樣はその頃もう五十六七で二人の息子は東京の學校の方へ行つて居るのだしそれこそ唯一人になつてしまふのだつた、それでお常さんはずつと續いて居る事になつた。

お常さんよりずつと年上の息子達が暑中休みを終へて學校へ歸つて行つてからは全く主人一人女一人の寂しい住居になつた。もう島の方でも家の周圍でも機織虫や蟋蟀が降る樣に鳴いて初秋の風はさや／＼と木立の上を渡る、それに今と違つてその頃は往生寺山でなく野狐の聲さへ聞えたものだ。島のまはりの道端にも家なぞは極僅で隣と言つても遠かつた、旦那樣は色々な村用を勤める身なので外出する夜も多かつた、そんな夜は新らしく佛樣を送つたばかりの伽藍として家の中は餘計にしんとして鳴き立てる虫の音さへ息苦しくなる程迫つて聞える。お常さんは家の中に居たゝまらず庭に出る、出れば出たで何だか黑々とした木立の奧の方から怪しい人影でも出さうな氣がして猶々恐ろしくて堪らない。お常さんは

居ても立つても居られなくなつて啜泣く、するとその小さな啜泣きの聲が又一層異樣に自分の耳に歸つて來て泣くにも泣かれなくなる。そんな夜お常さんは旦那樣のお歸りをどんなに待つた事だらう。——旦那樣さへ居て吳れればお常さんは心強くその家に居る事が出來た。

お常さんは幼少の時から奉公に世を送つて來た樣な人で親の情もしみ〴〵受けて居なかつた。思ひ出して獨頰笑むと言ふ記憶は何につけ無いにも等しかつた、その故にまだ戀も知らないお常さんは只旦那樣のものとなつたのだ、お常さんは再びあの醫者の許へ歸つて苦勞するよりは此方の方が餘程ましに思へたのだらう、お常さんはそれ程にも手頼少い身であつた、お常さんは其の年の內に並の身でなくなつた事を知つた。そして羞恥と過勞の中に日を過して次の年の七月に身二つになつたのだ。お常さんは妻らしい本當の自由がなくともたゞ一途に愛して吳れると言ふ人を持たなくとも、親戚などから堪へ難い侮蔑と疑の目を向けられても、芳ちやんを得た爲に生き樣とする強い力をも與へられたのだつた、身を割いて作つた樣な芳ちやん——それは何と言はれてもお常さんにとつて「これこそは自分のものだ」と確りと抱き締める事の出來る唯一つのものなのだ「自分が生きて居る」「生き度い」と言ふ歡びや願ひもその時になつて初めて分明と知る事が出來、水の樣な心に母親らしい愛も希望も心遣ひも自然と湧いて來るのであつた。それからずつと今迄お常さんは氣苦勞と過勞の中に居ながら始終笑顏で芳ちやんを育てて來た。考へて見たら二十六年の生涯はお常さんに取つてどんなにか長くも亦短くもあつただらう。

○

お常さんのあの日の言葉を聞いたに就いて殊に蘇つて來る記憶がある、それは丁度去年の今頃だつた。旦那樣は雇人とお辨當持ちで山の畠へ行つた朝だ、お常さんは洗濯物を干しておいて芳ちやんを連れて出掛けて行つた、何の用があつてかその後へ旦那樣が飛ぶ樣に歸つて來た「おい」と呼んだ「ねいやッねいやッ」と呼び立てる、いつもの樣にぼん〴〵

と劇しく手が鳴る、續いて何やら大聲に罵り立てた。芳ちやんの玩具の箱から風鈴を捜し出して振つた。怒り狂つた樣にその鈴を鳴らして屋中見つけて歩いた、私は出場を失つて了つて今更何とも言はれないし、其の上その恐ろしさに小さくなつて部室の中に隱れて居た。屋から飛び歸つた旦那樣は腹立ちまぎれに其の鈴を式臺の上に投げつけそれから草鞋履きのまゝ家へ上つて室々を歩きまはり簞笥や押入を手荒くガタ〳〵言はせてお錢でも調べて見るらしい物音がした。其處へ母子は元氣よく話しながら歸つて來た。旦那樣は怒りに震へて物も言はず飛び出して來ていきなりお常さんを打ちのめし、其上式臺の上に坐らせて止め度もなく荒い言葉を浴びせた、呆氣にとられた芳ちやんも氣がついて大聲に泣き出す、旦那樣はいくら罵つても罵り足りないと言ふ風にどなり立てる、私はもうどうなる事かと息を殺して言ふに言へぬ恐怖に戰へて居た、その中に忙しい仕事の事に氣がつくと機嫌も直さず其のまゝ何か言捨てて行つてしまつた。あとはしんとして物音一つしなかつた。芳ちやんの聲もお常さんの聲もしなかつた。數日たつてお常さんは其の日の事を話して向、

「亡くなつたお母さんはもつと酷い目に遇ひ通したものださうです、旦那樣は職業が職業で荒らくれ男を相手に旅に暮らす日が多かつたせいですか家に居る時は難しくて〳〵、――それでも私は年の割によく俺の機嫌をとれえるなんて言はれるのですがお母さん（先妻）は幾度か千鳥ケ池の端に立つた相です。」

から話して聞せた。その故かお常さんの異性に對する態度は實に愼み深いものである。

「私は眼が惡いせいか男の御客樣の顏を覺えた事がありません、毎年林檎たべにいらつしやる生徒さんの顏さへ一人も覺えて居ません。學生時代に食べた味が忘れられないなんて言つて卒業してわざと食べに來て下さる方もあるのですけれど。」

お常さんはよくこんな事を言つて聞せた。お常さんはまともに男の人の顏を見る事もしえない樣な人だ、こんな事を考へて來ると炬燵にあたつて本なぞ見ながら、

「おい、そこの新聞紙の上の眼鏡をとつて呉れ」なんと言ふ物の言ひ方をする旦那樣の顏が浮んで來て自然とをかしくなる。

○

お常さんはあの日から餘計に打ち解けて自分の體の事を色々話して呉れる、あのどんよりとした瞳をおとしてそんな話をする時はお常さんの頬にもほんとうに若々しいつやが見える、產婆のまはつて來た日などは殊に色々話して呉れる。

○

芳ちやんの入學祝ひに遠くの兄さん達から靴だの鞄だの頂いたと言つてお常さんは非常に喜んで話した。きちんとした袴などつけて芳ちやんも新入生らしくなつた。

○

畠の方では一日一日何も彼も目に立つて成長して來た。梅は咲き出した、海棠も櫻も一雨毎に蕾が含らむ。それよりも林檎の黑い木立の美しさ、褐色の堅い苞を押し破つて嬉し相に躍り出して來る若緑と黑い小枝の色の對照は生々とした中に寂もあつて實に晴々しい。井戸端では丸太を三本組合せて臨時の自在鍵が吊される、石油罐の口を切り取つて鉉をつけた鍋の中ではボルドー液が靑く煮立つて居る。旦那樣は二人の若者を指圖して高い木の頂まで噴霧器で藥をかける。お常さんも上衣の單衣を靑く染めて手傳つて居る。

○

急に忙しくなつて行く畠の方の荒い仕事を手傳ふのが障るのかお常さんは血の氣のない顏をして、胸を抑へて力の無い咳をして居る。寢汗がじと／＼と出て氣持ちが惡いとも話し乍らゆつくり休みもせずこせ／＼働いて居る。昨日のおだやかな夕暮に井戸端で一緒になつたら

「もう五月ですねえ、今年は好きな夜櫻一度見ずに了ひました。」

と言つて寂し相に笑つた、私は「えゝ」と答へる外に言葉も知らなかつた。

○

畠には林檎の花が咲いて來た、一つの莟から出た青い柔かい葉の群は、六つ七つづゝかたまつて咲き出して來る薄紅い花の蕊の樣である。

お常さんは流石に外の方の仕事は休んで居るが家の中の事に追はれて居る。私でも通りかゝると針の手を休めてにこにこしながら目映し相に植込の方を見入る。何も彼も青くなつて晴れた空から照る日のかげはほんたうにきらきらしい。

○

赤い苺が出はじめた、もう六月だ、見知り越のお客様達が子供の手を引いて新鮮なのを食べに來る樣になつた。お常さんは其の人々の前に恥しい姿を見せなければならない、隱すにも隱しきれない自分の身を羞らう樣に顏を赧めて御用を聞いて居る。旦那樣が山の畠から摘んで來るので足りないとお常さんは此方の畠のを摘む。私は手傳つて上げる積りで隨いて行く事もある。お常さんはどう自分の身を扱つていゝかと言ふ風に體の樣子を替へて見ながら、せい〳〵と苦しい息を肩で使ふ。

「しやがむのが一番苦しいんですよ。」

かう言つてその不恰好な體を見まはして笑ふ。そんな時お常さんはほんのりと血のさした可愛らしい顏をする。

○

梅雨らしい雨に濡れてつや〳〵と大きくなつた櫻桃が出る樣になつた。お常さんは隨分大儀相に見える。

「お店の方も畠の方も忙しくなるばかりですのにこんな體になつてどうにも仕方ありませんから佐久の母に來て貰ふ事に

しました。」

お常さんは流石に嬉し相に話して聞かせた。

「公園の小母さんも御承知下すつたんです。」

と附け加へて、尙山の中から一足も外に出た事のない樣な母親の話をしてきかせた。汽車に乘るのも初めてだと言ふ事を聞いて私も驚いた。だから今迄も此の大きな町の御祭禮だ、惠比巣講だと仰山な騷ぎのある度哀れな母親を一度呼んで見せたかつたとも言つた。

「よく〳〵田舍者ですから來て貰つても身がひけますけれども。」

と笑つて、父親の葬式の時

「善光寺さんのすぐ裏です、善光寺さんには一人で抱へきれない樣な柱ばかりです、と話しましたら驚いて居ましたが、寄り來る人に繰返へし〳〵その話をして來かせるので私も本當にをかしくなつてしまひました。」

とも話した。そのお母さんの來るのは何だか私にも大變待たれる

○

七月近い午後の日を浴びた木立ちは蒸し返へす樣にいきれて、茂葉をぺた〳〵物倦相に動かして居る。

母屋の方から急に田舍人らしい高笑ひが聞えて來た。お常さんの笑ひ聲もする。旦那樣の切口上も聞える——お母さんが來たのだなと思ふと何だか旦那樣の話向きが出迎へにでも出たらしい樣子だ。暫く經つとお常さんはお母さんを伴れて下駄音賑はしく離れの前から畠の方へ案內して行つた、スヰートピーだの夾竹桃だのが盛りに咲き誇つて居る。

「あちやそれ皆林檎かつちや——ほう色々な花だなあ、まあ、」

私は思はず頰笑んだ、何とか言つて笑ふお常さんの聲もいつもり晴々しい、樂しい話聲が絕えず畠の方からきこえて來

る、一まはりして出て來たお母さんは離れの庭先まで入つて來て、

「ふうん、これも、お前とこの借屋かい。」

と言ひながら家の中を覗く樣にした。

「母さん——」

お常さんは恥し相にして

「あなた母が參りましたよ。」

と聲をかけ乍ら入つて來た。私が開けて見ると庭の林檎の木の側に丸々と堅太りのした六十近い小母さんが色の黒い顏をにこ〳〵させて立つて居る。小さくて窪んだ質朴らしい眼や、黑々と染めた齒を出していつも笑つて居る樣な口は私の想像して居たお母さんと全く異つて居て、それ程の苦勞したとも、物に不自由したとも見えない程福々しく見えた。遊びから歸つた芳ちやんはいつもの樣にお常さんを尋ねて島の方へ駈け込んだ。

「あれ、芳坊かつちや、まあ大きくなつて。

「芳ちやん〳〵こゝだこゝだ、お婆さんが來ただよ」

と大聲に呼ばつた。芳ちやんは島の方から飛び歸つて來て「母ちんこゝかい」と笑ひながらお常さんに縋つた。

「お婆さんがいらつしたんだよ、お辭儀しないの、お土産もどつさり下すつたよ、さあお家へ行きませう。」

お常さんは芳ちやんの頭を撫でた。芳ちやんはお婆さんを覺えて居るだらうけれども羞んで、母親の帶の邊に頭をもたせて指を銜へながら祖母の方を偸見て居る。

「元氣のいゝお婆さんがお邪魔しまして、もう來る早々町ちやあ大根のおろぬきまで買ふ人があるのかい店に並べてあつたよ、なんて笑はせるんですよ。」

お常さん達は晴々しく笑つて歸つて行つた。

何となく嬉しい樂しい空氣が皆行つてしまつてからも其處らに殘つて居る樣な氣がする。ほんたうに賑やかな明るいお婆さんだ。

○

母屋の方は急に賑やかになつた。學校から歸ると芳ちやんは祖母の許を離れない、二人は何彼と高い聲で話し通して居る。

○

此の頃中何の氣なしにお常さんが奧に居る旦那樣を呼ぶ處を聞いて居ると「父さん、父さん」と呼んで居る。氣を付けて見るとあの慇懃な「旦那樣、旦那樣」と言ふ呼び方を捨てゝいかにも自然に「父さん」と呼んで居る。少しでも自分の位置を力強いものに見せて母親の前を作らうとする樣なお常さんの心遣ひを知る事も出來る樣な氣がする。旦那樣も「ねいやツ、ねいやツ、」と語尾に力を入れて呼び立てるのを止して「おいこれ」と言ふ風に優しく物を言つて居る。そんな呼び方一つ改まつたのを知つても私は嬉しい氣がするし男と女の間の不思議さにも氣づく、かう改まつたばかりに何も彼もどれ程自然に見えるか知れない。

○

お母さんはよく働く人だ。朝から休みつこなしにそれからそれと仕事をして居る。

「手傳の人が殖えれば殖えたで眼に見えない仕事が出て來ましてねえ。」

お常さんはこんな事を言ひながら店の土間にしやがんで野菜物の始末などして居る。

「女つてたわいのない仕事ばかり多いんですもの、こんな事でけつこう半日すんでしまひます。」

お常さんはしみ〴〵した事を言つて聞かせる人だ、去年の今頃は「まるで獨樂の樣ですよ」と言つて帳場から店、店から帳場と忙しく行き來して隙なく立ち働いて居たものだつた。

○

朝水汲みに行くと障子口に小さな綿入れを拵へて居たお母さんから田舍者らしい率直さで呼びかけられ氣さくに話しかけられるので遂腰を下ろしてしまつた。

「あんた、つひぞ一遍遊山に來いとも言つて寄こさないあれから是非來て呉れと手紙が來る、次の日は又父さんから旅費まで入れた手紙を下さる、さあ何かと氣が氣でなく、ちやつとまあ行かずと思つて來て見ればこの始末じや御わせんか。」

と聲を隱す樣に言つた。

座敷の二階でごと〴〵やつて居たお常さんは工面をしなければ形にもならない樣な小切れを取り交ぜて一風呂敷をもつて來た。

「せつ角長野へ來たと言ふのにあんたまだ何處も見ないんでやすよ。」

お母さんに笑ひ乍ら大聲に言つて尙

「時々は公園の小母さんの方へも御機嫌伺ひに出なければならないし、なあお常。」

と娘の肩を持つ樣に言つた。

「母さんは何言ふの。」

お常さんは恥かし相に窘めた。

「此の子も平常どんなに忙しい暮らしをして居るづらと思つてねえ、それでも私が來たお蔭でこんなに出來たでやすよ。」

と言ひ乍ら立つて行つて行李の蓋の中へ縫ひためておいた物を出して來て見せた。それは丁度「幼少の時から苦勞ばか

りさせておいた娘に恩返へしの積りだ、今娘の爲に骨身惜まず働いて居るこの心だけでも汲んで呉れ」と默つて居る樣に見える。ほんとうに涙ぐましくなる。私は「おばさんもほんとうによくおやりですねえ。」と繰返へし〳〵言ふより外に言葉も知らない、それだけでもお母さんの力になるのか嬉し相に受けて呉れる。

○

今日またお母さんに呼び止められた。お母さんはいそ〳〵と嬉し相に公園の家から貰つて來たと言ふ黒つぽい染ガスリのチヤンチヤン程の小切れや、旦那樣が町から見立てて來たと言ふ紅氣のない染ガスリのやらを出して見せた。私は「皆は生れて來る赤ちやんを男と決めて居るのだらうか。」と思つた。

「それでもこんなに何も彼も充分にして貰つてなあ、あんた、綿でも布でも皆新らしいものばかりでさあ。」

といかにも滿足さうに言つた。

「さうですねえ、ほんたうに小父さんもよくでいらつしやいますよ。」

私は何がなしに一所に喜んでやらなければならない樣な氣がしてかう言つた。

此の頃は夜になると旦那樣も小ざつぱりと着替へてよくお母さんを町の方へ案内して行く、賑やかに出て行く人達を見送つてお常さんは如何な心持ちで居るだらう。お常さんはかうした經驗は一度もないのだ。並んで見れば旦那樣に似つかはしい自分の母親を見て何の憶ひも起らないのだらうか。

○

七月に入つた。畠では晩手の林檎の間引きが始まつた。若い男衆が四人も各自高い梯子の上に鋏を使つて居る。流行唄が出る、都々逸が出る、假聲が出る、仲々賑やかだ、人の居ない方の木ではいかにも夏の鳥らしい大柄な鳥が言葉妙に鳴き乍ら木を啄いて居る。間引き落されたのは隨分大きくつてもう林檎らしい味も出て居る。芳ちやんはその敝いた樣な果

實の中へお友達を連れ込んで樂しく遊んで居る。畠一面にチラ〳〵とした影が動く。お母さんも來て見て、

「えらい勿體ない事をするもんだなあ。」

と言ひ乍ら不熟な果實を拾ひ上げ美味しい美味しいと食べて居る。お常さんは此の頃になつてめつきり苦し相になつて來た。畠までお茶の知らせに來るのも大儀らしい。暑い日をよける樣に手を翳して畠の入口の邊で遠くに居る人達を呼ぶ。

「父さーん、皆さーん。」その高い聲を聞くといよ〳〵切迫して來たと言ふ氣がする。

○

七月六日――今日は芳ちやんのお誕生日だ。お萩を配つて來て與れたおばあさんは、

「矢張り今夜いつか知れやせん。」

と言つた。私も何となく緊張した心持になつて來た。

今か〳〵と怖ろしいものを待つ樣な氣で一日一晩を明かしたが別條はなかつた。水汲みに行つたらお常さんが庭を掃いて居たので、

「まだでしたねえ」

と言つて二人で笑つた。

○

次の夜私はふと眼を醒ました。

母屋の方の取り込んだ氣配がよくわかる。公園の小母さんの聲、産婆の聲、お常さんの呻き――時計はまだ三時前だ。

私の心は寒くふるへて恐怖が喰入つて來る。そして、

「今頃こんな體になつて――」

と嘆いた言葉がまざ〳〵蘇つて來る、然しお常さんはそんな事を考へる隙もなく今の苦しみを苦しんで居るのだらう。私はもう眠むれない程彼此と考へた、そしてじつと考へ込んで居る中にもお常さんの呻きに誘はれて「人間の罪が何故女にばかり報ひられるのか」と悲しく考へさせられてならなかつた。

○

「オギア〳〵」と甲高い赤ちやんの泣き聲がする、嘗て此の世に無かつた聲だ、私はほつとした。

○

家の中が取込んで居るうちに人に知れない様に水を汲んで置かうと思つて四時前に兩手にバケツを下げて出た、銀色の曉は薄闇に縺れてひそやかな舞踏をして居る樣だ。畠の奥の方にはまだ闇の群が陣取つて居て魔の樣に黑い、何も彼も短夜の物倦い寢醒め前である。

母屋ではもう雨戸が引かれて電燈の光りは庭の植込みの中へ流れ出して居る。引返さうかと思つたがそれも妙な氣がして思切つてずん〳〵行つた。もう芳ちやんまで起きてお祝ひが始まつて居る。私はどき〳〵する胸を抑へてどもりの樣な物の言ひ方をして挨拶した。

「まあ御安産でいらつしやいますか。」

その言葉が終らない中に元氣な旦那樣の返事があつた。

「色々御心配有り難う御座いました。えゝお陰樣で――」

正座に背を丸め氣味に坐つて居る旦那樣の顏にはもう祝ひの酒がまはつて居る。公園の小母さんも

「さあどうぞお一つ、」

とお銚子を持つて來て、

「兄さんも女の子を儲けましてねえ——五百兩ですよ、あなたなぞも如何ですか早くまあお一人。」
と蒼白い顔に大きな眼を思ひなしか見開いて小さな口でまめな物の言ひ方をする。私は如何受け答へをしていいかまごまごしながら盃を受けておいて逃げる樣に井戸端へ行つた、東の空は白んで來た、私はねづ色の雲の棚引いた銀色の空を眺めながら、何と言ふまとゐだらうと思つた。私はあの二三分間の印象から來た焦々しさを強いても鎭めてひそかな處で外の二つの尊い魂の事を思ひ度かつた。私は汲み上げた水を兩手に下げて皆の前を輕く會釋して家へ入つた。

○

午後の四時頃、旦那樣も島の方に居る樣だしと思つて勝手口からそつと入つて行つた。お母さんの外誰も居なかつた。何か產婦の食べ物の用意をして居たお母さんは、
「まあ、あんたよく」
と仰山な聲を出して前掛けで手をふきながらお辭儀をした。そして古けた簞笥や行李などのならんで居るお常さんの產褥に通して呉れた。
お常さんはその穴の樣な間の古い蚊帳の中に薄い布團を敷いてぐつたりと倒れる樣に寢て居た、多く安產の母親が——しかも此の年頃の母親にあつては、安心と誇らしさと新に生じた湧く樣な愛とに、おだやかな輝かしい顔をして居るものだと言ふのに、お常さんは何と言ふ蒼ざめた力なげな樣子をして居る事であらう。私はその儘歸らうと思つたがお母さんは靜にお常さんを起した。
「お常、お常、」
お常さんは血のにじんだ樣などんよりした眼を開けて私を見た。
「あなた、ほんとうにお耻かしい。」

今迄耐へて居た樣な淚がはら〳〵とお常さんの蟀谷を傳はつた、氣の好いお母さんは呆氣に取られて勝手の方へ立つた、私はどうかして氣を引き立ててやらうと思つても、其處に寢かされた赤い顏の子供を見ては自分の心もつまされてしまつて何とも言へない

「あゝあゝ欲しい方には出來ないで私の樣な者の處へ——。」

お常さんは私が返事の仕樣もない樣に言ふ。それが私の胸には犇々と來る。私は默つて深く被つたうすい眞綿の中に無心に眠つて居る赤ちやんの方へ坐り直してそつと眞綿をのけて見た。生れたばかりの如何にも細い生命が其處にあつた。黑く長く延びた髮の毛を撫でて見た。旦那樣そつくりの赤ちやんだ。

「お父さんそつくりでいらつしやいますね。」

と言ひ度かつたがそれを言つたらお常さんはどんな氣がするだらう。嘘にもそれを言はれて喜ぶ母親と異ふ。

「いい赤ちやんですね、可愛いもんですね。」

私は丁寧に眞綿を被せながらお常さんを元氣附ける樣に言つた。

「耐へても諦めても淚が出ます。——でももう靜にします、失禮しましたねえ——」

「ほんとうにお靜になすつて下さい、取り越し苦勞などなさらないで、お乳にでも障つたら却つてお困りですから。」

「さうですねえ、」

お常さんの頰は又淚に濡れた。耐へて居た私も淚を落した、

「餘り氣が立つて居るものですから少しの事にも興奮してしまつて、でもかうして一人で居ると色々考へられてたまりません。」

お常さんはまた新らしい淚を流した。

「仕方がない、今の中だけでも何も忘れて大事に仕樣と思ひながらつひ――」

と私と自分とに言つて聞かせる樣にして微に頰笑んだ。私は何も言ふ事が出來なかつた。

「お互に涙を踏臺にしての生涯ですね。」

と言はうとしたがお常さんこそそれを言ひ度い人だと思つて默つて居た。「でもこれ程涙に淸められて行く人を見るのは私にとつては有り難い事だ。」と思はないわけには行かなかつた。

暫くたつて私はお常さんの笑顏を見て枕許を辭した。外へ出て見ると日はまだ目映しい。

多産の爲に物倦く項垂れて居る樣な林檎の木立ちは私を息苦しくさせる、果實に被せた白い袋は一層目にしみる、若衆は相變らず鋏を使つて居る、旦那樣の聲も聞える、四時のお茶に上る頃だ。

（大正十三年三月二日第八回淨書）



愚かな口髭

豊島與志雄

高木が家まで送つて來ようと云ふのを、郁子はむりに斷つた。

「だつてそれぢやあ……。」

「變だと仰言るの。」そして郁子は急に眞面目な眼付で高木の顔を見返したが、すぐにまた冗談の調子になつた。「大丈夫ですよ、あなたぢやあるまいし、眞直に家へ歸りますよ。」「それでも、夕方までには歸つてくると云つてたのを、こんなに遲くなつたんですから。」「家まで私を送り屆けなければ、川村に濟まないと仰言るんでせう。そんなら先へ家へ行つて下さいよ。一人で夜遲く公園の中を散歩するのが私は好きなんですから、後からぶらぶら參りますわ。」

高木が怪訝さうにつゝ立つてるのへ、郁子はふいと別れを告げて、淋しい公園の坂をすたすたと上つていつた。新緑の木の間に、瓦斯の光が美しく輝いてゐて、彼女の影を長く短く躍らした。廣い砂利道を博物館の前まで來て左に折れると、彼女

の小さな住居はすぐ向ふの横丁にあつた。
博物館の前を曲りかけた時、彼女はふと變な氣がして後ろを振向いてみた。がたゞ、白々とした陜い道と、新綠の木立と、瓦斯の光と、二三の粗らな人影とだけで高木が後をつけてくる氣配だになかつた。それを見定めて彼女は、怪しげな――と自分にも思へたほどの――微笑を浮べた。そしてその氣持からぢかに川村のことに飛び移つた。――あの人はどんな顔をするだらう？
彼女は我知らず足を早めた。
「たゞ今。」と梯子段の下から二階へ聲をかけておいて、さすがに一寸躊躇されて、それから茶の間に疲れた身體を投げ出してゐると、川村はいつもの重い足取りで、いつもの落付いた顔付で、そしていつもの通りに、二階の書齋からのつそりと下りてきた。
「隨分と遊び呆けたものだね。面白かつたかい。」
だが、活動寫眞なんか見たつて何が面白いものか、といふ調子だつた。と同時にまた、それでお前の氣も濟んだらう、といふ顔付だつた。郁子は何だか當が外れて、一寸苛立たしい氣持になつた。
「えゝ、面白かつたわ。夕方までに歸つてくるつもりだつたけれど、他の館にいゝ寫眞がかゝつてたものですから、御飯を食べて、それを見てるうちに、遲くなつてしまつたんですの。」
そして彼女は性急な調子で、映畫の話や天麩羅の話や、歸りに高木が送つて來るといふのを斷つたことなどを、順序もなく並べ立てた。川村はそれを笑顔で聞いてゐたが、終りになつて尋ねた。
「そして、そんなに方々見て歩いたり物を食べたりして、お金はお前がみな拂つたらうね。」
「切符はみな私が買ひましたけれど、食事の代は高木さんがお拂ひなすたの。

「高木君に出させちやいけなかつたね。お前がむりに連れていつて貰つたんだから、勘定は當然お前が拂はなけりやならなかつたんだがね。」

それだけかしら、この人の考へてるのは……さう思つて郁子はまぢまぢと彼の顔を眺めたが、彼は泰然自若とした顔付で、そして滿ち足つた樣子で、煙草の煙を吐いてゐた。

「あなたは何をしてゐらしたの、あれから今まで。」

「勉強してたよ。」

「またカントだのヘーゲルだのつて、あんなものを。」

「うむ。讀めば讀むほど面白くなるよ。」

「そして夕御飯は。」

「お前がゐなくて千代や一人で分らないものだから、天麩羅そばを取つて食べた。お前も僕も期せずして天麩羅を食べたわけだね。」

皮肉でなしに人の善い笑ひが彼の頰に上つて、しよんぼりした口髭が一際貧相になつて見えた。

そんな髭でも、川村の説によると、何かの役に立つのださうだつた。

結婚した翌々年、二人して内房州の海岸で一夏を過した時に、川村はその口髭を蓄へたのだつた。初めは郁子も一緒になつて、彼の薄い唇の上に粗らな黑毛が伸び出してくるのを、異常な期待の念で見守つたが、さて出來上つたのを見てみると、あちらこちらに六七本づゝむらをなし、鼻の下の溝の所で左右にと切れ、毛の先が薄赤く萎びて、どう見ても立派だとは思へなかつた。

「見つともないから剃つておしまひなさいよ。」と郁子は見切りをつけて云つた。

「さうさね、剃つてもいゝが、まあ折角伸したんだから……。」

成行を見てみることになつた。その上、川村に云はせると、その貧弱な髯もやはり商賣道具の一つだつた。中學校の教師に髭がないのは、女學校の教師に細君がないのと同じで、重みと押しとが利かないことださうだつた。

「さうね、」と郁子も不本意ながら同意した。「そんなとぼけた髭でも、ないよりもましかも知れませんわ。それに、毛の根を刺戟すると毛が濃くなるといふから、毎日つとめて指でこすつてごらんなさいな。あなたの髭が立派になる時には、私達の身分も立派になるかも知れませんわ。」

だが、それから二年たつても、彼の髭は立派にならなかつたし、彼等の身分も立派にはならなかつた。

——ほんとに嫌な髭だこと。

もう一寸調べ殘したことがあるからと云つて、川村が二階へ上つていつてから、郁子はぼんやり考へに沈んだ。然しいくら考へても分らないことだつた。考へれば考へるほど胸の中の空虚が大きくなるばかりで、氣がくさくさしてくるのだつた。

もういつのまにか春も終りに近づきましたのね。其後いかゞでゐらつしやいますの。いくら手紙を差上げても、ちつとも御返事を下さらないのはあんまりですわ。近頃の御樣子を少しは遠方の友へもお知らせ下さるものですわ。

こちらへ參つてからまる一年近くになりますけれど、相變らずの生活を續けてゐますの。野田はやはり例の通り、酒ばかり飲み歩いて、ちつとも家へ落付いてゐません。一晩家を空けることなんか、珍らしくもありません。それが時によると、二晩も三晩も續くことがあります。私がいくら云つても、誰が何といつても更に聞き入れてくれないのです。そして

云ひ草がいゝぢやありませんか、僕はいくら道樂をしようと、世間によくあるやうに、一人の女に熱くなつて、妻子を忘れるやうな、そんな危險なことは決してないから、お前も安心してゐるがいゝつて。私もうあきれ返つて、涙も出ませんわ。ほんとに此頃は、自分でも不思議なくらゐに、一人で泣くことなんかも無くなつてしまひましたの。泣いてる隙もありませんの。二人の子供をかゝへて、自分で何もかもやつてのけて、その上月々の暮しの工面もしなければならないのです。こちらの女中は東京のと違つて、それは氣が利かないものですから、ゐてもゐなくつても同じことです。少し私がうつかりしてると、洗濯物を山のやうにためてるんですもの。これでお金でも澤山あつて、女中の四五人も使つて、一人澄してゐられるのでしたら、私もどうにか我慢出來ますけれど、もうこんなではつくづく嫌になつてしまひましたの。月給はみんな待合の方へ持つてつてしまつて、月末になると、どうにかしといてくれつて、それが野田の口癖なんです。私何度家を飛び出さうとしたか分りませんわ、それでも、いざとなると、やつぱり女つて弱いものですのね。

この町から山の裾を廻つて向ふ側に、立待岬といふ一寸景色のよい所がありますのよ。夏になると若い人達がよく散歩に行きます。途中に啄木の墓がありまして、歌が書いてありますの

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹と戯る。

それと並んで、岬から身を投げて死んだといふ失戀詩人の墓があつて、やはり歌が誌してあります。

わが命この海峡の浪のまに消ゆる日を想ふ岬に立ちて。

その墓の側を通つていつて、立待岬の崖の上から身を投げて死ぬ人達が、よくあるさうです。四五日前も若い一組の情死者がありました。そんなことを聞くと、私何だかその人達が羨ましくてなりませんの。私にもそんな時代があつたのに、うかうかと通り過ぎてしまつて、もうどうにもならない今の身の上になつてしまつたんですもの。こんなことを書くと、あなたにまた笑はれるかも知れませんが、えゝ、どうぞ澤山笑つて下さいな。私も自分自身を笑つてやりますわ。

ほんとにあなたは幸福ですわ。御主人はお酒一つ召上るのぢやなし、いつもやさしく親切でゐらつしやるし、それに、哲學の御研究を益々進めてゐらつしやいますさうで、私あなた方のことを考へると、嫌で嫌でたまらない世の中にも、何だか光がさしてくるやうな氣が致しますの。ほんとにあなた方だけなりと、いつまでも幸福に生きてゐて下さるやうにと、さう祈らずにはおられませんの。それにしても、あなた方にお子さんがあつたら、どんなにかお宜しいでせう。無くてもよい私の方にばかり子供が出來て……。でも、或はもうお出來になつたのでございませんかしら。さうだつたら早く知らして下さましな。お生れなさる頃までには、殊別上等の變挺なアイヌの玩具でも見付けてお送り致しますから。

それから、勝手なお願ひですけれど、三越や白木で夏物の賣出しが初まりましたら、明石と御召とを一反づゝお見立て下すつて、お送り下さいませんでせうか。着物に致しますの。代金はその節お送り致します。こちらでは思ふやうな柄が見當りませんから、よろしくお願ひ致します。

御主人樣へくれぐれもよろしく申上げて下さいませ。

郁子さま御許に　　　綾子

……………………

函館の友達から來たその手紙を、郁子はくり返しくり返し讀んだ。

「女つて隨分長い手紙を書くものだね。」

さう云つて川村は新聞でも讀むやうな樣子で讀み初めた。郁子は默つてそれを眺めた。時々薄ら笑ひを洩らして、ゆつくり讀んでゐる……。

——綾子さんが云ふやうに私達は幸福なのだらうかしら。この人は恐らく幸福かも知れない。然し私は、この私自身は……

「相變らず綾子さんは呑氣だねえ。」と川村は手紙を投り出しながら云つた。「夫婦喧嘩を仄めかしたり、若い情死者を讚美したりして、そして結局の用件は明石と御召との着物なんだからね、愉快ぢやないか。」

「私達よりはまだよつぽど幸福ですわ。」

「どうして。」

「だつて、生きてる張合があるぢやありませんか。」

「ぢやあお前は生きてる張合がないと云ふのかい。」

「さういふわけぢやありませんけれど……私何だか、あなたがちつとも分らなくなつてしまひましたの。どこを摑んだらよいか、摑みどころがなくて、私を本當に愛して下さるのかどうか、それが分らなくなつて、これが本當の生活だらうかと、疑はしい賴り無い氣になつてきますの。」

それはお前が本當に生活の味をかみしめて味つてゐないからだ。そんな風に凡てに疑ひを抱く時が、誰でも一度はあるやうだが、それを通り越して、人は本當に落付いてくるし、本當に偉くなれるものだよ。愛とか戀とかさういつたものよりも、もつと深い大きな……何と云つたらよいか……生活だね、しめじめとした深い生活が、初めてはつきり分つてくるものだよ。」

「そして案外安つぽい生活かも知れないわ。」

「そんな風な考へ方こそ安つぽい輕率な考へ方なんだ。心を澄してぢつと味つてごらん。かうして生きてゐるのが有難いことに思へてくる。勿論お前は、去年の病氣以來神經が衰弱してゐるから、强い生活力がなくなつてるから、何もかも淋しく賴りなく思へるのは無理もないことだけれど、それをしつかり持ちこたへてゆくのが一番大事なんだよ。子供でもあつたらまだいゝかも知れないけれど、そんなことを云つたつて今更仕方はない。それよりも、僕達二人で生きてゆくとい

ふことの方が、力強い確かなことぢやないか。」
「どうして私達には子供がないんでせう。」
「そんなことは神にでも任せておくがいゝさ。まだ實際、子供なんかどうだつていゝぢやないか。僕達二人だけでしつかり生きてゆく、それだけでいゝぢやないか。」
郁子が默つてると、川村は云ふだけのことを云つてしまつたといふ風に、重い足取りで二階の書齋に上つてゆく。
郁子は夢からさめたやうな氣持であたりを見廻した。箪笥、長火鉢、茶箪笥、何もかも見馴れた古くさいものばかりで柱時計がいつもの通り几帳面に振子を振つてゐた。そして向ふの片隅には、洗ひ張りした銘仙の着物が、縫ひかけたまゝ放り出されてゐた。そんなものをぼんやり見てるうちに、彼女はいつしか眼に一杯涙ぐんで、綾子の手紙をくしやくしやに握りしめてゐた。

——川村は二言目には必ず自分達の生活などゝ云ふけれど、一體何が自分達の生活なのだらう。川村は朝早くから學校へ出かけて行く、それを送り出しといてから私は、千代やを相手に、ごたごたした取止めもない家庭の仕事に一日を過してしまふ。三時半頃川村が歸つてくる。夕食の時間がすぐに迫つてゐる。食後川村は書齋に上つて、夜遅くまで書物と睨めつこをする。私は雜誌を讀んだり針仕事をしたりして、いゝ加減の時間になると先に寢てしまふ。たまの日曜日は寢坊日で朝が遲いし、午後には來客があつたりして、すぐにたつてしまう。そして芝居や音樂會に行くぢやなし、寄席や活動寫眞は川村が大嫌ひだし、同じやうな單調な日々が明けては暮れる。それが自分達の生活なのかしら、いや、さういふ日日の底にある生きてゆくといふ意識、二人で一つの生を營んでるといふ意識、そこに自分達の生活があるのだと川村は

云ふ。然し結局底だつて表面だつて同じぢやないか。何といふ單調な慘めな生活だらう。勿論私だつて、川村が疲れきつた顔付きで學校から歸つてくるのを見ると、氣の毒なやうな濟まないやうな氣もする。去年私が肋膜炎をやつて長い間病院にはいつてたりして、無理な借金も出來たものだから、川村が一層哲學の研究にこり出して、その方面の著述を急いでることも、私にはよく分つてゐる。僕がこんなに側目もふらずに勉强するのを我慢してくれつて、川村は却つて私に許しを求めるやうな口の利き方をしたこともある。單調ではあるが落付いた靜かな生活であることを、私だつて知らないではない。然しそれだけでいゝのだらうか。私はどうしてから不滿で苛ら苛らするのだらう。なぜ川村は私にも働かしてくれないのだらうか。どうせ隙だから何かの内職でもしてみたいと云つても、川村はそれだけはどうしても許してくれない。男の威厳にかゝはるとでも思つてるのかしら、あんな無頓着な川村が、……それがどうしても私の腑に落ちない。或は、あんなしよぼしよぼの口髭でも何かの役に立つさうで、川村が大事に生やしてる所を見ると、私達の生活にも教師とか知識階級とか中流階級とか、さういつた口髭が必要なのかも知れない。そしてやつぱり川村の髭と同じやうに、何といふ見すぼらしい髭だらう。借金の利子拂ひや月々の諸拂ひが漸く出來るだけで、うまい物も食へず面白いものも見られず、明石や御召の着物一枚拵へることも出來ず。たとひ川村の著述が出來上つたところで、どうなるものでもない。そして生活のうはべだけは、しよんぼりした口髭を生やして澄し切つてゐなければならないのだ。あゝ何か、何か胸に響くものがほしい。野田さんのやうに川村が少し放蕩でもして、夫婦喧嘩でもする方が、まだ張合があるかも知れない。川村にはどうしてあゝ何の欲望もないのかしら、川村は私に、强い生活力がなくなつてると云ふけれど、私から云はせると、川村にこそ初めから强い生活力なんてありはしない。變に悟り澄した聖人君子みたいだ。そして私がかうして、高木さんやなんかと勝手に出歩いても、嫉妬とか疑惑とかを微塵も感じないらしい。私がもし他の男に心を移して身を任せたら、川村は何と云ふだらう。いや、私にはそんなことは決して出來ないと、頭からたかをくゝつて見縊つてるのだ、あゝ何といふこと

だらう。私達はこれで幸福なのだらうか。狹苦しい牢屋に繫がれてるやうなこの生活が幸福なのだらうか……。

そんなことを郁子は考へてゐた。それを少しも知らないで、返事がないのは注意深く聞いて貰つてゐるからだといふやうに、高木はぽつりぽつりと話し續けてゐた。

「……姉の友達だつたといふばかりでなしに、私には何だかあなたが亡くなつた姉とそつくりだといふ氣がするんです。實際あなたは姉と、氣の合つた一番親しい友達だつたんですね。だから私は、姉に逢つてゐるやうな氣で、あなたには何にも隱さずにありのまゝお話が出來るんです。話してしまふと、みんな許されたやうな氣がするんです。……私は今ほんとに迷つてゐるんです。迷つてゐるといふより、苦しんでゐると云つた方がいゝかも知れません。相手の氣持がちつとも分らないんです。私に非常にやさしい眼付をしてみせるかと思ふと、また馬鹿に冷淡な眼付をすることがあります。先日なんかも、三四人で――みなその兄の友人ばかりですが――三四人で話をしてゐる間中、あの人も一緒に話してゐましたが、他の連中が歸つて、私一人後に殘ると、あの人は引込んだきり一度も顏を出さないんです。それをどう解釋していゝか私には分りません。そしてそんな時、私はついふらふらと、酒を飮み歩いたりするやうになるんです。卑怯なんでせうか。」

暫く待つてから高木はまたくり返した。

「ね、はつきり云つて下さい。私は卑怯なんでせうか。」

郁子はぼんやり眼を擧げて、彼の眼付に出逢ふと、その意味もよく分らないでたゞ機械的に云つた。

「えゝ、卑怯かも知れないわ。」

「私自分でもさう思つてゐます。然し外にどうにも仕方がないんです。たゞ苦しくて仕樣がないんです。」

靜かな晩だつた。瓦斯の光が青葉の間に大きな波紋を畫いてゐた。ぢつと考へ込んでると、天と地との間に自分一人だ

といふ感じのする靜けさだつた。

その靜けさの底から、向ふの茂みの影から、眞黒な人影が飛び出してきて、十四五間前をのつそりと通り過ぎた。黒のソフトを目深に被つて、草履ばきで、後手にきらきら光る刃物を持つてゐた。

その人影が向ふの茂みにまた沒してしまふと、芝居じみた印象に息をつめてゐた郁子は、急に不氣味な恐怖に襲はれて、高木の手につかまりながら、ベンチから立上つて、小走りに逃げ出した。無言のまゝ三十歩餘りした。

ほつと吐息をついて振向くと、高木の手がかすかに震へてゐるのを感じた。薄暗がりの中に、露はな眼がぱつちりと見開かれてゐた。それを、片方の手を伸して胸に抱き寄せた。がはつとして彼女は、喰ひ入るやうに顔を寄せてきた高木を、兩手で押しのけた。

しいんとなつた。高木は其處の櫻の幹によりかゝつて、顔を伏せて泣いてゐた。

「あれ不良少年でせう。……行きませう、氣味が惡いから。」

なほ默つて泣いてゐる高木の脊に輕く手をかけて、高木が素直に從つてくるのを見定めて、そつとその手を離した。後は無言のまゝでゆつくりと歩いた。非常に長い時間がかゝつたやうな氣がした。

家の近くまで來た時、高木は不意に立止つた。

「私はこゝから歸ります。」

「あら、なぜ。まだ早いから寄つてゐらつしやいよ。」

「でも……。」一寸躊躇した後で彼はきつぱり云つた。「今日は歸ります。また參りますから。」

「さう。ではこんどゆつくりゐらつしやいね。」

ちらりと眼を見合して、それをすぐにそらして、二人は別れた。

――私はどうしたんだらう。馬鹿馬鹿しい……汚らはしい。

郁子はすたすたと足を早めて、勢よく家へ飛び込んだ。何か無性にぶつかつてゆきたかつた。そのまゝ二階へ上つて行つた。

煙草の煙の立ち罩めた中で、川村は毛虫のやうな文字を一生懸命に讀み耽つてゐた。

「もう歸つて來たのかい。……どうしたんだい、變な顔をしてゐるぢやないか。」

「おかしな男に出逢つたんです。」

「いつ。」

「先刻……今すぐ。……今晩何だか氣分が惡いから、高木さんにいゝ加減なことを云つて別れて、一人で公園の中をぶらぶら歩いてゐますと草履ばきの怪しい男が。後ろ手に出刃庖丁か何かを持つて、すーつと私の前を通つていつたんです。それで喫驚して……。」

「そして。」

「急いで歸つてきました。」

「そいつは……不良少年か何かだらう。そんな芝居じみたことをして、人をおどかして面白がつてるんだ。」

郁子は眞劍な眼付でちつと彼の顔を眺めた。

「そんなに氣にかけるほどのこともないさ。……だが、淋しい公園の中なんかを女一人で歩くのは物騷だよ。これからは必ず高木君に送つてきて貰ふやうにするがいゝよ。」

「えゝ、さうしますわ。高木さんを腰巾着のやうにして連れて歩きますわ。あなたがちつとも私にかまつて下さらないから。……あなたは私のことなんか、どうなつたつていゝんでせう、御自分一人さへよければ……。」

川村は煙草に火をつけて、それを吸ひながらゆつくり云ひ返した。

「またそんな無茶なことを云つちや困るね。僕がなぜこんなに勉強してるか、お前もよく知つてる筈ぢやないか。僕とお前と二人の生活をよくするためなんだ。お前ももつとしつかりして、僕と同じことをしてる、僕と一つの生活をしてるとさういふ氣持でゐなくちやいけないぢやないか。……お前は今晩……この頃……實際どうかしてるよ。」

「えゝ、どうせ私は馬鹿なんです。そんな深い自覺なんか持てやしません。もつと利口な女を探してゐらつしやるがいゝわ。」

「またそんな……。いやもうその話は止さうよ。氣を落付けさへすれば分ることだから。不良少年に出逢つたくらゐで、そんなに取亂しちや困るぢやないか。もうお寝みよ、ねえ。僕もすぐに寝るから。」

郁子は歯をくひしばつて、眼にたまつてくる涙を一生懸命にこらへた。

「四五日か一週間ばかり、私を旅にやつて下さいませんか。」と郁子は云ひ出した。

「お前一人で。」

「えゝ。」

「旅をしてどうするんだい。」

「一人きりになつてよく考へてみたいんですから。」

「考へるつて、一體何を考へるんだい。」

「自分にもはつきり分りませんけれど、たゞ一人きりになつてよく考へてみなければ、このまゝぢやとてもやつてゆけま

せん。」

「それごらん、何を考へるのかそれさへはつきりしてゐないぢやないか。そんなことで一人旅先で沈み込んでゐると、とんでもない考へしか起りはしない。それよりも、も少しぢつと落付いてゐておくれよ。夏の休暇になつたら、僕も少し旅をしたいから、どんな工面をしても、二人で何處かに出かけることにしようよ。」

「いゝえ、そんなに待つてはゐられません。」

「それなら、お前は何か僕に隱してることでもあるのかい。」

「いゝえ、何にも。」

「それぢやあ、さう急に一人旅をしなけりやならない理由もないぢやないか。お前の今のやうな氣持では、一人旅は却つて危險だよ。くよくよ考へることが一番いけないんだ。何にも考へないで出來るだけぼんやりしてゐなけりやいけない。だから僕はわざわざ高木君に賴んで、芝居や寄席や活動寫眞なんかに行く度に、出來るだけお前を誘つて貰ふやうにしてるんぢやないか。僕が連れて行けばいゝんだけれど、僕には今忙しい仕事があるし、またそんな所へ行くと、僕は頭が惡くなるばかりでちつとも面白くないことは、お前にもよく分つてるだらう。お前がこの頃何か苦しんでることは、僕もよく知つてるけれど、それは去年の病氣から引續いた衰弱のせいで、神經衰弱から來た一種の厭世的な氣持なんだよ。一人旅なんかその氣持を猶更增させるばかりだ。も少し待つてゝおくれ。夏になつたら何處かへ一緒に行かう。身體と神經とが丈夫になりさへすれば、何もかも一掃されて晴々とした氣持になれるから。」

方程式をでも解くやうな數學的な確信の調子で、諄々とそんな風に說いてゆく彼を、郁子は上目がちに眺めやつた。正確な足取りで進んでゆくその言葉と共に、薄い脣の上の貧弱な髭が、ひよいひよいと步調を合してゐた。

――この人には私の氣持なんかちつとも分つてやしない。自分一人で分つてると信じてるだけなんだ。そして何といふ

恐ろしい確信だらう。私と高木とのことだつて……。

高木は其後も時々やつて來て、川村から勸められるまゝに、寄席や活動寫眞に郁子を誘ひ出した。郁子は平氣でついて行つた。そして別に感情的な話を交はしたことはなかつたが、絶えずそつと自分の方を窺つてる高木の眼付を感じた。

——男つてどうしてかう同時に幾人もの女に心を寄せることが出來るんだらう。……だが私も、私は一體高木を好きなのか嫌ひなのかしら。そしてまた、川村を愛してるのか愛してゐないのかしら。

そして彼女は苛ら苛らしながら、高木のその若い感傷的な心を、どうしてくれやうかと思ひ惑つた。それに自ら氣がつくと、もう何もかも嫌な陰欝な氣分に沈んでしまつた。

——せめて川村が、私の行動に嫉妬でもしてくれたら……。だが嫉妬どころか、何といふ恐ろしい確信だらう。

「あなたは、」と彼女は云つた「私がもし他にいゝ男でも拵へたらどうなさいます。」

「お前にそんなことが出來れば僕も安心なんだ。情夫を拵へるくらゐの勇氣があれば、お前はそんなにくよくよしやしないよ。」

郁子はむらむらとしてきた。

「あなたがそんなに私を見縊りなさるなら、私だつて、私だつて……情夫の二三人くらゐすぐに拵へてみせます。明日からでも拵へてみせます。」

「だからお前は困るよ。冗談と本當との區別がつかないんだから、うつかり口も利けないぢやないか。一體お前は、何に對してそんなに腹を立てゝるんだい。はつきり云つてごらんよ。」

「腹なんか立てゝやしません。」

「いやお前の樣子は、何かに始終腹を立てゝるやうな工合だよ。自分では知るまいけれど、この頃お前は夜眠つてから、

よく歯をくひしばつてぎりぎりやつてるよ。眠つてまで歯軋りをするのは、始終何かに腹を立てゝる證據ぢやないか。」

「私が……歯軋りをしますつて。」

「そら、そんな風につまらないことまで氣にするから、いつまでも氣持が落付かないんだよ。」

「いえ、あなたが餘り落付きすぎるからです。何處を掴んでいゝか、掴み所がなくて、張合がなくて、そのくせ私を馬鹿にして、見縊つて……。」

「もういゝ。」と川村は彼女の言葉を遮つた。

「お前は自分が何を云つてるか自分でもよく分つてゐない。落付いてよく考へてごらん。何が不滿なのか、何に腹を立てゝるのか……。みんな神經衰弱のせいだよ。それに氣がつきさへすれば、獨りでに神經衰弱なんかなほつてしまうよ。」

郁子は口を噤んで石のやうに堅くなつた。

――どうしたらいゝんだらう。夜眠つて歯軋りなんかしてるのを見て、この人はどう考へてるんだらう。そのうそ寒い口髭を逆立てゝ薄ら笑ひでも洩してるんぢやないかしら。

そして彼女は、彼の薄い唇の上にしよぼしよぼしてる髭を、毛虫の毛をでも見るやうな氣で眺めた。何もかも、世の中の凡てが、嫌になつてしまつて厭はしかつた。

梅雨がしとしとゝ降つてる晩、郁子は友達の所へ行くと川村へ云つて、慌しく家を出た。が外に出て、變に蒸し暑い陰氣なじめじめした夜氣に打たれると、もう何處へ行くのも家に戻るのも嫌になつて、見當り次第の辻俥で牛込の叔母の家に逃げ込んだ。

子供が大阪の病院に赴任してゐて、老人夫婦で呑氣な淋しい暮しをしてゐる叔母は、たゞ遊びに來たのだといふ郁子の言葉を聞いて、非常に喜んでもてなしてくれた。叔父は向ふの座敷で客を相手に夜遲くまで碁を圍んでゐた。

郁子はその晩もその翌晩も、其處に泊り込んで一歩も外に出なかつた。

「郁ちやん、一體まあどうしたことなんです。」

幼な名でさう呼びかけながら、叔母は翌日から不安がり初めた。叔父は一人で小首を傾けてゐた。

が郁子は一人ぽつねんとして坐り込んでゐた。

――これでちつとは川村が懲りたかしら。今頃はどうしてるかしら。何を考へてるかしら。私だつていざとなれば、どんなことだつて仕出來してみせる。

けれどその夜、庭の植込みに降り濺いでる細い雨音を聞きながら、郁子はたまらなく淋しくなつて、一人でしくしく泣き出してしまつた。私だつて、私だつて……さう心に叫びながら、止度もなく涙が流れた。「お前は何に腹を立てゝるんだ。」と云つた川村の言葉がひしと胸にこたへてきた。それでも彼女は齒をくひしばつて、眼覺めながらぎりぎり齒軋りをした。そしてまた泣いた。夜半過ぎまで眠れなかつた。

その翌日の十一時頃、川村からの速達郵便が叔母夫婦を喫驚さした。

……………

一昨日の晩、郁子は友達の家へ行くと云つて出たきり、家に戻つて來ません。多分御宅へ參つてることゝ存じます。

郁子は去年の病氣から後、何だか神經衰弱の氣味で、始終苛ら苛らしてゐました。いつも何かに腹を立てゝるやうな風でした。病後すぐに溫泉へでも連れていつて、すつかり保養をさせればよかつたのですが、それも出來かねた事情が今となつては悲しまれます。

郁子が家を脱け出したについては、別に直接の原因もないやうです。家へよくやつて來て郁子とごく親しくしてゐた高木君に聞いても、全く原因は分りません。私達はいつも仲よく暮してゐましたのです。

全く病氣のせいと思はれます。神經が弱つて興奮してるのです。それで、どうかそつと靜にさしといて下さい。何にも尋ねも責めもしないで、するまゝにさしといて下さい。實は私がすぐに迎へに上る筈ですけれど、もう二三日靜にさしとく方がよいと思つて、二三日待つことにしました。二三日したら、多分郁子の方から家へ歸ると云ひ出すかも分りません。

今考へると、一週間ばかり一人旅がしたいと申してゐましたので、その一人旅のつもりで置いやつて下さると幸です。その時すぐに私がお宅のことを思ひついて、お宅へやればよかつたのですが。

別に御心配のことは何もありませんから、どうぞ御氣になさらぬやうお願ひします。

たゞ、もしお宅へ參つてゐないのだとすると一寸心配です。その時はすぐ學校へ電話でお知らせ下さい。お宅に參つてゐれば安心です。私はお宅へ參つてることゝ信じてゐます。

川村誠一

瀨原叔父叔母上樣

……………

叔父と叔母とは喫驚したが、それが靜まるとすぐに安堵して、にこにこしながら手紙を郁子の所へ持つて來た。

郁子は默つて讀み下した。

鐵棒で頭から毆りつけられたやうな感じだつた。何もかも駄目になりひつくり返つてしまつたやうな氣がした。

——もう私は駄目だ。生き甲斐もない私だ。こんなに踏みつけられて、見縊られて……。この上は、死んでしまつてやる、死んで見せつけてやる。

そして彼女は大聲を擧げて泣き出した。叔父と叔母とが何と云つても耳に入れなかつた。泣きながら起き上つて馳け出さうとした。

「もう私は生きてはゐられません。このまゝ生きてはゐられません。」

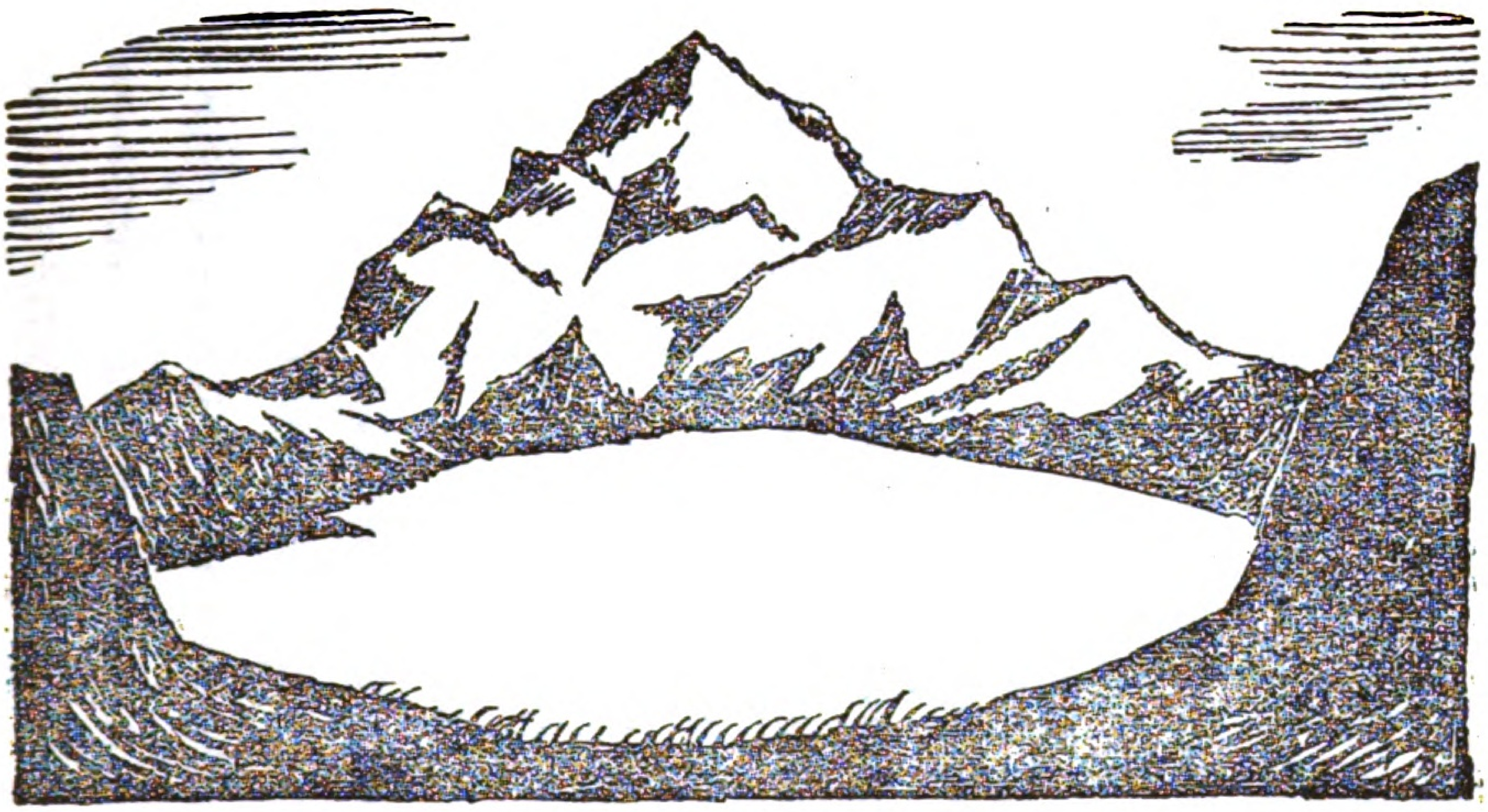
それを漸く取鎭めて、叔父は川村へ電話をかけた。

丁度十二時頃に川村が慌てゝやつて來た。

郁子は臺の上につゝ伏して眞蒼になつて震へてゐた。川村はその側に恐る恐る寄つていつた。

「郁子、どうしたんだい。僕はお前を信じてゐた。僕とお前とは一つの生活に一體となつて結び合つて、離れることのないものだと信じてゐた。その僕の信念が間違つたのなら許してくれ。僕はたゞ一圖な信念であの手紙を書いたのだ。それが、お前の氣に障ることがあつたのなら、どうか許してくれ。この通りあやまるから。」

眼に一杯涙をためて、鼻の先に汗をにぢまして、しよんぼりした口髭をなほしよんぼりとさして、古ぼけた洋服の膝を折つて坐つてゐた。その惨めな様子を見ながら、郁子は其處に起き上つて、惡夢から醒めたやうに眼を見張つた。そしていつまでも、默りこくつて、坐り通してゐた。



わが生ひ立ち

佐藤春夫

………時には自分の生ひ立ちのことなどを思ひ出して、自らそぞろになつかしむやうな柔かな甘美な氣持になることがある。(誰にだつてあるだらう)。ふとそんなさまざまなことを書きつけてみたらばといふ氣持にもなる。私が筆を持つて書くことの出來る人間だからです。そんな折があつて、或る日、私はそれを書くことをこの雜誌の記者に約束をしたものです。

ところが今日はどうしてもそんなことなどを思ひ出しもせず、況んや書かうなどといふ氣にもならない。別だん腹を立ててゐることもないのに、今日はへんに世の中がおもしろくない。ふさぎの蟲だ。

それだのに書かなけやならない。職業だからだ。喜劇作者は喪に服してゐる日にも笑ふだらう。

私は、今日すこぶるフロゼイクな氣持だ。しかも幼時の思ひ出にとりかか

らうといふ。私は努めて詩人になる。笑ふ人は笑へ。憫れむ人は憫め。しかになかにはひとりぐらゐ厳粛な顔をしてくれる人もあつてほしい。

× × × × × × × × × × × × × × ×

C子よ。

またI夫人よ。

あなた方は、或る時私に、幼かつたころの私を語れと言つたことがあつた。しかも、私はそれを語るべきをりなくして、時は去つた。今日、私がそれを書いてみても、君たちが果してそれを見るかどうかを、私は知らない。私はよい聞き手を失つた……

しかし

幸にして私は、私の幼時を語つて、それを讀んで見てくれるであらうところの二人の人を持つてゐる。

誰と誰とだ？

父と母と！

お父さん、お母さん、私は三十年の歳月を遡るのです。

――無理に、私は、詩人のやうにかう書き出す。興が湧いて來てくれればいいが……

一　最初の記憶

……菊の花がある。黄色い。

兎が一疋、白いのが、逃げ出した。

そこは塀に沿うた細長い花畑で、川原の石をぐる〳〵ととりめぐらしてあつた。私はよく覺えてゐる。兎がそこへ逃げ込んでしまつたのだ。その兎を箱から出したのが、どうやら私自身に違ひないのだが、そいつを出した時のことは思ひ出さない。私は精一ぱいなことをして兎をつかまへやうとしてあせつてゐた。兎をたうとう倉の横へ追ひ込んでしまつた。私自身はそこへ這入らうにも、どうしてだかもぐれなかつた。途方にくれて、私はぼんやり立つてゐた。倉の方を見ると、太陽がきつかりとすじかひに白壁の上にうつつてゐた。その日ざしを私はあり〳〵と目にうかべ得る。——私は助けを呼ぶために泣き出しながらその日ざしを見てゐたやうに思ふ。

これが、私のもの心ついてから最初の記憶ではないかと思ふ。一枚の繪になつて私には思ひ浮べられる、白兎も黄菊も白壁の日ざしも。たゞ自分だけはどんな形だつたか一向わからない。

——いや、もつと以前にもあるらしい。

女中の背中におぶさつて、私は裏口から出て行つた。人がひとり通ると一ぱいになるやうな狹い露路で、ごくうす暗い。女中がそこで私をおぶつたまゝ、やゝ長い間、誰かと立話をしてゐた。女中の話相手が男だつたか女だつたか、私は今それを時々考へ出さうとするのだが、それが少しも印象にない。その代りに、私は自分の手に廻つてゐた風車があつたことを新しく思ひ出す。たゞよほどぼんやりしてゐる。さうして記憶を呼ぶことさへおぼつかないやうな氣持だ。

女中の立話をしてゐた露路といふのは、二つの大通りが背中合せになつたところに、その家々の各々の裏口の露路である。大通りは四五町もつづいてゐるから、この露路もやはり四五町の長さはある。それが整然と殆んど一直線で、幅は三尺あるなしである。うす暗いへんなところを好んで、そこの溝板の上で、めんこやら庄屋けんなどをして遊んでゐたものである。——後に十ぐらゐになつて私は、その妙な露路を珍らしがつて、時々、わざ〳〵そこを歩いてみたことがある。

さうして自分と同じくらゐな子供たちがそこでそんな遊びをしてゐるのをよく見かけた。さうして、私のもとの家も私の記憶も亦この妙な露路の一隅にあつたことを知つた。私の家はもう別の場所へ移轉してゐた。私が最初の記憶のあるそこの家にゐたのは私の五つの時までだといふことである。さうして秋の日の出來事なら、私が四つの秋であるに違ひない。

後に聞かされた話だが、私は三つの時に一度、死ぬかも知れなかつたさうである。私は川のなかへ這ひ込んで行つたのだ。姉と一緒に川原へ遊びに行つた――私のその家は川原に近いところにあつたから。私が川のなかへ這へ込んで行つたのを見て、姉はあつけにとられて、それから氣がついて泣いてうちへ敎へに來た。姉はもう八つぐらいになつてゐた筈だけれども突嗟のことで面くらつてしまつたものらしい。家ではびつくりして助けに來てくれたが、それよりさきに私は誰かそこにゐ合せた人に抱き上げられたらしい。――そこのところのことを今ちよつとはつきりは知らない。川へ這ひ込んで行つたことも、私は自分では少しも覺えがない。だいぶん水を飲んで苦しんだらしいのだが。

五つまで住んでゐたその家は、私たちがゐなくなつて間もなく町の大火事で燒けた。私は多分あの家で生れたのだと思ふが、その家はもうないわけである。

もう一つ、その家にゐた頃のことで夢ほどおぼろげに、然し不思議な印象がある。それは私の向ふの家でそこは相當な富豪であつた、が、そこの子供が――その頃十位ゐだつたかも知れない。或る日の午後、その子は夕方まではげしく泣き叫んだ。近所の人たちがかけつけたり、巡査まで出入したりして、私はをさな心にも大へんな騷ぎだと思へた。子供は泣き叫ぶのだ。

「ぬすんだのちやない！」

それから煙硝々々といふ言葉がまじる。

その狂ほしく泣き叫ぶ聲が、恐怖を私にまで感染させた。私の世界中がその時、その子供の號泣で一杯になつた。それがいつまでも私の耳の底に殘つてゐる。三十年後の今日でもかすかながらその泣き聲を聞く。それは或る夏の日であつた

ことを、今新らしく私の思ひ出が追補した。あの時、あんな騒ぎの小主人公は今はもう四十になつて、立派な商家の主人である。私は近年の歸省にふとその人を見つけて、むかしの追想を母に語つて、あの大騒ぎは何であつたかを尋ねて見たけれども、母は一向に緒口さへも思ひ出してくれなかつた。私は自分がそんな夢を見たことがあつたのぢやないかとも考へた。或はまたその子供が、晝寢の夢からさめてあんなに泣いたのではなかつたかとも考へた。もし夢ではなく事實だつたとしたら、私は今考へ合せてみるのだが、きつとその子供は、何かピストルの彈丸のやうな危險なものでも持つて遊んでゐたのではなかつたらうか。それを巡査が見咎めて、親たちに注意をすると同時にそんな危險物の出所を訊き質したのに、子供は要領を得ずに泣いたのではないだらうか……。

私が五つまで育つた家に就ては、もうこれ以上の記憶はない。たゞ、私はそこの家の二階と梯子段とのありさまを、暗のなかの仄明りに認めるがごとくに思ひ浮べ得る。

二　日清戰爭

日清戰爭の時、私は四つ五つであつた筈である。國家の一大事はその歲の私にとつては何の影響もない。そんな大事實に關聯する何事をも私は追憶することは出來ない。たゞ日清戰爭實記といふ雜誌の合本と一緒に、日清戰爭畫報といふ日本職家の手になつた畫本が五六冊あつて、その旭日の聯隊旗を表紙にした本のうらなどに、私が墨で縱橫に描いた軍人の繪などがあるのが、十年ぐらゐ前までは藏の隅にあつたものだ。僅にさういふ記念物と、及び私が明治二十五年の生れであるといふ事實とによつて、私自分のその年ごろに國家はそのやうな一大危機にあつたことを、理性的にいま判斷するだけである。日清戰爭の代りとして私の知つてゐるものは、父の新築の家にころがつてゐた澤山の木片である。それをつみ上げて私自身が小さな家を新築した事である。しかし私は、父の新らしい家がどれくらゐ大きくつて、私がそこを自分の住むところにすることが嬉しかつたかどうか、さういふ點に就ては、日清戰爭同樣に全然私の印象にはない。

三　はつ旅

六つの時、私は初めて旅をした。

――いや、それよりも以前に、私は旅をしたやうな氣持はある。旅と言つても、六つの時の旅のやうに長い遠い旅ではなかつたことは確だが、しかし私の幼ごゝろに旅情を感じさせたことがあつた。

父がどこか山の中の温泉場のやうなところにゐて、私はそこへ父をたづねて行つたのだ。或る男の肩ぐるまに乘つて、幽邃な山の谷川に沿うて上つて行つた。父は庵のやうなところにたつたひとりでゐた。私をつれて行つた男は、もと父の車夫をしてゐた人であつたが、父と永いこと會談をした。ただの無駄話のやうではなく、何か重大な用事のやうな氣がしてゐた。父はその時、今思ふと私には、隱棲してゐたやうな氣持をよびおこさせる。――どうしてだか知らない。さうして、大へん靜かな景色のいゝ場所だつた。水邊に魚があつて、すべてが、私にそれが初秋であつたやうに思ひ出させる。しかも私はそれ以上には何ごとも思ひ出さず、また誰に尋ねても父がそんなところにゐたことは無いやうに言ふ。――ともかくも、確に、それは私にとつてはその日がへりの旅であつた。私には早く歸つて母に逢ひたい思ひがあつた。

私はどんなに母になついた子供だつたか。母なしに、私は一日も生きてゐられなかつたらうと思ふ。私が今から述べようとする初旅も、私が母なしでは居られない子供だつたが爲めに、私について旅行をしたのである。六つの時といふのは、それが私の小學校へ入學する以前であつた事によつて、はつきりわかる。父は子供の見聞を廣めるために、私をつれて母の旅することを贊成したのである。その時の母の旅行といふのは、母は死の床にゐる實兄に最後の面會をするために實家へ歸るのであつた。

母の實家はW市にある。私の生れたのはS町である。S町からW市へ行くために私は、無論海を越えなければならな

い。その間の航路は我が國でも有名な浪の荒い場所である。海の難所として古來知られてゐる。土耳古の軍艦がそこで沈沒したのは私の生れた前後のことであらう。そこに近い場所の海底から、近年、海女が拾ひ出したといふ七寶の花瓶を私の父は持つてゐる。蝶がたくさん飛び亂れてゐる模樣で、口や胴などが壞れて穴が開いてゐたが、生地一面に金砂が埋めて鏤めてあつて、形も優雅な出來である。薔薇を生けると大へんよく似合ふ。……

幼い私がそのやうな海路を渡つた時には、そこは僅に三百噸ぐらゐな汽船で一晝夜を要した筈である。私はそこを無論往復したのである。それが不思議と私には何の印象をも殘してはゐない。私は一たいそんな地方に生れながら、今だに船は好きになれない。その後二十度近くも通つたその航海のことは、それぞれ思ひ出すことが出來るほどだのに、生れて最初の航海が私にいかなる印象をも殘してゐないといふことは、よほど思ひがけない事實である。たつた一つやつと思ひついたことは、その旅からの歸りがけに汽船に乘る時、和歌山の青岸といふところを端舟で本船へ乘り込む時のことである。青岸はひどく遙遠だと考へられる。汽船はたしかに一里も沖に船がかりしてゐた。後に母にたづねたが、子供心にさう感じただけではなく、實際、青岸はそれほど不便なところだつたさうだ。今思へば紀の川の川口から端舟が出たのだ。千石船の下をくぐつた。遠い水の上へ青い灯がおぼつかなく一つ見えてそれが汽船だと敎へられた。いつまで見てゐてもその灯のところへはなか〳〵遠かつた。星月夜で――多分夏の初めか、でなけや夏の終りであつたかも知れない。水と空とをふるはせて船が泣いた。海に關しては、ただその端舟のことだけを覺えてゐる。しかし、その外に、その旅は私にさまざまなものを見せたり敎へたりした。普通の意味に於て重大な、たとへば汽船や汽車に乘るといふやうなことは何の感銘もないくせに、私は、その外のごく些々たることに興味を持つた。これは一般に子供といふものゝ通有性であるか、それとも私だけのことであるか、私自身にはわからない。

ほんの一ケ月間ぐらゐかと思へる旅だが、その豐富な印象と記憶とは私の頭には斷片的にではあるが、珍らしくあざやかに殘つてゐる。この旅の思ひ出をつぶさに語る時、私は早くも自分の今日の性格の萠芽がそのなかに藏せられてゐたことに氣づいて驚く。

校正室にて

「本誌が挑發的態度を斷乎として斥け、眞實の態度に出で、學術的に、そして永遠性の讀物を收錄して以來、智識階級の同情翕然として集まり、中には全縣下の小學校敎員達が申合せて購讀さるゝの榮譽を荷ひましたことは望外の幸ひであります。それで七月號なぞは發賣早々賣切れの盛況を呈しましたことは全く雜誌界の偉觀です。

□「萬朝報」は本誌七月號を批評して「この雜誌は『兄雜誌』の『改造』から比べると、その編輯ぶりが地味である、卷頭には杉森孝次郎氏の論文『國際日本の廣さと國內日本の深さとの比較』と山川菊榮女史の論文『職業婦人と母性の問題』が載つてゐる、野口米次郎氏の『文明批評』紀平正美氏の『哲學講座』森田草平氏の『文藝講座』永井潛氏の『婦人生理學講座』等は新時代の婦人にとつて有益な讀物で、編輯者はこの方面に意を用ひてゐるやうだが、一時的なセンセーショナルの讀物よりも婦人の敎養に裨益する所が多い。かういふ讀物に力を入れるのは善い事だ」云々。

□これは好評の一例ですが、高等師範、女子大學より各縣女子師範に至るまで、本誌が近代的ヂャーナリズムより脫出しつつあることに滿腔の贊意を表する方が非常に多數になつて參りました。とにかく、本誌は我國での智識階級の雜誌として唯一の權威あるものとしたい。

□野口氏の文明批評は全く本誌獨特の計畫で非常の好評を博しつつあります。その他、哲學、生理、文學の三講座も共に多大の歡迎を受けています。一號は一號と充實してくるでせう。

□濱口藏相が奢侈品輸入關稅十割引上、募債中止は近頃のいい思ひつきです。「今日は三越明日は白木」の婦人連を警醒せしめる頂門の一針だと思ひます。獨逸婦人等は只今でもビフテキの一片を得るにどれ程、困難していることでせう。我國は內に農村が疲弊して破綻が迫らうとしてゐるし外には米國が政治的に、經濟的に最大の脅威を加へつつあるのに贅澤三昧も出來ない筈と思ひます。唯だこの際內地製の奢侈品は絕對に製造禁止と出たら面白い

□アインスタイン全集と共に「大正大震火災誌」は立派に製本が出來まして總て配本濟みになりました。いくらか殘本がありますから入用者は金拾五圓で頒つことが出來るそうです。

□穗積重遠博士廿年の苦心になる「離婚制度の研究」は世界にても類書のない權威ある書です。全世界の婦人の發達を此方面から觀察するにも絕好の良書です。

□懸賞創作は九月號から發表します。皆さんが續々今後も應募さるることを切望いたします。四百字三十枚以下です。それから本誌の三十七頁を一覽して下さい。論文の懸賞募集があります。

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	貳錢
六ケ月分	四圓	郵稅共
一ケ月分	八圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅實費を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料一頁　一等百圓　二等七拾圓

◎本社廣告取次所　日本電報通信社　博報堂　正路喜社

（八月號價七十錢）
大正十三年七月十三日印刷納本
大正十三年八月一日發行
編輯兼發行印刷者　平田貫一郎　東京市芝區愛宕下町一ノ一
印刷所　株式會社秀英舍　東京市牛込區加賀町一ノ一二
發行所　改造社　東京市芝區愛宕下町一ノ一　電話高輪四九九三　振替東京八四〇二

廚川白村著

◇◇出版界の新覇王

苦悶の象徵

四六判天金
表紙羽二重
裝幀界唯
一の美本

定價壹圓八拾錢
送料拾七錢

白村の眞の魂を求めんと欲する者、苦悶の藝術に人生の生命力を見出さんと欲するものは共に本書に就け。藝術の聖地に一日を陶醉せんと欲する者は本書に就け。不世出の名文、稀世の情熱、我之を本書に見る。人本書を讀んで人間にかゝる清境あるかを始めて發見せん。藝術は人生の聖地、人我に聖地あるを知らざれば恥之より大なるはなし。恥を覺ゆる文化人は必ず本書に就く

近代の戀愛觀

113版

定價貳圓五拾錢
送料拾七錢

人間の燃ゆるが如き情熱、感激、憧憬、欲望の白熱化した結晶とも見るべき戀愛には悠久永遠の生命力が潛くと論じ更に戀愛は人間の最高峯であり、人生の最高理想だと高く評價して因襲的結婚、未戀愛的生活に一大痛棒を喰はす本書を味到し得る者のみが新戀愛の勝利者たり得る。

發行所 東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

中澤臨川著

嵐の前

(改造社隨筆叢書第四編)

若き日に襲はれた烈しい病苦と痛はしい懊惱——ニイチエは、全く絶々なる心を抱いて、逃れるやうにエンガデンの國にさまよひ來た。彼はこゝで淋しい孤獨を抱き占めながら長閑な沈靜の月日を送つた、エンガデンの國は彼になつかしい一人の女性を與へた。夜の褥の上に戀に悶ゆるニイチエの姿は恰も小兒の樣であつた。併しこの熱烈な戀も遂に空しいものであつた。唯一の戀を失ひ、過去の行路に無上の哀傷を感じた彼は、あらゆる人間苦をなめ盡すことによつて遂に寂々を見出した「永遠輪廻」これが彼の人生觀であつた。彼は悲壯な驗者として新しい道にまつしぐらに進んだ。——こうした見かたで書かれた中澤君の小説——嵐の前——其はちやうどニイチエのそれの如く病苦の痛はしい懊惱から解放されぬ——血を吐くやうな絶望の記錄であつた。……………

(第十七版)

東京芝 振替東京八四〇二

改造社

定價壹圓廿錢 送料十二錢



海へ・山へ

避暑旅行の前に三越へ

品が良く、値段の廉い旅行用品を一切取揃へました。御出立前一日の御來店は御用意を完全にします

御用書品十種

◆防水布	一圓五十錢より
◆防水帽	八十錢より
◆海水靴	九十錢より
◆浮袋	一圓七十錢より
◆天幕（二人用）	二十圓位より
◆バスケット	四圓五十錢より
◆救急ケース	二圓より
◆携帶用蓄音機	百二十圓より
◆罐詰、瓶詰詰合せ	二三圓より
◆化粧品揃	一圓五十錢位より

旅行地の常として、日用品には兎角不自由勝ちです。通信販賣部への御一報は御生活を快適にします

避暑旅行先から三越へ

山と水展覧會
八月一日より二十日まで

杉浦非水氏將來ポスター展覧會
八月廿五日より二十九日まで

三越呉服店

◆東京駿河町◆

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十三年八月一日發行（每月一回一日發行）
大正十三年七月十三日印刷納本

八月號

定價七拾錢



東京秀英舍印刷